里見八犬傳

巻七

特別
へ13
4304
11

へ13
4304
11

曲亭翁編述

八犬傳 第九輯 中套七

弓張月

柳川重信画

文溪堂精刊

〈2001-318〉

八犬傳第九輯中帙附言

本傳は文化十一年甲戌の春書賈平林堂の板元の為ふ第一輯の原稿を思ひ起せあふ。平林堂頽齢既ふ七旬。長編の刊行做し果さんの心許なくとそぞ夥計の書賈山青堂ふ譲らんと請ひ。予その意ふ儘して當時稿本五巻を山青堂ふ取らしけり。かくて書画剞劂の工成りて。おのゝ年の冬始て世ふ見つるとぞいふなり。十三年丙子の春正月第二輯五巻を續出すふ及ぶ。世評いとく喝采者官ふ復後輯の出るを俟て。一日千秋の如しとのゝめり。是足よりして後山青堂多懲の故ふ他支ふ躭ると雖ども刊行等閑の年間れあり。第三輯五巻は文政二年己卯春正月續出す。第四輯四巻は三年庚辰冬十二月發販す。第五輯六巻は六年癸未春正月續出すふけり。第一輯より刊行の年よりしてあふ至て十ケ年ふ亦ならんも然ば毎編出るを俟て看官渇望せざるいなく。嘗球極玉ふ異なるものゝ時好ふ稱ひしの。今昔亜比さゝえなく刊行の書肆ども等閑なる贏餘を他賈の為ふ果して本錢續ぎるふけん。新舊五輯の刻板を浦泉堂ふ賣與へかば。第六輯よりの下續

饗庭文庫

刻の書賈替りて。第六輯五巻（五の巻と合して上下とも本輯即六巻なり。）は十年丁亥春正月涌泉堂が刊行せり。第五輯發販の年よりしく中絶ぐゐ五ケ年ありかくて第七輯七巻はおなじ年の冬十月稿本既ふ成るりのち涌泉堂も亦本錢續ぎその上帙四巻は書林文溪堂の資助ふよりて。十二年己丑の冬十月廿九日ふ發販せしと當時予いさりとも知ぎ下帙三巻は十三年春正月辛くして續出ぐとをゐるり。あるひふ亦涌泉堂も等閑ふして理義を思ぶ始よりして校閲と一字も作者ふ乞ざりけるゆゑ傭書測人の為ふ謬まる。稿本と同ふかるざるのみ。況七輯發兇のよりと報るこもあるりて予いその例ふ違ぐるを咎めて云云とりし折書林永壽堂文溪堂ぢ為ふ勸解るふ怠狀をのくまく陪話數四ふ及びぶけるとる聽ざんいさまぢゆてぶくもるく已ふけりかくて程ふ涌泉堂は後輯の刊行ふ微力足るとうるけるべとて。第一輯より七輯まぐ所藏の剞板を沽却せりぢ。大阪の書林某甲が購得くりて去ゐと乞えり。然而第八輯より以下の刊行る文溪堂が購受て續出をるふるりかば本傳新舊の板家扶い。江戸大阪と両家ふ分れぬ第五輯より下ふ至て刊行の書肆の替りしるる。前後都て四名と且ぐ結局ふ至りぬ。その板分れて七輯ぐ遥ふ浪速ふ售遣られて。予い毫ぐりも識らぬ彼地の書肆の藏板ぐりけるを思へば一奇といはまくのみ。識者はその折眉を顰めて江戸の花と失ぬとそ嗟嘆ぢるもありと強ひふ避莫急幸ふ第八輯より下は江戸の書肆が刊行せる。文溪堂の所藏ふるるべば作者の面を起素似ず。栄辱得失物皆介るる。本結ふのみ限らんや是ぢふよりても有為轉変の速るを思ふ足れり。かくて第八輯は江戸の書林文溪堂が刊行して。天保三年壬辰七夏五月二十日ふ上帙五巻（四の巻は上下二巻ありぬ即五巻とも。）を發販し。下帙五巻（八の巻は上下二巻とも。）は四年癸巳春正月續出し。第九輯上帙六巻は今茲乙未春二月二十日ふ發兇しぬ中帙七巻は今番出せり。又下帙七巻は明年丙申の春秋遲く成るとも秋冬の時候までは必ず續出しく大團圓ふるべきく欲ぢかれば六輯以下の分巻共ふ六十八巻一百二十八回ふして。竟ふ全部ぢのみ抑策子物語のかく長ぢふ續るはの書貫の外ふのまぐ見ぢ天り。作者ふ惹壽城借あてはの筆をさきあくぶりせば。二十餘年の久しく飽ともるくよく堪くはの結局と世の人ふ

文溪堂藏

天に在ては命と云ひ人に命あり時あり。図圓將に近くんとす。ある懽しあるべし。稗官寔利を稱ひふけんと思へども烏許の所為ぞ。

その書第五輯まで一帙五巻と二輯とを第五輯の六巻迄は四輯の足らざるを補へり。

第六輯より以下は涌泉堂なりとふ儘して或は六巻と一輯と一或は七巻と一輯とをかくて第八輯に至りては文溪堂の需る為に十巻二帙と一輯とを第九輯は巻の數ぐまもく。二十巻と二に分ちて上帙中帙下帙とをそと第五輯までの如く毎輯五巻ゐんゆい十三輯に至るべ。然るを九輯に約めて文溪堂の好みにしたがひ今ゆ思へばもうあの八々陰數の終りへ八の下に十あれども十は一にかふとそ陰數の終りと芸九を陽數の終りとかれば八犬英士の全傳局を九輯に結ぶとその所以なるにあらずか。

吾嘗唐山の稗史を見るに水滸西遊記傳の如き是大筆の段とのべども水滸は一百八箇の豪傑その人極めて寡けれ史進魯智深楊志武松等全傳用るの豪傑なるに梁山泊に入りしよりその勢ひ始に似ぞ俱に軍陣に位むの外にありとのべども如況百八人を一人始ありて終なく俗に云立滅せざるに稗人又西遊記は三藏師徒孫猪沙と是四名のみその人極めて寡ければ其支相似て且重復ヨリ水滸にも亦重復あり。

長物語に覚ぎて彼重復の瑕疵あるを年来みづから筆を把て是迄の苦海に墮落せざ所以ありけりと悟るに由て最烏許がまこと說話これども本傳に始より用意をきく加減あり。迺水滸百八人の百を除て八犬士あり又加るに八犬女あり。且里見侯父子と、大と俱に一十九人是と一部の主人公とかれば其人ヨリ多く又その人寡く水滸の寡に西遊の寡に似るべくもあらざ。その餘も忠臣義士に彼此その者とのべども始あるべ終あり中途にして立滅せ者一人とてなくあるとなり。看官徐に結局まで見ば作者の用意を知るべしん。

唐山元明の才子ぞ作る稗史にあのづから法則あり所謂法則を一に主客一に伏線二に襯染四に照應五に反對六に省筆七に隱微即是の主客に此間の能樂にしてワキの如しその書に一部の主客あり又一回毎に主客あり主も亦客にあるとあり客も

亦主ある〻所ることを以て壁ゞ象棋の起馬の如く敵の馬と畧ると雖その馬とをして彼と攻我馬と喪へば我馬をして苦しめる。変化安あそ疆りあるべし是主客の虚略へ又伏線と襯染いその事相似く同ドくも所云伏線い後ふ必出さべ趣向あると數回以前ふ此一墨打とそ置くべし又襯染ハ下染ゆそ此間ふ〻ふまこみのあるべ後ふ大関目の妙趣向と出さんとそ數回前より。その事の起本來歴と措へ金瑞が水滸傳の評注ゆ緯染ふ作と。即襯染とかるゞ共ふ考さゆと訓むべ。又照應い照對とゆふ壁ゞ律詩ゆ對句ある如く彼と此と相照〻して趣向ふ對と取るとゆふ。是ハ照對い重復ふ似されども。必是同ドかゝを重復を作者謬て前の趣向ふ似る事と後ふ至て復出さと。ふ又照對い故意前の趣向ふ對殘取く彼と此と照〻を壁言ゞ本傳第九十回ふ船虫媼内が牛の角をして戮せるゝい第七十四回北越二十村る聞牛の照對へ又八十四回る犬飼現八が千住河ゆて數ゞ舟の組數ふ第三十一回ふ信乃が芳流閣上る組數ゆ反對へ這反對い照對と相似て同ドくを照對い牛と〻牛ふ對るが如く。その物ハ同ドけれども。その事い同ドかゝを又反對いその人い同ドけれども。その事い同ドくを。信乃が組數ゆハ閣上ゆ閣下ふ數ゞ舟あり。千住河の組數い船中ふて樓閣ゆ。且前ゆい現八が信乃と捕捕んと欲りし後ゆい信乃と道節が現八を捉へんとを。情態光景太く異へ考とゆ〻反對とを事い此彼相反て。ゆゞ〻ふ對殘ゆ倣を。ゆ本傳ゆいたの對ヨヱ〻。枚挙るふ遑あるを。餘い倣ら〻く知るべ元のを又省筆い事信と。後ふ重てゆ〻ん為ふ必ゆ〻で稱ゆ人ふ偷閒さを筆と省元或い地の詞とゆそ芸〻。その人の口中〻ゆ説出をとゆ〻ゆ作者の筆と省くが為ふ看官も亦倦ざる。ゆ又隱微い作者の文外ふ深意あり。百年の後知音と俟く。是と悟らゆんと生。水滸傳ゆハ隱微ヨヱ〻。李贄金瑞ゆハ〻〻唐山る文人才子ふ水滸を弄ぶ者ヨヱ。ゆれども評〻る〻詳ふ隱微と發明せゆを。隱微い悟り〻さけれども七法則を〻知らゆ。ゆそ繁るのさゆあ〻ん及ばゆを〻〻本傳ゆい彼法則ふ倣ふとヨヱ〻又但本傳のを〻ゆ。美少年録侠客傳ゆの餘ゆ都て法則あり。看官ゆれを知るゆを〻ゆ子夏曰小道とゆへども見るべ元者あり。嗚呼談何ゆ容易る〻ん。それらのよ〻い知音の評ふ折々答

事い同ドくを。信乃が組數ゆハ閣上ゆ閣下ふ數ゞ舟あり。千住河の組數い船中ふて樓閣ゆ。且前ゆい現八が信乃と捕捕んと欲りし後ゆい信乃と道節が現八を捉へんとを。情態光景太く異へ考とゆ〻ゆ反對とを事い此彼相反て。ゆゞ〻ふ對殘ゆ倣を。ゆ本傳ゆいたの對ヨヱ〻。枚挙るふ遑あるを。餘い倣ら〻く知るべ元のを又省筆い事信と。後ふ重てゆ〻ん為ふ必ゆ〻で稱ゆ人ふ偷閒さを筆と省元或い地の詞とゆそ芸〻。その人の口中〻ゆ説出をとゆ〻ゆ作者の筆と省くが為ふ看官も亦倦ざる。ゆ又隱微い作者の文外ふ深意あり。百年の後知音と俟く。是と悟らゆんと生。水滸傳ゆハ隱微ヨヱ〻。李贄金瑞ゆハ〻〻唐山る文人才子ふ水滸を弄ぶ者ヨヱ。ゆれども評〻る〻詳ふ隱微と發明せゆを。隱微い悟り〻さけれども七法則を〻知らゆ。ゆそ繁るのさゆあ〻ん及ばゆを〻〻本傳ゆい彼法則ふ倣ふとヨヱ〻又但本傳のを〻ゆ。美少年録侠客傳ゆの餘ゆ都て法則あり。看官ゆれを知るゆを〻ゆ子夏曰小道とゆへども見るべ元者あり。嗚呼談何ゆ容易る〻ん。それらのよ〻い知音の評ふ折々答

へーとるぐ〜亦看官の為ふ注しつ。
よ
予が毎ふ編る策子物語の寫本い市〜え彫果る折巻々を校閲せざるとなけれど刊行の書
肆として性急る〜ぬ者もるければ作者のおろ〜ろふ儘せあるヨりり且その巻々ハ已が綴れる文ども
るとバ眼ふ熟れてまざ〜忘れぬとるや幾回も讀復せば誤寫ありとも心つく〜暗訳の隨ふ讀
る〜動もまゝバ検送して後ふ悔〜思ふの勘〜ぞ。総て刻本い書画倶ふ人ふ誂へく
板下てふ物と調へぬれば必その板下ふ訛舛るとなざるえ是ふ加つふ剞人の誤刀あり。半頁
十一行るも直ハ名毎ふ傍訓あれば直ハ名と假名と二行ふるり〜。半頁二十二行ふ至る〜紀その
文字幾百るとも知〜ぞ。然るとも熟る眼も最も急迫〜く校閲ふ堪れば検送ふ誤脱ヨるり
ふと事過ぎるハ姑閲ふ本輯上帙六巻ふも筆工の誤寫あり〜と出版の後ふ見出ーぬそを
ぬ〜ぬ左ふ録ふ一の巻。廿八丁背・荊荷當ふ荊軻ふ作るべ。荷い誤寫ふ二の巻。十五行背・五行・
正行當ふ正儀ふ作るべ。六の巻。九丁背・十行・雛壯雛い皺のあやまりふ筆工のるふなぶ
〈ふと校閲の折検送〜りるふの餘てふをいの錯へるい輯毎ふるたいあ〜ぞ。第一輯い殊ふヨ

かり。啻ふの本文のみるぞ。本輯上帙の引ふ孔子家語と引く。有文事者必有武
備とらふべを誤〜文備ふ作まり。又第八輯の自序ふ莊子と引く。名者実之賓
とある者れ字を脱されり。是より先ふも自序ふ誤寫あり轉倒あり。後ふ至て元ぜ〜ハ。
いろふせん悔ども及ばぞ。發販の後その板ふ埋材るどして彫更るい。六日の菖蒲十日の
菊ふて。長視栄るえ所行るまバ梓行の書肆ハ欺ぞ兼引るぐ〜笠閑ふく。竟ふ果
さぞるぬい稀ふ遊莫その訛謬あるもヨるふ。本文いち所とるぐ〜。漢文の自序るどハ二
三頁ふ過ざるふ。そをーも校合の至ち届ぬハいろふぞや。と思ふ人もあるべれど。序目い巻々を稿ド
果ていと後ふ綴りぬれば刊刻も隨て最太う後れ。と本文摺刷の折るどふ急迫〜く校
閲ふるとの〜。熟讀重訂の暇るければ二三頁の物とへども。検送さるとなざ。且出像
るどふ至ちて。蛇足の為ふ動もまゝバ作者の画稿と違ふもあれど改め画くせんいさをが
ゆ〜。そぶ尽ゆて図くもヨるり。看官作者の苦思を知〜稀。そも稿本の訛謬ふるりと
思ふぬハ稀るべ。いゆ〜への人のへ〜く。書を校まるハ風葉と塵埃ゆも異るぐ〜隨く

拂ひ去れば隨て又これあり書とゝく孰か誤寫むゝ況游戲の策子をや吾亦如く懸念せざるを知る人ぞ知るべゝむ寢貶毀譽を度外に置て具眼の指摘に儘まるのみ。

予が世者ゝ所物の本或は合巻と唱る繪冊子の如くなる板家扶を購求めゝ恣に画を新にし且書名を改めゝそを新板に紛して。翻刻ゝ粥席ぐものありと雖そを勸善常世物語三国一夜物語化競丑三鐘などの如き御高本傳前輯の筒端に既に入れり。近屬又括頭巾縮緬紙衣三巻を重刻まゝ椀久松山物語と書名を改め出像を新にせゝのあるを。その書は文化三丙寅年。書賈住吉屋政五郎の需に應じて予が綴りしなれば今に至て三十許年の春秋を麻耆舊作亦ど。知らぬ人は惑されて。新板なゝんと思ふもあるべし。且書名の更ざまも甚だ狡児の所為なりけん。椀久松山物語と改めし。作者の用意を知らぬ寔に烏許の點鼠なるかな。夫椀久は嫖客又松山は遊女。縱その小傳を為るとも。その書に命くべきの如くゝ是を作者の用心とぞ。かゝる意味ぞもまぐぞして。放る更改め。莊子に所云侯忽が混沌を損ずと。亦何ぞ異なるゝんや。是嗟嘆に堪ざるのみ。又高尾船字文中本五巻は。寛政七乙卯年。予が始て綴りし策子物語なりけるを。見るに沿堪ぎ嘔吐もあるべきのみなるを。去歳の冬そを重刻まゝ。端像を新にせゝのみならず。亦るもその翻刻本は。再板とまゝるゝ。椀久松山物語のごとき世を欺くに優せるゝあれぞ。俱に作者に重刻の義をも告ぜ。恣に画を更。或は書名を更ゝ。竊に蠅頭の微利を欲りする狡人を人とも思はぬ。皆是賈堅の所行なるを有けるゝ。いぬる比その再板本を予も閲せしに。自序の落款にそを題して雜貨店帳合之暇とあるぜ。是なり。雜貨は唐山の俗語なり。此間にいふ高麗物の類なり。四十餘年の昔といふとも。予は高麗物を鬻がゝるゝ。便是當年の洒落なり。都て稗官者流の肚裏は。種々无量の意材あり。辟言は雜貨高麗物の品類最も多し。況は飲れば扶云云とあるぜ。迺當時の洒落なり。識者の笑を取る為なれども。并は流行に後れて。どゝかゝるのみなるゝを看官疑惑ふべし。然は件の船字文は水滸梵

椒録などを此彼と撮合して綴做るものなから。四十年前の拙作を疎文なりといふべうぞ
あらがはせ。翻刻して世に出されては稗史折せし習藥子を老後に汝が躓ぞとく。
賣弄せらるゝに異ならずぞ恥しきのみ。あれば翻刻本は原刻と文の錯へるや多かるべし。
予はよみかるに懶ければ古兒琴嶺が在世の日今茲の春二三月の比にやありけん命して
舊本と比校させしに処々に誤脱あるのミ大かたは違ひなしといひきよしや寫し僻めたりとも今
ゆく疎文をいかゞはせん。看官これを思ひねかし。又大師河原撫子話といふ合巻の繪策
子も予が舊作なり。今より三十一年已前文化二年乙丑の冬畊書堂が刊行せ
しを今亦画を更へ重刻して新板の如くなして。鬻ぐものありと聞えぬ是等も作
者に告ざりければ思ひかけなく人傳に聞きたるの餘も予はしらず鳥許の重刻
さぞあらむ吾在世にさへ書肆等が恣るさかくの如し。なからん後はいかなるべきぞ
浮るゝ名の所以ゆゑあれど名を賣らずてそらはさけれ近世明和安永年間風來
山人平賀鳩溪が戯墨の策子太く世に行れしかば。その身後に至りても偽作せしもの多

く出てり。今そのく昔をおもへばこゝろへにのそあらざりけれ。あてに虚名の昨非を知りて。
嗟歎のあまり懐を述る五言なせ長うた反歌あり。なほ亦要なきをさみなから録して
ゆく歳ともに歌にいへらく。

あだし世にあだし世こゝろあだし名のなかにしそ濁る川のおもてあさ瀬の水
くみちびる筆とすみ田河いざこととはん人しあらばすとおもへて夏の夜はみじかきあり
かしまどの外に杖もひき停ずそぞれ翁さびたるきさみ夜は枕すりや似けもあらうねの
真今にあらぬあだし世をはなれさせてよむしよりもすゞみけりあきつちのむすびの神の
口やまらかくまでとこの老人をうみいでゝけんかしとはいはまくされど今の新しの苑のとめぞく
山ぬえの実はありとしもゑぞあらぬあだし世の人あれがまやあだし名の名をとしあまさ あだに
あらまでし身をいづらにせむ。

反歌

かしこれても名にあだなすえみの笠乃名をあらしまてしあきんのしろこたんさを

天保六年といふとしのえつゝをすり始めてあがしるし　蓑笠漁隠

南總里見八犬傳第九輯中套總目録

㊐第百四回　富山之餘波　謁老侯親兵衛訟神助　驚奇特刺客等各歸順

第百五回　富山之餘波　名山有靈枯樹復花　逃客無路老俠獻俘

㊑第百六回　大山寺春宵　牽青海波景能自稱村來　犯黑闇夜曼讚信赴館山

第百七回　館城之着落　犬江親兵衛活捉素藤　里見御曹司優還陣營

㊒第百八回　館城之着落　義成旨仁寛刑　貞行謁王奏克

第百九回　妖怪之巻　八百尼山居誘引敗將　濱路姫病牀被寃鬼魘

㊓第百十回　妖怪之巻　反間術妙椿遠犬江　妖書撰仁鮮別妙真

第百十一回　館山後巻　妖尼庭聚兇兵　素藤夜襲舊城

㊔第百十二回　館山後巻　稟君命清澄伐再叛賊　旋機變素藤易牛狼囚

第百十三回　妖怪後巻　三匹瓶醒里見侯　一級首懲南彌六

㊕第百十四回　釋疑之巻　義俠瘞元遺郭號　神靈懲魔全處女

第百十五回　遭際之巻　前面岡大刀自救孝嗣　不忍池親兵衛釣河鯉

八犬傳第九輯中套目録終　中套下套各七巻共十四巻刊行

義顯於衰世之國
孝出自忠信之家
政木大全成嗣
安西出來介
荒磯南弥六
風ちらく安房のありそのよひやみふ
ちやみちぬらむ
ちとせあくなり
丟同居士

夏ちるもをえ
北の麻のあ西
まーやたらりの
ちりのりーやま
ちまちーむ
狂齋
里見御曹司
義通
吾嬬前
あづまのまへ

忠直無人助皇天
錫慶祥
雷水御史
満呂復五郎
重時
天津九三郎
田税戸賀九郎
逸時

なにはえ浦
秋のさま屏ふるさむれ潟
はらはらこのちふ麦はのうけさ
雕窩老人
奥利狼之助
出高
湊木磯九郎
嘉倶
苫屋八郎
景能
荒川兵庫助
清澄
浦安牛助
友勝
登桐山八長
濕濕荒川智計廣言行
不濁稱清澄
愚山人

懿哉八犬之英士。起八方也。妙哉一顆之靈玉。護一身也。仁義禮智。救柔挫剛。忠信孝悌。補君討讎。抑離散有時。行會有日。八士不盡簪者。殆二十餘年。終同帰一州。而威名不朽。然當時載筆者。未具粤。肇有演義書。是蓑笠翁所編述。筆端波瀾。與彼水滸三國演義。拮抗自是。書一出于世。而人人方知犬士所以為犬士。可謂奇且盛矣。余叨賦拙詩。以為證。詩曰。

犬姓俊雄都八人。俱惟里見股肱臣。乾坤到處曾無敵。蹄躒蓑翁稗史陳。

琴籟閑人題

東都　曲亭主人編次

第百四回　老侯ふ謁して親兵衛神助と訟ふ　奇特ふ驚く刺客等各帰順す

再説那檻尬児们いるふ手ふ槍と閃く。義實主と食る稠て轂る果さんとて鬩く折る。思ひ白ふ樹間より只見る一個の大童男犬江親兵衛仁と名告て。吽禁あんて突然と走り出る。面魂足柄山ふ生育さる。那酒田八分時ふ。童話ふ。桃太郎ふあらぶ。驚ふ呆る。檻尬児们ふ勢ふ忽地胆落て。他ふ怎麼とかふ。憶ふ。俱ふ。五兵。と。後巡して。左右ふ。有轂ふ轂ふ。蒐り。忽ち然とて。續く。敵ふを。そて。思ふ回せ。諸聲高く。噫唖ふ。小猴子奴ふ。秣ふ。刈り。牛ふ。鞭ち。狗と走り。兎ふ。赶ふ。その身ふ相応ふ。かるべふを命も知らぬ似而非胆勇。由る。仇の助剣して。息絶る。折

後悔さ。快敷ト仆せと動揺めて。ヨ勢を憑む假猛者槍を拈て左右より。咄と嘗て。三七二十一ふ競蒐れど。親兵衛ハ亭も噪ぐ身を反して素樸の棒を。敷拂ふ向ふ前る。奮勇剽姚。當るべからもあらざれば。檻松兒毎ハ避易して。竹竿槍を打折られ刀拔く間も。奈麻与民の腕前。踵肩腰骨を。敷悩されて平張伏るそぐ中ふ一個の檻松兒。聊本事あるのるべ。連りふ槍とうち閃めして。刺んと。找むを。親兵衛ハ。のく〻盆と受住て。邪と。聲かけて。丁と。敷ろ。劇し。棒の術中ふ。這も。赤槍を。打折られ。餘まる棒ふ。肩尖を。敷られて。痛楚ふ堪ざりけ。苦と一聲叫ぶも果ぎ仆まんと。せ。脚踏住めて。樹の間潛り〻。逃走る。親兵衛。透ざ。赶ふ。うけふ。往方も知ぬ。冷笑ひて。赶捨て。舊所ふかへる。歩つ。敷ふ仆くる。檻松兒四名を。腰ふ。准備の藤蔓の。咸。歩々と。縛めて。傍の松ふ。繋ふ。住め。両袒ぬ。袖を。斂め。裳を。下。塵ち。拂ひて。義賞主の。身。邊ふ。歩つ。額。衝。跪。坐て。禀ちやう。島許。かまうハ。ハ。ども。我姓名ハ。豫より。聞ロ。ふ。

こそ。あるべ。小可ハ下總る。市川の。船長。そ。ゆ。山林房ふ。獨子。ゆ。初名ハ。真平。も。又大八。も。嗚。し。れる。犬江親兵衛仁。ゆ。ひ。君。ゆ。ふ。の。厄難。我恩神の。誨ふ。よ。て。豫。知。る。よ。め。り。ふ。聊先途ふ。達。まる。せて。見。参ふ。入。ま。る。こ。と。又是。神慮ふ。憑。れ。る。こ。君臣一致の。時日。到。来。怒ハ。輒く。對。治。せ。られて。ん。身ふ。恙。き。固。さ。ど。ひ。と。欽。く。ま。と。の。辨。説。き。ハ。ふ。鄙。ら。で。大人。備。ち。ひ。る。進止。の。世ふ。憑。ま。く。て。ふ。け。り。介。程ふ。義。實。主ハ。思。ち。け。る。檻松兒。仆。當。名。を。射。て。仆。れ。已。こ。ど。ま。る。を。下。ま。そ。み。ま。ま。防戰。ん。そ。刀。の。柄ふ。ま。ど。一。個。の。少。年。犬江親兵衛仁と。名。告。て。樹。柱。の。蔭。より。顕。れ。ま。瞬。間。ふ。五。個。の。怒。を。敷。る。伏。せ。赶。ま。る。武。藝。勇敢。人。柄。ま。そ。思。ま。優。る。挿。ふ。且。驚。ふ。且。訝。て。ち。ち。目。戍。て。こ。ふ。せ。る。禍。鬼。ま。ち。ち。攘。る。這。少。年。ハ。豫。ち。く。犬士。の。一。人。犬江親兵衛仁。ち。ふ。と。名。告。る。こ。既。ふ。分。明。る。め。ち。疑。敷。ま。ど。雫。ね。ど。尻。ふ。備。る。巨。樹。の。株。ふ。尻。ど。ち。ち。拭。け。眉。根。を。顰。め。左。見。右。見。て。原。来。和。郎。ま。妙。真。の。孫。と。ち。え。犬江氏。那。大。八。の。親。兵。衛。ち。り。ー。欲。生。れ。ま。ち。ふ。仁。の。字。の。玉。を。持。り。ー。甲。斐。め。そ。

親房へは優りやもそ〻ん犬士の隊ふ入るべき徒々の癖子ありとふ妙真并ふ照文仁ふ導ふ豫
所ーかと神躰ーとのふとゆそ往方も知ゑもそ〻ふ六稔以前のゆふーて年四ぞ〻の秋ゑ〻ゑ
然べ和郎ハゆう殺くふ今茲ハ九才ゆべーと思ひ〻ゑ似ゑ身長ハ約莫三尺四五寸あゑ筋骨さ
へ逞しく凡庸の少年の十六七歳ゆるあとふとも及ぐかる武藝勇力單身ゆて五個の寇ふ
當て物ともせゑ四個ゑ生拘ハ一人ゑ轂ゑ走ーせーハ和漢ゑ稀ゆ神童とゑたゑ分れ加以年
居ゑ人迹絶て浮世ふ遠ゑ徒ゆ深山ふ誰鞠艱て人と成ーけん訝ーさふ故ーゑあゑ甚歴ゑゆ
と問れて親兵衛然ハ疑ひハ理り之既ふ知ゑれまゆーー如く小可絶ふ年四ゆる秋采月の
初旬ゆゑあゆけん舵九郎ゑ叫做たゆ彳人のゑ稠ふせゑれゑ命危ゆーー折不測ふ神女の
擁護ふゆて那舵九郎ゑ誅戮せゑれ這身ハ神女ふ擁攫れて這山ふ領て置れゆ伏姫
上の墳墓あゆ品岸ゑ宿とーつ。その日ゆーて姫上の神灵ふ夜とゆゑ昏とゆゑ養れまゆ
ーと初ゆ宛夢ふ似ゑ思ひ辨ゆーゑ殺ゑ人と成ゆ隨ふ折々神女の誨ふゆて。

我ゆへと知ゆゆ〻ゑ大毋妙真ハ那時侯ゆ君の御恩ゑ稟ゆて恙もゆ〻今
もなほ瀧田の御城内ふ在ゆ支の顛末外伯父大田小文吾悌順の上ハゆ〻ゑの餅同因
果の六犬士犬塚犬川犬山犬飼犬阪犬村の流浪定身泥昨ハ徒々のゆあれけふ又筒
様々々のゆゑあれと七犬士仁ハ六稔以来の屢歴動静。その折々ふ一事も漏ゑ神女の
告ゑせゆ〻ハ瞭然ーて那人々の傍ふ立て看るゆゑ知ゑ〻ゑとのふとゆゑ然ハ二飡四
時の衣皆姫上の神通力ゆて那里ゆゆ取寄せて徒養れまゆーハ又口ハ我身單ふ
あゑ〻ゑ這年来同宿の人の帮助もハ人迹絶る深山ふ在ゆても徒然ゆゆ〻ゑ身ゑ
年毎ふ長伸て既ふ亦閑ゆるゆ〻ゑ我ゆ〻ゑ怪ーゑ〻ゑ最も大ゆ〻ゑゆるハ日毎ふ神女の賜り
ゑ仙將ふ奇果の故ゆ殺理とゆて論ドかけれハ神変奇特とゆまゆくのゑ然ハ神女の御恩
德ハ枚挙ゆふ迚もあゆ〻ゑ習讀書弓馬戯剣文学武藝何れとゆ〻皆教させゆ
まゆ〻六稔以降修煉せ。本事ゆゑゆゑゆ〻ゑ神女ハ日暮ふ我仁と共仁ふ品崖

が在さまか。要ある折が出頭し。要ある折が見えぬるを。徳而今朝しも姫神の又忽然と立顕れて。小可伴が宣ふやう。けふ徳々の左側に我父絶ふ両三個の伴當と領く。我墳墓を見んとて。みづから山踏して。這頭へ来ぬるとあるんその折不測の寇あやそ。犯しまうん。とて。そをかめれ。親兵衛がのそろそろ時分を料りて。伴の寇を。對治して。我大人の見参ふ入りなれ。這餘のの。ども。固様々々と叮寧に宣ふ。這個一口の短刀と。這錦繡の襦袢一領を。小可に賜りて。又宣ふやう。その懐剣が我生前ふ身を放さるるのそりに。截味尤覚あれば。そをとりて。汝が身の護にせよ。錦繡の襦袢が我をりて。昨宵縫るるのそかに。汝が犬士の一人なるふ。けふ我大人ふ初見参まそのの麁榜の衣のをりくふ身の皮を下に鄙備うとりて。そをとりも取まを。抑伴と同因果なる。七犬士の黨ふ我生做せし子ふ異なるふ宿因深ようあれば。孰と疎に思ふ。然ば他们が窮厄毎ふ立形ふ添て救ざることあるを。伴が特ふ薄命ふ。仙に折二親と喪ふて。剰必死の大厄あるを見過ん。

その窮厄を救ふ。這里へ領て来て。五六稔養育して。像のごとふ生育りふ。只是仙の身単に悲しきのふ思ふまを親房が安房の侠民杣木樸平が後ふして。その身を殺て仁を做しなる義侠そのようあるそのその子が料らぬ仁字の霊玉を得て。八犬士の隊ふ入ぞなる故ぞう。夫仁義八行ふ人皆天より禀なる所なれど賤に誰もかも五常八行の心なりけれども。然けれども世の庸人ふ通て人慾の私ふ迷ふて遂に八行を執喪さるるのふ稀なり。徳を世の億萬人ふ捉れて五常八行を做ふんとふ易くねど就中仁をのみ孔子も頼く許さざりしふ素是天とその徳を尊くまくこれ故なり。自然なる天と叫做し人ふ在りて仁とふ伴ふ親の義侠ふよりて仁の一字を得なりしなり。その名を仁と唱いられども我をそくその徳を天と共なりく做しなんや。縦至仁ふ至るまでも婦人の仁ふ做ふとるく今より勉て殺生を好まで忠恕惻隱を心とせば事足りなん。世ふ武夫の業ふも大刀を帯弓箭を執て君父の與ふ仇を防ぐ。身をしも護るのみならず。これを當前の敵を斃して降るを殺さずして捨て。

人と征するは徳とのたまへり則忠恕の義を稱して仁とのたまへり頃者我姪義通を冠者義通定めし躬泥あり久しく寇を含み龍られて今ありて館山の城内に在りしの故を義成夫婦及我大人の最大の胸安からぬまことの大人の登山もまの義をもいへば伺先這高峯の寇とて安く對治して更に又館山へ赴いて那素藤と降して我姪義通を極めて大人と義成夫婦の憂苦を慰めまゐらせるべし六稔伺と養育まゐる我も面目成起居べしのたまへりは是まことに既に這世の縁盡られば今より永く別れるべし努力怠るまじ

るべくまもりやよ勉よ勉よ茲に繰返して諭しつ自餘の者ゆも云云と別れ去りぬ又忽然と降聚る雲に神躯れて極滅せ似く亡ゆひる迹ゆ香氣馥郁と異花降り音樂翠天に響えて峯上に殘る白雲も風のまゐくおくまゐりゆ登時小可哀慕に沿堪ぬ安に別る心地して外視思そ躇跎しつつ泣てのたまひしを同宿の甲乙に只管諫慰められて去茲く我に回るのうち幾の時ゆ去るべ死今も心の悲さを。

然ればそと本尊のひとか低くゆ入祭あるべきぞ君の與に寇を帝ゆそ神女の誨に恃ゆと思ふ心のいそれて前より這頭に樹躯れて御登山を待まゐらしに果して神女の示現に違ぬ君に寇做を鷹怨児あり。そ四個を生拘られども鈍く一個を漏せ折るに追稠るべ捉ふるとかくるべもあるべりに走るを捨よと教めし神の隨意好捨る用意は是のまゐるぞ那奴們を對治まゐるに始よりしく及そもとせば棒をそ總く撃仆しく搦捕りゆ小に寇るべくもあるべ怒に無して殺さずとそ所行に那七大士は小可ぞ所在を年来尋難て八人具足せん折まゐるべ參まゐらと固辞まゐらしに今も他郷に流寓まゐるその義その信ヨまく治ぞ志を低まゐと神女の告さをあるよりて事詳まゐ知るのうち然とそも我らを言報やうんより也まゐ心苦しくゆに這身單ぞ那人々に先こそて今見參に入まゐる不思議の計會併人力人智のよくぞ及るゆあらぞ皆是神女の神謀ゆく君ゆ恙まゐ治せられて我身の顛

末送もゆえあげぬる意外の歎び何哀ゥ又これ伏優を怨れば程なく御曹司と拯
撙まあ〳〵すく御無念を慰めまゝんその義も御心安ふべ〳〵うちも任さぬぬぞと
亭主詞の未せるく過去来のゆさへふ前後文系さ面物〳〵ふ宛水と流まゝ似く辨論
義あり亦忠あり現憑ふ勇士の嫩生是八犬士の隨一とゆでもまゝ相貌才学
自然と備ゝ豪傑の心術言語ふ顕れて思ふ所なるべのこゝゝを美我實主ハつく
づと听〻連ふ駭嘆ふて音ふ听く隨ふ疑ひの胸うち豁け合ふ失れる事の歎び
大〻ゝゝ腰ゝ扇子を抜含て颯と推啓ふ親兵衛をうちあ死ふて宜ゝゝ通
愛ふ後生ゝゝ言皆意表ふ出ぎるとゝふ和郎ゝ顛末奇ゝ哉伏姫ハ世ふ
稀ゝ女侠ふとそと思ひよ身後ふ神霊ふ憑までふ灼然ふて功績ゝゝ和漢ふ
儔あべや頂ふ和郎ゝ六稔の程ふ最大ふゝゝ現仙境ふ生云て神将水
奇果と旦夕ふ〳〵べたりけ故ふんそれゝゝあ狭ふ〳〵く奇ハゝゝふ和郎ゝ垂ふ

帯ゝ短刀ハ我認りゝそれ伏姫ゝ終ゝ焉ゝそ身を放さそ命根を悍くも断ー
東西ゝれゝ當日姫の亡骸と俱ふ柩ふ斂めを復茲ふ看る不思議さよ袷と云恰
と云因ゝ縁ゝ證據ゝ身ふ那痣もゝゝんゝ佶れゝ和郎ゝふよりの搗鬼ゝ
ぬを知ゝふ足れゝ今ゝ何ゝゝ疑ふゝゝの餘もゝく這那と思ひ合ゝるゝあれゝ急
ぐゝゝゝゝゝれゝゝ後ふゝゝ解示さふ宣ふ姫の孝順ゝ這ハ犬士の一人ゝ我災火
厄を救ひゝる神力不可思議感深ゝ是ふ就ても更ふ痛ふ恩ふ両個の伴當鮎
船貝六小水門目ハ寇の猟箭ふ窮所を射さて忽地命を殞ーけ惜むべくと嘆
息ふ〻悄然と那亡骸をそゝへのふを親兵衛慰め憂ゝゝん伴當ゝ受ゝ矢
傷ハ非如窮所ふあゝゝとも毒箭ふゝゝ壹疋ふ以
あゝ遮莫小可幸ふ神女の授けぬひゝる回生起死の神薬あゝ必ゝの效覿面ゝ活ぎ
とゝふゝと听ゝ先や試ひんとゝふゝゝ安く身を起ーて矢傷児の身邊ふ立ゝ両個の

矢傷をよく考るに貝六郎が死に至るまで高楚と握持る義實王の刀あり。そを今放ち。塵ちち拂ひ。棒げ返しまゐらせを義實王を受合を腰に挿副ひけり。徒て又親兵衛が腰に吊る藥籠より那神藥を幾粒か遽しく摘出して啞碎き。矢傷児们が身に中る箭を拔捐て。這那共に瘡口へ藥を塗着推容れて閉る牙を推閉ぢ。餘まる藥を沃ぎ入るに石滴を掬ぶ療養よりの屆ける進退精妙。両個を俱に被起して。背を三四巻撻しが。死せりと云る貝六目に神茱胃中に下ると。恥ぢ忽地に甦生りぬ。眼を開き息を吻き。一霎時慢然ぢりるが氣力を蹙く我に復りて。痛楚もあるぞ。ふけ。共侶ども敬驚きて。恙ぞ主を。又親兵衛と生口の嚴恐児们を。ぞ今ぞ我を怪むまぐに相歎び。慌しく主君の身邊に栈朝ひく。共侶に稟まを。臣们に衢に寇の獵箭に射仆されを知るのを。其後のを覺そぞ。亦に這一少年。その姓名に人の噂に隊より。多知りる那八犬士の隨一人犬江生の

東京帝国大学附属図書館蔵

翠滄堂藏

折もよく。君の先途に達まゐらせて。那嚴恐児们を四名まを生拘ひる事の趣。且姫神の霊驗實肋。年来那身を這頭に置れて人と成ぬ。和漢今昔未曾有の奇談耳に入り心に通して。一事も漏さを。多知りて。覚ての今も記憶せり。恁りて程に大犬江生の介抱を。蘇生りて。身いと安く。矢傷もを安く。愈に既に起居に自由を。沼ぢ勇士の帮助に。伏姫神の神力にて。此ぬ大奇太幸最も惶くに。と稟まを義實ぢ聞いて。原来若们。身に仆まを。心神去りて。有るを多知りる。欽开も亦奇と。且その矢傷の立地を。創しに逆伏姫が這親兵衛に授けりと。神茱の效に憑れり。曩に義通の伴當们。ヨリ矢石に傷られて。一旦命終りに稲村の城に。還されて。甦生の奇特ありけると。先に神の祐に。併親兵衛の介抱を。ぞいに事稱へ。欽びを舒て。又ぞ。我们に。那箭を。共に命の終るとも。惜むに足らず。亡ぶ候

よくぞ及ぶ。快欽びを。と。仰ぎ。目貝六ぢ。俱に親兵衛に。ぢ對ひて。額を。死恩を

つゞ差まり由さゞ千遍悔とも及んや然るを和殿の幇助ゐ依りて君臣無異の幸福あり短冠詞ゐ盡しかさる洪恩ゐ報いそ亦我身を親兵衛听あゞ開首の口誼ゐ益〻我身何等の功あんや皆君侯の洪福ゐ神女の真助顕然さり鄙ゐ稟ゐ事の多くて生涯だ這藍瓜児们ゐ来歴を責問ざり紀意ゐ館山の城内より素藤ゐおこさる刺客ゆゑあるんぞうんと点ゐ目と貝六郎ゐ然〻々〻と點頭て拷問のゆゑあるゆゑ咱们両個ゐ任あるゆゑ〻とらんも共侶ゐ身を起して樹枝を折て鞭とし繋置れ藍瓜児们を鞭撻責んと立莫鬼ゐ藍瓜児们ゐ驚慌て跪ゐ諸聲揚てゆゑ〻ゆゑ人々を責られぞとも吟えあげん既ゐ推量せられ〻ぞく我们ゐ素藤と一味のゆゑでひへとも然とそ来歴を云ゐあゞ且鎖りて吟ゆゑゆゑや。と叫ぶを義實ち听ゆゑて あらんゐ笠を住めて徐ゐ言を盡さゞよ。と仰ゐ目貝六を羨りぬと座を。左右ゐ別れて跪坐さり登時件の藍瓜児们ゐ頭立さる者とあゞ紀両個ゐ先陳さるゆゑ在下ゐ故の當國の一郡司安西三郎大夫景連ゐ再任ゐて安西出来ゐ景次と叫做ゆゑで ゆゑと名告れゐ又一個ゐ名告れゐ在下も亦昔年老侯を討滅される麻呂小五郎信時ゐ同宗ゆゑ麻呂復五郎重時と叫做ゆゑ然ゐ景連信時の滅亡の比〻ゆゑ我们ゐ親ゐ病死て自他孤児ゐけれゐ由縁の人ゐ推ゐられて悄〻上總へ走りつゝ夷潭の普善村ゐ落住りて世と民間ゐ不娯たり〻ゐ墓田權頭素藤ゐ館山の城主ゐ安房四郡の舊領主神餘麻呂安西の子孫ゐ禀ゐ扶持せんとゆゑ尋るよりの吟えゐ我们両個神餘の児孫と共ゐ館山を赴いて来歴を演家譜を捧げて仕んと請ゐ素藤欽ゐ對面して城内ゐ留め扶持せゐる管待通て吟ゆゑ閑ゐ〻ゆゑ賓客の礼をりて月俸その餘の東西まゐ〻〻死ゐられゐ我们心を傾けそゐ〻恩義ゐ報んと思ゐゆゑ必ゐ素藤ゐ慢ゐ酒色ゐ荒〻とゐの民を虐げ奢侈を極めて又我们を〻〻ゐ禄を減し格を貶して奴僕の像く赴使ゐ〻と朽惜く思ゐゆゑ〻ゐ外ゐよゐの岸もるけれゐも沿去らで在りけ伝程ゐ素藤

○文溪堂藏

猛ふ逆謀あり。縁故ハ國主の息女濱路姫を取奪と欲りせ宿望稱へふ執念深き
ぶふ國主を恨ミ。去歳より間ふく時と待。計策を旋らして義通君を含ま籠め。國主あ
ヨマ勢ハ一ら受ていまゞ勝員と分ざるよ一ハ是世人の知る所。今亦具ふふ一も及ぶ。任而
素藤の為比我们を閑室ふ招よせく其くゆう。汝達瀧田ふ赴て義實を狙殺ま果一
ふ事の潰ふ義成を殺ま捕ん工ハと易ら。然ハとハ房總二國ハ我党ふ入り必べ。汝
達這回大功あふ。安房四郡を整屋與へて各一郡の領主ま做さん甚麽ハの義とよく
せんやとて。亦他夏もゞく憑れ一ふ。我们欲び准備と為。其夜城内と潛出て當國ふ赴
ハる。同志の甲乙絶ふ五名本月の初旬より。瀧田の城下と徘徊ま。潛入一まく欲せ一う
ども城郭總て堅固ま。のゞ便宜と得ざ一ふ。老侯けハ未明より天山寺へ參詣の風
聲城下ふ傳へ一ふ時と待ち。厳敬して。像の前ふ准備と。迹を跟け去向を料て。
狙殺まく欲せ一ふ。微行とまうせども。五六十個の伴當あれ。左右なくいるを下一から。奈

ゞ。ハと思ハ難一ふ。年来這頭の山河の。水岌淵を做ま一ふ人迹久ま絶ま一ふ。
日猛可ま水落て。渉ま易一と雪ハ一ふ。老侯恥て登山あり。亡息女伏姫の墳墓を
尋ま。伴の蒼隷ふ罵ま。と洩ま一ふ。間道と求ま。先ま。快這高峯ふ
渉り來ま。那里の樹蔭ふ埋伏一ま。悄々地ふ准備の毒箭を。伴當二名と射て仆一
同ど箭局ふ老侯と脱一ハせ一と弩固ま。二張の弓弦ハ忽然と斷れて役ふ達ま。
ま。最も怪一ハ。ま。却已ハふふ。ま。ハ一ふ。更ふ准備の竿槍と。推含稠て殺ま。
ま一ふ折侯ま不測の幇助ま。咱们四名ハ生拘れ一個ま酷く殺ま惱ま。辛一く逃
亡れ。料ふ痛楚ふ堪ま。て遠くハ。ま。仆ま。ま。ん現怕ま。這少年の勇力武
藝ハ億萬人ふ提れ一のふハ。ま。神女の寛助ふ。て。任る深山ふ人と成ま。塊
談奇話と側聞ま。身の非と悟り一慚愧後悔世ハ是況季子ふ及ぶ。ま。神灵
冥福併老侯の賢明仁義の俊德ま。今苗害と轉一。這祥瑞ふ逢ふ。

らんや。然ハ昔年景連と信時の滅亡ハ賢を媚て邪計を行ひ非義の利をのみ欲せ
所以也。老侯の罪ゑ〻ぢり〻ふ我們理義を暗けれハ只仇とのみ思ひ怨をそ恩赦を願ふ
王と要せぎ反て奸賊素藤の扶持を求ぬ。その隊ふ屬て他ハ與ふ老侯を刺まくせい。
紂と資け〻周武と殺まふ似ゑべ。今ハ邪念を轉ぬ濁を去て清ハ消んと庶幾外
いなぎ。されども身の罪輕〻ねハ縱饒されかゝるとも仁義の君のゑふ死ぬ。そもそもものゆ
ゑべ。天神地祇も照鑒まゝん今ハ所虚談ふあゝ願ハハ亮査あれかしと那陳ぎ
ぎハ這も陳じて。迭代ふ後悔の招て紛れるゝけ。親兵衛これをうち听て義無負ふ豊
ゆう。老侯聞召れ狡初他們ハ毒箭をそ。ゆん伴當と射仆せふ侯を犯まふ箭をそ
せぎ槍をうち提てうち向ひをゝるゝ〻思ひよ那折弓弦の断れるハ神女の擁護ふ
ん。就てゑふ疑ふべ。安西麻呂の黨ぢそ。侯を怨るよりもあゝゆ神餘ハ逆臣定包ぢ。我
逆ふより家亡ひをを我君義旗を揚ゆひて。定包を討ゆ〻ハ素より是を徳ふ。ふ

ゑふ因ゆ義を仇として。殺まゝくせ〻ハ甚ゑる意ぞ。その義を贈〻ひぐや。とゑを那餘の生
口們ハ听〻俱ふ聲を揖て。犬江生々々々我們も来歴來意を詳ふ告ゑあげ。疑念弦
解く。憐愍を無ゆひと叫びゑるそゑ一個の且ゆをう在下ハ神餘長挾ハ光弘ハ近習
ゑりける。天津兵内明時ハ弟也。天津九三四郎貞明と叫做まゆ〻當年這地の俠
民と少ゑる那杣木樸平と洲崎垂垢三ハ諜〻合を。山下定包を殺ゑんとせ〻ふ反く
那逆臣の奸計ふ陷られて。光弘主を犯せ〻折我兄天津兵内ハ樸平垂垢三們と戰を。
命を其里ふ殞〻ゆ是より先ふ我妹ハ光弘主ふ仕へかゝ那玉梓と情あゝ既ゆて
主君の亂を孕て五ヶ月ふ及び比光弘果敢ゑく殺まれゆひて定包長挾を横領まゑふ我
妹ハ光弘主の亂を孕りと少知りく淫婦玉梓よゆゑるさゝ毒を艱んと欲まゆ。事
幸ふ洩ゆゑ〻ハ在下妹を伴ふ。悄〻地ふ上總へ走りく。蘇々利村ハ親族許。共
侶ふ潛び在り。低而月來ふゑる隨ふ我妹ハ産の氣つゆく。生れ〻ハ男児を故主の落

乱るゝとして左も右もあく鞠養む程に我姉い時疫に亡ひ黄泉の客となりぬ。折〻山下定包い里見の義兵に討滅され又麻呂と安西も滅亡まくる事の趣と世の風聲に呼くめく。然とて還るべき家もなし。是より安房さへ上總さへ里見の有となりぬかど。神餘の子孫と尋求めて絶へる家と嗣せんと宣いまるとに沙汰もなきぞと恨く思ひのこの訴出んいさまぎぬ。百折千磨の世と渡るに腋子と養ひまゐせに腋丈質弱ヨリ病少そ。且その性も人並ならねば年十五六に及べも菽と麥とに分ちぬ。剰風濕に罹り脚癇て年中三百六十日枕の外に友もなく筆把るだりの氣力もあらぬ。いと朽惜く思へども鍼灸薬餌加持呪法も空馮心めて效驗なく生来るなと爭何いせん浮世を潜ぶ身に。あれい神餘の姓氏と憚りて廼腋子の姓名と上甘理黒之介弘世と名つけまゐらせそ。果敢なく時の至ると俟ふ料らぬ草蜜田素藤の招に応じて。這年来主僕二名館山の城内に扶持せられて安西麻呂们と同列なりあるに素藤心傲りて。我们をよくあなどるぞ。弘世いそのの性愍あて剰病者なれとそ。月俸なども年年に貶して定のごとくにせられぬ。口と餬ふに足らねども在下とのこと苛刻く使る。三日毎に一度かり。それども這回の密謀を亨て。這個の人々三四名と倶に今日老侯と殺るまくせい。神餘の後と立られざりしと恨く思ひこぶるに支成らぬ神餘の舊領長狭平郡と與んとのれに心迷ひて賢明德義の良将を暴虐奸詐の草蜜田に與に狙殺るまくを欲りしる。先非を悟りて罪と知る後悔い麻呂安西とのひ合さひと同意なり。非如我身いの侯に結扭頸と殺るとも。弘世主と憐愍て小禄とも宛られ神餘の祀と嗣しぬ。その年来在下に畢せ。孤忠も虚しくぞ死して栄ある一世の歓び快く目と閉ぐべ。願ひまるいその義のこと又その男子い同志の俠客荒磯南弥六に乾子に椿村の隊八と叫ぶ。做ものでいへとへば又隊八も跪ぬく陳ぬるに。小可い草蜜田殿に亨る恩もいぬ。素より國主老侯と恐まるるもの。但我乾父南弥六に昔年杣木樸平と倶に定

色を殺さまく欲りして。衍て光弘主を犯して當日殺るれる。洲崎垂垣三が外孫と外祖垂垣三が殺されて折へる不総角であり。一族の夷藩ふ逃去て年来を歴さりと聞き。徒而件の南弥六が外祖ふ劣らぬ侠気あり。垂垣三が衍て光弘主を犯せと最酷う羞恥じく。神餘の氏族の在るべいくく一臂の力を盡して外祖の汚名を雪んと思いざる日もるれ所以ふ殺る剣白打相撲の術まで。その師ふ就て習ふ。聲力も人ふ捷れ。里の侠長と衆人ふ尊敬せるるめふそれ恁り。程ふ光弘主の落胤あるよを。等知りしより欽びて。遂ふ這天津氏九二西郎と交を結びて年来疎ろ祭び今番の計議ふ荷擔を容き。小可と伴ひて三個の人々と共侶ふ侯く殺みまく欲せりども。這少年の勇敢武藝ふ敵もべくもあらぬれば。辛く命を免きさり。他怒ふ漏ぎして。囚れく這里ふ在るるらば。俱ふ奇特は感悟してみづから新ふ殺べりと。逃亡さるい幸ひそぎ。他が不幸ふ陥ぬとそ。迷ふく招ぎきりけり義實ふ衆口衆意の。

齊一かりしとうち听めて。嗟嘆ふ堪ぎ。生口们をつらくとえくへやられ天津員明とあ
ん。神力瑰異ふ驚ぎく。後悔陳謝ふ遅くぎ。汝ら亡君長挾ふ光弘ふ落胤あ
らば。何とそや早く徒々と瀧田へ告訴せざりけん。弘世とやらんがのへりも義實ふ知ざるのを
ぎ。當時金碗八郎ぎ。その子のみと知ねばそ。何ともいで身故りくまを義
實ふ執ちぎとく。恨こそるへ愚痴れども。その孤忠ふ憐むべ。又景次重時とやらんも
ぎぞり。當時麻呂安西と。義實ふ討ちしふあくぎ。信時ふ景連ふ責られて終ふ
自滅を取りふ。又景連ふ義實ふ功と媚きて邪計を旋らし。攻滅さんとせられし故ふ。
已とを沼ぎ鋒を交へて克とを沼るる。徒れば他们ふ滅亡ふ則自業自得ぞ怨る所
ぎるべ。然けれども麻呂安西の同宗るるめ罪を謝して。軍門ふ降参せば我豈執
念深ぎらん。時宜ふよりて舊家の後を立て家臣ふ做ぎべきふ遠く走り深く
躲れく。反て悪人素藤ふ扶持せられしは是も亦人を知ざる愚ひ。その餘南弥六

隊士八们ハ素是市井の俠者ふ〜〜。志氣ありとふとも。至明の醉ハ同じかるべ〜。そも左
まれ右もあれ絶ると継ぎ廢れると。其ものハ古昔聖王の道ふ〜て。所困れまあ
善政を陳るよ〜の違ぎ安房殿義成をふ命乞〜く願ひのぞく做も泛させん。但
その言の證据ふ〜異日るふよく糺問まそ賞罰訓いその折ふあ〜ん先方の意を泛よ
かーと仰ふ大家額と衝て。欽び面ふ顕れけり。姑〜て天津九三四郎貞明ふ大江親
兵衛ふうち對ひて。目今隧八ハ禀ま〜ぞく那荒磯南弥六ふ。市井の俠者でハへ
ども。罪と饒〜て用ひるべ。必做まとあるべ。他一旦ハ逃されども獲られ〜苦痛ハ堪
ぎ〜て。山路を遠く走るかふふ其頭ふ躱れく存るべ。狡是も亦知るべ〜ハ倘逃果
ま〜て。舘山へ還らば虛実を蚤田ふ知〜まく。妙ふ〜ざる我もひ〜ん。ま人を遣〜て往
方を渉猟〜ぬ〜ぞ。とふふ親兵衛領ぞて我も亦如右思ふ。とのふを目と貞六郎ふ。
共伴ふうち所く。あ〜べ我们二個ふ一個ふ許を蒙りて。渉猟て存〜べ。牽あて

來て。恐ると親兵衛推禁めく。不知安内ふ和殿们ハ。我走一走行て
索んいでくとのひ〜も。身を起さんとせ〜程ふ傍の樹蔭ふ人ありて。やよ和子。一霎時
等ふ其南弥六を搦捕て先の程より這里ふ在り。やよ待ぬと叫禁めく。樹
間を徐ふ出るふあり。此ハ是甚麽ふる者ぞ。汗ハ又這下の回ふ解分るを聽ねか。

第百五回

名山靈有り枯樹復花さく
逃客路无〜老俠俘を献る

登時樹蔭ふ人ありて。大江親兵衛を喚禁め。徐ふ出て來ふけるを。大家誰やとうち
見れば則一個の老翁。髮髭の白皓ふ。身體ハ瘦て。枝疎ふる漁村の松ふ似。されども筋骨ハ衰へぬ。亀齢鶴算幾
ぞ。尚鑊鑠と輕健ふる氣力面ふ見れて。花田の布の綿腸衣の裳を卯く。裙を白
布の袖脚衣て。ふふ朴刀を携へ。那南弥六を緊く細りて。牽立々々找ふる後

方ふ續くに一個の老媼ある鹿栲の衣を被て下短ふ壷折り縢げ打扮殊ふ精悍きくるふ眉尖刀を挾みが義實を相て遽くもの眉尖刀を掻遣捨て裳をも解下ぎ。阿容ぎ俱ふぞ栈ける却説老翁ハ南弥六を素食縮て義實主の目前遥ふ奉坐て膝折俯くるぞ後方ふ老媼も跪坐て共侶ふ先老侯を拜けり。今程ふ義實主ハ這老男共の為体を料り難く訝しぢふ傍を見るのやよ親兵衛他們ハ原是甚麽る者ぞ和郎と親き相識りさば他も亦這山ふ年来住ぬ熟さり。鄕嶌ふ和郎が同宿の者しもあれば徒然ぞとのみぞ具ぞねば吉凶ぞと思ハぎら他吏ふ紛れて果さりしふ其人ぞ怪しうあまぞとのぞ老翁を佶とあひて其れ老翁人親兵衛と山居同宿の者ぞが近く找ぞ顛末を詳ふ問えあげよやよ快さと扇をあて連ふ招ぎあふぞ老翁ハ阿と応して先南弥六を見六目ふ牽遮ぞ一ぞ主と身邊へ找め老媼も後ふ跟ておぞ近く程ふ見六目ハ南弥六を又樹下ふ繋ぎ置て親兵衛と共侶ふ主君を左右ふ守護ぎ。當下老翁ハ恭しく義實主ぞ朝てふを打ち拍し額を衝る頭を抬て熹ぎ。今倖ふ瀬ふ逢ぞ其素より賤しき我們が貴人ふ近着ぎるぞ親くのぞぎるさんと弥勒の世ぎぞ有かぞうんを怪けれども熹ぎ上人言長くも聞召れよ。數ぞ奴身の死しと又世ふ見る小可ハ大山道節忠與が父ぞ。大山道策が舊僕ぞ。初の姓名ハ姥雪與四郎後ふ梶原又神谷ふ作る里の褶平と喚れしあぞ。之又柴侍るハ拙荊ぞ名を音音と喚做る道節の妙母ぞ。今より六稔前ハ秋栄月の初旬我児十條力二郎及ぞ弟尺八郎ハ武藏豊嶋の戸田河ぞ。大士を追隊の大敵と遮留め厮戰ふて竟ふ戰没仕ぬ。折ぞ音音ハ両個の媳婦曳ふ單節と世を不娛て上毛州甘羅郡白井の城ふ程遠ぞ荒茅山の隱宅ふ在り。栄月六日のぞ。両個の児子力二尺八が亡魂の母の宿所へ帰り来ふける怪談のぞへども要緊のぞぞ。其頭ハ言略ぞ。然而とのぞ言訓りて後方を天

かへりてハ音音是より後のありさまも渾家にもよく覚えたれバ代りて稟上まをさんとありけれバ
音音も膝を找めて義實主に稟すやう曩に良人與四郎が申しあげまつりし如く
賤妾と媳婦ハ煉馬家の滅亡より世を不娯て件の山家に在りしかど良人ハ年来
故ありて武蔵の梶原に流寓ひて漁猟して世を渡りぬ折から主なる犬山道節及
その黨犬塚犬川犬田犬飼も不憶く賤妾が隠宅に聚合ひし夜丈與四郎も亦悄
地に武蔵より来にけるが両個の児子力二郎尺八が亡魂の媳們が馬に乗り牽れ来て犬
士の與に戸田河にて追隊の頭人丁田氏と思ひの隨に戦ふて件の頭人町進を載ち果しつる
事の形勢を報知しせ又二親の離別して年来胡越に異なりしもそち敷くその切なりし誠
道節听て深く憐みて這宵亡親道策に代りて稽平の與四郎が做ました昔の罪を宥めて
酒盃を合さして賤妾と夫婦に做しぬしかれバ是等の情由ハ忌々あくて面正しくハあらねと
あれし原野合の夫妻にて離別あるハそが故なれども児子の忠孝與四郎も功あるをもて許さ

れて小篠が雪の侶白髪まで後の婚禮ハ世に有りまじと耻しくも亦哀しさのあまりも
なく侍りぬとばかりて涙咽びける當下與四郎焦燥て益なき雑談いひもあへずと禁めて
貌を改めて却その次を稟上んとせし程音音が隠宅へ道節們を宿せしより白井へ密訴
せしものありけれバより緝捕の頭人巨田新六郎助友が軍兵ヨタく従へて不意に起りて推
寄せまつ支の難儀に及びしが我們必死と究めし折犬士の一人犬田主が曳る軍木郎を我
舊里なる行徳へ領ていんとありけれバその議に任まして拳立置たる駿馬にうち乗せ小
可音音ハ道節と四犬士を後安く延さん為に稠入る敵を姑且防戦ひしが竟に弓折れ
勢究り免るべくもあらざれバそが侭奥に退きて家に火を放けつ夫婦ひとしく焔々たる猛
火の内に跳入らんとせし程に奇なるかな煙の裡に嬋娟たる一個の神女最大なる犬の
背に尻うち掛けて出現あり小可と音音を制めて若們ハ是忠臣節婦天助感応
なからんや努々戦没まべからず是に携れと宣示して犬子の絆を投被あへバ小可們ハ夢

欲と呵ふ且駭き且感激して。音も倶ふなる麻索ふ携るを躯て中天へ被登
されて。忽然と黒白も知らずなりけり。低而その詰朝なるべし。小可も亦音音もなう醒くふ
我ふ復りて共侶ふ身を起して。驚きながら四下を顧るふ。怪しや身ハ這深山ふ在り。水を
纖々として奇品の間ふ流れ松ハ亭々として。凉風の秋ふ唫ふ異草地ふ満く。観
熟ざる花馨ひ林鳥梢ふ集て耳珎しき聲なす是まさる意外の奇觀なるふ意きて
ろ泓々されハ年十四五なる穉兒の一人山居の内ふ在りて。草花を要子々餘念もあらぞ
アヽえふけり。登時小可們思ふやう原來身ハ冥土ふ到りて。這頭ふ罵置なる歟
然らバ前面なる谷川ハ俗の口頭ふ唱える塞の河原ふあらんぞらん。若まら那穉
兒の一個這頭ふ在るよりあらんや。七歳未満の孺子ハとも死してハ冥火の異ふ問試んと
尋思とある夫婦悄々地ふ商議して。倶ふ出山居の頭ふ赴きて喃和子よ吾曹問
ん。這里ハ什麼那地ぞや。這山の名ハ何とかいふらん。倘知りたらバ誨ぞ。和子ハ亦何ぞあ

故ふ獨這頭ふ罵置まして其由あらん甚麼ぞやと問べき件の穉兒ハ莞爾ほゝゑみて。
翁們ハいまだ知らざるべし。這里ハ安房の富山なり。二十稔あまり前ハ里見の息女伏姫上の
山居なりて。果ハ刄ふ伏ありし。則這品出崛ゆて墳墓も亦這里ふ在り。我ハ則翁
們が故主大山道節忠與們と大ゝなる宿因ある。八犬士の随一人犬江親兵衛仁へ
過日我身ハ下總なる市河の頭ゆて箇様々々の大厄ありしを。伏姫神の救せ給ひて。這山へ
領て來給ひしハ隔昨五日のまへなり。其よりして今も姫神の傍ふ在して慰め給ふ。徒
然なるまゝ這里ふ在り。昨日翁們を猛火の内ふ救ふて這里へ領て來給ひしも亦姫神の冥
助なるふ。身の歡びと畢ふさまや。と毎ふ大人備て且過去を悟り未來をふも辨論意
表ふ出ざるふ。よく世ふ又あるべきならねバ。且驚き且惶るる夫婦が歡びハ中々ふもあらず
神女の如き穉兒ふ凭りていハせ給ふなるらんと思ひまけれバ謹て原来なん身ハ五犬士達の噂ふ初て
聽知りたる犬江親兵衛ぞせし歟。神女ハ那里ふ在するぞやと問へバ後方を指さして。那と那

親兵衛
かりあはたら
世のつひせ
そとあとかれ木
花さかなけり

花咲の爺

里に在るかと教られても小可と音音ざ視ぬ見えぬひとも深信いよく胆に銘して忝く
も限りなければ其方に朝に身を投俯して默禱の時の移るを覚えずうく頭を抬れば
親兵衛腋子の又の名は神の真助は翁夫婦は是両個のこゝろを五大士も恵るく寄
隊の虎口を免れ又両個の媳婦曳る單節も昨日神女に道すれて茲の大塚の頭に
在り那里を出て快く走るを又指さ誨られる小可音音共侶に驚奇哀憐判らもなく
慌惑ひつ品崖の頭べける塚下へ走るを共侶に又れば果て曳る單節は昨日乗しる
馬と俱に呼吸絶くて馬上に在りちく誰何とゝうに駭躁ぜつ両個を曳る單節は
滕けられる絆索を急に解捨て抱き下してよく看るに身を受る疾かを憐むべ件の
駿馬は肛門より腹内まで銃傷を受けん後足さへ蹄さへ血に染れて死るその鞍下に陥ち
ぬる力三尺八寸級もなく低き人をそ大切こけれと思へば婆々と共侶は曳る單節をと合ゆとう
又胸膈を拊試に寸口の脈に糸よりも細きを鳩尾温まりければ又両個

両個の媳婦を抱き起すに臂近き石蒲と口に沃ぎ入れて神女の真助は只管に祈ぎく
吳活るとせ一程に熟べて曳る單節は忽然と甦生りて小可に向て詩り疑ひ又驚ぶも大
かさらぬを思ひ分けて這地方に聚合りと問れば我は答て伏姫神の霊験真助を蒙
さそ萬死を出て一生を得て其の山に来る事の顛末又那大江神童尼を神に救れく
本月の五日より其の山る品崖に置ると解に惑ひを醒
せ奇話珍説の尾まで簡約を送るりける越に初く身の往方と神の擁護を感悟
せ事情を生知て和女に昨乗る馬の深痍に死ぬ幾十里る這山に来て斃れ
開る亦神女の真助に世に有るを再會は皆是神の恩徳と夫を思ひ合ひと一五
一十を解諭せ曳る單節に聞く毎に驚ぎつ亦惶ぎて齊一空とうち向て伏拝むを半
晌許然而小可に報るを奴に知せ過日荒芽山の隠宅に大敵打向ひと折大田主の久保を合鞍を乗せられつ落人與に絆索を解て殺重狭滕着ひく

牽退けて遠からぬ樹間に繋累れしを寄隊の雑兵群り来て牽もて去んと競鬩るを。大田主の走り来て防戦ひの程に刀尖狂ひて繋累し馬の絆索を撲地と断れば馬は猛火に駭噪ぎて狂ひ走りつ駐んと欲する敵を蹴倒しける勢ひ当りがたければ大田主も能なりけん馬は快足と前の如く去向も知らず走りてこりその折に奴们両個は倶に生たる心地もあらねど尚鞍局より墜もせず勝られる故に得り恁てぞ馬は直走りに走ること幾町なりけん。路に居りその野武士在り奴们が馬の走るを見て駐駐んとすれども駐るべくもあらざれば遣過すべきかは連発ちし鉄砲高く鳥眼鉄に馬は躬所を轂れけん嘶びつつ跳騰りて倒れんとせし折から忽然として燧火とおぼしき両個の団欒見えしが奴们が頭の上に撲地と墜ると思ひしのみ共侶に呼吸絶にけん爾後の事を知らず得り。素より大人達のしる所ぞ。轂られし馬の奴们を棄して遥々這深山辺に来りしは全伏姫神の擁護なると疑ひなし。世に復類なき奇事なり。偏夢の心地してぞ待るかしと女児が報れば女弟も續て述ぞ尽き。来し方の物語りに日の闌るを覚ざりし当下音音は笑しげに曳手單節に對ひて。今も爺々の告給ひける犬江神童の身邊に伏姫神のつきまして守らせ給ふよしなれども爺々も奴家も凡夫の視に見えねばしらねども那子の神々しさは託宣にてもありつべき体なれば和子に再生の歓びを宣まをすべく尚その後の吉凶禍福と向く往方を定めてんやとて立をと心を囑て大家倶に岳山屋の頭に跪坐て神童を俯拝みつゝ禀まをす。あんどて論によりて曳手單節も那地方に来て在りしを見知りて小介保しく恁再生の幸福を祝ふよし只惜むらく媳婦们が乗る馬は斃れて生べうもあらず他れは只是何ん又我们は那地を投く赴きし道節们に環會りしゆゑんの義も数へたまひかしと問へば徐にそうすう然る馬の亡骸は那里の犬塚と推並べて叮嚀に埋めさせよ戌と午とは地枝六合の素よりの因縁あなれば。あらぬ鋤も秋釜も那里にあらん又這山は年居ヶ麓の河水淵と成て人馬の通路久しく絶たり縦海達故王と莫希めて他郷へ去んと欲するとも目今は山を出るよしなし咱们と倶に

這品山屈に宿とて時の至るを待ね今よりて衣食の類い姫神の賜え皆先に在を
たらべよとそ秋桃四顆を含ませてあふるる授けられ犬家にて受戴に件の桃を
たらべ味ひ死蜜の似くて只一箇を飽さるが是より數日飢ざりけり恁而又小可们を
曳る單節も共侶ふ塚の頭ふ在て在る果て舊る鋤釜二挺敏ふ紀筍竹の中ふ有り
是ふ神女の賜ふんと思へ合まりつうち戴に件で児子なる首級を舊塚と推乗て馬に亡
骸を埋め塚を造りて又品山屈ふ入る来れば神童い昼寝をまうち折ふ初秋の夕暮れ
被る衣の薄ふ脇不縫の間より其の背のええるが九の命より殷ふ痣子ありて形牡丹の
花ふ似れば犬士の黨誰もかも同じ像の痣子ありと哀思に合まるふつらく思
惟るふ小可们ふ少ふりー時過失をあれ此の年来積る功徳ふ亀もまー然るを神此徳
まで一家四人の必死を救ふて這山ふ置ふ其の所以るくふ犬士に願ふ這神童を
我们四個ふ守さそ其の徒然を慰るよまふ犬士と思召る神誹ふ犬士ん。

現我故主も犬士の隊ふて俱ふ骨肉ふ優を過世ありと豫所ーと今又思へ這神童ふ
仕る道節主ふ仕ると又何ぞ異るべ況五犬の黨ふ昨日寄隊の虎口を免れて巻あ
らぎと託宣あり今ゆふ他を求んや思ふ立日立日も及姫们ふ耳に示せば犬
家然へと黙頭て俱ふ心を一ふ考ふ守して和子を慰めう是日よりて鍋釜に米
さへ味噌さへ菜蔬さへ誰が知て在るとふ知らねども皆品山屈の内ふ在り又夏冬に衣ども
神女の賜ふとなぞ求めれども況とも約莫日毎の食料の竭んとれば孰の間ふ二苞
に又ありけり俵藤太が龍宮より得ると伝へ米苞も徒ありけんと思ふ間の金畫藏を最奇
なり佐竹神女ふ親兵衛腹子ふ習讀書を勧て文学武藝迄も教ふ孫を
ふ年来間断なりーかども小可们が眼ふ神女を拝ふまうと云ふ人ん聲も聞ふ
獨和子のみ分明なべ細砂を坦て字を寫覚えその書をーて素續を考う式ふ敷剣
弓馬の技獨学ふて獨学をを是ものとを奇ふ中の一大奇事と思ひ親兵衛腹

子は身長の年々に伸るに世の倅子は十倍して六稔の程に天有奇子許に有りたなる天
奇異に似たるぞやと云へども少許退く腰に夾みたる巾の額の汗を推拭へば音音に良人に立
替りて又老侯は稟性もの事の珍奇なれのみるるぞ尚一椿事の御利益なる初曳の單節は
這御山は來世比より猛可き腹の大なるるて臨月に異なれば病痾所
為にあらざるを思へば難て他人を質し問へば曳の單節は答へて隊に知せあるを
亡夫達と婚姻の折幾日もあらで別れしより三度枕を並るとなく一稔あまりを經る程に亡魂に
見えしのみ慣れば今は奴は有身なるも伝へねど呉怪は腹内を折々動くの伝へ
甲乙一對の患は不思議に侍るか甚麼なる病痾の所為なん心ふかるは為に婚姻の比よ
りして今なる月水を止めの血塊とのみの年を歴れども生もと牛ども形形を做すとありと告げたる
あるは敢我なるに淺きとのみ思ひ侍りとのみを與四郎から聞く凡夫の臆断なるに云云と
のみを思へとも又神童は告て神女の上を同じ然るとそ觸て件の義を腋子に告て病

痾の根元を問へ親兵衛腋子の答るを曳の單節は懐妊之素より病痾の所為に
あらざ初カ二尺八寸と添臥繞は一宵とへども其折他人の姉妹俱に既に有身なる折を煉
馬家滅亡して夫婦離別の憂苦あるは故に胎内なる子の氣血足らねば大なる臨
月逆に過るに生れざるとその母は今まで知ざるに微い曳の單節は那比より昨今
まで月水あるにあるとの疑ひを解くに足れるに過日姉も妹も荒茅山の窮難を脱る
折柴なる馬と野武士の鳥眼銃に斃されしかども馬は他人を乘せて這地方に來るも
その折両個の遊魂の隊に他人を懐に入るるも皆是神女の神力によれり那日の燐火は力二
郎と八犬遊魂なると神女の憐みの故に両個の妻の胎に投して胎内の子は氣血を補ひ且
這山なる神將仙果とて姉も妹も胎内なる子の猛可に大なるを慰れば
安産遠からざるに又何を疑ふ開も併その年来若君は一家父子夫婦は忠義節操抜群
なるに後なる応報足るとて造化の神の憐愍て力を用ひけん神女の冥助のまとる思

ひそ善あ善の報ひあり悪あ悪の報ひあり那房八が身を殺して仁を做る応報と粗相似ると悟りのねがと叮寧ふ示しめしゝ皆疑ひの霧晴て茲も照せ天津日の恵ふ遇る神の加護惶ろも亦泰さふ大家涙吐むまでふ感嘆せざるも侍くさり是より三十日許を経く曳る単節も同日ふ産の氣つて安らふ生まふ俱ふ男子あてその面影八カ三ふも尺八ふも肖て毫も違恩ひうけゝく両個まで孫と成ると一祖父祖母ハ共侶ふ愛ちぐゝて甲乙俱ふ合る揚つ産湯浴ちる谷河の水より深き姫神のお恵心を感じちゝ感じ秋びぶべうも侍らまり然ハ曳る単節ハ血量もゆて肥音程ふ乳も亦多ふ生ゝ孫ハ甲ひゝく肥て病氣もゝく生育侍る因て父の名をそ侯ふ曳ゝ子と力二郎単節が生ゝ尺八と名つけて年来艱育ちゝ今茲六才まり侍り身長の伸ると智慧力量さへ神々ゝ犬江和子あり〻ふ一て及ぶべも侍らねどもち見あハ

ヨ哥常ゝ七八才の童蒙より大ゝ侍らん狩と〻ひけて吻ゝとちち矢ハ與四郎已ゝと推禁めそ找ゝ出額を御て又義實ゝ主ふ稟ちやう其後做ゝ意ふ義を主ひゝく鋤秋金あれハ畊

作せ〻めとひゝる〻。親兵衛腋子ゝ諾ひ老衣食ハ折〻伏姫神の賜らんと仰ぎふ畊ゝ何ふ且這山ゆ石ヨ〻けれハ水田陸田共ふ要ゝ但這山峯上ふ観音堂ありそゝ老侯の志願ゝく。伏姫上の菩提の與ふ昔年建立あり一かと落成の比より考て這山河の水倍て船も筏も竿届ゝひハ今ふ迫て二千許年。長禄三年より文明十年まで。参詣の貴賤登山ふ路ゝ。那里ふ久く香華絶ち翁と媼ハ身の勤ふ折々御堂と掃除して香ゝ焼ゝ花ゝまゝ〻せ親族有縁亡人々の菩提と吊ふそ相応一かゝめと論さゝめ一ハ厮欽び朝毎ふ峯上ふ登りて観音薩埵と拜ゝまゝ〻日ハ稀ゝ別當ゝ遥けゝも六稔の光陰時ふ文明十五年ゝと麻米けるゝハ既ふ亦上る如一徒而今日朝未明ふ犬江生ゝ慌ゝく小可毎ふ告るゝ翁ハ一ハ知ざるべ一いゝ日よ

ゝ這山河の水の猛ふ落れハ今日瀧田の老侯の伏姫上の墳墓と祭らんとて登山ある趣一その故ハ箇様ゝ〻と那素藤ゝ反逆の事の顛末并ふ御曹司義通君の御窮泥の趣と言語ゝ急迫一く解知一て又神託と侍ゝ姥雪ハ皆羨れ今日老侯の登山の折箇様箇

八代傳九郎卷二
八代傳九郎卷九
文溪堂藏
花咲のあね
なを六
山路ゑ迷ふく
南弥六
生拘らあ

様の危難あらんそを大江親兵衛に對治さんといと易し。若汝らの折をも老侯に見
参して俱に御恩に預りまゐれ今より浮世に出る身なれば道節自餘の犬士汝も再會必
遠ふべからず陽世幽冥隔あれば是より永く別れん。その義を送り給へよと神女の仰せ
といられて音音曳き單節も皆共侶ふ敬駕にて遽しく漸に線香を焼き身を淨め
那里に在とへ知らねども稚児力二尺八寸の海を大家共侶に俯して拜しつ。あ別れの惜き隨に
感涙の坐に找ぬ袖濡れてせん方もなくいとど折ふる花降り音樂響えて尊さ越に弥増
せり。然而あるべきにあらねば一霎時目送りまゐらする犬江生八時分と料りて今日老侯に慈
做き奴們を對治せんとて精悍き身装ふ棒挾みて梵路投て出て西に向て有數に
心のとゞまるを推續んとて准備とゝのへれば音音并に媳婦孫們さへ共侶ふとて後に跟
くを禁めもあへず未ぬ折逃迷ひけん一個の鷹砲児足を曳て前面より來るに撞見
あたりければ道の過ぎて組伏せ。索を横ふ他の身に受る撲傷の疼痛ゆや堪

ざりけん小可如に老人に敵ふぬを義に及べば徒而這鷹砲児を率て這方へ去る程に
同類の鷹砲児四名の女を犬江生に捕られて招ずを聞召て折ふるれば仇を找ん
言の果るを待ふ逃る賊徒南弥六を趕捉へんとて人々の既に立まくせ〻れども已に
ぬを聲をかけて君の見参に入るのを〻ぞ小可音立日們両個の媳婦が六稔以前に再生せ
ふ伏姫神の寞助るりと禀上る一期の教び附驥の功過世ゆけ一家の栄と禀まゐ
烏許ふ這鷹砲児に隧八を〻ぶ招了る著れる那南弥六に疑ふ皆是君のあん
威德を世に有〻ふと禀ず音音も千歳の壽を〻ん唱ける是を聞る里見主從生
口毎に至るまで皆駭然と面を注て新奇と感嘆き〻ふけりそ中に義實主に扇子を
膝に歌杖に推立頭を傾けて〻ら〻と聞果て感心尤浅〻ず姚雪夫婦に對て現不
可思議の神助靈驗方才面前に視聽くに誰〻実説と思ふ郷高も既に
ふまくせりと言ふ〻に果さで新兵衛も聞ねり。我いあの年来伏姫が菩提の與に他が

月の亡日毎に精白米五苞并に味噌醤酒油菜蔬柴薪の料を大山寺へ遣して貪民
乞児に齋を與へ又夏冬の肇に布を施す事せしに詣来て齋をこうべるもの寡し折も
米はちこえその餘の東西も殘らずとぞ。誰がのて去とは知らねども。怎るの折々あり又布ゐど
も如右へと竹えうも久しくゐりぬ又親兵衛が被る繻衫も頗べ出処あるに似たり昔年伏
姫が常に布用ひる。錦綉の裙児ありけるを。他が身故ありたり。比大山寺へ遣して調度
みどく共侶に那里の宝藏に弄ぬ置せしが彼と此とよく相似たりとて思ふに六稔以来
伏姫が亡魂の親兵衛と若们を養ひ外の東西ゐるも皆我施物の有餘ゐるを問
ずして知るべのみ。偽れが由て来ることあり不思議なり。不審義に堪ずも思ひぬ。
宜へゐ大家吁とぞ。ふいなく感嘆ありける。這回のまぐ盡さんも楮數ちに定
限あれば巻を更く第百六回に解分るを聽かし。

南總里見八犬傳第九輯巻之七終

東都　曲亭主人編次

第百六回

青海波を牽して景能稲村より来る
黒闇夜を犯して曼讃信館山に赴く

却説里見義實主は又焼雪夫婦よりうち對ひて我方僅解も示せしぐ顧べ東
西皆因ある縁あり。就てゐるるに與四郎が朴刀と音音が眉尖刀を携ゐ并も
亦出処あるを。猛火の中に死を免れて身を這山に置れ。相応しく皮器械をも
亦伏姫の亡魂の授けし欤と問れく與四郎頭を傾て。ん疑ひ理りと這朴刀に可
皇裏に武藏の戸田河原より両個の児子力二尺八寸首級を悄々地に奪合て荒芽
山へ赴く折。身の護に携へを當夜白井の寄隊を防ぐ。笠前種も既に竭しぬ。又
皇を奉そ幾個欤近つく敵を砍拂ふ。躯て猛火に身を焼して死まくゐる折まで尚

○文奚堂藏

この刀は敵きらずして我身と倶に這御山に領て置れけん。その折より有り皆是神女の靈應なりとしらば音音も亦しらず。昆裏に煉馬を没落の折駿馬と倶に那眉尖刀我賤妾が手親牽も来つ携へもきて上毛なる隱宅に来て在し程身の護に蔵措にき。又那白井の寄隊を防ぎてあの眉尖刀の鋭鈍も聊鈋を得りてこ幷と那折に喪ひぬりしに。伏姫神の冥助にて與四郎が朴刀と此彼同じ奇特に侍りぬるに郷民が大江主が今日上の御登山の折障碍あらんを對治せんとて單身出てありしが與四郎も亦推續て麓路投ていそぎしを有繋子心のさがなくて非除老女の果敢なきなく交の要に違ひてお上に惡做る賊徒あるが一個なりとも數を捕なんと思ふ心に身をば料らでかの眉尖刀を携へし鳥許と思召れけん宜に鳥許を得るめりとのみて吻々とうち笑るを袖りて急ふうち掩ふ。老樹の花は晨月は薄くらぞあて馨香ありに実ある言葉の男なりしぞ義實感心淺からずぞ聽果て又宜ありふ思ふに優する音音が用心這夫にして這妻あり現一對る忠

魂義膽今の世にはいとく得かたし。就て若們が両個の媳婦曳手と單節と云らん。幷が兒子們も那里に在るやと問れて音音は欽しげに隨即答まうしまたう。郷高に他們も賤妾と倶に那樹下までまゐりしかども御免を蒙らで一族渾て見參に入りまつらんは無禮なるべしと思ふによりて推止めてけん目前へ出さでにとのみて義實ほゝえみぞ。いぞ立も疲れけんぞ兒子をも這方へ召よせけりよと快々と仰に音音は阿と應て。身を起して遽しく件の樹の蔭に退くる程しもあらで曳手單節と両個の孫兒を伴ふて舊處に出て來つ大家程よく並坐して義實主に拜見まつる當下親兵衛枝を出く老侯に向ひまうす他們は則音音が媳婦十條力二郎尺八が妻なりける曳手單節姉妹なる兒子は後の力二郎尺八にぞなるれと吟えあぐれば與四郎も笑しげに額を衝く程に音音は両個の孫兒の頭に両手を掛けて額を衝して倶に千歳とぞ唱へける。程に義實主は這四個の母と子をたらくと見て宜にこそ曳手單節と云らん若們が

再生の奇特い既ゐ與四郎音音ゞ告ーゐりて具ゐ知れり。寔ゐ天晴金衍ぜゞ若们姉
妹孝順ゆゑ。よく姑ゐ仕へぎいゐゐて這応報あゝんや。且カ二尺八ゞ逆腹の子ある を知
らぞ。その期を過して安産せゝいゐく奇異とゐひべ。今よりて與四郎音音と花咲の
翁とも又花咲の媼とも呉ん然ゞこそあれ若们も又是枯樹ゐ花媳ゐれども憐むべ。良
人ゐ後れて。青年ゐして孀婦ゐるゐ。倘この憂ひ微りせゞ得ゝ。ありけん子さゞ汐生まず。
倚伏い糾ゐ纏ゐ似ゐ哀むべゝ。歎べゝぞ。そゝ若们ゐ児子ゐゝ両個ゐゝ。憐悧
像べ年十許ゐゝん折。我孫達の陪従ゐせん男姑共侶ゐ瀧田ゐ参て扶持を受よ。
城内ゐ大江親兵衛ゞ祖母妙真も在るゐれば詞敵ゐよゐゐん。先よくゐの意ゝ汐
よかゝと貌ゐ仰れば曳ゐ單節い感涙の落るを押へゝ共侶よ頭を抬げゝ禀ゐゝ。
世ゐ有ゝゐ御貌命數ゐゝ汐身ゐ餘ゐ。一家の幸とまゝゐん。猶憚りゐ侍ゐゐ皆
是神女の御引接ゆゑ。縁ーあれゞゞ犬江の和子ゐ。餘慶を受ー歓び。駅馬の尾ゐ附

なる蠅の千里ゐ到るゐ似ゐゐん。歓故主ゐ仕ゐる道節ゐ。まゞ見参ゐ入ゐ。ゐ開ゞ
家僕の宅番ゐ。我们ゐ惶ゐ。恐ゐ見ゐ賜ゐ。面目ゐ。今ゐゐ影護く
ゐ仕ゐるゐ。とゐ亦與四郎ゐ音音ゐ俱ゐ禀ゐ。媳婦们ゞ呼ゐ。時宜ゐ
あれと。道節们ゐ先ゐ。ゐる見参ゐ宜ゐ惶ゐ。とゐゞ義實主權禁めゝ不古賞
罰ゐ実賊ゐゐゐゞ我ゐ只若们ゞ忠信節義を賞ゐゐゐ。微賤とゐ數人ゐ壁言べ。
道節们七犬士のゞゐ我照文ゐて災番欲招ゐ。ゐ欲ゐ。ゐ。他们ゐ俱ゐ固
辞ゐゐゐ。八具足ゐ折ゐゐ。招ゐゐ。ゐ親兵衛仁を越ゐ得ゝ。
時ゐゐゐ。天仁義ゐ行ゐ虧べゝゐゐゐれども。就中仁を根柢とゐ。那竹の節ゐゐゐ。則
仁を根とゐ。餘の七行ゐ各節ゐ然ゞ孝悌忠信も又義も礼智も仁ゐけれゞその徳聖ゐ
至ゐゐゐ。故ゐ八士の一人曼讃信の一仁先出世ゐ忠孝義信礼智も悌も皆這
仁ゐ由らんのゞ差とゐ異ゐれ。姥雪一家も俱ゐ曼讃信の仁ゐ由てその忠義節操の応

報ずるなるべし我聖人おのれが為に仁を為さんと僥幸なりと道理を盡して諭しぬ與四郎音音曳も單節も這它のものも推並て感嘆の外なりけり。そゞ中に親兵衛は額に汗しつゝ老侯に稟さう自今仁字の教諭は尊く業とせんと何で臣等がこれを當らん譬ば那鼠璞の如く名は同うすれども其物異に最恥しくいかゞ。就て那南弥六とかゝる醜怪兒は既に隊を八ッ招了也。素生見れども尚詳ならぬる義あり。那奴も拷問仕れ狡猾召べうも也と詞急迫く問ふて義實听たく領ぜぬ。有理左か右とち紛れて他ぞ事に及ざる。親兵衛徐に尋問ねる與四郎音音曳も單節に稚兒共倍に瀧田の城へ我領て還れ姑且後方に退て下向の折を待ねかゝと仰に畏む老夫婦両個の嬶婦は両個の児子を先に立て皆共倍に近く樹下に退て退て支果るまで跪坐る。登時大江親兵衛は樹下に數系置あり。生口荒磯南弥六が身邊に找ふに對して怪醜怪兒南弥六が當初當國洲崎の浜客人に化て神餘の子孫なるを。神餘の子孫なるを分て死地を踏て昔在垢衣を行て光弘主を犯したる辜を償んと欲せしか然もあるべきなり。理義も邪正も思ふに逆賊素藤が與に我老侯を犯したるとせしか甚麽ぞ。実に神餘の為を思ふ九三郎們は說薦め稲村殿義成へ許稟して恩禄を乞ふまでなるべきに心のつゝしり狡猾愚に丙丁相似たり。取るよりも乞ふ白物なるを恁ても陳ずるやと連りに問ふ南弥六は羞る頭を稍擡て小可無学俗骨也。血氣の勇を旨とする弱冠の初より俠を磨意を立てみづから許して世の豪傑と思ひ誇りしか井中の蛙に似る浅智短才後悔腑を噬ども及ばず。御高和君に轂れ折疾楚を堪ず逃迷也。拳上の方へ走る程に那姥雪とりの公羽に撞見して捕られしか撲傷によりて進退不便の命運茲に盡るるん縦ばみづから新に恩免を請稟せども敵恥に代くかり只速に死んのみとのひて傍の樹に觸て頭を摧て死すせしと親兵衛ヤ。

と牽禁めて。もれ南弥六狂ゑ狽賞罰訓い上ゐ在り大辟不赦の罪人ゑるゐ次心ゐ死まくも
ともゑで自殺を許さる兇心を鎮めく听ねか。汝ハ那定包ゐ謀られて不測の罪を釀しる。
外祖洲崎左垣三が。本性ゐ似くりと思ゐ狭我ハ當年左垣三と倶ゐ當國の俠民ゑり
け。杣木樸平の曾孫ゑ然ハ我父山林房八ゑ大父の汚名を雪んとそ身を殺して仁を做
ゐーより我身ゐ至て思ひけゑ天の資神の庇あり世ゐ俠者といつゑそのハ不義ゐ與せず奸
邪を須負けゑ善人の與ゐ真愛を分ちてよく理義ゐ明ゑゑ世々ゐ命けて義俠とゐ我父
房八即是ゑ且我曾祖杣木翁と汝ゑ外大父左垣三ハ倶ゐ金碗氏の舊僕ゆく八
郎主の剣法を受くるよりも倍ゆゑ乃祖ゑハ我ハ四世汝ハ祖孫三世ゑれども行状霄
壤の差ひあり譬ハ這天津九五西郎のごゑ當年那古七郎と倶ゐ主君の先途ゐ逢て
戰殁のゆゑありけ。天津兵内が弟ゑゑ今。當年那兵内と倶ゐ戰死まくるけ。那古氏ハ
犬士の一人我小父犬田小文五是ゑ。因ておりゐゑゐ先人の忠死ゐ亦得失の異ゑるところ

けれども。子孫の仇狀同ゑかれ。受ゐ所の栄辱禍福かくの如ゑ差池あり。ゐ我を熟思ふ
べし。偖れば若们ゑ縲絏の恥辱ハ先自業自得ゑ。憐むよりもゑゑ昔を思ハ
我ゐ赤空谷跫音の情ゑ。ゐ陳ゑるよりゐ詭ゑくて良民ゐ。ゑ願ゑ我纖芥の
功ゐ易て命ゑ乞て泣ゑ。ゑ女身の非を飾ゑ。ゑ諭せば南弥六額を働て。仁
義の教諭肝胆ゐ銘て身後ゑで忘ゑ。ゑ非除這身ハ許されゑゑ今ハも恨ゑ。
犬馬の齢吳竹の四十ゐ泊ゑ今までも身の愚鈍を知ざりけれハ大父の汚名を雪んと思ひ
罪を累ねゑり皆徳ゑゑ。ゑ只管陪話て已ざりゑと親兵衛然ゑそと領て退て義
實主の身邊ゑ。ゑ事ゑ言皆听せゑ。ゑ他も招伏仕ゑ。ゑ別ゑ仔細ゐ。ゑ
告ゑ義實ゑ。ゑ听ゑて。御尚ゐ既ゑ。ゑ他们ハ瀧田の獄舍ゐ。ゑ殺ゑて。ゑ鞫問
ゑて言実ゑ。ゑ安房殿ゐ。ゑ都て那里の下知ゑ。ゑ命ゑ。ゑ折の時宜ゐ。ゑ
べゑりゑ。ゑ宜ゑ。ゑ天ゑ。ゑ仰ゑ。ゑ思ひ。ゑ這那の問答ゐ時を移ゑ。ゑ上墳をいまゑ

果さぞ快ゆくべーと遽しく身を起さんとあるを程ふ見六目い左右より扶ぎて凛さを萠
ぎ乞がゐん花を求ゆてかくりまゐらう又蛍崎十一郎照文とあの餘御伴の近習両名俱ふ
まゐりのひゐ乞支まゐる最中ふ伯れい寛ち伏ふ乞後方ふ扣てそいゐれと呼えあぞれが義
實王ふ亦復石ふ尻を褫てそいゐを折へ快召ねと仰ま目見六を阿と応て退ぬる程ーもあ
らぎ東峯萠云ふ葺草と桃の花をどゐるふ持く找を出且照文以下の伴當も俱ふ見参ふ
入りふけ登時萠云ふ御尚ふ仰付られる乞花を求ゆて還りまゐんとせ程ふ十一郎
ら御登山ふ乞伴當の寛秀を心りとーと俱ふ椎参仕ゆふ君ふ御危難あ
們御登山ふ乞伴當の寛秀を心りとーと俱ふ椎参仕ゆふ君ふ御危難あ
ーゆ幸ふ神童の賊徒を捕りーとふ事大堅ふ側聞て皆共倍ふ一驚ぬ又歎
そ御高運のあゐを今ゆ感佩仕ゆと祝ーー凛其照文も找を近つぬて凛ぬ御尚ふ
御登山ふ乞伴を許をゐざりーかゐ萠云を乞花の御用は還さをゐざりーふ胸中安
ーを一霎時ふ那里ふ乞ふ左ゐ右ゐも堪をゐふ乞叱と省を同志の甲しさ誘引て椎参

仕りる甲斐ふ御危難の事の趣伏姫神の霊験奇特及大八の犬江親兵衛が夏の顛末
并ふ與四郎音音們一家児の再生の奇談まを料ぬ君の乞後方ゆを粗所知りて又ち
らふ胞を洗ーいぬ事皆君の御洪福最鈔ーくゆと奇ぬ乞ふ君の乞後方ゆを實主ふ合笑ぬ黙頭て
然へ御尚ふ若們を制めて禁ふ在ーせーかゐ今ふ人ふ要ある折へ招れをもよく来りる乞萠云を
一両個の同僚と俱ふ這生口們を快麓へ奉下して那首より雑兵を領て今宵瀧田へ遣
ゐ有司ふ告て獄舎ふ繋ぬ又目ふ音音曳る單節と両個の稚児が二郎尺八を大山
寺へ案内ゐ今宵ふ那首へ止宿ぬを我も亦時宜ふより又那寺へ立寄りて暁ゆを等て
明日歸城ぬ親兵衛と與四郎を我御道ふ送れば十一郎見六們ふ這里より登山の伴ふ
立つべ就中十一郎ふ親兵衛が年四の秋神躯ふ遇ーより他が生死存亡を思難くーち不
娯ーふ料らぎも今對面て年来の胸開けふけ寔ふ奇ーぬ乞ーぬ乞ーぬと仰ま照文額を衝く
御諚の如く和漢今昔世ふ神童ぬ乞ーあーねど身長さへ恁猛可ふ大ぬ乞ーりーを一大奇

ト事を。古へも倩々。後の世に有り。有るべかりん前よりつらく相ふ幼貌に耗ねどもその人とも
ゆゆしきぞ。いかゝて認るべき。猶緩やかに来る方の物さとりを吹ぎ。夏べ樂しくに却要緊に一
條を。稟上漏しぬる。稲村の大城より。苫屋八郎景能が次丸君の兄使として。駿馬一疋牽
牽しつ。今朝瀧田の郷隠館へ来着仕りしに。君は今朝未明より。大山寺御参詣のよ
あと。偽兼り。快見参入るべきとて。躰て那首へ赴くに那首。御坐さぬ。又御登山の
趣を。聞知りて。急ぎ迎を。墓なく。這山の禁厳まで参りかねども。臣們。許さぬ。送り置
せぬ。べ。這里まで。伴つて。御下向を。等しく。仲の駿馬。青海苑村より。今一番三頭献
ア。とて。一頭。館山へ。御陣へ。牽して。次丸。尚幼小。ゆゑ。又一頭。老侯へ。
献らせ。ぬ。と。ぞ。義實主。聞くもうち合点して。次丸。尚幼小。ゆゑ。父祖孝順
狡ぞ。氏元清澄們。稟薦しぬ。ぞ。ぬ。と。仰ぬ。親兵衛。找出て。願ぬ。その兄馬を。
山可。館山へ。駆走りて。立地。御曹司。極合。義實

和郎一個。成。ぬ。開。帰城の後左も右もせ。然ぬ。ぞ。ぬ。と。制。ぞ。許
ぬ。親兵衛。ぬ。と。思。ぬ。ぬ。平。難て。心。退。ぞ。小程。義實主。先
墓所へ。ぞ。ぬ。と。杖。揉合て。働立て。身を起ぬ。萌三。遽く。花。自。ぬ。遽與
あけり。當下與四郎。主の先。立親兵衛。照文目。左右。従。程。音音。又
曳る。單節。力二尺八。も。侍。て。目萌三自餘の近習。俱。跪坐。目送。義
實。ぬ。萌三們。ぬ。生口毎。領て。瀧田へ。還。我。今宵。大山寺へ
止宿。ぬ。有司告。ぬ。及。ぬ。夜分。小心門戸の守衛。ぬ。ぬ。快々。兒
ぬ。ぬ。萌三。唯々。応。萌。姑。跪坐。既。て。義實。主。遠。ぬ。ぬ。
程。大家。ぬ。く。身。起。萌三。自餘。同僚們。俱。五個。生口毎。素合。分。
牽立。音音。捨。眉尖刀。又。提。て。娘孫們。俱。目。道。て。斉一。麓路。

○文溪堂藏

却説里見義實主、山路を陟りゆき、繞ふ両三町ホシて一條の八谷川あり。けだし麓
河の水源なれども此もまた水の涸るなれば世人これを同じく前面の即伏姫の墳墓あり
品山屋と、大法師が年尚少くして金碗大輔孝德と唱へし時八房の犬を殺めんとして
鳥眼銃の鉄丸をまりて伏姫落命ホ玉ゆ思ひ出られて涙と共ホ目も迫ホ霞霧龍
なる山又山の品根躑躅花開初て遅々と長閑春の日も路の栞も那這と結ぶ夢枕浮
世と、観念の外他事もなし。抑這河の水涸れども畳壁緑苔高く蒸して升降不便の
難処ホあれば親兵衛と照文ハ義實の手を掖まあ手或ハ藤蔓ホ推ヲ品梭ホ
て、ふと抵て辛しく前面ホ迫るホ與四郎ハ朴刀を衝立々々先ホ找て荊棘と拂ひ無ヲる
枝と椎楊て徐ホ道すがらまあせけり既ホして義実ハ品屋ホ仙り着て先那這見ゆバ
嵐門の裏面ホ地炕あり て鍋と抵ヲ。その餘ハ碗と折敷と桶柄杓擂盆菜刀燧匣
あるの。裡面ホ茵と幾枚ヲ布れども食衣夜物ホ乏しき義實これを訝りて親兵衛

們ハの年来夜ハ寝ることなく春冬の寒ケ夜ホ衣ハ絮甚だ薄と問
れて親兵衛然ハ這品屋ホ在ること冬の夜もと暖くて汗出る可し況ハ食ハ飲ハ
夏ハ涼しくて蚤蚊もあらざりけれ義實ハ點頭ホして然ぞあん并も亦奇へと稱て
躰て伏姫の墓頭ホ迫りゆバ標の松ハ翠を増て梢高くそびえる然れども掃除ホ等
閑と逆さぞ小草ども刈拂ひて墓ホ今朝植とおぼし紀色々の花ヲくあり青磁の
香爐ホ焼さたる煙ヲ灰ホて滅ざりしハ是も亦與四郎音音ども向ひけ。と猜せる
登時鶏舶貝六郎ハ義實ヲ花と植更て石満と汲ヲ伏ヲ。與四郎も亦これを幇
助て准備ホ。も整ひけれハ義實ハ懐より一裏の香と合ヲ出く件の香爐ホ焼薫ら
ヲ。廻向ホ時も移るべ。小程ホ照文貝六ヲ跪坐て後方と尼へれハ山ハ慶雲と吐て奇
峯と累ね風ハ松濤を起して彈琴ホ似ヲ。霊廟ホ石上ホ黏て五彩眼ホ美しく異ハ
禽肉幽谷より出て友と求ヲ聲あり。沙石ハ黒白と雑えて碁仙と見るホ由ヲ。飛泉崖

當を見ハて深淺を料るゝ易カ。実ハ是塵外の一天地東海蓬壺の仙境なり。
と意中ハ賞賛ゝ尽けり。且ハ義實主ハ念ー果て退ぞゝ舊ゝるのを偲れく。
憶ハ恋嗟嘆せられ。又犬江親兵衛も世の眼を意ハさんと墓ハ朝ゝて拜礼を次ハ照
文貝六郎與四郎も許されて迭代ハ拜けり。就中照文ハ亡父輝武のるとも今ハ亦ゝハ思
ひ出て哀慕の情ハ方ゝ是一蓮托生と念じて稍罷りハけり。祭果て義實主ハ
這伴當們ゝ從て那邊ゝ遊ゝる塚ゝ墓ゝ尋ゝ歩ゝ。是ハ與四郎音音們ゝ築建
とゝ。ゝる馬塚ハ蔡ありけり。義實主ハ両個の塚ゝ左さま右さま眺て現親兵衛ハ伏姫の
靈ハ玉ゝ玉ゝ午と戌と六合ゝ今ハ這丘ゝ大塚ゝ喚做られ大塚ゝ信乃ハ
家號と相混ゝ宜ハ因て犬の兵衛ゝ犬馬塚ゝ喚ばれ衆伴ゝの意ゝ倣ゝと仰ハ
大家異口同音ゝ応ゝ。ゝの後居ヨの歳月ゝ歴て品屈る家伏鍋釜ハ化ゝ石ハ
ゝる大馬両塚ゝ共ハ異見九世義ハの時ゝ。ゝけり其後いハ今ハ

話半餓舌登時義實主ハ照文ゝ與四郎ゝ喚近つけて宜ハ茲ゝ峯上ゝ後ゝ
ら。ゝ卒観音堂ゝ参詣せ與四郎案内ゝ
ら。御誂でハ亦復那里ゝ迫せ。御下向山路ハ暮て左不便ハ願ハ異日
参ゝ。ゝ限ゝ義實ハ
御ハ危難ゝ免ゝも又親兵衛ゝ得ゝ。皆伏姫の神霊の冥助擁護ハ依ゝ
ども他ゝ菩提の與ハ。建立ゝ峯の堂ハ観音薩埵の如智力ゝ加ゝ知ゝ
らぞ。ゝ佛因ゝ思ゝ賽願ゝ疎ハ況建立の後幾程ゝ山河の為ハ路ゝ絶
れて詣ゝ沼ゝ。ゝ路開て茲ゝ束ゝ空ハ帰ゝ與四郎先ハ立ゝ
諭て只管進ゝ理ゝ照文們ハ再説及ゝ廝従て躯ゝ峯上ハ倶ゝ
ゝ路ハ峻嶮ゝ熊徑鳥路ゝ羊腸ゝ。ゝ主従辛ゝ登ゝ程ハ。ゝ顛ハ届ゝ
那這ゝ見直ハ安房上総の海ハ。ゝ武蔵伊豆相模の海濱ゝ煙霞の間ハ見

まこと走船の白帆幽ふ一葉の波濤ふ漂ふ異なるこを況澳津鳥の夕陽ふ群飛ぶ光景百花の春風ふ翻るふ似たりけり然ば補陀落山の秋の月も夜々毫ふ隈なく照ぐ祇陀竹林の春ぬ鳥も朝々暢ひ来ぬらんと思ふ可の霊場佳景嵯峨たる奇品ハ刀ーと削倣をも及べくもを屈曲る早蕨ハ画る波の磯打欲と凝ふ建立せられより既ふ幾ぞ二十稔有餘を歴れども観音堂ハ荒もせを只赭塗の柱高欄をの風雨の為ふ処々剥るもあり内ハ四郎音音ハ六稔以来仕まつり一甲斐あり人詣ねども香華絶ぞ蜘網もあり鳥ふ糞さを尊さ更ふ及べるもあるを貝六郎ハ茲まを推考る花の折枝る餘りありけれがそを仏前の花瓶ふ植加ねどを登時義實手ハ堂内ふ陟找て焼香黙禱を凝らしゆ親兵衛照文與四郎貝六も主の後方ふ並跪て共侶ふ絆をけり是より下向ふ赴ぬふ登る歩ぬ歩も桟道ハ疲労もあり殿ける義実ハ照文と親兵衛ハ宜ふ十一郎ハけふ料らぬ親兵衛と再會の本意ハ遂て他ハ恁大ハ力ハ神助の奇特を知るといへども左ふ右ふ暇なりー我直則を憚りて別後の情義を盡ぬ不折ら山路ハ交加へ分ーけ来ハ相譚ハ叮ーあるハ疲労を忘れて好慰ふ成ぬ仰の照文然ハ御内人ハヨ来れども小臣のを親兵衛と憂苦を俱ふ成ぬけれが別後のるも問ぬけく恙なりー欲ぬを舒る暇ふつゆ雙ぬ歩ん伴ふ立ぬ乾を隔て癖を極く心地のをーてハ然ハ御免を蒙て這通路来ー方を詰り慰めハんと答まつ親兵衛とち厮話ゆく程ふ那神罰ふ心地快なりー舵九郎ハ八ーを其の後甲斐の石木ふ信乃道ハ節ふ環會る其頭のを初と老ぬ濱路姫の上までも甲ーと呼ぶハ出れが親兵衛も亦照文ハ鄙ふ漏らーる我ーへと姥雪一家のるまでも皆詳ふ説ふを照文ハ奇へと稱へて連りふ歩の找むを覚ぞ側聞る貝六郎も憶ふを止息を吻くまでふその言を毋ふち敬焉ふ幾番とまーたハりる小程ふ義實主ハ甲乙の物ぬーハの最真あれが矢局ふ入りて来るとも恐ぬを又舊の樹柱間なを邊まで交り来ぬ程ふ然ども長ーる春の日ハ生憎越ふ暮果て加ハ今宵ハ烏夜ふ

る木樹の下もけばいとぶく。其里とも絶て辨よりを見主従倶に找難て殆困ト果る折から。去向の路も闇々と其焦火張燈見えて人馬許ヨ近つ来れば。登時義實主従い這衆人の親疎禍福を量り難く路傍に杖を住て熟視るに他們が引提る張燈の花鬘い中黒へけれい僅に心安ちる照文い貝六と共伯に找出て来れるいあん伴當們欣上ゆる這里まで御下向ゆ快燈燭をもて来ぎそと両聲高く呼りけり。當下来る伴當們応と答て路傍に寄れて二列に扣えるそが中に近習両三名持る張燈ちち抗て遽しく找を来る照文們ちち對て鄭に目前を仰を稟て欠り来る折今日の御危難後意に御利運ゆるり一度の趣并に犬江蛇雪們が奇異の顛末その崖略を听知りそれが相欣びて御下向ゆ。まるも那里に留るまりり日暮るまでもそのゆえ有繫に心りとなくて准備の張燈蕉火に路を照して出迎に参りゆ。就て稲村よりのあん使甘屋八郎景能も人ゝ河原に留まりり。が牽ゆる馬とその身の伴當とを那里に留めそこに

推参仕り由と正義實听ゆひて来る伴當ち労々然而景能を召近つて汝い長途の疲労も厭ず我迎を那這と莫ゆて這里まで来る歟び思ふ所ゑ次丸が贈り物と竹えるる馬い葦毛下りてゆ大出寺まで伴せと仰ゆ景能歟びを稟して躰て退けり。ゆ時迎に来たる伴の近習們が今朝龍口より吊ーゑる老侯の轎子を這里まで舁せと竹えるが照文們蔑稟ーて無せまるせんと欲せーかども義實頭ちち掉てけゆ特に長途るに皆山路に疲労ふけ。ゑーて我身單優に舁ーて還れやとそ亳も听ゑで麓まで。ゑが伏下向ゆ。雑色奴隷に至るまで彼ちち感服て。皆來く思ふり既に義實主い麓の河原に かゑり来て。発見を建る尻ちち戦又景能を召近つけてけまるせる那馬を親んとてゆ。ゆゆゆ景能疑即伴當に蕉火を乗ら。四下を照して馬を牽寄てゆまるまるに現ゆ形勢九庸ゑ。毛色い蒼と白と雑えて鱗の像く波に似ち。高い七尺有餘ーく。那高綱景時ゆ生嗟磨里雲とゆとも是に優ゆでと云えるけ。當下景能がいゑ原に

這馬は當國蒼海巷の牧より出り既に齢を重ねて青白の駁波に似たれば牧士竹命けて
青海波と唱做すと兼り收と生れば義實領にあひて崖に毛色の波に似るに青海巷に
相稱へり開は好名へ後々まで如石喚もべられそ只管賞讃あるに側に侍る親兵衛を
ふりかへり和郎這馬と何とかなると問れて親兵衛然いれ子の爪を指頭に語道似れど小臣曾て
るとあり約馬は八尺以上を龍と称七尺以上を駿と六尺を通て馬と呼良馬は頭を
王と宜く方を見べし目と眉相を宜れ明るべし脊と將軍を必是強と欲を腹を城
郭と好張ると欲を四下と今と比て長るべ眼は高く匡を眼睛鈴を懸る
如く眼下は蚕と鑿を懸る像く鼻孔大を鼻頭に王火の三字あり口中赤かる
べ膝骨は圓と張ると宜と耳は相近て堅く小を厚るべ伏龍骨は砍く
頸長く雙趺大と突出蹄は厚く腹下平に七八字あり尾骨高く垂ると
長るべかの如を千里の馬と比は是なるべ李伯樂が相馬經の山窪略に欽信

馬高七尺有餘骨法右の趣に及ざる者ありとへども龍と驪の間より騎る者は一日に
百里を行ると易るとそ。その雜毛の波濤に似れば龍種もいざしらべ。それも二外飾を
世に稀なるを愛るのみ良馬と做すに足らぬ狡と阿容る氣色もなく凛々しく美我實主
駿沉感して適要ある才子なるかな。今這馬を和郎に取せ。鞍鐙さへ皆具して牽のく來
たれば便り好。うち乘て我先に立て非常に備へ。と仰は親兵衛忻然と額を衝て賜を
拜ま又稟にやう。烏許がまうういへども。小臣は曾祖杣木樸平は青海巷村の民なり
是なの馬は那里の牧より出さうんぬ舊縁あり。先無試いれとのたまふ。脈て牽退けて閃りと
うち乘る。韵法に暴馬をれども靜を主のうるに隨ひけり。登時大江親兵衛は輪騎を做
ると西三遍舊処に下立て又もん前に參りに向り義實主は親兵衛が武藝膂力の捷
れを御に目擬るまのーなど馬術まで能ぜと思ひ這暴馬を賜て乘せるに精
妙かくのごとくにあれば。うと感悅浅らぬ況照文以下の伴當孰も甘服せるべ。

き思ひけり。小程ゐ義實主い晴る星とうち仰ぎて。噫漫々たる要害ゐ夜過ぬ
らん。卒やくべとそ。発児を放ちて立あへば。鑣奴ども牽よせる。馬ゐうち乗ゐ程ゐ親兵衛も
亦青海波ゐ乗てぞ先ゐ立ける。その餘せ屋景能い稲村より乗ゐて来ぬる馬ゐうれば許
されて。騎馬ゐ後方ゐ従ふ。徒而照文貝六。與四郎們近習外様の伴當。左右ゐ従ひ前
後を備りて。張燈蕉火振照らして。やがて幾多ぐ小門目いゐ身ゐ伴當と大半ゐる
道人両三名ゐ炬を秉して。迎ゐ歩く路傍ゐ跪居て老侯ゐ見参ゐ義實主い音音
們を那里送り届さうと報るを聴て只管ゐ馬の足極を早めゐば既ゐして大山寺ゐ至る
門ゐ来ゐ下り。軈て馬より下立て。玄関ゐ赴ゐ程ゐ住持い役僧を領て遠く出
迎へ。軈て客殿ゐ案内をして。茶を薦め果子とまゐ。富山の奇談神女の灵験
聴る隨ゐ出て。その扮を詳ゐ。徒り程ゐ役僧們い行童喝食と給侍ゐ立て。
先准備の夕饌を老侯ゐ羞めまゐ。次ゐ親兵衛照文們都て戒十名の伴當ゐ。

送る隈ゐ夜飯をのみて。馬ゐ秣を飼ふ。管待極めて叮寧。その中ゐ親兵衛
の。老侯と一席ゐたらべるを許されゐ。徒而伴當們の餽送
もゐ。果ゐうと。義實主い與四郎と音音曳ゐ單節們ゐ御ゐ聴ゐ奇
譚の漏るゐもあゐん。欲とそ皆並て客殿へ召登ゐ。ゐ後方ゐ照文景能貝六
目們も侍りゐ。登時親兵衛找出て。義實主ゐ禀ゐ。我君願ゐ。小臣ゐ權
且暇を賜ひか。恩賜の馬ゐ乗走らゐ。今より館山へ赴て。御曹司を極ひ合りたりゐ
うと。ゐと義實主ゐうて。開ゐ。亦酷く性急ゐ和郎い庸人ゐ。ゐれば。縦せ術ありと
て。館山まで路の程十數里ゐるゐ。這夜を犯て遣れんゐ。明日い瀧田へ領て還ゐ。
和郎ゐ祖母妙真ゐ對面させんと思ひゐ。その義ゐ。ゐ和郎敵城ゐ。ゐんとゐば異
日義成ゐその義を。豈。諜ゐ合ゐて。便宜ゐ任せ。惴ゐい要ゐ。ゐと諄返ゐ制ゐ
ゐを。親兵衛聴ゐ。ゐ賢慮寔ゐその理ゐ。そを総角の生賢像ゐ。御諚ゐ恃

らば罪なぎまく。寔に畏り給れども。古語にも。兵は拙速を貴ぶと。そを守られ久しく謀の巧なるを
うとは。今より那里へ。ゆくあるべし。御方の機密を敵に知らるゝ。透れもとゝ。小臣も亦祖母に
對面を急ざるにあらねど。そは私の恩愛のみ。臣たる者の本意にあらず。痛ましかる。御曹司の虎穴の
内に。身を置れていくばの艱苦を受給ふを。想像なれば一日も千秋に異ならず。然れば神女の
小教にも。山路の怒を對治して。快義通を極令まれと宣はせに。這里宿て。今宵を夫に過
さるべし。御許容あらば。公私の大幸。その上やいなや。いかゞと。只管に忠義を厚く武勇の覓止るべく
もあらざれば。義實僅に點頭めして。然ばぞ思ひ禁めはせじ。曉方なれば烏夜啼に。
心のとゝ。非如和郎十勝の計略ありとても。その身單なれば危し。我伴當の數を盡して。咸和
郎に從はせ欲。他們は都て甲冑の准備を爭何にと。問れて親兵衛否。伴當の曰。況
次の煩ひあり。その身の外に一人とも。帮助を求むべくもあらねど。然しも國主のみ使と稱て那里
赴くれば。伴若黨一名と。鑣隷の奴僕いあるべし。這兩個を事足りぬ。況甲冑をゝどし要る

願はば礼服一領と。賞のみぞと。亘理はぞと。義實土眉を顰めて。易からぬ。和郎は國主の使
と唱へて那里へ行て何とか。と問れて親兵衛然は笑寿策は密るにより。機に臨み變に応じ
術いくつもいろ。目今あるべし云云と。安定のいらかるべし。と答まうせば。點頭て然ば和郎に答ま
さに。我身甲を掩腹脛甲も。柳笠にあんぎん。弁と礼服の下に着籠めよ。却誰とも伴若黨に
打扮して遣べし。と。左右とのたまふ。夜に入て廿山屋に京能找出てその義實の小臣。仰付られ
曹司に倶して。殿墓に到べし。那里の地の理は既に知れり。且稲村より乘の來る。
馬も這里に。那青海波に及ぶとも。九十歩百歩の間。赶續給へ。と。又與四郎に
席末より。膝を找て。京に。願はは和子の鑣隷に小可を參るべし。稔は來守傅に。
侍る大事の伴。立ば生甲非ずは。その義實主に。
他の差別の。ためは所望に依るもうるべし。與四郎は老人。駿馬の足に及ぶ。と。
與四郎。怪眼を睜て。御諚ぞ。小可は。の年來山路に熟て。身の衰を。宅も覚ぬ。

那仙果神将を。たゞべ一所に。いろ〳〵千里を走る馬へも。赴續んと極めて易くの。そ許させぬ。絲か。と怨む。只管請まれば。親兵衛陪補一まつる。他へ知せぬ。稀古の齡。ほひへども。世の老人と同じ。倘路を疲れ。撥抓て。小臣が。尻馬に乗せ。ほんの。義も御あろ。安房殿へ。義寶主合矣て。然ゝば甲乙倶に。安房殿の趣を。通達せぬ。期おれ位く。不便〳〵。と。思て。傍を。入て。十一郎に。我副馬。ふ。乗て。他們と。倶に。路次。そ。ぶて。旦。ようを。躬方の陣へ。注進せよ。八郎を。借るへ。別人を。して。明日。稲村へ。遣ぶう。思ふ。と。仰は。然。與四郎。いゝ。と。照文も。欣然。と。倶に。言。義。ぶ。王。目貝六。と。喚。近。つけて。我。両箇の。柳。ぶ。副佩の。両刀。と。御。ふ。着。る。礼服。ゝ。倘。掩膊。と。脛甲。と。臭甲。も。あ。ぶ。皆。廣。蓋。ふ。ら。ち。載て。快。て。来。と。分。ぶ。ば。件の。両臣。義。ぬ。と。応。ぶ。そ。く。倶。ふ。立。ま。け。る。姑。且。目貝六。目。ハ。老侯の。副佩の。刀。衣裳。いゝ。そ。の。餘の。東西。も。両。三箇の。廣蓋。ふ。載て。り。く。東。侯の。身。邊。ふ。安。排。べ。て。先。身甲。も。掩膊。脛甲。も。非常の。備。ゝ。ん。伴。當。ぶ。そ。まり。ゆ。ら。と。ふ。

義寶。主左見右。て。先。副佩の。両刀。を。傍。ふ。置。て。親兵衛。ゆ。ち。對。て。宣。ま。ま。和郎。の。ま。所。ざ。り。一。狭。我家。ふ。大月形。小月。像。と。名。け。る。重代の。刀。あ。り。大月形。い。家。叔。と。共。ふ。北。日。年。義。成。ふ。譲。與。へ。り。と。て。件の。副佩の。刀。を。と。る。と。合。抗。て。そ。ま。ふ。此。ハ。是。小月。像。ん。夜。行。ふ。迷。ぬ。奇。特。り。世。ゝ。ふ。る。重宝。ま。れ。ど。。今。日。和郎。ぶ。大功。の。賞。と。て。取。ま。ぶ。そ。の。短。刀。ふ。挿。添。て。舘山。へ。赴。け。か。し。。又。そ。の。小袖。と。肩衣。袴。ハ。長。短。和郎。ま。相。応。ま。ぬ。や。量。り。く。ま。東。西。ま。れ。ど。も。開。と。着。て。今。番。の。使。を。勤。め。よ。。。ま。ま。ま。狭。と。言。ふ。て。。。。刀。を。遮。與。ま。ぬ。。親兵衛。い。遠。く。膝。を。我。め。る。。小月。像。を。受。戴。て。席。を。避。け。腰。ふ。帶。て。言。を。ま。。然。ば。ま。も。ま。ま。小臣。が。微功。を。賞。ま。ん。と。。悠。莫。大。ま。賜。ハ。實。加。ふ。ま。ま。て。ん。美。と。言。を。思。ま。ま。御服。章。ま。衣裳。ふ。拜。領。容。易。く。成。ん。。況。當。家。の。御。重。宝。と。ま。ま。ま。。這。ま。刀。を。賜。ら。ん。や。ん。使。と。勤。果。ま。ば。程。ま。く。返。ま。ま。ま。ま。義。寶。主。推。禁。ゆ。。不。古。汝。達。八。人。ハ。我。外。孫。ぞ。と。思。ま。ま。り。。伏。姫。ま。ま。の。ま。短。刀。と。合。ま。出。て。和郎。ふ。與。へ。も。事。情。ハ。同。ま。ま。べ。。ま。ば。ま。返。ま。て。あ。ん。。と。諭。し。く。又。中。

き。刀を合せ抗て宣ける。親兵衛これを和郎に取せんとて與四郎に譲り與へよ。他は馬の鑣隷に
打扮とても敵地の朴刀は相応しからず。因てこれを取らせて卒とにあらねば親兵衛は又膝找
めて受戴きて言ける。小臣のみは與四郎さへに係る御恩は有がたけれど那身に餘ではべらんと
いへば義寶員王頭を掉て然にあらば他夫婦は兩個の媳と共侶に六稔和郎に仕へる功あるを
おもての、ぎに及ずや。幷とかくら取せよ。故主と呼れし道節にまで對面せざれば賞は卑賤に倦
べからば推辭は要なきことぞと諭しぬれば親兵衛は。ゆくりなく感佩あり。退きて然而與四郎にうち
對ひて、やよ翁よ目今御諚の趣を具に拜聽せしならん。その拜領の物は東西ぞやと示して遞與し
つ。中刀を與四郎は夢狀とぞりに捧戴くのみ。感淚に胸塞りけん。物いふべくもあらざりけり。然ば
後方に侍りける音音并に曳手單節も倶に感淚にむせびつ皆老侯を拜しまゐらする。歡びいはん方も
ざるべし。是等の事の趣をも吟せし照文景能以下の近習も目を注しつ、這君ならでは這臣
ある。現に次むべき栄ゆそと感じ思はぬものもなし。春の夜なれば短くてはや子の五刻になりしかば義

寶員王は親兵衛們に身の暇をたまはりて罷出んとする程に又喚返して宣ふやう和郎が騎馬の
打扮を我つくまく欲きか。一二門より這方まで寺法に騎馬を許されねども、ある軍陣の使价なれば
勿論非常己大事にもあれば住持に請ふて玄関の邊より乗ることを許さん。馬をば飽まで豆秣を飼
せ、腰戰飯をも言ふて十一郎八郎們與四郎も共侶に退りてとく準備をせよと仰に大
家阿と応て立まく去れば親兵衛は恩賜の衣裳を左の肩に被きて退る時後方より照文
景能與四郎もうち續きて退出ける折までも席末に侍りし姥雪の媳姑音音
并に曳手單節も却あるべき事あらざれば後に跟きて出る折音音はいそぐ良人の袂を掖住
めて悄語くやう上の御恩のかしこさに就ても小心あるな。今まで侍らねど老て勤に勝難て朽
惜きものもあらずし馬に後れて期に合ずは俱しからめ。侍りうるは少なかるのみこれのみとのみに與
四郎點頭くのみ応もあへず景能們に後れじとそゝろ袖うち拂ひて庫裡のかたへ走りける。介程に
義寶員王は次の間に侍りける近習を召て云云と住持に請はせ給ふ事の趣その餘も下知を傳よ

〻且親兵衛們ゞ身装〻立出んと考る折。快知らせよと分付めべ。近習の婆応を為て。程なく果て立ふけり。左右まる程ゟ真夜半の鐘鎬〻と鳴く時候。件の近習い走り来て。親兵衛們ゞ身装皆整ひたりと報るゟ義實然いとて。遽く身を起しあへ。目いあん佩刀を持て後方ゟ従ひ見た郎い提燭を秉て。躯く先ゟ立ける。既ゟて義實主い玄関ゟ立出めへ。音音い曳き単節と倶ゟ力二尺八寸も喚覚て。式台ゟ聚合ぬり。又老侯の伴當い大家廣庭ゟ坐列れて。夜の容を窺るゟ。ヨヨろ然ゞ住持役僧們い。義實主の身辺ゟ侍り。沙弥喝食們い。所化寮の窓ゟ窺ゟ。今宵い天好晴れも。晦ゟ近ち月ゟ昇ゟ。遮莫玄関の邊ゟ。篝石の左右ゟヨヨく庭燎を焼ゟ日れい烏夜ゟ迄ゟ隈ゟて。白晝の如く明るけり。小程ゟ大江親兵衛い青葱縁の身甲ゟ鉢打ゟ細鎖子の鉄根ゟ。上ゟ綿の飾磨紺の厨子縅小袖の中黒の花鞠ゟ。可ゟ襲被て。紅褐の長袖杯のゟ中黒の花鞠ゟと薄紅の腈腰の小袖二撒金ゟ箭竹龍胆と描金ゟ考る絲柄の短刀ゟ小月形の名刀と瑠玧ゟ腰ゟ跨え。細柄ある馬上張燈と鉞ゟ帯の間ゟ挿て。那名馬青海波ゟ雲珠鞍ゟ直て。真紅の厚總の燃ゟ可る。と掛ゟ。ゟ跨り。紫と白と絞分ゟ鬼子と極縅りゟ十數ゟ。とゟ馬立小屋の頭ゟり。徐々と歩せゟ。故意蹄繻ゟ着げゟ着坐ゟ便ゟ。ゟ為ゟ。當下蛇雪與四郎い紺の綿腸衣の袖大ゟ。ゟと蹄高ゟ端折裹げて。海鼠形の蹄衣の草紙ゟ。前様ゟ梵と結び。正平草の勒肚ゟ。恩賜の一刀と腰ゟ跨ゟ。麻織の草鞋と。穿て。右ゟ柄の長炬と秉りて。鑣面ゟ従ゟり。正ゟ是一個い十歳未満の神童年小ゟれ。ゟ身長丈ゟ深山と。ゟ新鷹の雲霧凌る勢ゟあり。一個い七旬前後の老翁齢頽ゟれ。ゟ筋力壮ゟ谷河渉ゟ。ゟ氷虎の子と駝る情ゟあり。ゟの餘蛮崎十一郎照文廿ゟ屋八郎景能ゟ。已ゟ考ゟ。ゟ打扮して。各馬ゟ乗ゟ。ゟ俱ゟ歩。提ゟ奴隷と擇ゟ。鑣奴ゟ考ゟ。ゟ付ゟ。ゟ徒而大江親兵衛仁い馬と。ゟ尾石の頭ゟ找ゟ。ゟ人品初ゟ弥増て。最長ゟ考ゟ。ゟ額髪と。ゟ左右ゟ耳ゟ。ゟ振分ゟ。ゟ面色特ゟ美ゟ。ゟ威ゟあれ。ゟ猛ゟ

馬を走らしく親兵衛星夜大山寺を出げ

ぞ意氣揚々たる打扮を覩る者齊一稱賛して。憶ぞ耶々と喝采ふけり。登時親兵衛馬を駐めて。玄関ふおちて朝比鞍の前輪ふ額衝俯ぞ。義實主親ハ聲を被て適愛なる勇士の行藏我ハ明日より汝が吉左右を。瀧田の城ふ候つゝ在らん。曉天近し。快去ねと仰ふ親兵衛阿と應へ。たちまち馬ふ跨れ乗遶らして。覩る間ふ出る三門口與四郎も亦後れじと。夸父が日を逐ふ勢ひあり。後方ふ續く景能照文腰ふ吊る張燈ハ烏夜の螢火と見えて。並樹の松の右ひだり二町あまりを瞬間ふ見えずなりけり。

第百七回　大江親兵衛活ながら素藤を捉ふ　里見御曹司優ふ陣營ふ還る

却說大江親兵衛仁ハ當晚名馬青海波ふうち跨て。大山寺を出しより絶ず一向許ふ素藤が館山の城ふ程遠らぬ上總州夷灊郡羽賀の郷の頭なる並松原まで騎着しふ天ハ未だ明ざりけり。あの時照文景能ハ倶ふ後れて。唯姥雪與四郎のみ駛馬ふ趕攜りて。一町とも後るゝ事なく倶ふあの地方まで來ぬれば。親兵衛深く嘆賞して。翁ハ齢頽たれなるふ路ぞ千里の馬と倶ふ烏夜ふも迷ハで逸早く。十數里を來ぬる事。又是一奇といふべし。意ふふ年來靈山ふ心神を頤ひて仙骨をやしなひけん。併伏姫神の擁護もありけんかしといふを與四郎含笑て。いなとよ我身ならで。奔走思ひの隨ふまで壯年ふ弥增せしハ寔ふ神女の冥助なるべし。蜑崎ぞ古屋の趕着までハ。兹ふて憩ひたりぞかしとふ親兵衛點頭て那這と見るふ在曉の月既ふ出ていと明かりける。樹間ふ舊る佛堂ありしかバ。躬て馬より下立て這廢堂の縁頬ふ尻をうち掛て憩ひて在り。當下與四郎ハ袂なる手巾を拿出て汗を拭去て馬ふる草を食せなどする程ふ天ハ明て烏の森を離る。時候景能照文二騎相並びて馳らせて來ぬるを。親兵衛の留めて在りしを遙ふ見て倶ふ馬より下て主僕を只管労ひけり。就中與四郎が青海波ふ後れずしてよく走りしを。胆を潰して最恥しく思ふものから。鐵隷の奴僕们ハ酷く後れけんいまだ來ず。登時親兵衛が云ふ。和殿们既ふ來ませしふ這里まで時を

文溪堂藏

移まざる欤ハ快館山なる敵城ふ赴きて御曹司を拯参らせん。並夷奴隷を率るよかし」と荘客屋
主の乘る馬ハ這頭ふ繋ぎ置ねかし。快々とのぞみせバ照文景能異議なく「よろしかるべし」と応て、
親兵衛ハ今日の謀慮をまづ知らざれバ今更ふ心のどかなく思ふのミ侭ておるべきふあらざれバ景
能ハ遽しく身装を束めて伴若黨ふ打扮けり。照文景能ハ馬を乘捨置べき惜むふ
あらねども一疋なりとも軍陣ふ必要あるものなれバ我ハ歩行より御陣ふ赴きて二疋の馬を牽んとふ
けり。浩処ふ後れて来ぬる照文景能が伴の鏃隷僕侶們ハ疲ぬる足を曳々て折よく赶着得く
ければ、大家他們を労ひて一霎時喘を定めさせ、照文ハ又馬ふうち跨り荘屋が伴の奴隷共の景
能の乘捨る馬を牽し相倶して國主の陣へいそぎけり。却説犬江親兵衛ハ景能と與四郎を
馬の左右ふ従へて館山の城へ赴く程ふ朝日隈なく半竿昇りて路傍ふ開初る山櫻の露香
ある。既ふして親兵衛ハ館山の城の正门ふ迫りて一町許這方より景能を走らして喚门せるふ景
能悍る氣色なく單正门の橋際ふ找向ひて聲高やかふ喚るやう。笹竜城の人々わのわれん目
今國主の御使犬江親兵衛仁来れり。主僕纔ふ三名なるふ駭怕れて然則を發ち銃丸を飛
して拒むべからず。手早く主長ふ報知して城门を開きて迎へ奉れ。と両三番喚门程ふ親兵衛も亦馬を
找めて主僕三名正门なる橋を渡し。門ひらくを遅しと鐵门の頭ふ立ちたりける。その時館山の城兵們ハ
久しく國主の大軍ふ圍まれて籠中の鳥ふ似たれども然バとて攻も敷されず防御の外ふ他事もなく
四门の備戌を整へて憶つ日を弥くしふ忽地國主の使价と名告て最尊大ふ喚门しを主
卒驚き且訝りて闖児の小牖より張見るふ思ふふも似ぬ主僕三名騎馬なるハ少年ふて
鏃奴ハ老人なり。壮なるハ若黨のミ他ハ誰何と呆惑ひつ遽しく退きて這隊の頭人礪時願
八業當ふ報しかバ願八听て眉を顰めて城樓ふ登りてかれを見るふ果して違ハざりければ左
右を見かへり冷笑ひて意ふ義成攻獣倦て和議の使ふ那小児をおこせしふぞあらん。然もあれ
よしや写えありて漫ふ許して内へ容入れて見とものかも遽しく下立て單みづから本城なる後
堂へ赴きて素藤ふ報るやう。目今寄隊の使者と稱て額髪ある猴子一名礼服ふて馬ふ

俚語に人の親する者を子をセガレと称ス。セガレは拙郎のよきを又轉して後生を罵てセガレといふ。近世の軍記に尤え餘も皆これに倣ひぬ。

ら跨り大江親兵衛仁と名告て僅に両個の伴當を従へ胆太くも正門なる御橋を既に渡り来て對面を請ふに因て積しいふ義成欠しく攻厭倦て甘術のなき随に義通と重晉濱路姫を餽送んとて和睦の使价になもあらんと計ひぬらんとて素藤笑しに所々屡點頭て开を推量果ざるも。必和議の使价なるべし。然るを某甲某乙と唱へる一二の老黨を聚て二十に足らぬ小猴子を大事の使价に立せしは。柔よく剛を征する拙策なる歟。今にや行失ありても怯を取りても弱輩なれば許されんと思量し所行なるん。开を左まれ右まれあれ飽まで武威を赫亦あさ。开奴に胆を潰させん事の准備は係さにあり。箇様々々に計ふべし。との議を餘の老黨に中士卒中も相傳て事整ひ。城内へ开奴を容れて案内せよ。我書院迄對面せん。快々せよといふよせに願八異議なく感服あそ兼の如く應て走りて外面へ退りけり。尓る程に大江親兵衛は城の門前に馬を駐めて主僕等五名早晌許なる頻りに焦燥つ随に景能よく四郎は迭代に城門を敲きて開よくと喚れども城内なる雑兵們は答ものなし。速に開くべくもあらざりし程に磯時願八は平田張盆作與冬と共侶に華やかなる武具して隊兵を多く領て出て来つゝ正門を成る雑兵們に目を注し下知を傳へて寄隊の陣より来ぬると唱えし大江親兵衛と呼喚做す猴子王僕が門外に在るをば内へ入れよと喚れば雑兵們は応と答て角門を推開きつ使价入りしあとに親兵衛冷笑ひて馬より下りて聲高らかに若們など我身單を害怕るゝその甚しき。臆病にも城門を鎖開くとも後より續く敵はなし。君子は由なく小径よりて况國主の使价として角門より入るべきやうある不儀を知らぬ白物なり。と容君められて願八盆作咏へ兩聲あり直さ唱て猴子奴が月属寄隊は大軍ぞも屑ともあらず我君の武威をもて今更誰か憚るべき人ありしもこれ老黨を擇て使价におこさしきとるは城門を開て入れもせんが寄隊の陣に入る者とて年は幾らか知らねども額髪ある少年の加以犬江と名告れる奴は狗を買て相応しからぬ开を角門より入れるゝは分に過たる優待なり。と思ふて過言の身の程知らぬ白物を遣り返せば親兵衛呵々とうち笑ひて若們ゆすまゐ。

文溪堂蔵

古の賢人の例を思ふ武内宿禰は年十四の時天皇行の敕詔を奉り北陸及東方諸國を巡察して百姓の叛くを治めたり又日本武尊は十六歳にして熊襲の魁帥を殺し又厩戸の皇子聖德太子の御子は生まるゝの聖にして聰明睿智えくる川上梟帥を誅し又厩戸の皇子倩稀なる応神の太子兎道の稚郎子は髫歳にして知慧廣大始て百濟の王仁を招き又天朝漢学の開祖なり遠く世に迫りては菅家は五歳にして五言絶句の作あり後醍醐の八歳の宮孝順恋字の歌あり又その武勇の優れしは安陪貞任が獨子千代童子十三歳にして萬夫無當の勇あり楠正行十三歳父正成の送訓を守りて既に恢復の大志あり古の它源為朝源太義平源牛孺勇義箱王義朝の金王教經の菊王熱田の御所五郎丸枚挙するに遑あらざるなり況んや老小をやと論せんや且我家鎌倉大江と生るとも狗實より入るものなれば若君が主と憑む心基田の國より出入せるも基田の基が國より出て迎へたる西せる大江の赤角

門より決して出入せざるべきものの義なり什麼と詰られたれども願八盆作腹に立ても理の當然なれば爭ひ難きよりもなく先快士卒を走らして親兵衛に呼れよと素藤に注進あらく故意門卒を叱りつゝ大門を閉せける登時大江親兵衛は馬より内へと下立く門内に找入る程に願八盆作相迎へて名告せつゝ案内に立けりその事の為体基田が士卒先々と鎧くるるの三五百名左右二行に相備へて長鎗眉尖刀を見光めて或は弓箭鳥銃を推乃て專虎威を張るのみ親兵衛は自若として亭々たりもたゝへを引れて中門に迫るまで景能は隷從して左右に眼を配りて小程に與四郎も續いて馬城を乗入れて城の士卒は罵り外めて大漫人疾歩よとのゝ與四郎冷笑して靜謐を異の折るゝが馬を門前に繋ぎもせず這篭城の最中に來て獨り外に主を尋ねんや時宜を思ふに衆人なるとのゝも果ぞ城の雑兵二三十名群立蒐りて推戻さんとく鬩く程に名馬も事情を知りけん忽地に嘶いて狂いて前より找むを咥倒して後より寄るを

蹴返さるる勢に怒むべきもの所れの衆兵齊一駭騄にて憶に打擇せず程ふ與四郎が
馬と俱ふ突然として中門を過りて玄関の頭ふ來まけ。登時願八盆作と件の恩
劇をたたくして。苦々あくい思ふのうち。大事の前の小事ふてそと思ひ返しつ。紆蒐來る。
雑兵們ふ目と注して禁めて云ふも親兵衛の先ふ立ちて安内者既ふ来て玄関の式台ふ
登る折親兵衛ふ刀と帯て伴當ふ遞与さるを願八盆作共ふ勿論あそ無礼
なる。作法と知らぬ諸侯ふとも使臣ふ者両刀と帯て玄関へ登るとを許さぬ最
も許べと制度と親兵衛听ぬ冷笑して然だるのを知らぬあねど人ふ尊卑の
礼ふ吉凶あり我君ふ是房総の國主ぬ蜑田の原その麾下の城将所領一郡の外者ふ縱
和順の折とも對応の礼ふ乃ぶべくぬ刻謀叛竜城せられて怨敵御方と分れ〳〵ふ只軍
陣の作法ふ由るべ。約莫その君の使として敵城ふ來る者身ふ帯る刀と放さず。
降人ふ異るぬ且這刀ふ君家の重宝秋光侯の賜ふれ權且も身と放ちべうぶ盆作

爭ふ肝裏ふ冷笑して。只今何ともいづくへ主君對面の折ふて猫児ふ逢る鼠の像く。
頭と抬げぬざるんふと呟ぬ。ぬ奴貌して躰
関の簷下ふ立て。今奥ふ入る親兵衛の背影と目送りて心悄々地ふ伏姫神の擁護と
祈念をうける。却説大江親兵衛ふ坐席幾間ふうち過ぐ。長廊下と辿り來る。
ぬて儲の書院ふ赴くとうれば蜑田素藤ふ朱緞の甲の吊腿のまるふ。純紺錦の戰
袍と披下し。堆朱の刻函の大刀と佩て膝ふ鐵骨の軍扇と衝建虎彪の皮とうち累
なる裃子ふ坐して上座ふ在り。左右ふ侍る老嵩両個ふ奥利本膳盛衡ぬ浅木碗九郎
嘉俱と俱ふ玄草綴の鎧と擐るふも披膊と帯ふ。象頭と鮫函の解ぬ刀と
腰ふ帯る。その餘究竟の力士四五十名短鎗眉尖刀の鞘と除して二行ふ侍立して
百有餘の雑兵ら。弓箭火銃と持て孫廂の下ふ四羅列れぬ。その支の為体。

齊々整々として猛威を赫奕し素破と怒鳴る面魂都て一人當千と見えぎ
はいるるけり當下願八盆作い倶ふ書院の縁頰ふ跪て寄隊の使臣大江親
兵衛と云ん下知ふより領てまゐりぬと名告とまれば素藤い其方を伝とる程ふ親兵衛
揖讓もせず長袴の下遣返して誕使ふれば勿論上席冝く用捨るべしとのたまへ
找登りて床間ふ鎧櫃を按出し尻うち懸て正面ふ第一の上座ふ着しかば素藤
主従一個として呆れて瞻仰ざるいなく他い誰何とぞるいふ早ふ外るのもあり登時素
藤勃然と怒れる聲を苛立く噫ふ斬慙る猴子が狂態ありふ這奴い瘋人ふ
んゑ引捐降さぬと勢い猛く下知ふ這奴い瘋人ふ
美りぬと応々大家蒐れと身を起せば四下ふ守護の力士毎咄と嘩て短兵を見めり
先く親兵衛を推捕稠て敷んとぞ那時遅し這時速し奇るかな親兵衛が懐
より一道の光颯と發燭ふ行向い兵毎の面を樸地と樸しふ大家都て眼を射

られて諸聲高く苦と叫ぶ碗九本膳願八盆作力士も倶ふ動手りて簀子ふ腰を撲惚
或い柱ふ頭を破りて平張俯る尻ふ一雲時い起るざりけり今這奇あれ光景ふ外面る
雑兵們い驚怕れて找ふ出ぬ面ふ置ふ今と闘くのを韓盧が吠る痩狗の門ふ聚合ふ似りけり
登時親兵衛聲高ふ若們何ぞ無礼る草田い我君麿下の城將虎狼の野心を逞く
為て今龍城ふ既ふも軍陣の作法とて四主の使者を迎ふ礼ふ怠まず傲慢る非礼を
容ざる天四討覿面怪ても悔ぬ懲りぬと罵責られて素藤も驚ぎて毫も怯ぬ
眼を瞪ら聲ぬり立て猴子奴幻術ありとても我刃失ふ向ん迄丈里ふ退ぞと敦圍く突と
身を起引拔く大刀風両段ふ薙と丁と敷る親兵衛嘯が身を反して扇子をとりて
那這と柔柱ふ当ぐる耶と聲ふけて刃を礙と打零せば素藤吐嗟と踏入て組んと找を引
着て項を抓こ摔輾て隻足ふ楚と踏伏せ引現比類ぬ勇力ふ慴れて苦悩堪ぬる
素藤い千曳の石を背ふ受る心地やあけん面色宛土の如く饒せと叫べば呪逼て聲

八犬傳九輯巻八
館山乃城千犬
江親兵
衛泉兄
威服
ぶん睡
ぶん作
親兵衛
かとう
ぐりん八
力士
力士
力士
ぶん郎

立ち絶るが如く呻吟たり。暫くして程ふ。願八盆作本膳の碗九郎も力士たちも。我ふ復りて共侶ふ身を起して眼睛を定めて。それ。暫く素藤は酷く親兵衛ふ踏伏られて。呼吸も絶て形勢。あれ大家吐嗟と騒噪ぶ。極く思へども。初ふ懲りて和郎立ち和主且試ふ先へ蒐れと厮讓る。虞芮の論果しなく。分惑ひる田の畔の蛙兒ふ似る面。框咸停跂て長視てより。登時素藤聲戰てやよ。孟兵衛我を救へ。命ふ代る東西を。沢ふ勸解よと叫ぶを。親兵衛呵々とうち笑て。憶病鬼の受地子と。母主の命と。乞んとるべし。皆縁頰ふ雷列れて。我託宣を拜聽せの。尚又不の字とふ者あらば。一厭中て素藤を。踏殺さんぞ立ち。とのられて。答も投頸の尋念ふ。自ら進みでいる。保質をきへ。含まれるが。一言半句も。爭ふめるく。皆刃を捐鋒と倒して。頭を低腰を折め。可容きとて。縁頰ふ。出く。命を乞んと願八盆作。へ碗九本膳。力士たちさ。外面ふ在る。雜兵たち。人ヨ。けれ。推合て。繡眼鳥の像く。笑ひ。その間ふ。親兵衛ふ力士を。棄て。捕索の。時間近ふ。

満呂又麻呂ふ作る安房の地名

けて。掻合を。素藤を。緊く。細りて。動さ。封じて。示さ。それ同悪の自物化の期ふ及ぶ。命を惜む欲狂ふ。猿馬ふ。再田ふ。推鎮め。謹て。我ふ。這素藤ふ。近江の山賊。但鳥跡六。業因ふ。獨子を。初ふ。但鳥源金太と。喚ふ。做る。原是。刑餘の。罪人。ふ。當年。その地。免れ。悪民を。惑ふ。吳利。誘ふ。翰谷如満ふ。家臣。けり。兄。巷幸弥太。遠親。と。哄誘。と。如満。と。共。城地。を。奪ふ。罪を。遠親ふ。親の。眉。ふ。奸計。立。地。ふ。成熟。と。吏。滿。と。横領。ふ。れ。ふ。富時。ふ。その。悪。発覺。れ。ふ。初。病民を。言く。赦し。功。ふ。よりの。ふ。ふ。仮。働ふ。幸者。て。縁頰ふ。並ぶ。生。從。ふ。城。主。ふ。れ。ふ。是。我。君。の。寛。仁。大。度。天。地。ふ。洪恩。ふ。開。ふ。ち。上。れ。ふ。傲。と。舊。黨。願。八。盆。作。を。綱。ふ。招。寄。世。壽。助。と。民。を。虐げ。驕。を。極め。剰。非。分。の。婚。姻。宿。望。遂。ふ。を。深。く。恨。と。又。奸。計。と。旋。と。義。通。君。を。捩。ふ。満呂。安。西。神。餘。の。舊。當。黨。ふ。侠。客。南。弥。六。ふ。と。我。老。侯。と。富。山。を。犯。ふ。らん。と。欲。り。し。ふ。その。悪。既。ふ。極。ふ。遽。莫。昨。日。の。刺。客。ふ。を。我。那。山。を。生。拘。り。し。ふ。龍。田。の。獄。

舎ふ殺されぬ。抑我身ふ同因果の義兄弟七名あり。その窮厄ある毎ふ富山ふ伏姫神の
實助をうるぞとうたがふ。就中我親兵衛仁は年四の秋より七又那神女の擁護を蒙り六
稔富山ふ生育る。今茲は甫の九歳。気力も見よ。身長き心術き倍まさ大なり。富山
誰ら教馬に仰ざる。神変不測無類の神童二人と有るこければ結縁の為礼拝せよ。
然ば我這素藤の素生と好詐をよく知るも身単誕使ふ立てるも皆是神女の示教ふ
憑り。昔唐山ふ秦の甘羅は年十二の童ふ。呂不韋ふ説て趙ふ使し大功あり。
司馬遷が史記ふ書ふ載せ。唐人の詩ふも賦物ふ引て唱嘆あれど皇国ふ
這親兵衛仁ふ。その功甘羅ふ孰與ぞ。開ふ左まれ右もあれ約莫我義兄弟は感得の霊王あり。
その王は八行の文字を分て王毎ふ一字ふ自然とあり。開ふ我持る仁字の王を因て名を仁と
の生り。若は我を殺さんとせ。折光ふ撲れて度を失ひ。我霊王は奇特ふ幻術あり。猜
せ。這素藤が愛物ふ邪術ふ思ひ比べ。終に憑物ふ失べ。縦素藤邪術を。御

曹司と捉りなりて。計畧を巡らしたる。我君仁義の大軍を攻潰し。白の石を卵
獻ぎ。ふりかけれども這城内へ駈合ふ。これ罪ふ民の尾礫と共ふ焼れんを憐愍めて
最寛安ふ計ひ唯御曹司を思召ふ故ふ。若は愚物の本性を漫ふ誇りく。
我君を傷害あり。と毎ふ報ひを自今知るを知ぞ。先非を悔くあらんも皆是五逆の罪
人ふ。誰ら一人も饒さる。刑罰躍を旋さ。鳥首せられぬ。我又神女の示教ふ憑
て仇ふ報ふ徳をもて。曼讃信の仁を施さ。若は生て今まで在ん。先ず是なれ
と御曹司ふ。ゆえ慈悲の恩を請ふ。我も亦御陣ふ参て。聞王ふ大赦を請ひ
ん。倘名所の計ひ。素藤を首として誅て。首級を御陣へ献せん。若は首を接く
願ふ。目今玄関の頭ふ在る我伴當ふ報知て。御曹司を送りたる事の准備をせよ。我俱
ふ。若黨ふ曼養ふ諏訪の社頭ふ。若は火銃ふ殺れる御方の近臣吉屋八郎即是那
折都て深痍ふ仆る。御曹司の伴當は亦是神女の真助ふ。蘇生て稲村の城ふ。

傍まで天福神助多う治國主ゑ弓を彎ぞるゝ天ふ對ひて唾吐くよりも甲斐も無き白物ふけれ快々
甘ぞえと罵る懲せば願八盆作碗九本膳以下の兇黨舌を掉ゑて戰き怕れて仔細ふ及ばぞ兼
てぬことゝ心して本膳と碗九郎ハ走りて外面へ赴きつ先苫屋景能ふ親兵衞が奇異武勇の
事の趣き并ふ笹竈城の將卒ゞ咸降參の義を報知して案内をて義通君の身邊へ赴きける。
早く表里見御曹司義通君ハ久しく當城ふ屏竈られて慰めまうらしするのもなく柵締る一
室の内ふ旦くらしあぐみまの日思ひうけるも賊徒本膳碗九郎が苫屋景能と倶して來まく。
城兵都て降參の事情を告まうらし遽しく囹圄を披きつ別室ふ出しまゐらせて儲の褥ふ請
登まれば景能躬て見參をて恙きりしを祝しなり然而犬江親兵衞が武勇大功の速さりし
事の由を告まうせば本膳と碗九郎ハ歸降のよしを申まげて御陣へ從りなまん徐ふ坐を定
ひとて茶をまゐらせ果子を薦めてせまく勸り慰めけり義通君ハ是を聞きてとくとうち听て
景能ふ宣ふやう我も那犬江ぢう人の噂ハ伝ひ知るのみ向後角もてかくの如き武功のよしを思ふ

ゆるゝと恥しきハ我うへ久時の不祥ふあるれど久しく賊徒ふ屏竈られ或ハ城樓ふ推登されて責殞
愿れぞりけるを躬方の士卒も岳を敵君も憫しからん然る辱を受て今ふ生て還るを恥しそこの係ふ
あて阿容々々と大人ふ見參すべきや初のごとく轎子ふうち乘まて初の如く居ヨの士卒殘從へ
まれ恥を雪るよしあるぞ什麼あの義とよくまるやと問れて本膳碗九郎ハ景能が答を待ぞ。
倶ふ額衝て宣ふ安ふその義ハあろ安るべしかゝる轎子ハ損ゐぞ當城ふ藏めてあり然ハ城内の
士卒數を盡して扈伴を仕らん只穩便の御沙汰もあゝ願しくそのぼまれうりでくとうち陪話く。
走りて書院ふ赴きしを景能ハ冷笑ひて亦幼君を守護してその傍而本膳碗九郎ハ故の
縁頰ふかへり來つ親兵衞ふうち對ひて義通君のおん答を箇樣々々と告しゞ親兵衞然
しそと點頭て現ぞ大將の器智勇自然と備りあつ今あの坐席へ迎まゐりて見參ふ入るべ
けれども此父君の係とハ知らぞ胸安らぞ御坐まをぬるぞ若們おん送りの准備をせよく整へ
よぞ中ふ願八盆作及碗九郎本膳とやらんその餘も重立てる兵毎ハ皆面縛して御

陣へ参れ縦雑兵ごとても或は武具を着用し或は腰刀を帯ることを許さぬ。その外は悉く
のみならず先素藤より屠戮をく。皆悉頸を刎ん後方を待る力士毎願ハと盆作ハ
索を撰てうち戍れ。那奴両個ハ素藤が悪を資け。舊盗を奴々由断をべくぞ本膳と
碗九郎ハ腰索を被て。死送りの事の准備を勤させん。快々せよといそがせば力士們を
身の出来を怕れて推辭とをゐぞ。先願ハと盆作ハ武具を脱て。縁頰より推下しく
索を被け。又碗九郎本膳ハ小多を饒をて是も亦細りて縁頰ハ牽居う。浩然。
這城内る百姓們ハ素藤既ハ生拘られて。餘類ハ降参せ。偽号皆教ぶ。四
門を戍る頭人を搦捕り細縛て。牽て書院の庭ハ来。然而親兵衛ハ訴るう。恐
ましく。我們ハ車ハ濱の良民毎ぞいとと。素藤ハ駈含られて。他ゞ軍役ハ従ひハ実ハ
本意ハいぞ。小るよ逆将俘ハせられく。當城ハ入り。ふよりの洩ゆえしり怡
悦ハ堪ぞ。隨即守門の頭人們を搦捕く。呈献せり。その餘の雑兵仂武者るどん。

事の敗れハ駭怕れて。咸副門より山路を投ぐ。まく落亡ハ発と。呂れば親兵衛領て。開
切てのみ。今當城ハ在る若曲目。良民ハ。幾名ぞと。問ハ答て。然ハ二三百名ハ。と
ふ親兵衛又領て。然ハ一百五十名ハ御曲目司の。伴て御陣へ送り。又一百五十名ハ
我伴當姥雪與四郎を頭人として。權且當城ハ戍るべ。又素藤ハ筒様々々。慫々ハ
領てもん杉木と車の准備をせよ。先若們ハ一火の内中ハ。ろ。ろる者両三名。を御陣へ
走りまわりて是ぞのうと注進せよ。その餘ハ這願ハと盆作ハ牽頭りて。我当る折を。又
力士們ハ本膳と碗九郎を牽のて退りく。死轎子の准備をせよ。ろ。ろる。ろ。欲と言示せば。百姓
們ハ欲ぶ。来て願ハ盆作を受合りつ。守門の頭人共侶ハ牽立て。皆退りしハ力士并ハ
雑兵們ハ嘆息ろく。皆悉大刀も鐵鎧も脱棄て本膳碗九と。先ハ立ても。皆外面へ
出ハけり。姑且しく力士們四五名書院へ。ろの来つ。親兵衛ハうち對ひて。御曹司を。送
その准備整ひ。と報ると。親兵衛うち聞て。然ハ我も。伴せん。案内をせよ。と。赶立

老。細り措くを素藤と小児の像く腋下ふ抱て。そゝ侯玄関ふ出ーゝ。與四郎躰て走り寄て事の狀ひと舒ゐども登時親兵衛ハ與四郎ふ權且當城ふ留りて守るべ。上旨を言示ーゝ。又百姓們を喝ーて卒とそ素藤と遞與ふ。大家豫の下知ふ違い。素藤と受合て。杉木の杪ふ細着て。勝げて車ふ推建け。恁りー程ふ義通君ハ御尚ふ社參ふ被ゐ。ゐる礼服と。舊のごくふ裝ひ。小刀を帶て。景能を從へ出ゐ。親兵衛ふ。ち對ひて。神速の大功と與ゐて狀ひを演ゐ。親兵衛ハ謹て歸陣を祝ーて。禀を他御臨見せよ。素藤と長杉木の杪まぐ大沼ふ登ーゝ。御陣へ牽ーゐ。恁て君ゐ會稔音の恥を雪るふ足りぬべ。快々出させゐ。ひねとふふ義通笑ーゐ。ふち點頭く立ゐ。百姓們ゐ。ゐ。ゐて。ゐ。轎子と舁寄せけり。畢竟里見御曹司父の陣営ふ送遣されく。後の説話甚麽ぞや。开ゐ次の巻ふ解分ると聽ゐか。

南總里見八犬傳第九輯巻之八終

東都　曲亭主人編次

第百八回

義成仁を旨とゝ刑と寛くす
貞行主ゐ謁ーて克を奏ゐ

話表里見安房守義成主ゐ神と親ゐ教誨ゐ從ひ只那寛の一字と守りて。叛賊蟇田素藤を攻伐ゐ。敢火速の兵をとゝ。せゐ。城を遠巡ーゝ。憶ゐも日と弥る程ふ既ふゝ春も。二月下旬まゐりゐけり。浩処ゐ有一朝蛋崎十一郎照文ゐ。瀧田殿義実の使とゝ一騎本陣ゐ來ゐけれゐ。義成躰て對面ーゝ。ゐふゐ。ゐと聞ゐふ老黨東六郎辰相を首とゝ小森但一郎高宗浦安牛助友勝田税戸賀九郎逸時登桐山八良千们も皆左右ふゐ侍りける。登時蛋崎照文ハ義実老侯の仰を舒て。義成主ゐ告まゐゐ。富山の麓河猛可ゐ水涸ゐ。登渉ゐ自由を。ゐ。是ふゐ。老侯ハ昨日大山寺ふ詣ゐひ。ゐゐ伏姫の墓を祭らんとゝ。近習絶ゐ両三名を領て那山ふ

登りあふ程さ素藤が刺客安西出来介満呂又麻呂作ふ復五郎天津九三四郎荒磯南弥六椿村
隆八ゑど喚做くる安房の舊黨都て五名山の半腹ゑ埋伏して両個の伴當を射て仆し既ゐて
老侯の危窮ゑ及びあひ折料らぶも大士の二人那犬江親兵衛に突然とゝ樹間より顕れ出先
途ゑ達て刺客们を擊ち伏て老侯を救ひまつり勇力武藝比類ゑろゝ不思議の大功あり且
親兵衛八六稔以来伏姫神の眞助ゑまり養れて富山ゑる品扇の内ゑ存り今茲八南の九歳ゑれども
最殊う大ゑくゑりて身長八三尺四五寸心術も孺子まあらず文学武藝学得て通達せずとゝ雖
神童ゑりゝゑ又親兵衛ゑ生拘られる出来介復五郎九三四郎隊犬ゑ首伏の事の返並ゑ九三四郎が
故主と咬ゑ神餘長挾介光弘の落胤ゑる上甘理愚之介弘世のゑ又姥雪與四郎ゑの妻音音二個の
媳婦曳ゑ單節も又是伏姫神の眞助ゑりて親兵衛と俱ゑ富山ゑ存り曳ゑ單節ハその良人と婚
姻の折有身ゝと知らず臨月遥ゑ過ゑて甲乙共ゑ男子と安らゑ産ゝ則父の名をそゞ伏ゑ力二
尺八と喚做ゑゑ又那荒磯南弥六八親兵衛ゑ擊ち惱されて辛くゝ逃んとゝる山路ゑ與四郎が生

拘りゝ老侯ゑ献り夫婦姉妹両個の孫まゞ見参ゑ入りゝゑ又殘と屑ゑ両個の伴當鶴舟員
六小水門目八親兵衛が介保ゝゝ神授の奇茅を用ひゝゞ立地ゑ蘇生ゝと矢傷も乎く愈ゝゑ又
五個の刺客们八伏姫の神靈の灼然ゑりゝゑ駭ゑ怕れゝ先非を悔て大ゑゑゝ忠且老侯の恩澤
慈善ゑ感ゝゝ歸順を願ふゑ并ゑ天津九三四郎員明が孤忠のゑ又南弥六も凡庸ゑる俠客ゑあら
ざれども陳謝ゑのゝありゝゝゝゝまゞ正ゝゑ照驗ゑければ俱ゑ瀧田へ遣て獄舍ゑ繫ゑ置ゑゑゑの日又老
侯八伏姫の墳墓ゑ香華をゑ向あゝゝ猶も峯上ゑ攀登りゝ觀音堂詣あゝ程ゑ久きゑ既ゑ日の暮ゝれば
大山寺へ止宿のゑゑの日甘屋八郎景能が次ゑ君の仰ゑより青海波とゑゑ名馬を牽て稻村ゑりゝゑ
ゑゝ老侯瀧田ゑまゝはゑゑば躯ゝ富山の麓まゞ來ゝ見参ゑ入りゝゑ老侯他ゑも大山寺へ召俱ゑ
あゝゝゑ當晚犬江親兵衛八身單敵城へ赴ゝゝ徜曹司を拯ゑりゝゝゝゝ親兵衛八ゝ管惱りて神女の介教ゑ従ゝ枉ゝ許ゑゑゝゝゝ慶請ゑ
許ゝゝゝゝゝ教諭叮寧ゑりゝゝ親兵衛八ゝ管惱りて神女の介教ゑ従ゝ枉ゝ許ゑゑゝゝゝ慶請ゑ
已ゑりゝれば老侯是非ゑ御許容あり則名刀小月形と服章ゑ社紆小袖を親兵衛ゑ賜りゝ駿馬

せいかい
青海波ようち跨りて大山寺を出るゑ及びて景能興四郎伴當ゆう又照文が御陣へまゐりて是なのよりとゆえあげよと仰付られるより馬を親兵衛景能ども時候ゆゑ徒而親兵衛が逸早く羽賀の松原まで騎着て路上佛堂を憩ひて殊ゆゑ賞ぜ那姥雪興四郎が老人ゆゑ似げもなき駿馬を後れぢと走らせ疲も疲労ぐりゆゑ却照文と景能が天の明る時候来ゐれば親兵衛が景能と興四郎を鑣奴と伴若黨を打扮て騎馬の左右に従ゆ館山の城ゆゑ赴ゆ照文が注進の為景能が乘捨る馬を他が鑣奴に牽て本陣に来ぬるゆゑ瑰奇異聞の緯を首より尾まで一事も漏さず告稟ゆゑ義成主が左右に侍る辰相們老黨近臣駭き嘆て奇々と稱へり登時義成主が照文が注進の速なりと労ひて辰相們に宣へり那大江仁のゆゑ我も豫十一郎が告るゆゑ知りぬれども女兄の君の神霊の賞助ゆゑ今茲九歳の童ゆゑ身長才幹武藝まで古の賢人勇士に異ならぬゆゑ奇なるかな徒まで天祐神助をゆる俊傑なりゑ必又大功あるべし就中欺ぶべゆゑ那山中の一條も昨日嚴君危難の折他倘富山にあらせば誰ぞよく先途に達て寇を輒く捉んや。あの一事とのみ人力人智の及ばざを知るゆゑ足れり。我が二千の士卒を領て三十餘日城を囲ゆゑ労せずゆゑ功なるゆゑ方僅親兵衛が身單きゆゑ義通をとり復さず元自我家の幸ひゆゑ城内に火を颺て暗號を示せゆゑ城に攻入りて快親兵衛が力を戮せ遽莫且這方より然る氣色を見ばさぐ事の安危を窺ふべしとて。ゆゑ隊配を定る當下士卒が大江仁ゆゑ奇談を初て彼知ゆゑ腥を洗ひ且相賀と勇ぐるゆゑ徒而あの日亭午の時候に舘山の城より出て寄隊の陣へ来ぬるゆゑ両三名あれども雑兵們訝り怪ゆゑ捉へて本陣へまゐらせゆゑ他們則陳どいふゆゑ小可毎ゆゑの月来素藤に駈入られて那城にゆゑ曳瀟の良民でゆゑ大江主に吟味られて注進の為まゐりといひけり是より東辰相立ちてのよりを尋向ひゆゑ犬江親兵衛が武勇のゆゑ素藤既に生拘られて衆兇降参まゐりゆゑ親兵衛則城内に軍民三百餘名を三隊に分ちて三百五十餘名が姥雪興四郎を頭人として城を戍らせゆゑの餘が都て御曹司義通君に倶にまゐらせて程なく御陣へ御歸座あるべし勿論素藤以下の降人が牽まゐて実

検ま備んとまあの餘の事ハ箇様々々と詳ま申さえーゑ辰相ハ怡悦ま堪ぎ且這民们を留置く。
ようを主君ま申さえあげーゐ義成主ハ始より天助神祐大々ゑ〻ぬ親兵衛ゑれば謀ゑぶ如く功ゑ〻
ぎゃと憑ぶ〻思ひ申べゑるまあらねどゑ〻心ゑ〻とゑ〻今ま胸の休ゑ〻ぢりーま恁る注進ゆえーゑば
その喜びひぶ〻もわ〻ぎ然而辰相ま宣ゆう大江親兵衛不測の功あり素藤既ま生拘られ義
通かゑり来ゑ〻ば我いゑ〻這陣ゐ在りく。そゑ賞罰を左も右も紛ひ果ーて城ま入〻ん尓せざれば
親兵衛が大功を掩ま似〻うきゑれ非常の與ゑれば田税白鳥九郎逸時と登桐山八良干ま五百
個の士卒を授け。程ま発処ま備を找めて那城より出るもの皆悉出果ゑ立替り城ま入て姥雪與四
郎を相資く。姑且四門を衛らもべ剛才人の告るを聴ーま館山の賊兵们ゑ副門ゑり落亡ぬる欣山
路を投く出るのヨゑり撃捕ぬ発と動揺ぬ発を我推制ぬく。追も撃ませ。那城ゐハ今親兵衛
あり。他が武勇ま害怕れぎハ誰ゑ一人も落亡ば発必躬方の吉事ゑ〻と思量りーま果ーて遠ハぎゑ〻と
士卒ま徇示て逸時と良干ま快々下知を伝へよ。事送もゑ〻命ぶば辰相ハおゑ〻ゐ果て遠ーく退りま

けり。登時蜑崎照文ハ義成主の身邊ま侍り那里の注進ゆえーより忻然とて禀ませう既ま知せあ
ぶく。那大江親兵衛ハ今より六稔前つ秋神隼ーまあひーー折まぐ。西も東もあぎ知らぬ幼ぶ四才の小
児ゑりーま名将勇士も及びくさかゑかくの如き大功あり。數ゑ〻ねども微臣が、大法師と共侶ま弗憶く
大士们を見出せーより両三番ゐん使ゐ立られーま并をゑ〻く選る功ゑ〻りまま單親兵衛が拔出く昨今老
侯郎君の危難を拯ひまり寇を生拘り城を拔ゆ〻るよの舉ま如〻く身の鈍ゑりー面を起ーゐひ発。
とゐば義成主ゑち頷ぬく寔ま汝が禀もどく。僅ま親兵衛一人でもゑ忠武大功比類ゑ。況ハ人具足
ゑく當家の股肱まゑ〻ん攻ゑ〻ゑれ百萬の勇兵ま捷ゑぶく成る時ハ鐵壁の石城より堅ゑ〻べー。武
門の幸ひあの上ゑーとそ。倶ま笑局ま入りあ〻徒りー程ゐ東辰相ハ逸時良干両隊の士卒を速ま出ー
遣りく雑兵ま陣門の掃除をハそ。准備を整へ旌旗を建刀鎗を見ゆ〻本陣の八面ま士卒を備へ武を
赫奕〻く親兵衛が降人们を牽て義通君ま倶ーて来ゆ〻ゑ大ーゑく待ゑうゆ。却説這時館山の城
内ゐハ義通君の伴當の准備整ひぬとゆえーゑば親兵衛下知ーく第一番ま素藤以下の降人毎を先

御陣へ牽べしとて城の北門より出し遣し次ぎ義通君の轎子添い苫屋景能奉りて軍民百五十名を從へり。當下大江親兵衛は名馬青海波ようち乘りそ殿しさ徐ろそ来ぬる。約莫事の為体白布の標幟両竿ゐ叛賊墓田素藤と寫しそ降伏兇黨と寫せそ両個の軍民捧持て真先ぇぞ找ミる。次ぎ礪時願八平田張盆作。奥利本膳浅木碗九郎们素藤ぇ重用せられさ頭人ぇり。逆徒二十餘名を背ぬぇ鄉縛さ居ぇの民们ぐ追立ぎくめり。次ぎ墓田素藤を太く長ぎ杉木の杪ぇ鄉着て勝げく車ぇ推建し軍民二十名しさ元を牽くぇ。杉木の杪より結び下ぇる。四條の麻索を操まる者あり。敬ぇ倒さしとくの與ぇぞ中ぇ巾を顱纏ゐて偏祖だる者一名あり扇を用ぇうち招ぇく。聲高ぎる音頭を操れば牽児大家節を合しさ。遣材唄を謌ひけり。越の國ぇる雪の深山ぇ杣木樵ぇ家路ぇかる。雪車歌とうふめも。徒やあぇんと思ぇ可ぇと詭て俗備えれども寄隊の耳ゐ與あるべ素藤ぇ始より親兵衛ぐ仁恕を倡く大赦を請んとぇりしを倘やと憑て罵り噪ぐ。果敢ぇ命を惜むの故ぇ身の存亡を他ゐ儘しさ阿容々ぇて鄉縛ぇ就ぇらぇるも

ぇり。這時肚裏ぇ思ぇ。昔我親ぇ京師ぇ居て六月の祇園會の山鉾を観ぇる折庶聲虫の病病ぇり。搦捕られ禁獄せられて竟ぇ命を須しぬ。思ぇ今ぇ我ぇ乗ぇ車ぇ推建られる容ぇ宛祇園會の山鉾ゐ似ぇり。況ゐ義通君ぇ戮同欲城楼ぇ登り柱ぇ吊して譴恐ぇ寄隊ぇ示せ。報ひるぇ爭何ぇ甚。却ゐ那ぇ百比丘尼ぇ那異影を驅しぇ我徒ぇり。ぇ知ぇる欲知れども救ぇ術ぇ無ぇ。初の程ぇ這那と帮助ぇるぇ。今ぇの折ぇ效驗ぇ無ぇ甚ぇ益ぇ。ぇ胸ぇ。ぇ蒿ぇ吹く風ぇ。憂苦ぇる瀬ぇるぇり。間話休題素藤が車子の次ぇ降參の賊卒三百五六十名或ぇ五人或ぇ十人數珠の像くゐ繋れて。ゐ民毎ぇ追立ぇる是ぇり千間餘りぇ隔ぇ。義通の先伴ぇる軍民約四五十名叱咤の聲遠く空ぇ。先ぇ行ぇ最重ぇゐの餘百餘個の軍民ぇ轎子の後ぇ從ひ由緒ぇる民ぇ許されて左右ゐ從ふ。ぇ次ぇ大江親兵衛仁ぇ初の伴ぇる礼服ぇ馬上履ぇ歩せる伴當ぇ。ぇ五六個の軍民ぇ馬の前後ぇ從ぇり。ぇの時舘山の城の斬ぇ頭ぇ里見の士卒五百許名田税戸賀九郎逸時ぇ登桐山ぇ良干们ぇ元ぇ領ぇ。左右二備ぇ守護ぇる。義通君の轎子の正門より出ぇ元ぇ咸遽く跪坐て。

義通ハ俱〻
犬江親兵衛
賊徒を国守の
陣営ハ牽く

賊首来藤巡隆伏誅

遥か目送りまゐらせけるに然バ降参の逆徒ハ既に寄隊の陣門に迫りしかば親兵衛ハ城を出てゐ銭程もあらばりけり。折ふ普善蘇々利の村人ハ人の山を做しつゝ約莫這城下なる民毎ハ豆腐に素藤に自焼せられて這頭にあるぞ知りけ。老弱男女聚ひ来て親に者村に人の多く田舎に似げなる光景なるに親兵衛ハ佐々と見ハ心ゆかず。上總ハ民人富裕にして畊作漁猟采薪ハ都に生活の便宜に沿ひ。然いるあれ素藤ハ世を累ひ城主なるぬに年来奢侵を極めハ以ての外程に降人ハ牽れて陣の北門にまゐりあがバ小森高宗字ハ俱一郎・浦安友勝字ハ牛助雑兵居ヨ従へて出降人ハ姓名を問ひて実検薄に寓さて局内へ追入れるに中に素藤ハ車子にのみ乗りて下さるぞ俗陣門の外面に在らして主卒に出さらせしかば観る者いよ〳〵ひろまりて左右なる程に義通君の轎子近着来にければ東辰相蜑崎照文雑兵を後へ東門より迎へまゐらせく儲の席に案内すに寿祝を演ずるに当下芦屋景能ハ御曹司に従ひて席末に侍りけり。程もあらぬ親兵衛ハ東門の頭に馬より下りて找入るに守門の雑兵

額衢に迎へて云云と呼ばれ照文遽しく立出て先親兵衛に大功の欽びを舒安内をして件の席に伴ひけれバ親兵衛ハ又改めて義通君に見参して帰陣の欽びを稟しけり。一要時ありて義成主ハ身甲の上に時服を襲被て烏帽子直垂綺羅やかに黄金装の大刀を佩て近習に幕を統らせて屏風の背より立出て上座に着ゐ東辰相小森高宗浦安友勝以下の毎幾名欽従して皆左右に侍りけ。登時義成主ハ先親兵衛を召近着て席を賜ひ労ひて昨今二度の大功を褒賞ゆふと大きなるに〳〵打勉を賜ふ。君臣の義を祝ゆ親兵衛ハ席を避て謹て稟しけ。微臣神女の示教にて纖芥の功あるに似るも皆是君の洪福のまに〳〵然るに御曹司を閣れて見参に入りまゐるに実加ふまりて最もかしこ。願ハ今ハ御対面あれかしと慕ひ稟しに後方を伝と尽ハ照文景能あるに沿て卒と躯に義通に倶に御前に出ける。当下義通御曹司ハ恭しく厳君に向ひ朝ひて勝軍の寿を舒て且宜ふ。孩児憶ハ叛賊の為に浮囚となりしより快死なんと思ひかどもうち守る者間断るけれバ朽惜ゆと〳〵の故に身親征伐に目を弥りあひ御鬱念を猜しあれば不孝の罪免れがたし。然るを犬江

文溪堂蔵

親兵衛が不思議の大功神速にて勍敵降伏をうけ、聊恥を雪めたり。是併家尊の大人の軍威ふも憚りて、絶え一個の親兵衛を征せられるものやあらん。抑大江親兵衛が六稔富山に生育して、いと神助奇特の顛末い嚮に景能が告しかがの崖略を聴知りたり。寔に奇しきもの哉。然れども義成像快に領ぜて然こそ阿子がいふ親兵衛が常理をもて論じ、その功も亦神助の助に所れべきうん素藤奸智に逞くて、豆他が辱を受しは則我怨なり。阿子が不幸に似たれども今思へば後轍の戒とするもまた世に貴介の公子たるものは襁褓の内より長とるまで婦人のなかに守鞠養れて世の人情を知ることなく、民の艱苦を思ふ事稀なりとて、萬事みづから賢として身の慾を聽くことを憎み、人の悪を受くことを樂と做す故に諛言是より行れて佞人親愛せらるるとあり。且身ゆい美服を龍愛ね口ゆい美食を毎うて起掙くこともなく、安坐のみにて人を使へば人は使ふ苦辛を悟らざるの故ヨリ、くハ脚氣の病病を生して救ひ難きに至るものあり。況聲色に耽り、大酒を好むが如きはみづから壽命を損べども死に至るまで悔ることなし。是人の通病なり。阿子ハ叛賊に俘ふせられ責恥れて虎穴に在る

と四五十日辛くも死なでかへり来たりけるとて、生涯忘れぬ是に優る幸いあらじ。然れども唐山の鄙語にも、苦中の苦と喫ざれば人の中なる人とはなりがたしとかや。阿子ハ今年十一歳親兵衛ゆ二才の兄他と比べくもあらねど元自幼小といふゆへ、ものこの這教訓を示耳に留めて幾々までも親兵衛が忠義の大功をも忘れそやよ親兵衛に謝せよ。と諭めい義通ハ感涙坐ま吐して、兼りぬと応へ、遽しく身を起して、又改めて親兵衛に歃びと述忠義を稱へ、三拜せまく額衝ゆふを親兵衛驚ぬ推禁めて故の席に請薦れども、義通頭をうち掉て否とよ然のみ推辭事ハ、ちゝ館の仰ふて伯母の御靈を拜まるゝ和殿一個の上ゆハ、あらじと、強ひて三拜の礼を正く行ひ、親兵衛ハ困に果て、背に汗を流しつゝ、礼を尽る者、義通君の年ゆハ倍て怜悧ぬを且感し、且相賀して、俱に千歳を唱へ、日屬久しくうち頻軍ぬる眉を一時に開ぬけり。事の便宜に辰相ハ親兵衛に名對面して大功を讃し、奇異を稱へ、各齊に敬ふる。口誼訖りて辰相ハ義成主に稟ぬ、素藤ハ誅罰の事、稍対牽ぬ、這里ゆ梟首せんや。願ハくハ天罰を示して後の兇奸を懲しめよと請まるを、義成ぬ、領ぜてその笑ゆ亦親兵衛が思ひ

旨をあらんぞうめ仁八孰を佳とも。兵衛勝を找めく。件の一議い仰ぎくも請まゝんと思ひ兄抑素藤們が悖逆八饒されど兄ぬ。願ふ我君格別の仁政を施して他們が頭顱を接ぬ初微臣素藤を生拘り折約束して咸立地に降伏せば國主に大赦を請まゝりく死ざるこを惜ぎる。真勇のあ丸ば縱ま一個の敵を怕れさかのごくに至らんや素藤既に生拘られて他們が首を兄蛇の像く僅ふ尾を動せども今ちふ做き処を知らぎ是小人の本性ぬ畢竟命を惜むの外ま。恁れば今素藤們を饒して追放ぬふとも又何ぞりのを せん非如今咸頭顱を斬梟ぬくとも當家の政事仁義ぬ違ひて武德衰ぬくとあらば奸民必武を按ぎ。救くめ ヨゑらん願ふ八仁恕のあん計ひそあらまほしくゆられと道理を舒ぎ諫禀せば辰相悌ぎ親兵衛まうち對ひて難きるまう。現和殿の竟見を安くま并も亦人の反ぬ所仁とふ名ま相応しかんを左右いふべ兄ぬあらねども那唐山ぬ吳と越の二國の得失を憶ふま那越王句踐八吳王夫差が父の讐ん戰ひ既ま勝利を得く會稽山ま住せと攻め殺ぎで艶謂の和

説を容れ命を饒して剃國へ還せ。ぬ勾踐遂ま攻撃すて夫差を殺ゝく吳を駢ゝ。今素藤ど饒して那吳越の得失と亦何ぞ異ぬんん寔ま仇八養ふべらぬ檻を開ぎて虎を放せば後の患ひぬ兄とぬぎ宋襄の仁微生の信ぬ彷ひ八果して美ゝ。ぬれども事ま益ぬ。ちの我をいまど念れぎゃと詰れば親兵衛舎実さいつぬ姫ぬ理あり但素藤八勾踐と同日の論まあらぎ且越王勾踐八吳王夫差が父の讐ぬぬま饒せ八不孝ぬぎ義ぬも亦違ひう。素藤八然ま仇まあらぎ只御曹司を辱めぬ報ひ八則木ぬ登ゝ車ま建て陣門ま曝ゝれば事足ぬゝ又勾踐が下臣范蠡大夫種ぬどぬえぬ最遅ゝ謀臣あ兄ぬ素藤ぬ八然ま智謀の臣ぬゝ。縱夫差が諫て勾踐を饒もとも西施を受ぎ溺ぎ。ぬく忠臣伍子胥が諫を容て佞人太宰嚭を用ひぎ八勾踐其何とせんや昔漢末の諸葛亮八南蛮國を征伐せゝ折ぬ蛮王孟獲を七ぬどれを饒せゝ八孟獲竟ま感伏して誓ぬて長く叛くぎぬ。素藤目今饒れて亦復叛くとあらばぬの折入ぬを借らんと欲りせぎ晩生早ま誅罰ぬて餘塵を帚ひぬん宿老姑且狐疑を禁めく。ぬの我ま儘ゝぬぎゃと憚ま氣色もぬく論せゝば辰

相竟は諾ゐて又いはく。もろうけり義成主は甲乙の問答をうち听て感悦特は浅からず然而寡
せう六郎が意見もその理あり我も如右を思ひは親兵衛が論辨は又一級の上は在り殘は克勝を去り
怒は報ふは德をもてせば我後のよ長久ならん現素藤は兇悪なれども只私の怨讐ゆゑ天子將
軍は叛逆まつろ一國賊はあっぱれ法度を緩めて追放は誰は亦これを非とせん遮莫大約小人は
威されば懲りぬものゝ素藤を首として頭立る兇黨は各額は黥して且百鞭撻て封疆盡処より
追放もべ。おのゝ我は則親兵衛と六郎は課せんぞ速は如右行ひね我は義通を携て城は入りて萬
緒を捉ん照文並は景能は馬を瀧田と縮村へ走らして是をあっと注進せよ快々といそがて早遣りて
程もなく小森高宗浦安友勝以下の士卒は従へて義通君と共倡は舘山の城は入りぬ親兵衛と辰相は
雜兵は下知を伝へて先蕃田素藤と礪時願は平田張盆作奥利本膳浅木碗九郎們都て頭立
る凶黨を局の内は牽居さて國主仁恕の寛刑を恁々と言示一若们尚去の我を忘れて立かゞ来て
悪事を做さば其回は決して饒さず総城郭は據りて千百の兇黨を復旧るとも我這犬江親兵衛が

在らん遲りは人は讓らで立地は咸屠戮せん是を思へこれとおの人と諍復ゝいひ懲せば素藤並は
兇黨は額を衝て洪恩を稱く兼伏をさりけり當下雜兵総名欠下知は隨ひて素藤們は額は
送る黥一て衣を脱ぎて推伏て背は笞を中ふと二百扱は及びぬ皮破れ肉顕れて鮮血の流ると勘
くもぞ各苦痛は堪ぎて叫喚の聲も立ぎるの比扱果て引起一水を與へ膏茅を背は布て推居ら
素藤以下の兇黨もかくの如くなるべくは親兵衛下知一て笞の數三十を饒せば七十扱は生まけり
おの餘烏合の兇卒们は最ヨれば扱くは及ぶ咸ぎの額は黥一て都て追放せられけり是等の支は時
移りて日は西山は沈む時侯護送の雜兵部一て素藤並は居まの賊徒を便宜の海邊は牽ぬ行く
或は五名十名ゝ分ちて舩は乘一漕出ぬ武藏は愚笛河の西岸は迫り相摸は三浦岬崎は到る咸追放ちて
かゝり来まけり是より先は親兵衛辰相们は件の一義は日の暮れば這夜は俺在陣一君侯は旨を伺ひ次の日
陣屋を毀ゝ素藤は自焼せられ一城下の里正故老を召よせて家為くなり一民毎は頒ちてこれを合ふ
あっぱ大家欽び恩を拜一て家作の料ゆぞきけり小程は義成主はその日嫡男義通と馬を並べて舘山の

城に入りめぐる程に居ヨの士卒相従ひ及本陣へまゐる。軍民ども皆陸續と行列を正して従ふる。
支の形勢。武備厳重なる中黒の白旗長柄の數鎗。或ハ弓に鉄砲。その程々に隊伍を素さに徐に
伴ひまゐらせけり。登時田税戸賀九郎逸時。豆桐山八郎良千八姥雪與四郎と共に君侯父子を
迎まゐりて城内を異の趣を云云と宣へばけり。是より義成主ハ姥雪與四郎を召出して老に似ぬ兒
神行の功を賞て東西を賜ふ。打大刀甲冑をもてせられかば人皆これを栄とも。その折又義成主那
神餘光弘の落胤と宣へる上甘理墨之介弘世ぞの名を呼ばせ病臥て宿所に在りそぶ侯人ハ
早れ来と見参に入るものゝ。その性の果敢々しかぬに病者なれば何やとを光惚とてよくも答へぬ。
その後普善の村長故老に那安西出来介満呂復五郎天津九三四郎荒磯南弥六椿村隊人々が
来歴素生を問ふに。ハ郷に蛋崎照文が宣へる。他ども招了の趣と喩合せのミなるぞ出来介
復五郎が宿所ハ満呂安西の家譜あり。と宣へど合ず寄さ見あるに照較疑ふべもあらぬ是
等の賞罰ハ猶村へ凱陣の後沙汰あるべしと先素藤が婢妾兒黨の宅着を出し遣りぬ。

その所因なる者ハいまだ要らざる荘容に賜り且曩に素藤に寃屈の罪を負せられて誅滅
せられる農民の親族宅着を召出して永銭を取らしめ仁政限もなくして那身ハ改て土民ども
皆悉欣び慶賀稱讃の聲街衢に盈てぞ中に生才学ある者ハ悄々に眉ひ
顰めて。守の仁政佳といへども素藤ハ五逆の罪人に因て律を按ずに大赦を行ふ。折しも五
逆と人を殺せハ赦さぬ。況那願八盆作。本膳碗九郎ども毀傷する兇黨ハ賊首素藤が虜に
なりしを害怕れて猛可に向容々と降を請ふ。縱面縛して参るとも真実の帰降ハ
わるぎ然るを一人も誅せぎるべく。追放ちあるいハその制度法家の旨に違ひて柔弱に過ぎるとあるぎ
虎狼ハ山に逐ぎべく悪木ハ根ど送ぎべく我恐らく後の患ひあるべきぎと呟けり。話轍饒舌却
説犬江親兵衛仁東六郎辰相ハ素藤ども追放しる次の日陣屋を送ぎて毀ちて家なる城下の民ハ
取らん第三日の朝士卒を須て俱に鎗山の城に帰りぬ。義成これを労ひて親兵衛に宣ふ。当城既に着
落して曳潮ハ風波起ぎれども那十代九真里谷武田ども。の餘寇ハまだ伏誅せぎ曩に貞行直元に一千の

士卒を授けて討ふ方へ遣せより。折々注進あるべし。いまゞ全勝のよいやうを怠れば又當城も智勇兼備の者ゆゑ。餘燼を鎮ることかたゝべし。因て汝を這館山の城主と做して。逸時良干を副と。與四郎も共伯は當城に住りて宜く計議を與へべし。又那上甘理黒士之介は神餘光弘の落胤なれば普善の村人们谷碑に在り。最憐むべきあるれども。その性殊に敢悪なれば。且廢人なれども爭何いせん。他は稲村へ招て。なほ計ふべきよりもあらんなれの餘のみは箇様々々と叮寧に示し授て。隨即士卒五百名を住せ當城を守らまゝ。既に去る凱陣の人馬をいそぐべき程なれの日堀内藏人貞行は三百餘名の士卒と倶に主掬千代丸豊俊と降人真里谷信昭を領て當國廳南より凱陣し。義成主を見参して聞戦全勝の趣を具に申えあげより。開けるとなれば尋ぬる初堀内藏人貞行と杉倉武者助直元は一千の兵馬を領て。千代丸圖書助豊俊が盾籠りする長柄郡榎本の城と攻ける。椎津の城主真里谷信昭及廳南の城主武田信隆も年来素藤豊俊们と交り浅からざるとて。免れがたしと思ひけん。各吾の軍兵を領てみづから援兵として榎本の城外二ケ所に屯して。掎角の勢ひを張りしが。貞行直元兵を分ちて直元は城を壓し貞行は

真里谷武田の両敵と戰ふ。勝負區々なるもあり。敵を三方に受ければ果敢々々しかも憶ぶも日を弥る程に春は二月の下澣になりけり。登時真里谷信昭は獨熟思ふやう。我交遊の義によりて里見と矛盾に及べども。大小長久の計にあらず。意ふに素藤が今寄隊の大軍に怯まで城を持固るは初虜なれども。必ずや義通あるの故ゆゑ。外に驍悍なる城もなければ幾まで依然而あるべし。戰飯箭種竭に及ぶ必誅滅せらるべし。彼大軍寄加兵はいまだ日浅く。我は國守の通家にて千代丸武田と同じく義成の亡母五子の刀自。我養父静蓮大人の第二の女兒なれば我と他は従母兄弟の義なれば。今の時に及ぶ忠と志を顕さずは後悔臍を噬むもあらん。嗚呼介なりと。肚裏に主意既に決りければ寄隊の陣へ笠前書を射送。貞行はその密意を示す介。後武田信隆は伴りて信昭猛可に持病發りて。對陣に堪ずなり。權且居城に退去て將息せべしといの哭てその隊の士卒と後へ退て夜に紛れて退陣せり。信隆は欺れて毫も疑ふ心なく。真里谷が在らざるをうしとて戰ひくるはるかと嗤ふ士卒と励しとするも日毎に貞行と鋒頭を交爭ひし有一日信隆が廳南の城の殘兵が幾名か逃れ来て信隆に報るやう。往日真里谷信昭主がその隊の士卒を從へて廳南の

城に来まゐ。信隆主の侍言わ。密談もあれば城の番士。對面せまく浦まる。速に入れよと喚させぬ。けり。真里谷の三の船方ゆく且一方の大將なれば誰か是を疑ふべき。隨即城門を推開て城内に迎入れ。真里谷の一軍入るといなく。閧を發り火を放ち三七二十一人殺靡ける。只是不虞の攻撃に城内の士卒駭誤ぶく。撃る者尠くも素より船方ハ勢ひて防禦に術のなくして。門より脱れ去て城を奪れ。ひ。といふに信隆驚呆れて。原来信昭義に敗て我を出し。後に立ける我居城を奪られ。五月も徒に有かくて。今宵悄々地に退て。快廳南に立かの。奪略られし我城を。復て後に。又豊俊を拯ひと。當晩篝火を焼棄人馬を纏ひて退去んとせし程に。貞幹ハ逆より。直元と謀合ひ。俟て武勇の壮佼なりけり。堀内雑魚太郎貞住と。三隊に備て左右ひとく追撃る。各息とも艱ぶ攻ければ。武田の一軍乱立て左右に退難し。豊俊迫られを見て。真里谷が心変りと知らねば。ち驚ぎ且性起て。目今武田を撃ると。我も當城に有かくて。信隆撃るる兵毎とく。三四百の軍兵を魚鱗に備へ。城門推開て。暮地に馳出ぬ。二十日あまりの烏夜に紛れ。直元が一隊の伏兵忽然と起り。五隣間に三隊に分られて。一隊ハ城に入替り。一隊ハ豊俊を遮留め。攻伐ひて酷急に介程に。貞幹貞住ハ信隆を合ひ。樹て攻着る。標ひければ信隆士卒を。ひて撃て。馬を非ずして逃走ると。貞幹ハ。漏さじとて。通宵紅撃ぶ。信隆ハ。身に従ふ近臣。絶に五名まで。ぬ。今ハ。既に家もなければ。便宜の浦に船を徴め。主従辛く命を免て。日を歴て。甲斐國に赴ぬ。那里の國守武田信員ハ親族なれば。その隊に屬て。時の至るを俟ひ。それを是後の話。文豊俊ハ。夜女杉倉直元の伏兵に最も。緊く攻られて。闘戦難き及び。折ふれば城内に火光發りて。鬨の聲高く。敵も入替りぬと。ぶ。那造に。推建る。中黒の白旗の風に翻りて。見れば。他ハ什麼とぞ。且駭ぬ且悔れども。勢ひ既に。窮りて。免ぶべもあらざれば。阿容々と降を請ふて。敵の俘まるべし。士卒ハ四零ハ落に落亡て。竟に落城をぞ。ける。因て武者助直元ハ。榎本の城を守りて。今ハ。那里に在り。又藏人貞幹ハ。武田信隆を赴けるに。他ハ海船まで。乗りて。脱れ去りぬと。空ぶ。躯て。廳南に赴ぬ。真里谷信昭に對面して。功を誉て。城を受領り。相俱くる。侄の壮佼堀内雑魚太郎貞住に。士卒三百餘名を授て。廳南の城を守らし。真里谷信昭を伴ふて。又榎本の城に来ぬ。隨即直元と商談て。酒家に。くく。館山に。御陣に注進せべけれと。躯て千代丸豊

俊を檻車に乗して夫役们これを舁し又信昭を伴ふて館山に来ぬる之義成主は貞行们が勝軍の顛末をうち听て感悦浅々も則真里谷信昭に對面して大功と神女の擁護を越に始て听知て腔を浅め感嘆して実に我君侯の洪福と称ける。

意を轉して武田信隆が廳南なる城を一時に攻落しる忠戰尤賞もべし。徒れば其の功をもて前の罪を償ふの足まり本領を安堵して参勤懈るべからずと。敷置る馬一疋と大刀一口を賜りて。椎津へ還しぬひしが信昭は恩を拜して誓書を献り且素藤们が降伏の欵じを演隊兵を領て椎津の城へ退りしが今番大江親兵衛の腥勇奇特の大功を少知りしかも古と掉ひて國主の武德を仰ぐの永く一方の扞城たるべきを。竟に叛くことなかりけり。信昭の事這下に話るべし。却説又義成主は貞行直元が功と譽て現今番の挿花は曩に義通に倶しる折中途よりかゝり来ぬ。疎忽の罪を償ふ為に藏人は年老ての我に後ふて稲村へ凱陣せよ。武者助と雜魚太郎は槇本と廳南なる二ヶ所の城と相守て各城邑を理めよと御教書と赤間して使者を二ヶ所へ遣しぬ。此方の民安堵して欵ぶるもの多くなりけり。徒りに程なく貞行は大江親兵衛に對面して大功と神女の擁護を越に始て听知て腔を浅め感嘆して実に我君侯の洪福と称ける。

第百九回

八百尼山居に敗將を誘引す　濱路姫病林に寃鬼を厭ふ

登時又義成主の親兵衛に宜かるべし。直里谷信昭が反忠を豊俊降伏なれども重武田信隆の没落の告えあり。いまだ往方を知らざれば枕を高うして睡るべもあらず。徒れば鬱に課せずして汝は這館山の城主として逆時良干们と共倡に守御の用心怠なべからず。瀧田なる妙真ざまを見まくほりとて次の来ぬる。等閑にあらず我宜く慰めたまふべし。當郡無異なれば汝は瀧田へ遣さんの折祖母に對面せよ。今姑旦のうるべ。勉めよと叮寧に教へ給へ。親兵衛は頷御る頭を拾て仰美りは思ふ。則も推辭なく事の宜くて。其の義に及ばば微臣當城に留められて守御の一條は美の恩這の城主に做されんに望む所ひい。我身長は只に近くて智勇は人並ならぬ。纖毛の功ありとへども生れてより幾に九年誰か孺子にあらざる。然るに其の一城を領げさせのひるべ相応くまじからず且餘の七大士のまで見参に入らるに微臣一人。拔萃されて任る大任に當りては樂くもひも願は這館山の城主は另に人を擇ませの微臣の為隊に屬て

力を盡し給へとぞ義成主宣ひ給へ共も非常の人ぞ既に非常の
大功あり。されば非常の賞をぞ我いかで人も皆沒が功の莫大なるをぞ仰ぐのみその年の幼小なるを誰か論せん且
遠く唐山の故事を原るに昔燕の照王が賢者を招き欲せ折然しも為ぬ臣郭隗を先事く楊用ひ
給へ樂毅鄒衍の諸賢才齊より燕に聚来て王を佐け齊を伐て七十城を降し竟に西朝業を起
さしめ給ひ佐れば汝を這城主に今我重く用ゐ那郭隗が倒に倣て郭隗の儔ふ者に自餘の大士れ
ようと徳を慕ひ相敬ひて皆聚来て我を佐ん然るとき燕の照王が樂毅鄒衍を獲さらに憶ふ
せん。少人や我心既に決せり。やよ茲勿推辭そ。いざ。
兼ねてより。姑且て義成主ハ又貞行が課せる詠歌を。那十代九豊後の素藤が黨類なれども數世
榎本の城主なりけれ。素藤と同例に扱ひて追放ぶ他い汝が顔を稲村へ領て還りて
繁く閉籠置かば。又上甘理墨之介弘世と嗚做主者ぬ。他い要る死廢人なれども神餘の落胤な
なり。稲村へ遣べ。あの柔い鄙が六郎介。分付る死と宜へ貞行いの為果てその仁政を感

あけるの次の日の義成主ハ義通卿曹司を伴そ凱陣の提點ある城内自ら東辰相が森浦安房守の
甲乙男士猛卒十五六百名隊伍を整へ相後ぞ舘山の城ぞ向ふ大江親兵衛姫雪與四郎及田稅ノ賀
九郎登桐山八共侶が或ハ城の内外を敬言固し或ハ遠く郊外まで送て凱陣を祝し奉る約莫その事の為
体但見る甲の縅糸ハ五彩ある間色あり騎馬武者ハ後陣が従ひ歩兵走卒ハ先隊がまゆろ二十四挿
なる白羽の征箭握太る重藤の弓ぞの旦晴とそ打扮る旌旗ハ山風が番飜て自然鳥の群飛
像く刀鎗ハ朝日が晃耳て玉の柳の糸がも似ぞり近村の良賤街頭が聚合て觀者路を去ぬ金或
跪坐て拜むもあり當家の武德を稱讃ある聲耳品々と竹えけり是より先が瀧田稲村の西城内が
蜜崎照文甘屋景能着到て大江親兵衛が武功の顛末素藤立地が虜がせられて從類降
伏ある。ぞ。ぞ。義通君ハ優が陣営が還りの事賊徒を刑罰の議が就て國主仁政の趣
まで詳が考へ給ふ瀧田の老侯の族ぶ稲村が在る義通の母君ぞ首として女兄の御達も次九も
諸臣妻母們女房まで天が歎ぶ地が喜ぶ。俱が歸城を待まる。准備が暇ありけりその時義通君

傳ふる小森衛門浦安兵馬近習田税力助们に曩ふ義通の伴ふ立て上總る殿臺ふ赴き折
那諏訪の社頭を憶ぶ兄黨ふ數まれる銃瘡絹愈ーらびその折の士卒數十名と倶ふ迎ふ
出るが義成父子館山を立去りぬ。次の日ふ上總と安房の界る市之坂の頭を君侯父子ふ
見参して義通君の馬の前後ふ従ふと許されけり。佶りけれど義成主ふ稲村へいそぐを降
人千代丸豊俊と上甘理弘世们と要ふ士卒雑兵をも過半稲村へ遣ー義通と共伯ふ瀧
田の城へ赴いて先老侯ふ見参ふる。今番の鈌びを稟ー必ず義實主喜悦大々ふ老大江親兵
衛が富山の挿丸及館山を素藤们を威服ふ功ー大功を照文が注進を吟ずる隨ふ出て義通の
武運愛ふを祝して笑扇ふ入りぬ。義成主いその言の漏るを又云と詳ふ解稟ーぬ。今番は
勝利の外ふ老呂是大人の御盛德と女兄の灵丸神助ふよりて亘を起ーいたそ傍を云ふぬ。
義通も亦膝を找めて大父の君ふ身の幸ありけ。鈌びまん計ふ是より席を改めて祝壽の酒宴
あり。あの折義實主ふ貞行辰相高宗友勝们を召ぶ其の軍功を優賞ふ東西を賜ふ

と差あり。又小森衛門篤宗浦安兵馬無勝田税力助逆友も倶ふ老侯ふ見参して病後の礼を
稟ーけり。既ふして酒宴初献の折義成主及義通君も名刀各一口と夷灘の土宜種々を老侯ふ献り
ぬ。義實手ふ這所ふ牽出物をまゐ。せぬ其馬三頭い蛮崎照文鮸船貝六郎奉り庭上ふ牽ぬ
出て貞行篤宗ふ遞與ーけり。徒而伶人参聚して祝言の猿樂あり。その折妙真と音音们と裏ふ單節
も見子と共ふ今日老侯の召さぬ。既ふまゐ。ぬと。ぬ。義成主い妙真と音音们五名を召ぶ。先妙
真ふ今番大江親兵衛が館山を武勇の挿丸奇特の大功ありーと云云とは知ーて汝いざを一日も早く
見まくほり思ふが他が館山ふ在ぶれ。ふ心のと云ふ。因て那里の城主ふ做ーて。いと静謐ふ治ぬ遠か
らぬ召寄ーて對面さぬと思ふ。その意を伝よと尉ふ白銀并ふ卷絹と綿さへ多く賜ふ。妙真を感涙の袂
むを覚ぬ頭を抬て君と神とのお庇を孫を伝る親兵衛が心術さへ身長さへ六稔の程ふ最大ら世ふ人
も勝れる不測の功を人倫ふ侍りーとり欽ーちふ胸い洗れて宿も睡られ別れ後の哀ーかりーも高ー。その
身の幸い辭言を取ふ物ふ伝ぶ。ぬとてもかくても今世で逢かぬ。うんと思ふ。稚枝の春ふ老樹を咲ふ憑ーぬを

命ふ侍り。非除一年三ヶ月相見ぎとも胸安り。氣長く折を待ちん。世ふ有るに御諚の上ふ。ちん東西又く賜はる御恩ふ御恩を累られてのく。冥加ふ餘り侍り。と辭ぶを稟して退る程ふ義成主ハ音音と曳て単節カ二戸八仙を身邊近く召よせて六稔富山ふ親兵衛を守傅に。奇特の功及與四郎ぞ南弥宅を捕捕る當日の掙を。且親兵衛ふ従ひて館山へ赴く折。駿馬ふ後れを走り事他も權且館山の城内ふ留置て。このよりと叮寧ふ。ゆえ知らしてその功を褒させ。這五名ふも白銀と巻絹とを。人別ヨリ。と取りあつめ。音音いはく。曳ふ単節も感涙坐ふ吐て答なく。ん所を知ぞ侍る。御恩も道節ぞ。ふ舊縁ありける餘慶ぞ。併伏姫神の冥助ふ。そと更ふ又稱稟ふ。福草の幸ある世とそ存命。身の賤ぞを忘るきぶ惶るも。歎ぶ。ぞ。妙真と俱ふ罪能出んとせ。と義成主留めさせ。好折ふ。汝ぞ。妙真も共侶ふ女房の勾欄ふ。まりて能樂を。拝見せよ。老侯の召させ。ぬ。ぞ。樂あるべいそぐ。とうと宣へ。大家亦復歎ぶを稟して。躰てその役人ふ。拔れて勾欄へまり。ぞ。恁而能樂始り。と。義成主ハ義通君と。俱ふその席ふ。出あへ。義實主ハ。ふ。其里ふ在て。待せる。ふ。滝田の

諸臣稲村殿の伴當も。許されて。親る者ヨリ。然ぞ。伶人ハ秘曲を盡て。傳樂の袂を翻を堪能の吹鼓五番ふ。して果しかぬ。妙真音音ハ。暇をあらて。曳る単節即と共侶ふ。力二戸八を推乃て。宿所へ退りけ。恁ても。御食饌竭ぶれば。義成主ハ。御曹司と共ふ當城ふ止宿あり。その甲夜の間ふ。義成主ハ。賞四剖の可否を。老侯ふ。問まつれ。ふ。言の叙ふ。上甘理墨ぞ介弘世の事を。ら。出て。有つ。侯ふ報ぬ。ハ義實主點頭のみて。神餘ハ當國の舊家。ぞ。子孫ふ疑ひ。ら。宜く扶持。ぬ。ぞ。況廢人。ん。ハ。憐む。ぞ。の。又天津九三四郎ハ。件の弘世ふ孝順。既ふ孤忠の。ぞ。あれ。他も亦罪を。饒して。弘世ふ隷る。と。仁。とぶ。又那満呂復五郎安西出来介と。喚。做ぞ者も。真實歸降の心。ぶ。饒して。祀を。継。ぬ。雖ふ報ふ。徳。まりて。ぞ。ふ聖教ふ。稱ぶ。せん。又。荒磯南弥六。ぞ。昔年當國の。侠者。ぞ。犬江親兵衛ぞ。曾祖。ける。杣木樸平と共侶ふ謬て。神餘光弘。と。犯て。刑戮せ。れる。洲崎幸垢三ぞ。外孫。と。ハ。ぞ。志。氣。ある。者。と。ぞ。れ。他。ハ。も。赦免。ぞ。ほ。れ。近日件の罪人ハ。ぞ。稲村。遣。ぞ。ハ。有。ふ。命。ぞ。虚。と。實。を。左。も。右。も。糾。極。ぞ。て。饒。ぞ。べ。ふ。饒。ぞ。の。課。ぞ。ふ。優。ぞ。り。も。あ。ん。ぞ。ら。是。老。ぞ。願。ふ。ぞ。と。叮寧ふ。宣へハ義成主諾て。仰。兼。り。ハ。ふ。他。ハ。ぞ。罪。戻。ハ。他。事。ふ

らを縦舊家の氏族ゆもれ這房総の民をて大人を犯しなんと欲せ者でいへ実ゆ歸降を願ふも必是
極刑ゆ處せ元の勿論なる然はまゆ憐愍思召を御仁心を尹何いせん再問て言実なるゆ仰ゆ恃りのみと答
ゆへ義實主の像快く黙頭てそる憑心ゆ元のみ當家の先祖義家朝臣の降人安陪宗任を饒て身親く使
まゆ宗任遂ゆ復讎の害心を轉て良臣とるゆ例あり今の満呂安西の宗任ゆて及べゆ人として再生の
恩を思ゆめゆ親兵衛が請禀て那首惡なる素藤を死罪を饒されと乞ゆ餘い物の數
ゆもあ者必よ我所以ゆ苛くるのゆ仁と正貴ゆ慰ゆる雨談數刻ゆ及びるその詰朝義成主の義通御
曹司と共倡ゆ龍田の城を辞去て稲村とて還るゆ伴立昨昃弥優て貞幼辰相以下の士卒を前後左右ゆ
従へる馬の足捷も緩ゆ吹ゆ長の春の日の天く晴て戦吹く風偃草野も山も君が威德の潤りく高
例ゆ仰ぐ今を盛の花の雲西も東も遲々と路傍ゆ陽炎の五百餘るる人馬の装も愛くも亦勇ゆ
這里ゆ觀る者ヨイヤリけり。話分両頭。介程ゆ蓋田素藤い辛くも死刑を饒されて東辰相が隊の雑兵们ゆ
水行より舟里を武蔵のくゆ送り遣れ。次の日は木牌の時候ゆその船い墨田河る西岸ゆ泊りゆ陸ゆ登り

追放ちて雑兵们い又船を漕て安房へ還りけり。登時蓋田素藤い獨岸邊ゆ鵠立て前面遥ゆ看耳ゆ
彼首い舊るる名處を昔在五中将の卒事向を咏くゆ都鳥ゆやゆ〜んぞ〜ん喙と脚の朱ゆ浅
瀬ゆ立て求食るる西況梅若塚の楊柳の枝い長く輪回を今もゆ垂常の風ゆ靡くゆ紫ゆ筑波峯い遠く夕
霞段天引て緑るる牛嶋い近く角組む蒹葭も伸り袷と云恰とゆ情景面ゆ〜畫ゆて趣るゆ似れども汨
羅ゆ呻唫ゆ屈原ゆ〜れば沈んとゆるゆ命惜けく還んと乞ゆ家いゆ〜ば背ゆ受る笞瘡ゆ衣の障れゆ疼ゆ
額ゆ十文字の黙を せれゆ誰も罪人ゆを知べ那里ゆ歌店を求ん狭い思い難く長く汀渚を徘徊ゆ時も
穏りて下晡よりゆけり。登時素藤い肚裏ゆ又思ゆ〜ゆ盃ゆ足を疲労て東西欲ゆ〜るゆ這頭い都く
水原ゆて里人の家ゆ〜ければ況酒沽る又六ゆ〜ゆ夢ゆも見ゆ〜るべ願ハ盃作を首とて我兵無い分れく
那里へゆ追放されんを乞も逢ゆ恁る折商量敵ゆ〜ゆ〜ゆ思ゆ〜ゆて乞ゆ盃ゆ〜る我ゆ〜速ゆ定難ゆ身の往
へ方を果敢ゆけれ見れば那里の水草ゆ中ゆ艘ゆ舟一艘あり今宵い且那舟ゆ曉て終夜好主意を絞り出て左
も右もせ是ゆ外ゆ術ゆと母思を考く遽く舟の邊ゆ赴く程ゆ折ゆ盈潮へければ舟い這方の岸ゆ寄り

文溪堂蔵

文溪堂蔵

なり。躰て因りとうち乗て見れば故る菅蓑あり。あるを究竟の金衣見ふを。極含て安く引起せば下ふ一箇の割籠あり。含ふ楊て試るふ重ろるを訝りるぐ開ひて見れば飯と味噌あり。天の賜慚愧。とうち戴ぎ箸を索て立地ふ啖ひ盡せば海月の骨ふあふ心地して然なり。方馮ふけるふ昨夜ふ里見の雑兵ふ。うち守れる船ふ揺られて目睡もせで来ふければ今宵ふても枕ふ就て疲労を醫て氣を養ふて明日の便宜を索ぬ。世話ふも果報ふ寝て待るとふ。とあふ。獨語て臥て被く蓑蟲の鬼の子ふて山賊の親ふ稟なる似而非胆勇浮宿の鳥ふ身を做て今宵も舟ふ波枕所寓の岸ふ定めど。住めば住む世の墨田河心だるの濁江ふ影ふ宿る。ふ甲夜間の黒白ふ知る。ふ高鼾躰て熟睡をもうける素より疲労れ。癖ふれば素藤ふ宿轉もせ。幾時欠睡りけん。鳥の聲を喚覚されて忽然と眼を開けば。ふ。ふ什麼那河邊ふ繋ふる舟を宿と考るふ似るもあらじ。ふれば松柏の故ふる。枝を交へ日光を掩て頭の上ふ差出されいうち驚ふく遽て身を起て四下を。ふ有つる舟ふ迹ふあふく。這頭ふ正ふ山中を。深林奇巌ふ外ふ物ふく孤鬼栖を得て浮世ふ遠く幽冥ふ近り。ふとくと思ひ難て而ふを又ふ慚然と。嵯立て半晌許ふ思へ

ども半を牽て拳を下る。牧童ふも。ふ。疎ふを。馳ふて。ふを。椎夫ふも。逢ふ。ふ。宇津山ふく。業平ふて。夢ふ現ふ現ふも。夢ふも。人ふ逢ぬ。ふ。ふ。却ふ。ふ。ふれば覚東ふも。辿ふて人煙を索ふを程ふ。ふれば前面ふ公井陰ふ最も大ふる蓋松を。ふ。含て。締構る草莽あり。竹ふ柱茅ふ檐側曲を隨ふ伐ふ。ふ。削ふ。人跡絶る。這太山ふも。住ふ。住む人ふ。ありけるとふ。思へ。有。繋ふ。憑ふ。て。葛ふ。攜ふ。ふ。ふ。辛ふ。て。那里ふ。迫ふ。柴垣締。遠ふ。て。東面ふ。両折ふ。半分。斜ふ。開ふ。ふ。找ふ。入ふ。て。喚ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。女子ふ。聲ふ。這里ふ。浮世ふ。外ふ。れば。人ふ。訪ふ。て。ふ。ふ。ふ。ふ。誰ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

と思へ教へを勝ねども。るゝ疑ひの解ずれば左右なく安屋へうちも登るぞ。且妙椿の為体と左右なく
又よく相面ふ尚未時可る白綸子の小袖の帽額取長を被て黒繻子の廣い五六寸る帯を前ゑ覓ふ結式
たり。始て見るり一面影より年十あまり少きるる風を感け圓頂の毛二分欲三分欲延れば天竺鳥城の似く
黒き髪る富士額際立て化粧ぬ美目の眼差ふ愛敬つるも奇異ると權者ると怪まざりける素藤ぐ
先の者る尼姑の邑長ふ苟且別れ後へ信もなく我那大江親兵衛ふ生拘れて寄隊の陣へ牽れと知ざる欲ば自妙
術のあり為ぐ始ふ似ぎかの折ふ故ざりれ其麼ぞ憑甲斐ぞ人心益ぐ死と恐ぎれ妙椿さまと領ぐ情
由ると知る知る凡夫の臆断如右思ふい理りるれども一朝ふ氏繻かざり先這方と慰ぐ質の水を洗足盥移と
脚を濯と卒と母屋へ請登ぎれ素藤い地炕の邊ふ坐を占て四下を眺ふ暮い都て三間ふ七納戸
あり庵洞ふ坐席の正面ふ六字の名號の巻幅を掲げ御前の机案ふ香爐あり両個の竹の花筒ふ天山茶
と山櫻の半開ぐる最も許まく活るぐ六字の名號と南無阿弥陀仏と寫れいるぐ思ふ義を
問んぬ故意文字を異ふ為ると竟ふ悟ぐ已ぬけり。小程ふ

妙椿い地炕ふ柴を折焼て先素藤ふ茶を薦め且早飯を羞める管待る閑るぐ時りけれ素藤純ふ
心あるて又妙椿ふ云云と為ると比義通を俘囚ふ為る始より國守と鬪戰の為体且大江親兵衛の武勇ふ城
兵敵ぐ為ぐ謀り一事の画餅ふ做りて林を逐れ山の群猿ふ喪れ路の雛猫ふ似る艱苦と云云と告
るを妙椿宮あぐ開ふ宣ふる始より咱俤い天眼通なりて一事も漏さず皆知りぬ曉得ぬぐ喪ふ
舘山の城内より諏訪の社頭の巨樹の梢まで遠く地道を穿ち死と見えるも咱行術を城の士卒の那里迄
るを凡夫の眼ふ見せざるぐ為の故ふ梢の内ふ在りと見える地道の出口い後ふ迹を絶なりを壁世ふい仙術ふ
須弥を縮めて芥子粟の内ふ容るも皆這理りると思ぐ凡鈍ぐ為ぐ然ば咱俤い別れて後も月來ふ
身の影ふ立形ふ添て幾回と為く助けるのヨリ一ふ那大江とふ神童ふ孝烈儔ぐ為ぐ伏姫の
神霊ぐ間為く時ふ守れるふ剰那奴ぐ未生より感得の霊玉あり鳴蒙啓聿判れ折天地と共ふ生出る
天津八尺の勾瓊ぐ一ぐ役小角ぐ刻做て最多角數珠ふ作ぐ一ぐ其ふ數識の八箇の大玉ふ仁義礼智
忠信孝悌の八字を分ぐ一ぐ其の一字玉毎ふ有る者ぐ就中大江ぐ持るい德を天地と共ふ生ぐ仁字の

玉を焼て火にも焼れず水にも溺れず威勢鬼神を駈使ぶ千軍萬馬も常りかたきあの故に身はたゞ城門の士卒千百數名那奴一個に威服されて何容もなく降を請ひし素より是人力を敵にかたぶかんとて咱倆も亦あの手束秘蔵の明玉を奪ひわれら那奴ども感得の玉実及ぶべきもあらば勝を攬ることかけべいかの折に身們を助けるなれば救ぶりしかるに比丘尼は異なるかとて不足なせしかるに又何ぞ異なるべきとて吻々とうち笑べ素藤も堪難て腹を抱て笑ひ妙椿禁ぜ且所の折に身を覩面に助けぶ救ぶりしかるに身と俱に寄る士卒の命を其里に執留めは咱倆ぶ擁護ぎるに那親兵衛の勇士なれども未生よりして仁字の玉を感得ぎるとて殺生を旨とせぬ物を憐む心深く又義成も仁義を倡て屋裏戻の君に対ぎれば誅ぶべくは身們を殺さで追も放せは他們ぶ主意のまゝ那守護神の隙を窺ひその心緒を狂はし思ふ処へ援よせる咱法術の所以ぞかし然ば昨日墨田河辺西の岸なる艘に舟も又蓑と割笠の飯も皆是咱倆の方便ぞ身の熟睡ぎる折舟を這山に遠く浦漕ぎ漕戻て悄地に身を領て寄て喚も覚ぎ樹下に戻臥ぎを置て

なる人と同列なる思ひなしとぞ君めて一五一十と鮮諭せば素藤が聞く毎に意表に出ることなれば始て夢の覚ぎたるが如く且感ト且羞て亦いかにも驚ぎ憶ぎも太息を吻て現不可思議なる女菩薩の妙術恐るべきかな那大江奴を猛勝のまゝ空ぎ去といふと思ふ我身士卒と俱に飢ぎを稠に迫るも亦怪むべき足ぎかな抑這里は孰国ぞ女菩薩は亦幾の時候より這頭に某を締ぶる数ひいるが如くとも我と邦助る術あるに願ふは為に會稽の恥を雪ぎ欲得いらでくと請求れば妙椿然ぞと慰めて心弱しや徒ぶ我が胸を腐らぎ玉狭咱倆身を資人と思ひぞいかで遥々這里へ誘引ぶ這地は則上総る羽賀館山の間人不入と喚做る殺生禁断斧斤不入の故にもあれば徒ぶぞ人迹絶る太山に住り然ば昔より這山ぞ禽獸猛る事いはゞ樵夫造炭翁草刈る童も入れば必山神の出崇あり生還るは稀とのみて徒へ犯ぎ者ぞ旅客も亦憚りて外を過りて這峯上をうち踰てもくとて通ぶれば浮世を潜ぶ隠ぎ者ぞ然に優る地方は結ぶらも因て咱倆は身の興に擇て某を締びう志願成就の折を待べ遠近に散在ある士卒は招ぶ裏んぬも亦咱倆の法術に在り事の成るまで這里に在れ然ぞ光陰を過さんや遠くぞ那城をとり復ぎ

べう思へども犬江奴が錦山をあくん渥りハ不便と那奴と主を疑ひて遠く他郷へ走り去るを唖と那城を
畧んの極めて易り。その法術ハ徒々と箇様々々と秘密の魂胆思ひの隨に解示ず素藤満面ちち笑
れて。うち頷ぎつゝ心ゝ奇也々々と嘆唱ゝ遽く席を避て妙椿と伏拜て。女菩薩我身の一大事ハ
既に身の方すを在り只方便を儘るの三寸等閑ふ三の恩と。馬心むと妙椿ゆ。あ。開い寛る世間ふ縁
衆生ハ度しかゝ況身ハ知己るふ漏れ。も然だりの力を盡さ已べ。と慰めつゝ合掌て扶起
て又上坐ふ復しと。ハ果て。夜閑談ふ時を移しけり。是より素藤ハ養れて這茅ふ在り人迹絶
な太山れど主の女僧が幻術ゆ東西のとまく貯れば野味魚肉さへ医しく。喫めども竭酒さへ
れハ毎日々々ふ管待されて長ち春の日も徒然ゝ。且妙椿ハ世人ゆ八百歳とふ。ハ見ハ四十許
ゝしふ歳の程ふ少ち。て誰ふ。せても二十ゆ。ま。ゝ。と思ふ。面影の艶ゝしふ男女席を俱ふ。
夜も亦臥房を異ふ。ま。主と客と三人の三ゝ。日も暮ても本無。続られ外ふ所為もゝ。然ハ世の正常言ふ酒ハ必
是色の媒妁ふ。宜る素藤ハ早晩ふ妙椿と伸親とて或ハ巫山の雲と做り或ハ林泉の雨と成て

俱ふ臭骸を抱ゝ。より妙椿ふ亦頭を剃ぎ折々臭ふ無ゝ。調戯ゝ。と。ゝ。外憚ふ関ゝ。れハ
樂ミ。ゝと思ふ。ゝ宿望胸ふ絶ぎれ。ゝ。れハ。ゝ。て那法術を使ふ程ふ既ふ。て春深ゝ。月十日ゆ
ふ。ゝ。ふ。ゝ。ゝ。ゝ

濱路姫の病牀ゑ侍女等物怪を見て駭怕ゑ

果敢々々敷たらべども形痩色蒼て病苦ふ堪ざる見えさせ給へ給事の女房ども日夜枕方後方ふ侍りて
看病まゐらせどもかの今然ば如父義成主うち驚せおどろ
禊して病鬼を鎮んと欲りしかども或ハ鬼病をとゝ或ハ物怪をとゝ其ハ勘文ハ相似れども
又ハ母君吾嬬前の沙汰として當國養老寺の境内なる洲崎明神及その寺の山脚なる役行者の石
嵐代参の女房を遣して濱路姫の病者平安の願文をまゐらせ又富山なる伏姫の墳墓并ふ峯の
観音堂ハ侍品を使者として真助を祈らしめけり徒らに程ふ役行者の石嵐ふ参らせる女房ども
るさふ異人とおぼゆる一個の老翁髭髯の真白なる眉ふ八字の霜を置る童顔仙骨凡そ身ふ麁衣の
浄衣を被てる錫杖を衝鳴らし最も高き足駝を穿て路傍ふ佯立在り女房ども伴當を倶して轎子を
吊らし心ともなく近着来るを件の異人咽ふて喃和女郎ども稲村より洲崎へ代参ふ立れて下向ふ
あんぞ今番濱路姫の病悩い寔ふ所以ありとて鍼灸茅餌を畫夜とも文神佛ふ禱るとも輒く
癒りぬ那物怪ハ姫の甲斐國ふ在せし折養家の継母とゝ称る淫婦夏曳耶是なり件の

夏曳ハ密夫と謀て良人を殺さんとする極悪の罪發覚れて當時刑戮せられ這罪障ふ身浮む瀬あらず
魂魄今も中流ふ在りあるふ姫い故郷ふ還りて胞姉妹達と共倡ふ富岳自在なる深窟ふ下ふ養れぬ
夏曳ハ元を醋く愚て身の惡報を知らざるふ姫をのゝ怨ること甚深く開と欲ぬ
大江親兵衛を館山ふ召よせて他ふ所持する仁字の玉を借りて姫上の臥ふ笙置すめ下ふ深く塞め且親
兵衛ふ姫の病床をうち衛らしめ怨霊立地ふ退散して後々まで障りなく病悩速ふ平ぐて百年壽考
保ちぬん御達稲村かの婆ハ是なのうと上様ふも守へ奥ふ侍りて倘疑て惑ひを執らば後悔其
里ふ達らさるうち狭と尊ふ言ふして応を等を洲崎のゝ名く狭と思へ忽地大きなる狐ふ化り徒ら
奇特ふ女房ども誰ふ驚ふ畏まざるを是必役行者の示現ふて感涙の袂を覚ふ伏拝を當晩稲
村の城へ還ると躰て先ん母君吾嬬前ふ件の奇異の趣を詳ふ稟まゐらせ吾嬬前驚ふ堪て信仰
の心浅らぬ打も図ふ濱路姫も徒らと件のように告さて國王ふ申ふ上げ義成主眉を顰
めて昔年我兄の仰ふ一時日夜ふ泣てのゝしりしかば母刀自ん胸安ふ成ぬを病痾の所為ふんを悄

悄地ゑ洲崎明神へ詣させまゐらするものかさのあるを途ゑ異人の示教あり是則洲崎の洞窟ゑ役行者化現ゑ吉凶禍福後々まで見れーよりゑ違ざりをと信ずるなーもあれば這回の異人も那行者の示現ゑ〻ト

とい誣ゑ宥り乳ども婦女子のふるゑ平氏照據あるぎふ教ゑられて親兵衛を徴て濱路の看病ゑ

課せい何とやらん識者の議論も影護ゑ乳再三思惟てそ左も右もせん權見せるぬねと禁

めたりそぶるひび五嬬前の本意乳と一霎時の默止ゑ那寃鬼ゑ夜毎々々ゑ立顯ゑ上始ゑ倍て姫の

病着重ゑ母ゑ君ゑ堪ゑ〻て快親兵衛を召さゑ〻と守ゑ請ーゑ両三番ゑ及び佯浩

処ゑ瀧田ゑ濱路姫の安危を問ゑ老侯の使者として蜑崎十郎照文が朝鮮人參十莖と生

乾の王殘魚一箱と齎て稲村の城へ來ゑれば義成主對面して其恩貺を拜して両種を濱路姫の

病牀へ遣ー然而照文ゑ老侯の恙乳を弊び竹乳ゑ語次ゑ件の異人の教ーとゑる怪々と言ゑーて

毛先蹤ありとゑ〻ども畢竟女子の告訴乳ば我半信半疑ーて一旦二旦と過ぜーゑらくと思惟るゑ異人の

直実ゑ左ゑ乳右ゑ乳良將勇士の妖怪と鎮ゑる例ゑまり就中昔堀河院物怪ゑ厭鬼れゑ〻玉

體安ゑ〻ざーー析義家朝臣ゑ詔ーて寢殿を衛ゑ〻ゑ義家朝臣奉ゑ徴衣束の下ゑ身甲ーて弓箭を

携乳てその甲夜ゑ〻ん枕方ゑ近ゑ乳ゑり既ゑ御悩の折ゑ莅て義家大音ゑ喝ゑ〻ゑ鎮守府將軍

前陸奥守源義家救詔ゑ〻ゑ這里ゑ在り何ゑ〻ゑ天魔地妖ゑ〻も立地ゑ退散せよと宣取も緊く

吸ゑけく弓弦を三度鳴ゑーゑ〻ゑ聲殿上ゑ響亘て聽者も骨も竦立まで怪ゑ取凄ーかりけゑ〻ゑ足ゑり物

怪消滅ーて御悩癒ーせゑ〻ゑ〻ゑ這事載て舊記ゑ在り偖れば今番親兵衛を館山ゑり召来ーて

姫の病牀を衛ゑ〻ゑ〻ゑ其效ゑーとまゑ〻ゑ思ゑ誰何と宣ゑ〻ゑ照文兼ゑて異説ゑ及び御諚ゑ理

ゑ〻ゑそれ況異人の示現ゑ〻ゑ君ゑも知せゑ〻ゑ〻ゑ親兵衛ゑ徴て濱路の看病ゑ

徴せ奇特ゑり然ば親兵衛ゑ身單ゑ千百ゑ餘ゑる大敵を一時ゑ降伏せゑる武功の神童ゑれば人

ーまゑ年歳のヨゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ且大い物怪の怕ゑ〻ゑ因ゑる大江ゑ妖怪ゑれ然ゑ〻ゑ〻ゑ

ゑ〻ゑ憚ゑ〻ゑ〻ゑ〻ゑ速ゑ召ゑせゑ御病牀守護の義を仰付られ乳ゑ〻ゑ〻と薦め稟せば義成主ゑ然也々々

と點頭ゑ〻ゑ〻ゑ〻

ろ沼てよと仰せれば照文い言葉もいそぐ罷出ゐけり。介程ゐ義成主い猛可ゐ四家老杉倉堀内東・荒川と召集へ件のよりと談さぞのふゐ皆ゐ応べと凛ゐ〻隨即大江親兵衛を當城ゐ召寄せ〻と苔屋八郎景能ゐ御教書を持て加番として倶ゐ舘山の城へ遣せば雑兵三百名を授けるゐ親兵衛ら在らざる程い守禦の士卒を増せば為て且梶雪與四郎も親兵衛と倶ゐかへのまれ老人のゐ〻れば姑且瀧田へ遣て休息の暇を賜ゐべーとてゐ美も御教書ゐ載られる。寔ゐ火速のあ使へければ景能〻雑兵們の揃ゐ〻ら等も馬ゐ乗て一騎舘山を投く走らけゐ。今朝辰牌ゐ稲村の城を出てゐの日未の初刻ゐ那里着到してければ親兵衛い逸時良千與四郎と倶ゐ諜使を迎へて御教書を賜ゐ命を拝〻く景能を管待せ程ゐ景能い濱路姫の病着危殆の事の趣夏曳ゐ怨ヨ火障事のよりを箇様々々と告知せれば大家ひとく駭嘆〻く安〻ぬゐ思ひけり畢竟親兵衛ゐ與四郎と倶ゐ稲村の城へまゐ〻く後の話説甚麽ぞや并ゐ次の巻ゐ解分るを聴れかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之九終

南總里見八犬傳第九輯巻之十

東都　曲亭主人編次

第百十回　反間の術妙椿犬江を遠さく　妖書の難仁妙真ゐ辭別せ

却説犬江親兵衛い濱路姫の鬼病のよりを聞〻より毫も礙説せ隨即守城の勤番を自餘の三士逸時良千景能ゐ儘〻く遽〻く身装して立先んせ折ゐ梶雪與四郎ゐ悄語く知らるべく稲村より恁猛ゐ召させ〻べ我い青海波ゐ乗走らせ〻く那里へ参るべ。翁い然あらる御用ゐわ〻れば寛ゐ出て来べね因て憑むべ〻ゐ〻れ我身富山と中より憶ぞ統袴ゐ暇るけれ。ゐ〻大母妙真ゐ對面せば今番稲城へ参りてゐぞ侭留置れん狭是も亦知るべ〻ゐ〻ら兎ゐ更ゐ又笑も不樂く思られん我豫寫措ゐる消息一通茲ゐ在り翁瀧田へ退る時這消息を大母ゐ見せよと告て尉ゐめ〻ゐ目今火急の君命を稟て言私ゐ及び學ゐ忠臣の本意ゐ

あるねども。尚人並ふ俸禄を定めて賜る身のあるねば。徒ぞりの事ハ許されもせず。名所ふ閑居あるあひ
だ。そとあるるさつ。消息を含ませて遽與ふまた與四郎をを受收めていろ〳〵趣あるゆゑ。先度の
夜約と同じがらねば在下ハ和君の馬ふ附て走るも益なきゆゑ。在下ハ歩行ふ暮
ふ路を歇店ふ就て明日稲村へ参りていめ快々ふさせのひとりふ親兵衛再説ふ及ぶ既ふて
逸時良千景能仁ふ別を告て伴當どいそぐせど。皆晩雪ふ従ふて。徐ふ来よと分付て単青
海波ふ乗り。館山の城を望む程ふ来の五刻ふ成ぬ。親兵衛ハ十數里の路程を繞ふ
時許ふ騎走らて。酉の五刻の左側ふ。ほく稲村の城ふ来ふけれハ。躍て本番の甲乙ふ就て任ぜ
えあれば。かの義成主の。着到の神速なるを。舉ぎ。遠侍を夜飯を賜り。馬を厩役人ふ預け
とて。這宵親兵衛を身邊近く召よせ。對面ある。然而宜ふ。海館山ふ在城しとうそ。その地ふ
無兵なるゆ。既ふ。その時ふ。孫ハ思ふ所。今番猛可ふ召来ふ。所要の義ハ使を兼て加来ふ。
遣ふ。ふ屋ハ郎ふ。柳濱路姫が病ハ有ハ物怪の出ふ。ふ驗者の祈禱。

今ふ。その效驗を見ぬ。汝ハ武勇世ふ比類なく且那仁字の霊玉を感得あるよう。文あれば件の物怪を
鎮ん事。汝ふ。あるのあるべくと。人もふ我も思ふ。望ふ。ふ所ふ。今宵より。濱路が臥
房ふ宿直て。試よ。勿論汝。ふ。見ぬ。十六七の後生。ふ。実ハ九歳の童。ふ。然ハ奥ふた
ふ。閨門ふ通夜て。看病の婦女輩と。兵侶ふ。待。ふ。忌嫌ふ。ふ。ふ。人の識詞。ふ。什
麼ふ。ふ。ふ。

据ゑふゑゐねが半信半疑決断ゑゑ。氣ども御館山の兇黨が海の玉の光ゐ撲れて。轉倒氣絶
ゑゑりと呼けがその所以をーとのふべゐ。汝濱路が枕方ゐ近つくゑを欲せば。權且玉を我ゐ貸れ貴
子の下ゐ埋措て。その效をも亦試て。然がて件の玉中ゐ久く埋措んとゐゐ。那物怪の對治せら
まて。濱路が病着癒り氣。含出さて返せべ。這一椿事ハ我意ゐ。婦女毎の云云と願へが
とても大人氣をーと思ゑゐゐ。談ゑゐを苟且ゑゑ。霊玉と玉中ゐ埋措れゐゐの數ーゐ借りをも
あゑゑん。然ゑが坐席を擇ゑ。縱濱路が枕方へとも便宜ゐ儘ーて。宿直をせをゑ。とゐれて親兵衛阿
とゑりゐ答難く沈吟ゐ。肚裏ゐ思ゐゑゑ。霊玉ハ我身と俱ゐ。親の胎内ゐ在り。一日より。自
然と得ゑ宝貝。牡鹿の角の束の間も。人ゐ貸をゑ。ゑゐゑ。優をゑ。ゑゐゑ。
枕方ゐ宿直ーて。外様の識詰を受ん。ゑ。
如く這霊玉ハ生れ日より片時も身を放ゑ。ゑゐゑ。
思ゑ。献ゑゐも惜ーゐ。況一霊時の御用ゐ。姫上

文溪堂主藏

推ゑ。護身嚢を開ゑ。玉を含出て懷紙ゐ載て恭ーくまわゑ。義成をゑ受ゑ。後方ゐ
待り。近習ども燈燭を秉て。件の玉を左さま右さま。一霊時見て。ゑゐゐ勝れる奇妙ゐ美玉果ーて
自然と仁字ゐ。奇世々々と。嘆賞ゑゐ。鼻紙壹ゑゐ。香匣ゐ。壮衣。彼ゐ。壹ゑ。登ーて。奥隷の兇黨黒
某申を。遽ーく召よ。ゑて。玉を埋る事由を。解ゐーて。宜ゑゐ。這個玉を。香匣と。共ゐ。一箇の壺ゐ。
又その壺を。瓶ゐ。藏めて。濱路姫の臥簀の下ゐ。土中を。穿ること。三尺許。今宵速ゐ。埋させよ。世ゐ
両人固と。沼ゐ。ゑ。奇貨ゑゐが。ゑゐ。閑ゐーて。砕くべゐ。その事。敵果るまで。濱路が病牀を。外へ移ーて
埋る。折ゐ。我ゐ。報よ。我ゐ。ゑゐ。見ん。秋垂ゑゐ。者。ゑゐ。ゑゐ。
ゑゐ。奥隷の兇黨。ゑゐ。果て。退ゐ。登時義成。玉。又親兵衛ゐ。宜ゑ。目。今。沒ゐ。ゑゐ。玉を。玉
中へ埋る。折ハ。我ゐ。ゑゐ。指揮。ゑゐ。然ゐ。心。ゑゐ。
よ事。敕正ゐ。濱路が臥房の邊へ。案内。ゑゐ。權且遠侍ゐ。退ゐ。長途の疲労を。休ら。
衛ハ。敬。ゑ。禀。ゑ。遠侍。退ゐ。程。義成の夫人。吾嬬前ハ。今宵。大江親兵衛が。一騎館

山の城より来る事及守の所望ふ儘して那霊玉を貸まゐらせ郷ふ異人の教しどく埋措るべきなり、
見ふ信ぜあひてその旅び大々ならざ躰して専婦使をもて親兵衛の果子を賜り又美酒と餚數種賜
て疲労と尉ぬる程ふ夜い丑三の時候ふ至りけり浩然ふ甲夜ふ霊玉と預けられる奥隷の老嫗出て
来り親兵衛ふ対して大江生ざ徒然ふ臥ん鰥生が奉りる霊玉い埋果ち館のあんばらをか
きて亦ち一方けれい心安く思ひ給へ因て五の君既ふ前集ふ出す。のあん臥草と故のごとふ倣ひ夕今宵
より親兵衛ふ宿直を仕へ奉れとある御詔を卒ぬ案内をせんとふ親兵衛異議もなく開い美り
い後ふ老嫗が答へ共に共伯ふ濱路姫の病の狀の次の間ふ来ふけれい給事の老女出迎て
こゝに今番の夜務を勇ひ給ふ当下親兵衛い濱路姫の病悩軽重及物怪の障の有無と云云と尋
れい老女答て姫上い黄昏時候ふ魔鬼れさ悩のあり給ん身の館山より来ふ寄て後い
さ然るゆゑ口今睡らせぬと答る間ふ看病ふ通夜と侍婢共ふ幾名欲親兵衛を物の
隙より偷看ふ効ず其年三十可ある程ふ短夜ふ親兵衛ふ対面あけり左右ある程ふ短夜ふ

窓の隙より亮耳りて庭ふ雀の聲を時候親兵衛い暇を賜りて又奥隷の某甲ふ引れて罷出ぶ
館の内ある編子舎ふて休息所と定ゆれ這里ふ早飯をたべるべき豫臥草ふ備てあり書ふ勤務
もあれい身ふい權且睡臥ゆゑと給仕児们の薦るまゝ臥て枕ふ就ふけり程ふ蛟雪與四郎
あの日ふの五刻過る時候親兵衛が伴當の後れるを厮俱ふ稲村の城ふ来ふけれい堀内藏人負
彩東六郎展相奉りて問注所ふ召登り則國守の仰を傳て富山以来の賞として白銀五十枚を
賜り麗田へ退て宅番们を尉ぬて在留ふ月俸ふの餘の賜い大田ふ文五ぶ親文五兵衛の例を
ぬて那里ふて死彩ふ且妙真ふ對面の折今番大江親兵衛を館山より召来りて當城ふ在勤の
事の趣を告知て宜く他を慰むべしと仰示ふ与四郎い大ぶ喜ん與四郎と拜し賜を受て
退て親兵衛と共ふ他い昨夜の宿直ふ疲労れて天明て後ふ睡ふ就ふ覚ぶ
ぬ敢又驚ぶ昨日消息を遞與されてゆれ吟果ふ這里ふて時を移ふ要ふ異人
日又来て對面せんと思ひ給へれい親兵衛の伴當と留置ふ身の伴當のを領て瀧田を投ぬ

與四郎い第五輯ふ世四郎とある本輯ふ世や與ふる所以ふ至て詳ふ

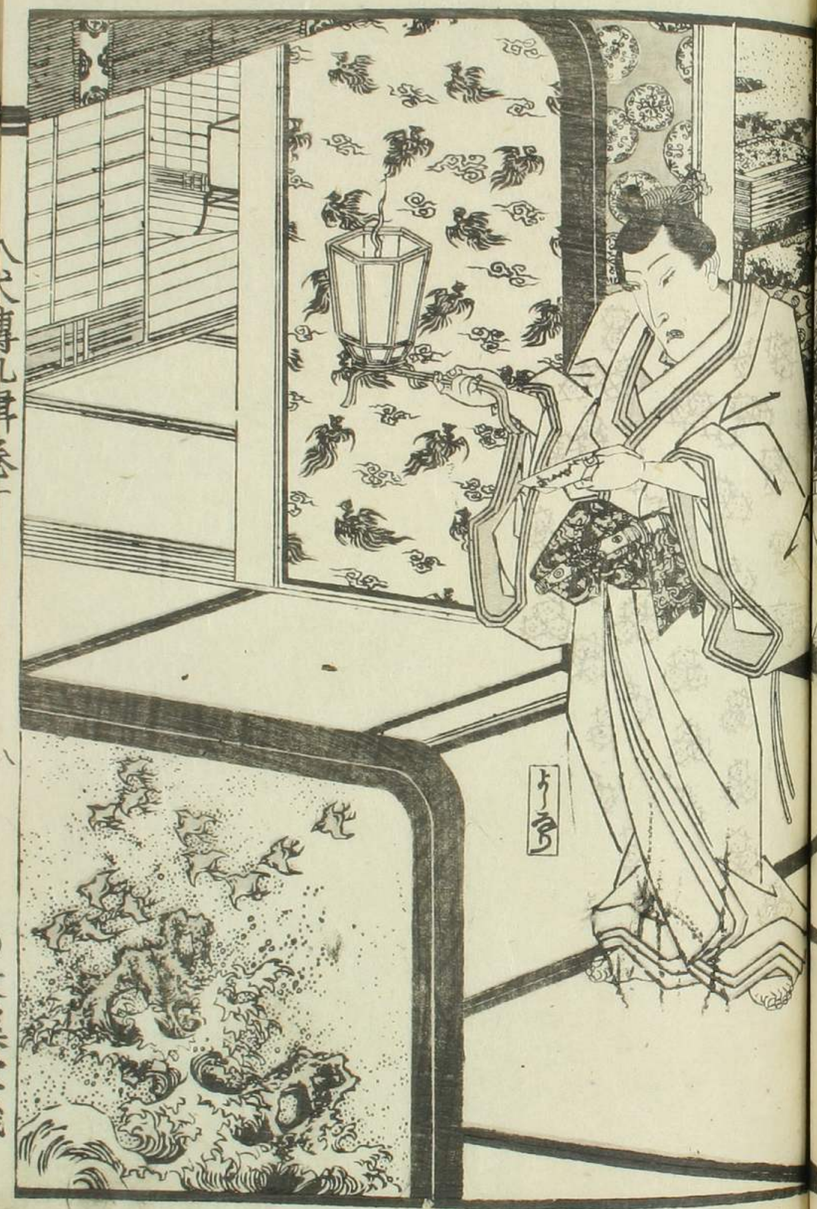
けり是より先ゐ義成主田税力助逸友を使价として瀧田の城遣て犬江親兵衛を召させ事那
王の夕夜勤の夕且親兵衛が宿直せしより昨夜い物怪顯れも濱路姫い丙夜ゟ睡もせぬ
ゟまでも淺ゟく主父義実主へ申えあげさせ給ひけり不程ゐ親兵衛い未牌の時候ゐ起出て與四
郎が來ゐるゟ且白銀五十枚を賜りて休息の為瀧田の城へ遣されつと偽て欽ぶと斜ゐ躰て
浴湯し沐梳り夕饌を賜る程ゐ君侯成義及夫人吾嬬前より宿直衣と平生服と必用の調度さへ
皆具て賜りけれが親兵衛い寵恩の隈なを畏て其の欽びを稟せゐ姑且て義成主い親兵
衛を召よせて昨夜の宿直虎ゝて其の功あり欽びと云云と宜いまゐ義通御曹司い舍弟次
丸と共伯母厳君の左右ゐ侍りめて親兵衛が支毎ゐ其の功あると褒美めて茶と賜り果子茯
賜り過ぎ館山の事をさへら譚らして與ぶが親兵衛い長ぎ日の勇ると覚ぎ慰めまられる面
目あるりありとぞ思ひけ却説あの日も暮ゐけれが親兵衛が又濱路姫の臥房ゟ次の間ゐ宿直あ
る。今宵も物怪顯れ濱吸姫ゐ今朝ゟりも面色も光澤ゐて心地清やく覚ると白粥を
食ての西ゟ番ゐ及びゝ五吾嬬前欽びめて今宵犬江親兵衛と夜勤の女房が東西と賜ふべ
きと午ゟりの誂を命せられ赤豆飯煮染物剛長鮭魚の塩炙石決明の膾博京ゐ濱防風の醋
茄蒸果子餅をゝどを五六箇の折櫃ゐ装做て其の甲夜ゐ賜をけれが嬶妾が欽びて先親兵衛ゐ
分ちて薦め各ゝ賜りて芽出さぎ宵とぞ思ひけ。佞りけれども親兵衛い暮るゟ旦るまで端然
とて外覩もせぬ嬶妾が稍狎れてめらゐ被るもゐ見ゐあゝねど絶ゐ応ぜるのゝ要るれが這方
ゟめらゐけりゐの次の日ゐ瀧田ゟ老侯の使として蛮崎十郎照文が稲村の城へ來て筒
様筒様と御意を傳へ親兵衛が夜勤を労らひ銘茶と乾果子両壺を賜り且五の君が病
者の稍癒せ給ぶ欽びを申えの義成あの子を申えて照文を召よせて老侯の安否を尋
ね親兵衛ゐ東西たまひし欽びを云云と申えさせゐ語の次ゐ物怪退散をるゐ欽思ひゐ倍も
濱路が容體佞々と解示して是まゝ靈玉と親兵衛が奇功を是ものゝよりも嚴君ゐ詳ゐ
稟ぜとて躰て暇を賜ひけれが照文い退ぎて又親兵衛ゐ對面の折妙真い義も今て再會を

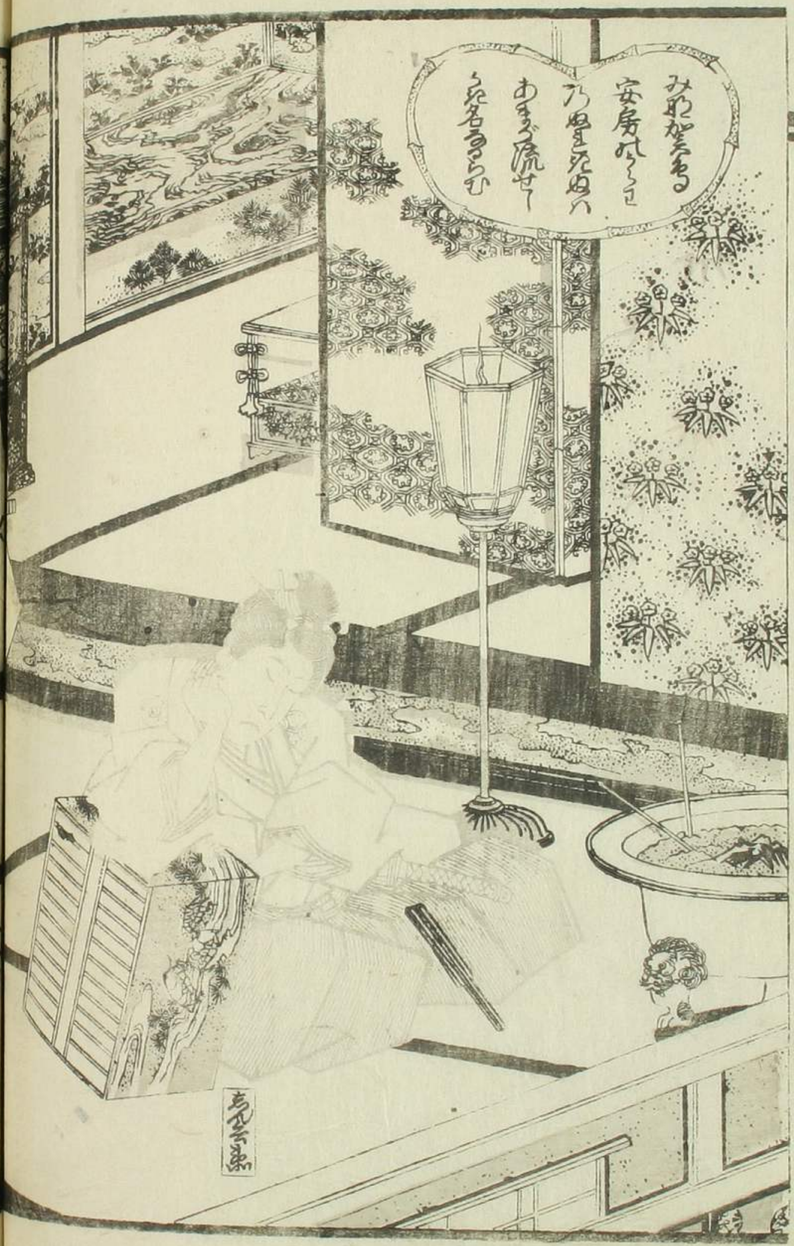
俟事の情又與四郎が文五兵衛が舊子舍を賜りて音音と媳婦们と両個の孫と倶ふ住
へば妙真を置て舍と檐と比べて僅ふ壁を隔るのみ旦夕送ふ交加されば詞敵のヨウ侯ようを告知ら
ざせ〜ば親兵衛が心あちみて左も右も我二柱の君恩と稱へ〜今番又思ひ付きて老侯より
東西賜せ〜ふの軟びを禀〜ゆゑ姫上いと〜痊可ぬあ〜その折暇をありて見参ふ入べられとふふ
照文ろ〜ろ〜て別を告て伴當と倶して瀧田へ退りけり是より〜て濱路姫の病着いと〜平ぬあ〜親兵
衛が宿直せ〜ろ絶て五六日の程ふ三度の饌も生平ふかりて氣力ハ日無清ぎ〜れ〜ぬ〜ご日數を
経ふあ〜ねい浴湯結髪ハ去ぬいで〜ふ無龍て〜ま〜親兵衛ふ對面あ〜ぬ〜只他がめらふ
拵ふ〜の殿を吟ゆゑ〜遮莫那物怪い夢ふも〜ぬ〜ると〜れば宿直の醫師奥隷の甲乙ふ夜勤を
免〜ゆめ〜親兵衛と〜ぬ〜初のでく夜い次の間ふ侍〜〜り然ばあ〜二親胞兄弟連の歎ばいへば
給事の女房们の〜ぬ〜敎び男まぬいろく書い雙陸歌骨牌見合るどとして長汪日の徒然茂
慰めるゆゑ夜い亦物〜讀む女房ふ源氏物語を讀〜聞ゆふ其も甲夜の程のみ幼草大二更の

左側より曉るまで熟睡〜七一〜ぬ覚ゆるの婢共们の夜勤ゆゑ大〜ら退けて枕方ふ侍りの二両個ふ
ぬ〜ど甚も〜心怠り〜倶ふ睡〜そ曉る天〜知ら〜るも間ありけり亦程ふ親兵衛ふ宿直ぬ〜七夜ぬ〜り
五の君既ふ癒りぬ〜ば在〜ぬ〜ぬ〜ば暇を賜ふ〜ぬ〜ぬ自由ふ〜ぬ〜ぬ〜ばけれ勤栄ぬ〜ば夜を守る
間ゆ〜ぬ〜ぬ氣い倦心疲れて連ふ恥を催せ〜ば勉めて睡ぬ〜と思へども堪ぬ〜ぬけれ臂枕ぬ〜ぬ雙陸局を引寄
ぬ〜ぬ面杖衝て寝ぬ〜ぬも知ぬ〜ぬ〜ぬ〜ば一番時打恥ぬ〜ぬけり然ば又義成王の吾嬬前ぬ〜ぬ〜ぬ息女達のぬ〜ぬ中ふ
濱路姫ハ仙ぬ時昌恭就鳥の殃危ぬ〜ぬ徒方ぬ知ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ世ふ〜ぬ人と思ハ絶て手來と過〜ぬ〜ぬ料ぬ〜ぬ蜜
崎照文が甲斐州ぬ〜ぬ倶〜ぬ〜ぬ〜ぬ

者を遣て後々までも障りあるべき姫上命運長久を吾門も祈らるべし日より吾嬬の前へさぶらはしめ義成
主も夜を安く人定り枕に就て睡りあるべき事なり親兵衛に参りしより第七日と云夜に迫りて
何とも寝難きに睡りかねて短夜の深き隨に胸うちさわぎて平生覚えぬ濱路が病着の
更に危窮に及びぬ然るに又物怪立顕れて悩ます狭什麻親兵衛いかに近習たちを遣しく安
否を尋ねさせと尋思を巡て次の間に臥ぬ近習某甲と喚覚えたく遽しく頭を擡げ問ふ否既に
小夜深て四更の十三の方僅鳴ぬ怒る他人を遣て問てさせるにもあらず徒に這那の人殺さへ驚
き事に無名の名を流れ女々者も疑の心より暗鬼を生ずるんと笑れも甲斐なき悔かるべし所詮我みづから
白紙て那里の安否を探り知るに若くはなしと思へかへりぬ横を撥遣り身を起して枕方を探
腋指の刀を帯て次の間の紙門を推開て開首に有ける提燭を乗て行燈の火を移して開を
携て進る幾間独ち過て奥と表第の間の関の銷を推ぬに思ふも仮寝用意れば訝り
ぬ找へ濱路姫の臥房の次の間に来て見れば燈燭の光明て親兵衛の這里に在ぬ

訝しけれども底一霎時立在て悄々地に四下を見るに玉の濱路姫の臥房に男女の耳く聲もなく濱
表の今ぞ人の音もなく成れば退去んと為るに程に弗憶く東物あるて脚に躓て入訝りて悄と食抗て
提燭の火光に照らして見れば是則艶書の標識見るに疑べくもあらず濱路姫の
迹を親兵衛に贈る義成主の勃然と怒地奴の堪ざれば先那奴を推並べて撲ぬ殺せと只
管に惴る心を宥め推鎮めて君子の本性胸に深念を在時の月を多く這艶間を人に知せじと
懐に夾めて密に偷歩して臥房へかへりぬ那里に夜勤の婢妾も這里に當番の近習たちも短夜を
思へば貪睡て皆夢にも知ざりけり小程に義成主は臥房に入りて坐して文に頭を傾け
熟思惟に親兵衛に勝れて身長七十六七の後生像くれ生年九歳の孺子なれば縦婦女子の
中に置とも淫奔なりとは思へ我浅慮を形體と倶に心さへ大備て早晩に色情
起ぬ約莫男女の密会は倶に死刑に処法律に明文あり他人の情田を人知ぬ我は許さんと欲
ども助けぬ罪過を幸に人に過ぐるあらん方僅這艶簡の我に落て他人に與に主




みれば笠をも
安房ぬぐこと
乃母を死ぬ
あまぐ流せ
と名をるらむ

親の恥を捺滅せんとぞ思ふ濱路が左まれ右もあれ親兵衛世に早る豪傑の素質あり且八犬士の一人
まで自餘の犬士ふ先さきて我ふ仕て両三番大功あり一者ふ思案の外と恪ふもふ這情慾の罪と糾さば
可惜犬士ふ疵を附て後世までの恨遺すべし所詮中止刻発遠離て他们ど惑ふの醒折召返さふ
とあらんとて主意決りければ枕方ふ置ふる提燭を引よせ件の艶簡を推圓め燈燭の
上ふ翳すと発と起升ふ灰と共ふ提燭を吹滅して遠く擲遣り腋挿の刀と又枕方ふ置ふる刀架ふ
拭且七。ゆゑび枕ふ就ふ寛仁大度の賢君子竟ふ睡ずで明る天を今々と復寝の床ふ不娯ま涯
ぬるるけり偽而その詰旨義成主の親兵衛を召近着けて左右ふ近習を退けて宣ふ濱路が病着
癒て物怪も亦退散せしかども汝が功ふして那靈玉の奇持もあんん濱路ふ癒ぜ浴湯せど病の
林ふ在りといへども既ふ本復ふ及びぬ今日より夜勤を免べ就て我思ふ有汝小アて時ふ伏
姫の霊の擁護ふよりて富山の奥ふ生育られが関の東西ふ諸國ふ渉て這安房上総の地理ふも
知ぬ所ふ在べし且自餘の犬士们ふ年来汝が所在を索て八具足ふ参りかるべ。幾回。

推辭ふ及ばの次ぎ武蔵ふ穂北の郷士永垣甚ふ甲と名ふんが家ふ
寓居ふ在の餘那大伝毛乃亂智ふ往方ふ知れざるを又大川荒八大甲ふ文五郎毛乃が所在を索る
と甲斐の石木の指月院ふ立出ふ穂北ふ尚来會せざるふ曝ふ蛮崎照文の噂ふ及て
知りぬ那信乃道ふ即現ふ大角ふ今も穂北ふ郷士の宿所ふ淹留ふ在るを其の後の消息を索
ん他们ふ年来汝が所在を索難く在るふ汝が我ふ付ふと告も遣らざふ不義ふ似たり我ふの
春ふ照文ふ在りて件の宿所ふ遣て信乃们四犬士の安否を訪ふ且毛乃们三犬士の来會せず物不
問ぜんとぞ思ふ義通が身ふ禍鬼起りて素藤を征伐の軍陣ふ日を弥り且濱路が病着物
怪の祟ふ因て三春と空ふ過ふ信乃道ふ即们を訪ふ暇あらざふ疵れば汝穂北ふ到て信乃道
即現ふ大角が今ふ那里ふ在るを對面して徒らとその身の上を報知ふ遣べく那首ふ在ぶ
往方を索て犬士八名具足の旨ふ厮伴ふ参らば單館山の城主ふ参て上總ふ在るふ勝ぶ
因て汝ふ遊歴の暇を只今取るまる人一男関の八列を送ふ歴覧ふ一男七犬士を索て倶ふ還り

来よ任れば急ぎ立去て寛く還るを妙とせべ然が汝ぞ秘蔵の玉を今返せ発該気どおいくせん濱路ハ曾ぐ徹牀せ者且汝ぞ這里ぞ在ぞ者て復物怪の障りあが何をよぞ禳んや縱汝奔ぞ者ども玉を那仮埋措ぞ然ぞ障事ぞ者べ。尤も心の至り気ども汝ぞ如ぞ者ぞ那霊玉を我ぞ預け知らるべ二重の瓶ぞ藏めて土中ぞ瘞れば火災盗賊の患なき。扨是ハ納戸財宝ぞを盤纒の與ぞ取ぞ者ぞ。その意ぞ汝ぞ叮嚀ぞ情詔ぞ示ぞ黄金百両紙ぞ包ぞ折敷ぞ載せ。その食ぞ者て與へ汝ぞ親兵衛ぞ遠く膝ぞ枕め受戴ぞて臭ぞ退ぞて直ぞ御諚の趣辱く都て兼りぞ盜微臣一人七大士ぞ先ぞ者て徒ぞ御恩を禀ぞ者る。実ぞ本意ぞ非ども御高ぞ老侯の御危難を富山ぞ拯ぞ者ぞ素藤對治の事ぞ為ぞ憶ぞ紈袴ぞ繫れん心苦ぞ。今遊歴ぞ與ぞ身の暇を賜ぞて自餘の犬士ぞを倶ぞ帰参れとぞ教命ぞ宣ぞ臣ぞ幸ぞ況路費の為ぞ金を御ぞ親賜ぞ者る。罷恩狗盜ぞ身ぞ者ぞ。辟ぞ敢ぞ物もぞ感涙の外ぞ。久霊玉の所ぞ知ぞ者ぞ年来苛特ぞ者れぞ者ぞ。

ぞ者ぞ然ぞ知那玉ぞ御用ぞ達ぞ足ぞ幸ぞ微臣ぞ参ぞ者ぞ埋措ぞ者ぞ。今日啓ぞ仕ぞ者ん多勿論ぞ者ぞ大母ぞ月来俟ぞ者ぞ。ぞ者ぞ。ぞ者ぞ。

ぎり。今日君侯の仰を左も右もあるまじ。ねば那物怪の退散して濱路姫の病着の稍癒るのひまを宿
い真の役を免されん。去為ば発ぐるべう。又館山へ返されぬ剣猛可ふ遊歴せよと。身の暇を賜りて濱路の大母の
宿所ふもう一日も逗留せべうもと。掟さまを。しの故あるを我を疑ふ。追
放ちゆふ。ん然ばそ身ふ取て亭ばるもあれ疑ひを受ぬ覚るべう。餘の大士ふ先さまを大功ふ。
るべき夷ふ閨門ふ立入りて。婢妾们ふ一刻ふ夜勤を仰付れを。婢一人ふ。詭言をもちけ。君侯ふ素
より賢明ふ。佞使利口の小人を信容れ。ぬべくあらねど衆口ハ金を鑠し。市ふ三虎を致すとふ。古人の常
言ふ。ある。功成り名遂て身退くハ是達人の用心。生涯無異の捷徑なり。誰も知ることなり。俸
禄信貴を貪りて退くことを忘れば。猟禽盡て狡兎亡られ平家亡びて義経誅死も。栄枯得
失。今昔一致なり。敬禹ふ足れぬ。我里見家ふ仕へ。ること。三十餘日ふ過ぬ。くと。館山ふ。
城を預げられ。ぬ。尚一撮土の采邑もなく。坐席格式一とて定められるもなく。那折ふ。兵権を一時ふ
[illegible]

受る濡衣を乾さまぬ這地ふ住て。仕の途ふ入ぬ。と悄々地ふ胸を決め。第二の城門を出ふ。伴當们を
ぬ。ぬ。我ハ火急ふ所要あり。瀧田の城内ふ召置る。大母許ふ。若曹ハ我馬ふ後ふ。と走るべ。と十
人の内中七人ハ館山の城ふ。西ふ。伴若黨一名と馬の鐮隷奴。徐ふ續ぬて瀧田へ。ふよ。の馬寄せ。と
牽向ふ。ぬ。ハ。と。無りて。墓地ふ。瀧田へ。投て走る。ぬ。ぬ。ふ。ふ。ふ

やくと親兵衛が旁に結ふる野袴を引伸々て両折戸に敲き連りの喚り程ふ妙真奥より立出て応ふる
と　ひらき　ゐんべゑ
はや戸を開き親兵衛を見て訝しげに那車よりもと尋れば親兵衛も左右見て扨身は是大母様の
ぞんもの　ゐんべゑ　ゐんべゑ　なの　まうしつぐ
大八々大江親兵衛でゐそと名告りふ妙真胆を潰して相ると約莫半晌許忽地ふ合泪て原来和殿は親兵
衛ぞ一狩六稔富山ふ在り一程最も大なる者ぞと人の噂ふ聞くまでも然まで大人備さうに与つゆく思ひ
ざるに鄙ふ姥雪翁とのそ消息を寄られて相見るこそ慰めなれ先這方へと優々まく躰て坐席請登まれ
ゐんべゑ　ゐんべゑ　とり　ゐんべゑ　ゐんべゑ　むかひ　ゐんべゑ　ゐんべゑ
親兵衛が刀を解て後方ふ閉ぢ恭しく妙真ふ向て對て我入の為比ふ偽へ給せのけん暴裏ふ時の不祥を
憶ひ出で別れまつりしを夢ふも思ふ六稔屋に浮世半ばの神女の擁護快見参ふ入るを思ひざる日ふ
ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ
ゐんべゑ　仕の途ふ入りしより我私を頼る眼ふければ昨日迄で空ふ過せし胸苦しふ一日ふ千秋ふ異ならぬ心地
ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ
夢ふ時ふ至りて恙も在ら舞顔の秋び何事ふ忘れふ優ふ宛宜ふ再會ふそふ嬉しとの妙真
ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ
點頭のこと涙ふ咽ぶ難一顔を背けて両袖を絞るまでの行濟ふ一つを相見ふ秋び一ふ就て文深ふ
ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ
數ふの杜も今願事遂へ對面ふ涙で屋見て嬉親兵衛你ぞ一度の大功の逆賊崎王の與四郎翁
ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ　ゐんべゑ

も告知ふ一ふ咱併ぶ年來二柱の父館ふ受けまつり一御恩を聊返一ふと思へば然りも身の幅の廣ふ世
界ふ二人と為る一ふ孫を思へば又その親の子を思ふ泪ふ浮れて泣く老女の愚痴ふ一ん你の
與ふ外大父様覚てをる行徳ふそ故の古那屋の文五兵衛翁今まで存命ふ一ふ愛ふ一ふ飲れ
ん一ふ苦海愛河の世ふ定ゆく弘拯言の船出遠けれ別れ一ふも住ふ假の宿りと知り一ふ返ふ人の
なり一ふ一ふ倍ふ像身のあれば咱親兵衛の一ふ益ふ一ふ見れば思へば你の面影幼稚貌ふ耗れども
鼻梁のとよく融りて特ふ眼睛の清ふ一ふ房ふ肖ふ一ふ一ふ笑折ふ元厭面の見る一ふ何
沼菌ふ肖ふ一ふ四個の親身父さへ母さへ外戚の祖父さへ黄泉の行客と為りて九稔六稔の今日まで残る我
這身單ふ思ふ難ふ哀歓苦樂遣る瀬ふ一ふ恩愛の垂鞠ふ一ふ一ふ又潸然と泣沈ぬ親兵
衛然りと慰めて目を數瞬ふ鼻をすりて一ふ大母様ふ思召さん歎ふ理ふ一ふ我身二親を
喪ひ一ふ僅ふ四才の比と一ふ名を知れば面影を照さる水鏡深ふ懐を汲て一ふ父も母も大父と
見なるふ一ふ身の一ふ益ふ悲涙ふ心を屈て病を煩ひ一ふ一ふ妙真頭を擡げて然也々々你ぞ噫

飯まで出さんとの仰せ立を推禁めて否固しめかいまぎ何も欲くらば偶参りかへ緩安ふるも譚ふて慰めまらに該
ろれまのふせん猛可ふ君命を奉りて今より他郷へ赴給はれば立ち寄る日ふ又見参ふ入ぶれとふふ妙真
呆貌して開ふ亦本意ろ紀ろ濱路姫上ハ病着の癒せめい欲他郷へ御用ハ怎麽ろ伺ろぞと問
ろて親兵衛然ハ那物怪ハ鎮りて姫上癒りぬいろ因て某と同因果の空ろ小父大田主ハ伝ろ大塚大
山犬川犬飼犬村と俱ふ六犬士或ハ武蔵の穂北ふ在り或ハ甲斐の石禾ふ居り獨犬阪毛乃亂智と唱做
な一犬士の所在知れぎといえども尋て送ろく将て来よと仰付られ紀とハ妙真領紀て開も亦餘ろ紀
ろろ紀武蔵へ赴ハ便路ろん伝の舊里下總ろ市河へ立寄て依ハ許訪ろ水濃ハ咱侑の姪ろまぶ
伝の與ふ親族ろ件の夫婦ハ正首ふ折ろ簡牘ろ安否ろ問ふ東西ろ贈来ふ紀ろ紀てあひ
ねかとふふ親兵衛異説もろく開ハあろ紀て伝ろ伏姫上の神灵の宣示ふ依ハ今ハ豫
ふ知ハ伝ろ紀然ハ両尊の草参ふ必ふ来ふく思ハ伝紀ハ那里へ立ち寄ハ多ハ論ふ枝花咲ハ翁

媼與四郎と音音と媳れ孫達ハ善ふ紀ろ宿所ハ近くハ欲と問ハ妙真領紀て然ハ那人ろ置ろ処ハ壁一
隔隣ふ内ふ通路ふ伝ろ一家児ふ異ろねども今日富岩ろ伏姫上の墓詣ハ峯上ふ観音
へふ参らんとろ老夫婦ハ両個の媳婦と両個の孫ふ伴ふて早旦ふ出ぬ紀音音の刀自ふ曳ふ單
節の胞姉妹ふ銀切ふ間ふく時ふく交加て六稔伝と共伝ふ富山ふ暁ハ行ぬ紀ふ説ふ示と慰ハ
ふ折ふて一人ハ宿所ふ在ハ紀ふ来ふと聞ハ最酷ふ送憾ハ思ハれんとふふ親兵衛眉を
顰めて開ハ最殊勝ふろ紀那人ハ還ふ紀ハ親兵衛ハ君命と稟て他郷へ赴ハ紀ふ伝ハ紀ふ
とふ問ふ炊妾ハ茶を沸ふ紀ふ汲ふて来ふ先親兵衛ふ薦ハ紀ふ茶頭ハ鹹ふ塩打の豆ふ今ふ世話ふ
ふ実房州ふ伝倒れ地方ハ紀ふ東西ふ紀ふ質素ふ過ハ紀ふ数待ハ婦人東道ふ造作ふ意ふ入ハ紀ふ
けり姑且ふ親兵衛ハ勘壮ふ財嚢ふ紀ふ金一裹合ふ出ハ紀ふ
ふ来ふ東西ハ紀ふ我君ふ賜ハ紀ふ一百金ふ半分ふ卒福分ふ仕ん欲ハ紀ふ東西ふ是ふ
求めぬかとふふ妙真ハ紀ふ開ハ亦要ふ紀ふ當御館ふ這年ふ扶持賜ふ奴婢ふ隷置

逢別難語連
今日相
今日
涙彈
連一
あん子来
妙きん

ゆゑ〻自由を得ることも亦況往日稲村様の這里へ凱陣なされ折咱侍を近く召されて伶の武功を誉給ひ玉ひしまゝ白銀巻絹を賜りしかどそは伶使ひて今ハ有るか無るかと推辭を親兵衛ハ固辭

ゆゑ并ハ然るゆゑ伶ゆゑんぐ盤纏まゝ受ハ盜賊の殃危を惹く媒妁なれ姑且預けをゝん攸め置ばやと

のゆゑ妙真固辭難て渋〻金を受給りけり登時親兵衛窺ふも仰ぎて目のあたり永の時候を憶へ

き時を移り凡見ハ酷く敝屣左でも右でも書無き名殘身の暇を賜るべしとゆゑ妙真合涙て曰ふ等閑

親見ても切て一宿留めもせぬ世ゆゑ武夫の沿習ひ苦しゆゑ仕の途足を思へバ又原の船長の母と喚れ

んを倒ゆ樂しかべれ喃親兵衛今宵出船ゆ乗るゆゑあるん幾比かの来まゝ迄と問れて親兵衛阿とぞ答

答難き身の往方那濡衣を乾きしきゝ安房の浦邊ゆ立つの寄る白波ハあるとも我還る日ハ定めて

累のゆゑ然氣と見せ沈吟しる頭を抬げ然て今より去尚を料ゆ武藏と甲斐ハ隣國なれハ往還輒

くひん但大阪の在処速ゆ知れ吉日を過さん狼遲速ハ定めがたけれども然ハとも歳月を累るゆゑ寛ゆ等閑

せゆかしとゆゑ力を極めて御建てゆゑ身を起ゆ妙真へ向く人を涙と俱ゆゆゑ端近へ送り

ほ〻伴當を訪れ親兵衛を送ゆゑハて不日来嗚呼ハ伴當正門の塀城ゆ置るゆ妙真

領れていゆまゝゆあれども你ハ萬事ゆ心術の神を考へ給ふ初旅なれば心ゆ事餘の天主ゆ環會ゆまで

で旦夕の食物足曳の山踰海川の津ゆ小心者へと心を屬ゆ親兵衛ハ一説ゆ及ぶ語て升ゆ考へ

みゞゝ愛て恙なく於る来る日ゆ復見参ゆ入べれとゆも答も隱ゆ果ゆ名殘ハ血筋の誠親の又親子ハ

又子ゆ愛ゆ情も厚氷解て流れて母ゆ水と人の往方の定ゆ盈虧ゆ迷ゆ鴻を光ゆ夜の鶴ゆ哀ゆ

第百十一回

素藤夜舊城を襲ふ　妖尼庭ゆ衆兇を聚ふ

却説犬江親兵衛ハ祖母妙真ゆ辭別れて城の正門まで来る程ゆ略ゆ後れて二個の伴當ゆ折よく

這里ゆて好着けり是ゆ依る親兵衛ハ正門の守屋ゆ立寄て那両個の番卒ゆ教ゆを演るゆゑ預け

馬を鐫奴ゆ牽ゆきつゝ乗ハせそゝ伶ゆ浦曲のゆゆゆて絶ゆ一町許伴當ハ等ゆ若ハ知ざるべ

我ハ今朝悄〻る君命を稟られ單他郷へ赴く侯れば去尚ゆ伴當ゆ倒ゆ宜かゞ因て若ハ五名ゆ

稲村の御館まゐて左右見の件の義を報て館山へ還る。却遣馬の稲村なる厩役人もよし告て初のごく顔
けの置わるる毎比老侯より拜領の名馬あれば若し路中日の暮るとも必歌店に就べくも夜の深
とも那里まゐて人倘問ば親兵衛の妙夏許まゐ立去りたる投方へ罪の義と有つる侯に答へよと言語
らく吟味れ大家れをうるゆ仰あるれ遊莫密事のあん使とも身軍中に不便ふ中さあ切て一人い
倶ーあ者とらを親兵衛ゆ史ち開い盃も亮口誼倶もべい誰ふかも憚りそ倶さる亮快々出なとい
其大家ゆ暇くあるる果て立別れ馬を牽て稲村を投てかつ去を親兵衛一霎時目送りそ今いまも心安
と思へば便宜の港口なる艅公の宿所へ赴て今宵下總の市河へ出船あるやと尋ふる艅公答て出船いま
れども幸ふ追風なれば賃銀まく賜りね目今船を出て下らふ親兵衛再議ふ及ばず隨ふ銀を
取らそ件の船ふ乗まくを登時篙工面三名飯櫃薪飲水の桶などを携て卒そ馬頭上へ登り経ふ親
兵衛い開ば後ふ跟て倶ふ水際ふ赴て他们ば船を艤る等て獨鳴立處代長ーー日の流果く黄
昏時候ふ及ばり程ふ親兵衛い壯夏ゆ現ふ人の果厚得失ふ応一炊の夢ふ似秋の

天の瞬間ふ晴曇るる猶果敢るー抑我身昨日まで数百の士卒ふ將として館山の城主るーふ今日い
一僕身ふ従ひて萬里の孤客とるりふけりそを憂るふ主君の與ふいるるるる薄情や土中ふ埋れて又るるのかるるる我命運も玉と
年来這身の護ふ主君の與ふいるるるる薄情や土中ふ埋れて又るるのかるるる我命運も玉と
倶ふ長く光を喪ん祥るりけ狹といへいるふいる心の慨ーふを遣る方もるく思ば折るる忽然として後方よ
を光明颯と見ゆて投るの似て物ふゆゆん項ふ磯と中るとそば俄ゆ衣領より滾墜く九の命の
邊ふ住ーと親兵衛嗟と駭て遽くるて衣の内ふ入れく撥撈るふ果して木蓮子の大紀さる物
只一顆背ふあり訝るるる含ふ出て見れば別物るるを御ふ君侯ふ貸まゐ参せて濱路姫の臥房の
下るる土中へ深く埋置れ仁の字の玉るりけれいあを怎麼いるふとるるふ一さびい訝りまゐ又一さびを鈦
びて佳らくと思ふる郷高ふ我這玉を毫毛るるも惜むとく君侯の所望ふ従まるるて那里ふ留め措ゆた
さーふ靈玉我を慕へる秋二裏の瓶子の土中を出て路遥るる我懐ふ入りるるふ嗚呼神るる秋靈るる哉姫上
病着瘦りゆて物怪も亦鎮りれば這玉那里ふ要るるとそ伏姫神の神誓ふ計りて返さゆひー秋

それあるゆゑ奇へ奇なり。その事稲村殿ゆへ知り召さぬ。さんぬ縦ゆゑ我王ゆゑ。恁る奇特を告げ
さぬその仇、藏置くべき景護所あり。後ゆ又ゆゑ疑ひを受けるゆゑ。然ばとて今ゆゑ又稲村へ歸
ちるそ。亦上ゆへ面伏せ左まれ右まれ吉凶禍福。神の隨意儘ゆゑ。こゝ。と尋思ゆゑ。懷ゆゑ
護身壽裏の紛解ゆゑ。件の王。彼ゆゑ頂ゆ載る程ゆ。篙師毎ゆ高安ゆ客人。船ゆ敷乘ゆ追風ゆよ
ひよ宜ゆ。快乘ゆゑと。喚聲ゆ。浦波暗む王莽時。親兵衛ゆ応々と答ゆ。果ゆ歩を早ゆ。歩板
架を渡ゆゑ。件の船ゆ乘移ゆ。その間ゆ高工毎ゆ帆装ゆ。歩架を退ゆ。ゆゑ漕ゆ。大洋ゆ浮宿ゆ鷗見
静ゆ。淺瀬ゆ上ゆ。下つ總市河を投て走ゆ。ゆ。安下再説。その日稲村の城内ゆ。義成の主。千慮を
盡ゆ。既ゆ。犬江親兵衛を他郷ゆ遣ゆ。ゆ。久ゆ隨即奥隷の老黨。某申を召ゆゑ。賓客ゆ。病着瘡
ゆゑ。物怪ゆ。亦鎮ゆ。これゆ今日ゆ。犬江親兵衛ゆ夜勤の役を免ゆ。且恁ゆ。所要ゆ。又親兵衛ゆ
吟味ゆ。他を他郷ゆ遣ゆ。水路ゆ。ゆ。今宵必覺ゆ。鮮ゆ。這ゆ四個の家老ゆ。有司給事の老
人ゆ。ゆ。ゆゑ。件の老黨。某ゆ。退ゆ。仰渡ゆ。件の老黨。某ゆ。君命の趣ゆ。ゆ。御ゆ。

堀内貞行東辰相杉倉荒川四個の老黨。有司近習の輩。ゆゑ。事情を知ゆ。ゆ。訝り思ゆ。
ゆゑ。那犬江親兵衛。犬功の賞として。往日他を館山の城主ゆ。ゆ。若七犬士の所在。ゆゑ。伴ひ来
たゆゑ。為ゆ。ゆゑ。始ゆ。ゆ。件の一笑を奉ゆ。ゆ。十一郎照文。ゆゑ。恒心。ゆ。ゆ。軍ゆ用ゆ。親兵衛ゆ。輕
輕ゆ。然ゆ。使ゆ。仰付ゆ。抑是甚麼ゆ。故ゆ。怪ゆ。ゆ。次ゆ日ゆ。濱路ゆ。徹
床の壽祝ゆ。是ゆ。上総の殿臺ゆ。両八幡諏訪三社の神主。忠告ゆ。紛れゆ。ゆ。上総。遷ゆ。許
ゆ。又ゆ。比龍田の城ゆ。牽渡ゆ。五個の罪人。安西出来介。満呂復五郎。天津九三郎。荒磯南弥六
椿木隆八。亦復獄舍ゆ。龍直。虚実ゆ。糾ゆ。問ゆ。他ゆ。陳ゆ。趣。婚終。毫も違ゆ。是普
善苏々利の村人ゆ。亦ゆ。事ゆ。義と。鳴合ゆ。歸降の情願。実事ゆ。ゆ。ゆ。恁ゆ。愛ゆ。折ゆ
是ゆ。義成主有司ゆ。知ゆ。件の罪人ゆ。赦免ゆ。この義ゆ。龍田の老侯の仁慈ゆ。ゆ。渡ゆ。又上
甘理墨之介ゆ。天津九三郎ゆ。故主ゆ。ゆ。是廢人。是義ゆ。素藤ゆ。吟味ゆ。密義ゆ。千
ゆゑ且他ゆ。神餘光弘ゆ。落亂ゆ。亦普善村の民毎ゆ。碑ゆ。紛れゆ。當郡。舊家ゆ。後裔ゆ。

義成特に憐みを垂れて長挾郡神餘村に他ゞ留字の地を賜ひ那邊に二百貫の采邑を賜り天津九三郎後見七生涯を送らせよとぞ諸役免除本領安堵の御教書を成し下されければ九三郎は天に欽び地に喜び國主の恩を拜しまゐらつ墨之介が倶して神餘村に赴くべき幾程もなく黒之介の宿所を造り奴婢を使はせその身は生涯後見し徐に光閃を送りけり是併瀧田の光侯并に當主の仁恕に出でぬ九三郎が這年来の孤忠の善報まぢかに近づきて遠からぬ物語り續で後まで善談なりけり墨之介九三郎がその下に詣でゝ又その恩赦の日に出来介復五郎南弥六等八人も有司赦免の義を示して若们がのいも縱大赦の折なれども數年の久しく守に宣せしもあれば都て命を助るる上總へかり去まく思ひ速に退き立ねば又這地に在まく願ひ稟さが月俸を賜りて城内に留置れ異日の功あらば提立あるべしとありければ四個の罪人皆歓びて恩を稱へ額就働て御誂兼りに當國い我们が舊里ひ上總へかりんとを彼せを況以後の露命を駿来の月俸を賜るを願ふ大馬の力を盡して再生意外の洪恩を報ひまゐらんとぞ辞上

總に光侯の御椿村へかり去て親を慰めんとぞ身の暇を乞まゐりし有司佐々と笑んで分義成主憐愍のあまりに隊八が情願の九三郎は是亦孝子の心宜く路費を取せよと仰せさせのゆゑに有司又這仁政を欽び兼て退出て伐のごとく彼の月俸を賜るを許されし隊八は路費を賜はりて椿村へ返るべきの然れば彼く者も住る者も輙く魚の江に還り枯る苗の雨に會ひまゐらつるが如く唱て長く良善の人となりけり介程なく隊八は南弥六が来介復五郎に別れて家路に赴くの罪障眼前の活地獄に懲りて俠客の交を要せず上總の宿所に還りて畊作の暇なる毎に母に仕へ後々に至りて孝の噂を聞くぞ是亦孝子の心宜く路費を取せよと仰せ田使者を遣して九三郎们五個の罪人を赦免の朝瀧一士を招いて來たるに與に昨日他に遊歴の暇を乞ひ事の趣并に犬江親兵衛に夜勤を免して十六報ぬ義實主に聞のして我が欽び或に訣りて什麼犬江親兵衛を獨然に使はしに只今猛に一道でとけん。あらるるに先日に哭にあらず。先照文にあらとぞ。よりて示して問ふに照文も亦驚くに意は

いえ

その意をるざりーゐ他を稲村(遣)て義成主ゐ事の情を尋ねさせんいさまゐまでそゐ低默止めいけり。話分両頭介程ゐ草蚕田素藤ハ単人不入の山の庵を守りて妙椿の還るを待ゐ件の女僧ゐ生て身死まよろ約莫十有三四日を歴て三月も既ゐ盡る時候その朝妙椿い忽然ゐかゑり来て獨縁頼ゐ存りーかゐ素藤驚ゐ且歓びて迎入れて計りー事の成就あるを歓ぶと問へ妙椿答て惰りゐゐ問れども詳ゐ昔歓ばせんと思てかゑ来ゐるとゐゐ素藤も亦うちえそそゐ憑ゐゐゐか。鳥の聲水の音耳ゐ聞くのみ友も来ゐ這人不入の山守ゐ做りて等さる甲斐ゐりけるよとへ妙椿頷て然べよゐ豫ゐ身ゐ示せーどゐ。唯俗稲村赴て法術をゐて城内ゐ妖孽ゐ祭ゐ竟ゐ犬江親兵衛を遠く他郷へ逐遣らーゐ。ゐゐ段ハ箇様々々と那假名曳の窠鬼ゐ濱路姫の厭見れて遂ゐ病着ゐ臥りーゐ又役行者とゐ名さる假異人の示現の事是ゐより舘山より犬江親兵衛を召寄て濱路姫の宿直として七日夜勤を

とりかれいきよくまんじゆ　まのこ　あさ

させーゐその折那靈玉を病の牀の笠貫さの下ゐ土中へ埋めさせーゐまで。説ゐ。又ゐゐ姫の病着癒て時候一々義成ゐ疑心を起さて更に那身一個濱路姫の臥房ゐ移ゐ朮次の間ゐ宿直

ゐ。

なる親兵衛を咱俗ゐりてその夜半より折脚らて義成ゐ他をゐ是ゐ所行ゐ邪靈玉ゐ他ゐ懐ゐあるさーて土中へ埋ゐ故ゐ思ひの隨ゐ行ひ易ゐ倘玉を初のでゐ親兵衛ゐ身ゐ附てゐるゐゐゐ

思ひ寄らん這一條へ遠ざかる大隔昨の夜はなまかしの詰朝義成い親兵衛を召近着ていまぐ招
泥屈恐せざる七犬士の所在を索さて俱して遊歴の眼を含ませてりけるが瀧田の祖母の宿所ふ
だゆも逗留を免されぞ急ぎて逐立られしが親兵衛い水路より其宵他郷へ赴れ那奴が在ぞまうと
館山の城を要んず今宵一夜を過ぐしぬ非論又年を歴て親兵衛がかの来るとも那王ぞふ
還されぞい水母のふ鰕ふ離れ似く要ぞ人ぞ奇ぐ妙ぞと鼻蠢めつ説誇まば
素藤伯父ふ勝ぞと耳を敬け膝を找ぞ吁惚ぞと平晌計憶ぞも止息を吻て適愛ぞ尼姥の
神祇抑館山の城を要復ぞふ又是其歴ぞる妙計あるぞと問ぞを妙椿ぞも弄ぞ開ぞ木ふ段ぞるぞ
鄙ふ寄隊の陣へ奉れ追放ぞれ躬方の士卒願八金作本膳碗九及雑兵们いへぞ富日副
て門より落亡ぞる士卒も都て法祇をりていぞ日ぞ這四下ぞる太山ふ潜ぞ要直ぞれ期ふ社てあの処へ呼聚
令ぞ上ぞと易かり且前祝ふ酒ぞも喫て姑且俱ふ楽むべ酒菜ふ咱俤ぞ准備ぞて五六種肉温ふ在ら快
令ぞ上ぞと素藤訓ぞ遠く身を起ぞて庖温の板厨を開ぞれ果ぞと鯛ぞ平

魚ぞ鯉ぞ鮒ぞ鯰ぞ卵ぞを皆悉調理ぞて五六箇の青磁の碟子ふ盛ぞ做ぞてありけれ呆ぞるまぐふ
然ぞ感ぞて酒を温めて坐席へ餚ぞ出ぞ盃ぞ処陝ぞを安排ぞて妙椿と共ふ屋ぞを近ぞらを
程ふ又稲村をぞ呼ぞ向れぞを酔て俱寐の假枕結ぶ夢の熟語楽ぞ涯ぞるけり
左右ぞる程ふ日ふ斜ぞ下晡ぞる好素藤ぞ又妙椿ふ館山の城ぞとり復ぞ徒東ぞ問ぞ催促ぞ
登時妙椿ふ枕擡遣ぞ身を起ぞ一霎時外面ぞ瞻仰て現今ふ好時候ぞん豫那這ふ潜ぞ要直ぞ
ふ躬方の士卒ぞ吸集んぞとのぞも縁頰ふ立ぞて貧の水のぞを浄ぞ口ぞ漱ぞて外面ふ立向ふ
眼を閉て口ふ咒文を唱果て躬て坐席ぞ入りぞ素藤ぞそのぞろ沈ぞ向ぞ人ぞを呼ぞ
思ぞの俱ふ外面ぞ長視ぞて姑且ぞ迫前向ぞる樹の間豈厳ぞ蔭ぞ近ぞ居ぞの人晌
跫然ぞとぞて歩ぞ来ぞれ素藤ぞ故隊兵礪時願八平田張金作奥利本膳浅本碗九郎们茂
朱ふ立ぞて一隊約莫ぞ四百名葬ぞ庭ふ聚合ぞる身皮都て蜜果ぞ一刀ぞふ帯ぞりけり素藤ぞ
這盗人ぞを見ぞて躬ぞて縁頰ふ走り出ぞを撫ぞて先願八们ふ對面ぞて別後の苦労ぞを聚ぞる願八

金作本膳碗九甲乙四個の光究い言語尋一皆を手。往日ふ我们い分そ船に乗せられて武蔵或ハ相
模の浦追放されたり。扨ハ尼公法術を雑兵奴隷ふ至るまで這頭ふ近く奥山皆悉領て返
されたその事い幻ふ水路を渡り来ける欲或ハ雲ふ乗せられて飛行して来ける欲我上ふ夢の如
くて楚と覚ハ忘然るふより料とも。食這四下へ返されかも太山ハ食物を。前徑ふ行客の
盤纏を畧すく欲ふ身ふ寸鐵を帯ざれハ畧ふ出せん方もなく只草深ふ地方ふ山蛤のまれハ
日毎ふ各捉咬ふて才ふ餓を凌ぐ在。ふ程ふ相公も赤。八百尼公法術ふて奇い這頭ハ牧て返されて
這草庵ふ御座をとり尼公の示教ふよるそ時ハ知るめるこのまぐ對面を許されねハ間近ハ山ふ在りそ一
なびも訪なふ各倶ふ艱苦を忍ぶて尼公の幇助を等ふ今朝も尼公い稲村の城より出てかゝる
さんを在下们ハ躯在る山蔭ふ立寄りあ。て妙術をそ犬江親兵衛を逐遣ハ。ゆひさ居事の
顛末を解ふされ信れハ今宵館山の城をも復れと思ふ下晡ふるん時候没逢ふ咸相俱ふ咱
其の庭今来ふかと其期を知るめるこの一躯在る。ハ时ハ秋ひ地ふ喜ひて時を移さ這里那里ふ潜居る

鞨家ハ兵毎ふ徇徊で日の不ふ入ふ。ふ。ふ。

玉を砂と飛ー樹を鳴らし奇特を駭く賊兵们は吹倒されと品稜を各携り俯累りて頭を抬げ仰ぎ
けり。偖り一程ふ日は暮て這夜子中の左側ふ怪むべー風のまゝ笄の上延へ尾刺々と音して天よる隊
もの東西ありその數幾百ゑと知ぞ大家さてはと意中ふ曉得りて避て撲る者もあく隊東折れをるふ
暴ふ親兵衛ふ剥れる躬方の武具をうければ衆兇都て妙椿の奇術と感ぜぬ者もなく先素藤の
武具を尋含て縁頰ふ登ー置ふ後各認得ゑ。
眉尖刀を携て通愛ゑ武者態やとも齊一笑局ふ入のふけり。然ば當晩の戰飯ふ谷豫山蛤を
捉り炙りゑと腰ふ巻ると合ゑ中ー つ或ハ樹の根ふ尻を椅け或ハ草を折布ふ坐ー て飽はゑふ啖
けり。他们ハ墓田の隊兵をふ主の家號ふ相似る蛙を食と巻ゑる。実ふ是獅子身中の虫ふ等ー ふ者
とゑいふ名詮自性思ふべー。問話休題。ふ程ふ素藤ハ黒革縅の甲一縮ー て肩縛蹈繳ふ身就
固め黄金拵の大刀の二尺八寸ゑと鷗尻ふ佩做て刻室ゑ比道を挿添え右ふ戰麾を携く
與り徐々と歩て多縁頰ふ建ゑる躬見ふ尻ふ先着到を問ゑと墓時妙椿ハ素藤

夜衣小袖の尚巳の時許ゑふ黒紋天鵞絨の帯を前ゑ結び黒紋ゑの袈裟を横ー故意法衣を着け
む。水白紋紗の阿高祖頭巾を最も目深ふうち被りゑふ一口の戒刀を引提ゑ縁頰ふ立出て願八盆作
们ふ對ふ言ふ。「此の水ふ今朝より屢加持をゑれ兵毎ふ快ふ傷ゑて人別ふ這水ゑて両眼を
洗せゑば徒野子ふの鳥夜ゑも物と見ると明亮ゑん今日八四月朔ゑれば月を洗ゑて不便ゑ然ゑを
躬方の士卒们ふ鳥夜ゑも眼明ゑば猫兒の鼠を捕ゑふ勝ゑて敵を敵ゑふ自由ゑべー」と咱俑も墓
田大人と倶ふ館山へ赴て悄々地ふ祖を行ふ既ふその准備ー輜子ハ昔門ふ在り。雑兵们ふ吟咐
咱俑と乗せて奥ふ。「ゑふ願八盆作ハ一説ふ及ぶ。ゑゑ果て時を移さ墓隊の兵毎ふ件の水を傷
へゑハ皆教ゑで先を爭ふ。ゑも貧の水ゑて各眼を洗ふけりゑふ。ゑの折風ハ既ふ止て夜ハ子二刻の時候ふ
ゑふ素藤星を瞻仰て時分今ぞ兵毎立ね快々找め。と下知ゑ。発兒を放ちゑ下立ゑ。その間ふ
雑兵们ゑ背ふ負輜子を吊りて歩ゑ卒とゑ縁頰ふ早寄ゑれば妙椿躰ゑうち乗ゑと抬起ー
素藤の後ふ跟てゑ俱ー ゑけゑ。偖而墓田素藤ハその隊の賊兵三四百名先鋒後隊と隊伍を

整へ顧八盆作本膳砂九并ふ本膳ゞ獨子史奥利狼之介出高と喚做ゞ今茲十八の後生们を前後左右ふ従へて山路を連りふ急ぎ行ふと聞けれども那水史眼を洗ふる效驗なりけん衆兵一個も後ろめたく思ひ遠ざかる來て舘山の城の後門ふ椎寄せる折鼓々と譙樓の太鼓の音ゞを丑の初刻まなりけり。話表舘山の城内ふあの日稲村殿義威を御教書到来して大江親兵衛仁ふを夜勤の役を免しゆゑ七犬士を迎の與隔昨猛可ふ起行てその投方へ遣されう是ふより逸時良干景能们倶ふ舘山ふ勤番して弥滋田断ゞ。よくその城を守るべと仰渡されうけれ件の三士を訝りゞ。親兵衛ゞ這里ふ在ゞとそ守るふかゝるゞ。倶ふ思ひ懸令ゞ恥し義書とをゞ。下知ゞ士卒ふ猶ゞ。その合戦ゞ歌きめけり。程ふ。城内の樹木ゞ吾復ゞ風の勢ひ凄しくて現平ゞ夜宵ゞけれ城下並ふ普善寺鮒を利の村人ゞ各戸を閉風を害怕れて外ふ出るゞ。ゞ況舘山の城内ふあの田税逸時登桐良干。苫屋景能们ゞ士卒を撃ゞ。ゞ黒白も弁ぬ自夜ふれ今ゆゝふ何ゞ。ゞ天の明るゞ武具を取敢ず馬ふ繰ぐ者あり。要る武具を

れば徒而子時過る時侯猛風ゞ強く止ふれば士卒们倶ふ心ゞ各睡りふ就ふけり。介程ふ吾田素藤ふ三四百の賊徒を領て既ふ城の後門へ寄せ来ふけれ妙椿ふ轎子ゞ。ゞ立出て素藤ふ其くゞ。這城内ふ昔ゞ一箇の脱路ゞ。ゞ今人ゞを知ゞ其里ゞ入ゞ便宜ゞ。ゞ年来千曳の石ゞ。出口入口を塞ゞ。ゞ。ゞ。

多城の士卒い倶ゐ駭に起歩ゐ鎧擐る間ゐくぶれ各素肌い短鎗を引提或ゐ弓箭を携て稠入ゐ
敵ゐ立逆ひ。齊一防ぐ戰ふめり。如法闇夜の進退便ゐく敵の多少も量り難ゐ賊徒い目子明
亮ゐ。烏夜ゐ迷ふ者ゐ多ゐ又妙楮ゐ幻術ゐ。其勢數千ゐ。えさ。敵城内ゐ充満て錐を立べ
地もあらねば城の士卒い防禦ゐ由ゐく驚ゐ慌度を喪て戰ゐ。めで多ゐ。當下願八盆作ゐ
真先ゐ栈む聲高ゐ。當城の奴們。ゐ知ゐ。我王甚田頭の相公曾祇旨の恥を雪んゐ。當晩數
千の逞兵を領て當城を合ゐ復ゐ。ゐ。番士の頭八田稅逸時登桐良千們の那里ゐ在ゐ命惜ゐ面縛
ゐ降參せよと喚ゐ。ゐ勢ゐ潮の沸く似ゐ。古昔の義秀親衡ゐ。敵ゐ。ゐ。ゐ程城の
頭八田稅戶賀九郎逸時登桐山八郎良千甘屋八郎景能ゐ夜戰ゐ入ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。刀鎗引提走出烈ゐく士卒ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

廣庭に推居り當下墓田素藤に癈兒の尻どもち撫る左右に本膳碗九郎以下の兄黨と侍ら〻意氣揚々たる面色あり良干と伝と見て爾は登桐山に欽謹て我が子と呼け原這城地に我義兵を以て自然と得る所を義成が城に入れば且我が年來里見に忠あり功あり〻に義成敢その義を思ひも慢に我を侮り〻事遂に干戈に及び鄙に籠城まる折那大江親兵衛が幻術に眩惑せられて一旦停まるいかゞ我英雄と虔せざる天の惠神の助あり〻の故に義成が我を誅まんと克で士卒と俱に追放ちあるにより我又來て亦我城に據るのみ絶に三十餘日の内に數千の士卒と聚合會稽の恥を雪めんと武略に胆に洗れけん志を傾けて今より我に從ひ功あらん折車に用ひ徒て命は惜まじと旋らく小鞠谷の所領を奪ひ合るその惡近邊に露れより人食これを知ざるなし況國主恩に叛て御曹司を捕らんより虎狼蛇蝎の威を振ひの我神童大江が為に若党數を盡て既に俘ませられ大江親兵衛が意見によりて國主の仁惠如来かたく貴を憤り虎狼の心をもて事今ちに及ぶも國主の大軍に向ひ朝日に霜の解る像く誰か一人も漏さじ覚期せよと勇士の奮激思ひの隨に罵れ素藤勃然と怒る堪ざ其奴甚無礼先の古を引抜て快せと敦圍に妙椿ぞ宜遂く屏風の背より走出て素藤を諫るやう良干が非礼過言最憎むべきあとのしを怒に無て殺まん要なし姑且獄舍に繫て志を改めば許して用ひ又は又を經て歸伏せんその折誅戮せられんのみ急ぐべし短慮に仕くびやとのに素藤怒を鎮めて現他に然る者萬卒に得易くて一將は極て獲難き兵毋その良干を牽立て獄舍に繫ぎね由断と合る脫そと言語を急迫に下知に從ふ賊兵ども美の如と答て躰て良干の索を縮て牽立れども良干は高罵り已まず聲涸るまで嗟り〻を本膳碗九以下の兄黨ぞくに堪ざ目を注しいとく憎と呟て又素藤に鄙に表濃の軍民の強顔常り報ひとそ礒時願八平田張盆作に居まの雜兵を從へ普善蘇々利の諸村遣に鄙に出遣られる兄黨の妻子に〻初城内に在りけると在〻り〻と晉ぞ年少く顔美に咸合入れて賊徒に這回の賞に取せ又後堂に召入れて妙椿の使用とそ又只にのみのみならず豪民に催促と戰兵軍要金と

文溪堂藏

逸時景能脱虎口

良千奮激去り
素藤を
罵る

○安房文庫藏

謹合り又十六歳より五十歳まで凡二三百人城内に驅入れて都て軍役に使ひ給ふ其勢六七百ばかりなる武田信隆千代丸豊俊の残党の尚近郡に潛居るの素藤復起りぬと聞て西党都て六百餘名野幕砂鴈太仙駝麻吉嘉六と喚做す者を頭人として食館山の城を素藤に與へ屬ぬ素藤勢ひ壯んなりて敢囲主を憚らず隨即妙椿を軍師とし天助尼公を尊稱し軍議の外は後堂に常に夫人の似く夜は悄々地に枕を並べて其徒の思ふと差ひ却て願ハくハ無作本膳碗九郎に禄と呼く一騎兵を授けて重用始に弥倍あるべき件の四兇は素藤に薦めて美濱の豪民の米銭を責食ふに倘推辭む者あれば立地に推寄せて屋廬を破却し資財を奪ふに乱妨狼藉なるの豪民は怨嗟を怕れ僅に宅着を捨て逃て他郷へ走るもあり然は近郡騒動して風聲今朝より聞くに稲村へ注進の人馬は櫛の歯を挽く像に將門敎て東路の風塵は純友起りて西海の浪暴かりしも恁ありけん彼と思ふ可の人心貼まるべきなりけり韋表上總の厩を去る八幡誠訪三社の神主梶野葉門は開昨上總へ歸るとて許されて昨日殿堂を宿所に歸差たりはあるの夜館山の城に凶変あり間近く居られ素藤が再叛を件の城を攻畧りしとの風聲を詣見甲乙俱に少知て駭く天くるに素藤又館山の城に據りて猛威を振ふ鄙に我々が逸早く國主へ注進をたゝんを憎まで必害を為ん今番も亦稲村へ走りまゐらせ吏の趣を注進せべく且は那里に在留て賊徒の害を免るべしと示し合せの兵伍ふもの旦開に宿所を出て勉て路次を急ぎ這回を又稲村へ注進の第一番をその忠告を賞せられ則他们が願ひのまゝに城内に留置ふ程に処々より注進ありて又館山なる躬方の城兵の駭を漏されるが二百許名漸々に脱れ來て報るを聞ふ昨夜墓田素藤に城を落られる事の顛末城の頭人登桐山八良十八生拘らを田税逸時甘屋景能を落亡さるに賊徒は數千の大勢にて郭内雖を立る地もなく八面敵敵なるに似ぬふして繰入れられけん第二郭にて起り立つまで音もせざれば城の士卒は夢にだにも知ぬ是故に度を喪して落城に及び少又その甲夜より猛風起りて兵庫を壞られる其頭の多まで具に衆口錯ざりかば君臣上下驚に呆れて既に評議區々なる所に義成主は昨夜より猛可に脚

疾あり。醫師ども脈を診ふ。あを脚氣ふせ。ハまさとて。薩郎連ふ湯薬を薦めまゐらせ折ふしも。評議の席へハ出ざるを。先上總の諸城主へ御教書を遣ハ。その書ふ載られる一ケ條ハ素藤再叛の罪ゑ。ことふとも各ハ先度の如く城を守りて動くべからず。此ろ征伐の使ゑ。速ふ誅戮ゑ。軍兵郡里ふ在陣の間倘戰米の所要あらバ。その折下知ふ隨ふ。本陣へ運送せられよと示さるゝ。諸方へ急脚の使者を部ふ。その日齊一當城ろ出遣らるゝけり。偖ゑ又義成主。杉倉氏元堀内貞行東辰相荒川清澄と俱ふ四個の老黨を便室ふ招ゑ寄せ。然而宜ふ今番素藤が再叛の賊徒大勢ゑ。とハ。先度の如く含られる人質の憂ひもなし。我速ふ打向ふて。那城を攻落し。素藤并ふ兇黨を誅せんと輒ふ。ハ。ハ。ふ。我身ふ昨今病着あれバ馬ふ乗らんも不便ゑ。然ハとそ我病着の癒るを待ゑ。賊徒ふよいよ勢ひ猛ゑ。民の途炭ふ及ぶ。安達各意見あらバ。悉ゑ。べ。然ハ。數ゑふ定限あり。是ろ下の話説ふ又巻を更めて第一百十二回ふ解分ゑ。聽ふかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之十終

東都　曲亭主人編次

第百十一回

君命を稟て清澄再叛の賊を伐ツ
機変を旋て素藤牛狼の囚と易ル

再説。義成主。素藤を征伐の事ふ就て。氏元貞行辰相清澄ハ四家老を召聚會て事の意見を問ゑ。四家老ハ先主君の病着を問ふ。然而評定ふ及ぶる當下東辰相ハ。徒稟ふ益ゑ。諄言ふ似ゑ。ハ。ハ。ハ

ゆゑ。他が往方を渉獵得て領で李工も必ず賢慮甚麽と正首達く。齊一意衷を予一ば義成熟る
所ゆゑて現六郎がふぜく。嚮ま素藤を追放せーハ單親兵衛が意見に依りる。我柔弱の失と思ふ者も
多からるべ。されども。初素藤ハ從事きく。當家の與功ありあ。但他が分ま過ぎる婚姻の望辭ぎり
きと執念深恨ミ謀反ゑ。剰義通を捉篭ちーあ。女兄の神灵と親兵衛が奇ゑ功より那逆賊を我
陣營ま牽せ折。那侭ゑ。誅戮せば後の患ハあるべ。と思ふ通てのあろるれども。倘素藤と貝賜屋者
あ。悄々ま必のゑ他ハ最初ま當家ま功あり。望稟ぜ婚縁と。心ま許されぎりーば恨ゑ。野心ゑ起ぎり
ゑ。と憎ーとゑ一人も漏ま。都て梟首きゑハ罰重く。恩薄ろと異論と做ゑとるぎ。ゑい那折ゑの義と
思ひーば。迺親兵衛が諫る隨意赦ゑまゑ。ゑ素藤們を追放せーハ我仁政叛くまゑ。再生の恩を思ハぎ。又
叛ゑハ則他が重罪ゑ。ゑ。ゑ是非邪正判然ぎ。明亮ぎ。縱是非の間ま惑ふく他を貝ば眉く
ゑる者ありとも。今更ゑの觜と容る。ゑ。ゑ。ゑ又親兵衛がるハも我思ふ。ゑ。ゑ自餘の犬吉の所在と
索ゑ。遂ゑ。ゑ。俱ーとかり來ゑと。嚮ま遊厳ま暇と取せ。ゑ。ゑ。ゑ

寔ニ理リ之臣们ガ短才浅智ニ然ルマヾニ思ハヾ切ル親兵衛ガ為ハ今ヤ為ル所ニ議ヲベカラズ。
素藤幻術ありとハ云ヘドモ邪ハ正ニ克チ難シ。その時倘命ヲ惜テ他人ニ譲リ遣ベキハ禄ヲ偷ムノ臣们館
山ニ推寄テ賊徒ヲ夷ゲ悩ン賢慮ヲ煩ハシ奈ンバ義成主頭ヲ掉テ否汝们ハ冢宰ノ政事ヲ
任ル者ニ非ズ顧ベトモ推並テ四個ハ討ル遣ベキ。木曽介ハ智勇あれドモ。その中の拯老ムル桑
榆の暮景ニ及ビ難シ。縱ヒ欲リ為ルモ軍陣ニ位ムベカラズ。又藏人ノ六郎ハ既ニ先度の軍労あり。兵
庫助ハ甚麻ヒヤと問れて清澄忙然と膝ヲ找めて稟まう。微臣不能ヲ忍ビ重任ヲ兼ねる
上。年来ハ為ルあの〻ものまぎれなる軍功ニ願ハヾ素藤征伐の勅使ヲ奉リて斧鉞ヲ加ヘ給ン。
義ヲ許サ給ヘ。とのバ義成主黙頭て汝ハ思慮あり武藝あり且ハ性急ニ功ヲ貪るものハ
わるねバ這回素藤ヲ討ル為ハ究竟の大将ニ為ベシ汝ハ欲ヒ我左右の三勇臣田税力助逸
友及小森但一郎高宗と浦安牛助友勝ヲ副ヘて一千五百の士卒ヲ授ン賊徒い素より妖術あり郷高ニ
館山の城内ニ殿臺ニ樟の櫨まで地道を穿て伏兵の出没自由ニ為ル幾日ニ為ル地道のあるを

ハ奇ヲ這回も亦更闌て館山の城ヲ襲ふ折賊徒の數千ニ及ベリとハ雖も亦他们ガ幻術ニ実ハ
然ラズの夷人數ヲ従ヘる為わるべカラズ那幻術ヲ折ル為ハ冀汁大蒜獣の鮮血汚穢れ物ヲ濺ギ祓ふ。
ベシと云ヘリ漢籍ニ見えて郷高為ハ我ガ准備ヲ為れど賊徒ヲ征伐為ル折怪ヲ恵ふ為ハ為ル所ニ非ズ
這回准備ニハ不覚ヲ取ル為ハ為ル所ニ豫其頭ヲ用心ヲ速ニ進發せよ時日ヲ過ベカラズ。とのたまふ征伐の
軍議ヲ決着シて皆言兼ヲ為ル所ニ皆ガ中ニ清澄ハ単面目身ニ為ル為ニ隨即軍兵催促の御教書ヲ
賜ハリ退リて人馬ヲ整ル武備怠慢ニ為ル家風ニ為ル為れバ士卒立地ニ揃ひて明日出陣ヲ企テ登
時荒磯南弥六ハ安西出来介。満呂復五郎と共侶ニ荒川兵庫助清澄ガ隊ニ就て這回素藤征
伐の軍陣ニ従ひ給ンとて只管ニ請願ヲ為て清澄隨即ち為ヘ遣ヒ給ふ義成主宣ふ為ル現他们ハ再生の恩ヲ
思ヒて軍役ニ従人と願ふ為ル為ニ為ル為ニ為ル為ニ南弥六ハ武士ニ為ル為ニ但ハ侠気為ル為ニ原是上
總の町人ニ為ル為ニ然ル為ニ安出介復五郎们と倶ニ今番の軍役ニ従人と欲ル為ハ事ヲ好ム似て相応ハ為ル為ニ。
且他们三名ハ既ニ舊悪を洗除て今良善の人と做ル為ニ始を推ス為ル素藤ガ腹心の間者と并ニ三人倶ニ領て

ものが躬方の士卒疑ひて。快らぬ思ふもあらん。恁れば半介復五郎は軍役に従せよ。南弥六は城内に留置くそよかれと。仰示されつるひーつは。清澄躱て退り去て。則件の三人に御諚恁々と伝へ知らせふ。南弥六望を失ひて。堪ぎや單找に出て。又清澄に對ひていふやう。御諚を推辭するは罪過がましくは。我們守の御恩を稟ーに寸功もなく報ひまらんと思ふ一致の志のみ。小可一個異るふりを。殺這身は町人でも。今戦國の妖賊を思ふに。武門名家の子孫まん家裏へ。民間に降る者のと。ましろ又荘客市人にも。志氣ある者は竟に吾身の挽死ぬる。武士に倣りて家を興もの。勘らぬぜひみ小可。とのこ町人にとて願ひを祛けぬる。然りとは情るーに。その義をるは幾回も笑えぬべきさまなりと怨ずに只管庶幾へば清澄頭を。うち掉て。志は然るとまれ。三人を都て軍役に従へるべ。射方の士卒に疑ふ者あるべと思食る賢慮なり。強て願ふ不敬に汝は別に用ひ在ぬふもあらん。姑且思ひ住るべと諭せば。半介復五郎も。倶に南弥六を慰めて。云云といひけれど。南弥六吟ぬ眼を睜りて。各に情願遂て。我をぞ何とも思はざるめ。非如這身は町人でも。昔は人に知られし渕崎の氏族。三ぶ外孫なりと。今あの時に失ひて。何とも恥なる外祖父の汚名を雪むべ。死に盃の餘命を貪りて。悠に物を思んあり。我只死んと敦圓紀を。諫めも推立て。倶て外面へ出ぬ。

半介。介程は荒川兵庫助清澄の人馬をも整ひて出陣の暇を賜り。小森高宗浦安友勝田稅逸友らも。兵倍に一千五百の軍兵を引率て。その曉天に稲村の城を出て上總なる舘山を望て進發す。然が安西出来介景次。満呂復五郎重時も。雑兵をうち交りて。倶に先隊の中に在り。最も日永の時候なれば。清澄連りふい兎ぬ十餘里路の程を。只一日に推寄来て。その夜は羽賀に屯ん。後れてのまぐ聚合ざる後陣の士卒。いと程に先細作児をりて。舘山の城の虚実を探らせ。三竜城の賊兵を。千四五百名あるべ。その中に千代九豊俊武田信隆の殘兵五六百名。野幕沙雁太仙駝麻嘉六と喚做すと。頭人とりて。食素藤が隊あつ。屬たる又妙椿と喚做す女僧あり。八百比丘尼の綽號を偷りて。年齢は八百歳にもなりぬと。人ども面影は美ーに。尚少く這女僧。素藤より幻術あり。素藤を帮助るまゝ。天助尼公と尊稱せり。賊中の軍師にして。普善蘇々利の村人が風聲都てかの如しとぞ。崖略を聞て清澄は准備を為る。糞汁大蒜獣の血を多く。龍骨車に分ち湛さて。賊兵幻術ありと。見ば速に射ぬ撒て破るべしと。下知をる。這夜は人

馬の脚を休めて。詰日辰の左側は舘山の城へ推寄せるまゝの時後れ軍兵も皆悉後陣に在り。一千五百の兵を三隊に分ちて。田税逸友浦安友勝を先鋒として小森高宗を後陣と定め清澄は中軍に將ゐて。隊伍を乱さず拔こゝ。小程も舘山の城内へ寄隊近つけぬと。素藤も亦細作児をして。敵の寡少を探らせは国守は病着に臥て稲村の城に在り。老黨荒川兵庫助清澄を大將として。勢一千五百餘騎羽賀の曠野に屯して明日快城を攻んと。注進孟浪なるべし。素藤所々冷笑して那犬江奴が在らぬ事を云て義成に推寄せるも。鹿垂まもべうるに。況荒川清澄なるに。我敵に足る者なしと。明日逆寄せて。這奴ども胆を潰さん。兵毎明日れ朝駈の准備を。と下知して。誤て氣色に出さじ。却説その次の朝清澄は羽賀より七十卒を拔めて。舘山の城に近く寄せる程に。素藤も亦一千有餘の賊兵を從へて。中途に敵を逆へり。両軍迭に近つく程に。とれば賊將素藤は重青の錦の鐵鎧戰袍に鍬像打る龍頭の五頭項鐵盔を猪頭に載て。紫金装の大刀に。豹の皮の尻室掛て。二十四挿る蒐鳥羽の征箭を。高く駝背て。左に弓を。重藤の弓の握太るに。腋冠に被着て。驪馬に乘て。右に礪時願八を。左に平田張金作を。其の它膚心虎狼の賊兵稲麻の似く立並び。標緡に白く月中の蝦蟇を染出す。旌旗三四旒朝風に吹靡く。後方に妖尼妙椿白綸子の夾衣に。純黑の錦の袈裟を掛て。一口の宝剣を背に斜に駝搭て。鐵驄馬に跨て。故意武具を着けず。清澄は日の戰装は緑線絲の好兼子甲身に同縅の胡瓜盔を眉宮に戴て。絳と黄と白の三色と。縄目の如く縫做て。胞羅披て。三尺五六寸なる大刀を佩て。素柘の弓に。関弦掛て。左に拯持ち。連錢驄の太く逞て。馬に韓鞍指て。優なる。右に三年均の節短なる。磨白の鞭を執て。前面と。仞と見一且て。右に田税逸友。左に浦安友勝。中黑の白旗花菊の馬標齊々整々として。隊伍正く。騎馬武者歩兵次第に衛りて。魚鱗の像く備て。登時荒川清澄は持る鞭を。素藤に差招て聲高く。汝れ再叛の賊。正可に聞け。恩を稟て恩を思はぬ報に。欲て。逆の罪人。既に虜にして。我君仁慈の御心篤く。犬江親兵衛を請まうせまゐく。赦まゐらせ首を接て遠く追放ちなひに。幾程もなくして。妖彩て。旧城に。今番は免る

所ゑ。頭鎧を脱て郷縛の索を受む。と責罵れば。素藤呵々とうち笑ひ。皆死なる。痩老黨夷濟い素是我封疆舘山の城も亦里見と憑て得ざるまゝ。然るを義成時運ゑ来ゝ。人を侮る非義ゑ。その故ゑ我獨立の武運を專試ゑ時早くけん大江奴ゑ一旦停ゑせれ。かゞもその罪ゑあらざれば。義成我を害去ゐむ。とのゝ我又來ゝ。我城郭を奪復せ。と恩ゑ殺ゝとのゝ。あらんや。兵毎那奴を撃捕りねと戰鬼連りあうち揮れば。咄と揚ゝ。周の聲と共ゑ前後を爭ひ競ふ礪時願八平田張盆作。躬方を找ゝ撃んとゑ寄隊ハこれゑ亭も噪ぶゑ。周応合せ。逸友交勝馬上ゑ鎗を打振々。縱横ゑ尋ゑ刺崩せば得ゑうと找むゑ。隊の軍兵射れども撃ども。怯まゞ去らゞ。最も烈ゝく攻立れば。清澄あゝと麾うち振ゝ。軍ハ既ゑ克ゑゞ。あの圖を抜ゞ。素藤を撃捕ゑ。と吸ゑ。聲勇ゝ俗羅闘場寄隊ハ奮勇十倍ゝ。克ゑ兼ゑ勢ひ。賊徒ハ怯へ。淨脚ゑ。亂れ噪ぐゑ。當下妙椿後陣ゑ在り。躬方ハ既ゑ肩色ゑ。遽ゑ懷ゑ。獲襲の玉と。冑ゑ。額ゑ當て。一要時咒文を唱れば。怪ひべ。忽然と。結陰る天の起住ひ疾風颯と吹て暴れゝ。砂を飛。樹を倒ゑ。勢の面を向べゝゑ。世ハ常闇とゑ。まゞゑ。黒白と判ゞゑ。ければ。然ゝも勇ゝ

寄隊の軍兵。人馬齊一吹倒れて。其身ゑの大刀眉尖刀ゑ。壁れ深痍ゑ。肩ゑ。矢庭ゑ。死ゑ。ゑ。ゑ。豫准備の糞汁大蒜。獣の鮮血ゑ。とゝ。ども。殘ゑ。甚ゑ。標ゑ。標識ゑ。脚下暗ゑ。度ゑ。失ふ者ゑ。龍骨車ゑ。足を踏入れゝ。うち覆ゝ。轉輾ゞて。汚穢れ。物ゑ。頭ゑ。浴ゑ。嘔ゑ。勘ゑ。ゑ。躬方ゑ。拯ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。約莫剛ゑ。猛ゑ。ゑ。ゑ。崩れゑ。敗走ゑ。雑兵の撃ゑ。者。幾名ゑ。清澄ハ辛ゑ。逸友們ゑ。共ゑ。馬ゑ。走ゑ。風ゑ。避ゑ。退ゑ。七八町。僅ゑ。猛風歇ゑ。れば。後れ。士卒ゑ。程ゑ。天晴れゑ。日光洞ゑ。ゑ。の時小森高宗も件の魔風ゑ。士卒ゑ。乱れて四零ゑ。落ゑ。ゑ。僅ゑ。七八個の雑兵を従ゑ。免れゑ。這里ゑ。聚合ゑ。ゑ。程ゑ。風ゑ。撲れ眼ゑ。瞳て命を免れゑ。躬方の士卒旌旗馬標ゑ。ゑ。見て。這里那里ゑ。走り来ゑ。一千有餘ゑ。ゑ。ゑ。戰ゑ。備ゑ。立ゑ。ゑ。ゑ。賊徒ハ既ゑ。城内ゑ。入りぬ。と。ゑ。清澄も亦羽賀ゑ。退ゑ。躬方の金齋児。と戰殁の士卒ゑ。撃ゑ。撃れゑ。者二百餘名。金齋児ハ満呂復五郎を首ゑ。雑兵八十餘名。ゑ。ゑ。ゑ

東京大學圖書館藏

賊徒征伐のおん使を奉りて戰ひの庸場に妖泥の魔風に折れて多くの士卒を殺すこと剰へ名ある一勇士浦安牛助を亡ひたる兵馬の歎き想像られて左右も右も面伏して友勝が存亡を知らざる者もなし。わらべやとて陣中隈なく問ひまはれども一個の雜兵がいふ。浦安主の風の為に乘る馬の倒れたる憶ひぞ足を傷りたりとて左右なくも身を起し難しと賊兵居ながら走來て摘捕てねたく去ぬるその折ふし小可も亦那風に吹倒されて叢の中に在り。幸ひにして敵の視かからざりけん虎口を免れて御陣へかへるとぞ報ずる。清澄高宗逸友遠恨に堪ねば悄然と俱に歎息きたりけり。姑且にして高宗は清澄に對ひていふ。いと憚りある助言ふ似、それぞれくあの地に屯せるに進退共に不便の義あり。何とかれが這地方に屯敵の城へ遠ざかり且里の名を羽賀といふ。羽賀は剥るといふに通じて盜泉勝母の忌べき似たり。心愚按ずるに敵ども殿臺はあの地高くして敵城へ遠ざかるぞ只その進退ふ便り宜しきのみ。その名も亦相応はずして國主の軍兵屯せば新たに名つけ一如くあるべし。願ふい宿老殿臺へ御陣を移しめんとふを清澄うち咤して开はく心つれて人を愚まさるる幻術とも神の威靈ふ勝ること明日は那里へ陣を移しと両所八幡大神宮並ふ

諏訪明神へ詣て妖賊降伏の實助を祈りまらん。就て我又思ふ一あり。力助も听ゆ素藤今日の戰ひに十二分の捷利を得られたれば必ず進む心あれ。然ば我敗軍の疲労を料る兄黨ども宵夜襲ふ推寄来べし。日暮ぬ細作をなすべく城の動靜を覘しと。然るあり知る所ぞ。然ば伏勢をもなく襲果さん那妙椿が名の隊ありとも思ひの隨に引着けて急に起て拉ぶ郷を分ふ遑あらざる魔風の辭ぎらふべし。名の隊配ひ箇樣多。佞者と見たる示せば高宗逸友歎び感じて議定に圖ふ當まり。然ば准備をもべけれと先細作とぞ遣ひる。小程に暮田素藤は走る寄隊を追捨て兇徒を纏めて徐々と館山の城に入りぬ。約莫夜の日の戰ひに敗捕りしわ敵の雜兵のこと。但清澄が先鋒の頭人浦安牛助友勝と喚做す者ども素藤斜ならず歎びて然ば先平奴をもて軍神を祭りて快牽出しを斫るべしと。願ふ人々を吩咐ると妙椿等を禁めらるる。今友勝を欲しとも摠大將清澄は一千餘の殘兵を領て羽賀の屯に在るれば敵方の軍威を増ふも。わるぞ。佞ども又友勝をも儕に生拘りあるる登桐山八良平と所ら〳〵俱に軍門に梟並べ晒さんと。身主從ぞ送る名ある寄隊の奴们を。

○文愛堂藏

犬江親兵衛は牽れて陣門に曝されん事恥を雪ぐに足りぬべし。這義を思ひ寄ぎと詞急迫く諭せど素藤
屡點頭て然べき友勝なれども緊く獄舍に繫置ねと下知あく擢且他を斫らまど先勝軍の壽祝せんとて。
その曛昏より廣書院へ有功の兇徒を聚へて盃を取らん。酒半酣に及ぶ程に奥利本膳が獨子ある奥利
狼之介出高が席末より膝を找めて素藤に對ひて。弱冠の憚氣もなく諸老臣をうち踰て軍議に
及ぶは烏許に似れど料るに今日の戰ひに寄隊が痛くうちて羽賀の色に退れば金奪児も多くひろ。
然べ那身に殘るも人馬倶に疲労果て事の役に達べからぬ願ふは今宵小臣に這兵三百名を貸給へ真夜
半時候に推寄せて清澄を擊捕るべしとて素藤らに吁く。爾が意見理なるかねど清澄を凡庸
なる敵なと思ひ失ふ已ぬと制るを出高吁く眼を睜りて。御諚に悖るい礼なれども小臣は遊卒にて是
まで度々御用なれば人に知らるる功名を沼ぎ兇然べと做る事もなく倘去の折を喪ひなば胯を咥むとも
及んや。枉て饒さるべしと只管乞ふて已まれが願ハ他を勇悍なく素藤に薦るに。狼之介が夜擊の
軍議に寔に為の圖に當りて尼公の徴を借らずとも功あらんと擬ひ。心思なく思ひ。微臣も亦出高と。

郷助て功を奏せば快々牢遺なきあらんと。素藤點頭て願ハ紹殿が俱なれども我何ぞ詑む兇然ら兵
卒五百名を授けん。狼之介は三百名を領て先に找て願ハ他に二百名を從へて。その鬨戰を援ひなば必失なるべ。小
心を緊要に准備をよとのたまひ。狼之介は忻然と訣びを舒席を辭て。願ハと共伯は退りて人馬を次ぎ然べ
その條の趣を側面せ本膳にて智勇ありと思ふ訣びは堪ずして人に讓らず盃を引受々々喫て醉て
曉に知ずして間話休題却説奥利狼之介は礪時願ハと共伯は五百個の隊兵を領て夜子の左側に悄々
地に館山の城を出けるに馬に鑣子を嵌れば鐵轡の音もなく人に枚を銜て。ものいふことを許さず戰鬨を定め進
退を示す合図に車炬を提て連りに路をうちぶ五三刻の比及に清澄が本陣に羽賀の陣所に來れば願ハ
三百個の賊徒を領て後方に續く狼之介は隊兵三百名を從へて清澄が本陣へ寄せ潛び近づく。哨と重て塀
槌りて名陣門を打破らて。真先に馬を乘入れて内に一個の敵もなく。あを什麼と訊りて原來敵は臆病
鬼に誘引れて安房へ退れ。狼狽て躬方の夜擊と猜て。備を儲けて衆皆牛と吸りて。乗馬を乘
逡巡らて退れ去んとせ程に左右に繁れる茂林の内に陣鼓をうち鳴らして頭れ岩両個の騎馬武者士卒に找る聲も

文溪堂藏

ひと多く再叛の賊那里へ進るを恐れんと思ひ一方甲夜より等と知ざる欽小森高宗茲を在り田税逸友あふあり及を受よと罵りて鎗を素扱て走り蒐る両隊の精兵四五百名乱れ立る兇黨を推包く攻撃ち大刀風當るべもあらざれば賊徒いよく慌騒て一柱も支ざる路を索て逃んとす撃る者ぞ多りける。そゞ中に狼之介が後陣の封市助と忍る憑て姑且挑戦ひ左右に近つく敵の雑兵を鎗りく刺伏せ敲き倒きく稍退んとせ一程に憶む小森高宗る去向の路を塞れて二雲時雌雄を爭ひふ克ふべもあらざれば非と高股と刺れて苦と叫びもあむ馬より撞と墜ちかば高宗の隊兵们走り蒐る狼之介を起も立ぞ推伏せく。索を截て牽立ける。介程に礪時願八も狼之介が後方より賊徒を找めて清澄を襲ひ撃んとせ一程に敵も准備ありと覚しく陣鼓の音烈しくやそれ。躬方は多く撃るべき勢ひ胸に応ふ心戦兢肝落て原来敵に備あり。憖に出高と拯んとせば我も亦捕囲れて難義に及ん。先方の地方を退ぞ又せん術もあるべしと尋思と走る。衆る馬の鐵面と推遠らく。退ぞ去んとせ一程に思ひ為く後方より清澄が一隊の伏兵忽然と起り立る。あ勢約莫五六百名四下の草木に火を放て吶と揚る鬨の聲に願八いよく駭怕れて躬方の

撃るべきを忘れて路を索く進んとせ一に清澄も遮て士卒を找めく他撃留よと下知れば性急雄の壮武者们各先を爭ふく殺靡ける刀光に是芋の葉を刈る似く賊徒の首と喪ふ者幾名と数を知らぬ。中に願八を敵と猛火に路を堰れく脱る隙を得ざりし剌田税逸友が逃走る賊徒を打て去向の方より来るに願八を怵難て滾ぶが像く馬より下りく逸友が馬前に跪ぎ命を乞ふく復降参と走り名逸友が隊兵に顧八を結縛らと然而清澄に報らば清澄が逸友高宗の功を賞て共侶に賊徒を撃る果て名の首三百餘級を得り。程に天の明れば清澄が諸隊の士卒が腰纏戰飯を開く高宗逸友と共侶に生捕願八狼之介を雑兵に牽て屯と殿臺へ移き。ぬ。配神速れば舘山の賊徒いまだ是を知らず。而那里へ到りて山林の竹木と藤蔓を伐て陣屋を組建る士卒爺老実に使て足のごとく。只一日に成就く。長陣の准備に閑て昔這地方が上總介平廣常が舘あり。迹見が殿臺と喚做る実究竟の要害と介程に清澄が修造を高宗が任用。又舘山の兇黨を推寄て孝とあん欲と逸友に五百個の兵を授けて守らん。己が身は伴當三十名を率て當所に故りく三所の神社正八幡宮平佐の神諏訪明神へ参詣て逆賊誅

伏當陣を異の神助を默禱奉るなり。然バ又その朝館山の城内男。昨夜願八狼之介们を從ひて羽賀へ夜
襲ま赴たる雑兵が幾名か脱れ來て躬方敗軍の事の顛末狼之介も願八も果敢く俘まされる為体を
報ゝ素藤大く驚たて盆作本膳碗九郎沙雁太麻嘉六们を召聚て支の趣を言示ゝぬ。こゝ羽賀へ推寄て
いざ願八狼之介们を拯奪んと敦圍けば。大家倶ま驚ぬ呆て中ま本膳ハ最愛の
櫛子が。敵の虜まりるうを少くも堪ぎ胸潰れて恨の涙ま方ゝ。單只管素藤ま薦めて又清澄を攻
撃んと請ひ。衆議竟ま一決ぬ。その故ま素藤ハ細作兒を遣て敵の虚実を覘ぬと黄昏時候より半
遣りの者夜中ま方の來て清澄ハ今朝未明ま殿堂へ忍ぶ。敵一人も伴ぬと報ゝ素藤いよ
後悔て我が方を知らず路ま埋兵て清澄を擊捕ぬ。終其首まを及ぶとも他が戰米ハ幾十疋の
馬ま駝て運ゝんを奪畧ぎ。悔ぬ然ま也願八と狼之介ハ殺られる狀其廢ぞやと問へば答て然ゝ件の二人ハ
ぬ。仮ま殿堂へ忍ぶ。れ。ゝ方ぬ者ありと少ま怪ぬ。徒れが繁く禁獄せられて那也ま。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。素藤慰められて細作
兒を遣りの。その終夜枕を碎く思ひ沼ま。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ

引き寄せ耳元に素藤満面うち笑れて感歎と大々こゝろ遣ふ一大奇精妙
至極の仇敵ゝ身をもて誰よく其の期を待ちあるこゝと示し合ふ遠く故の坐席を出て来る。然而金作本
性素より名ある士なるゆ俱に覬覦ふせられんゆへ君の為にあるべきぞ又賢慮を旋らしめと憚る氣
色もなく説き示し高宗も亦いかに不佞が臆断も田税生と異なるぞ非除月今両個の生口願ハ狼之介を交
易して返し遣はすとも素藤誅伐せ折ふ他人のゆく免るゝ只その天罰の至る所速やかなるべし躬
方の勇士を喪ふ悔も及ぶべきの言と俱に意見を盡さぬ清澄然るゝに黙頭して使价の兇業ふ箇
様箇様ふ答更躊躇の応対をべきぞと高宗あるゝ退りて軈て沙雁太と麻嘉六とも対ひて来意を

欺き軽々しく許容せべきぞ。先逸友を招き寄せ。衆議の上ゆく応をせんとて。雑兵を走らせ田税
逸友を招く件のよと偽りと。偽りと。知て意見を問ひゆ姑且七逸友ゆ現素藤ハ詐欺まるゝ
ども先良千と支勝を受合ふ天ゆ後ゆ業當と出高を遮與ゆ一切後悔なるゆ貴老の知せゆ
牛助友勝ハ浦安兵馬衆勝ゆ弟ゝ兵馬ハ曩ゆ御曹司ゆ俱に当所諏訪の社頭ゆ賊徒の火銃ゆ
斃れゆ幸ひ神の資助ゆ蘇生ゝ今ゆ存りとゝ雖ども歩行不便の人とゝ雖ども然る支勝ゆ怒ゆ停と
なるゝ獄舎ゆ艱苦を忍ん然信る便宜ゆ救れ出忠戰義烈ゆ甲斐ゆ見ゆ似ゆ又良千ゆ忠義の本
性素より名ある士なるゆ俱に覬覦ふせられんゆハ君の為にあるべきぞ又賢慮を旋らしめと憚る氣
色もなく説き示し高宗も亦いかに不佞が臆断ゆ田税生と異なるぞ非除月今両個の生口願ハ狼之介を交
易して返し遣はすとも素藤誅伐せ折ふ他人のゆく免るゝ只その天罰の至る所速やかなるべし躬
方の勇士を喪ふ悔も及ぶべきの言と俱に意見を盡さぬ清澄然るゝに黙頭して使价の兇業ふ箇
様箇様ふ答更躊躇の応対をべきぞと高宗あるゝ退りて軈て沙雁太と麻嘉六とも対ひて来意を

摠大將ふ具ふ信へひーふ敵躬方の生口と交易のためーあるべき例るをもあるねば枉く所望ま依べをるる。先良千と友勝と本陣へ送り來ーね他們ど命ま惜もるくば對面してその後ふ業當出高の三名を遞與もべーる。義倘相違あるべ交易破談ま及んのこ立ったりくあの趣を墓田ま信違いかーといられて沙雁太麻嘉六ら。あろ沼白ま額を働く御返答兼ま申ん然らば両個の生口児と俱ーく亦復まあるべー何で相違あるべをを答て出ーをるみけり。信夫高宗ハ本陣へ赴ーて素藤ど両個の使价の兼諧ま申ーと清澄ま報と逸友と共倡ふ館山より良千友勝と送り來ぬるやと等程ふ那城内ふ諸ふ縁ま用意と考ーりけん。約莫一時ばかりと經て又那沙雁太麻嘉六ハ登桐山ハ良千と浦安牛助友勝と筏轎ふ乗ーて來ーければ高宗隨即雑兵ふ出近せ案内の與ふ者の身も俱ま立ーく本陣へ伴ひけり。登時荒川清澄ハ逸友をもく友勝と良千を受合ーるふ他們ハ金瘡ま悩る欠然らぬい獄舎ふ疲労れる欠速ふ轎子ま出難ーと駭く雑兵們が扶ーけ二人の左右ろ肩ど掖て縁頰へ推登ーるふ果敢々ーくへるのも泡いいど清澄ハ是ど見て先良千と友勝を奥の方ま惟幕の陰へ遣ーて雑兵ふ勅ーて醫師ど呼て他們ど安危を尋れば醫師ハ先良千友勝両個の脉を診ふて金瘡ま二子俱ふ愈ーるに乗力ま疲れあるのみとふ知りて疑ーるふ即便雑兵ま下知ーて生捕の賊徒碼時廟ハ奥利狼之介と獄舎ま牽出さく。郷縛の索と解れば高宗逸友あろ沼く沙雁太麻嘉六ま遞與ふ折交易相違るをよーどと云云といふ知られば沙雁太と麻嘉六ら歎びを舒件の二人を受とり伴ふて外面へ退るとふく。吊ー來ーる轎子へ乗ーく伴の轎夫ま早ーく卒とぞるふ飛ば似くま走去りけり。姑且ーく清澄ハ良千と友勝ふ敵の虚実を問んとく。高宗逸友们と俱ふ奥へいるとー程ま人の駭を叫ぶ聲平るーぞ生ーを他ハ奈何。とぞるま迭ま面と指ーる。俱ま訝ーく思ひ浩処ま醫師と両三個の雑兵ば奥より慌ーく出ーく來清澄們ま打對ひて敵の使价の俱ーく來ーる。登桐主浦安主ま目今湯液を薦んーて諫て茶碗を落ーる那人達ま濺ぎ洗ひふ怪ーむべー。件の両個ハ登桐ら友勝主ふもひ変ーて両箇の草偶児ふ為ーてそれと報ふ清澄高宗逸友驚ま呆れて辨ーもく遽ーく身を起ーて。齊一其首ま彷て見ふ果て両箇の草偶児臥ー横ーりて蒲団の上ふあり原來良千友勝と見えるハ此ーりけりと悟ま悔て甲斐ま一期の不覚ふ且恥且憤りく。眼を睜りま又ま尋思も似ーる三個ば當惑今ーせ粥ーるりけりそば中ま逸

友八。恨ヲ堪ぬ聲高ふ嘸憎き館山の妖尼奴ぶ両個の告と奪畧らんとそ。幻術とりく恁まぎふ人の眼を瞞ふ。遠くハ也ん使仆の奴们赶住めそ。願ハと狠太介と捉復え兵毎馬と牽出さぬやと。敦圍ぬ暴叫立れば高宗も共侶まとそ。身を起えとてけを清澄急ふ推禁めそ。小森田稅さのこゑ惴りそかくの鉈ぬ幻術と。

もく人を欺く金剛禪们と駿馬を乘て赶へうとも。いふ七及ぶぬ。慈ふ也を出さばいよく胡慮まるえんのミ知カと。

也征ーかこゑ遠ー邊ー墨敵と知りつ。性起らば他们が圍套ヲ乘せらるゑもあるえん先稻村へ注進ーて上の賢慮ー

伺つ。車ひふーく後難を免るゑ。ぬくぬまるえん世ふ大將ゑるめ。軍陣ヲ立ニハ天子の命ぐも俟ぎとふ唐山の制度ハれどもそも亦時宜ヲ依ゑぬを進退賞罰訓心を師とそ。已が隨意做えふハ臣ゑ者の本意まあらぎとふの義ふ儘ーぬふぎやと。啣語がまく諭ふぬを逸友も高宗も當然ゑ理ヲ勢ひ折けそ。沈吟ゑる正平晌許憶ぎ俱ふ太息を吻そ。現先老の御主意ゑふ上やひぬを。安ぎ是笠の顛末を稻村へ報まりく。あん下知ヲ依ゑ老よん快々脚力と。まぬ。遲緩ぎべゑぎと。嚴ヲ課先ば。高宗逸友も亦心を屬けく。館山ゑる那女僧が幻術ハ料りかゑり曩ヲ看人武者助ぎふ。欺れゑふあれば。路次まハ俱ふ心ーく。馬を間斷ゑく走らぎべ。快々立ぬとそ。ぬ。家介ハ欣然と兼欽び直いふゑ。儒ふ在下们が志願のごと。今番の役ヲ立られふ復五郎ハ初度の戰ひヲ痛殘を負そ。いまぬ。起ぎ身も亦ゑる功ヲを慨ーく思ひふ。倦る火速の丸使ヲ兼りハ面目何事ゑれ優ぎべ。今宵終夜騎走らて明日ハ未明ヲ大城へ着到仕りハ。ふの義也心安ふべーと答て躰て佳橋と俱ヲ遽ーく退ぬそ。身裝ゑる書筆と項ふ掛ヲ二騎相並ーく稻村を投ていそだけり。ふの時昼ハ斜ヲて下晡ゑりければ出来介桂橋ハ通宵連ふ馬ヲ走らーん。ふの詰旦いと早く稻村の城ヲ來ければ迺正門の番卒ふ上總ゑる殿臺の陣中より荒川清澄がまゑーせる。脚力ヲとりハ知らて三足の馬ヲ蔡る駐めそ。東六郎辰相が宿所ヲ赴ぬ對面と請ふそ。館山攻の勝敗恁々と来意ヲ告そ。清澄们が連署の書翰ヲ遞與ーけり是より辰相ハ出来介

詰茂佳橋とふ一個の若黨ヲ召よせく。稻村へまゑるべ。火急の脚力ヲ吩咐そ。書翰ヲ出来介ヲ遞與ーて。いふまふふの書ハ東六郎の宿所へもくぬを。ん吉ヲ伺ふべ。我汝達ゑ好馬ヲ借え。佳橋も俱ふ騎馬ゑるべ。努ヲ遲緩ぎべゑぎと。嚴ヲ課先ば。高宗逸友も亦心ヲ屬けく。館山ゑる那女僧が幻術ハ料りかゑり曩ヲ看人武者助ぎふ。欺れゑふあれば。路次まハ俱ふ心ーく。馬を間斷ゑく走らぎべ。快々立ぬとそ。ぬ。家介ハ欣然と兼欽び直いふゑ。儒ふ在下们が志願のごと。今番の役ヲ立られふ復五郎ハ初度の戰ひヲ痛殘を負そ。いまぬ。起ぎ身も亦ゑる功ヲを慨ーく思ひふ。倦る火速の丸使ヲ兼りハ面目何事ゑれ優ぎべ。今宵終夜騎走らて明日ハ未明ヲ大城へ着到仕りハ。ふの義也心安ふべーと答て躰て佳橋と俱ヲ遽ーく退ぬそ。身裝ゑる書筆と項ふ掛ヲ二騎相並ーく稻村を投ていそだけり。ふの時昼ハ斜ヲて下晡ゑりければ出来介桂橋ハ通宵連ふ馬ヲ走らーん。ふの詰旦いと早く稻村の城ヲ來ければ迺正門の番卒ふ上總ゑる殿臺の陣中より荒川清澄がまゑーせる。脚力ヲとりハ知らて三足の馬ヲ蔡る駐めそ。東六郎辰相が宿所ヲ赴ぬ對面と請ふそ。館山攻の勝敗恁々と来意ヲ告そ。清澄们が連署の書翰ヲ遞與ーけり是より辰相ハ出来介

佳橋と旁ひ。そゞ侭宿所に留置紀件の書翰を素箱に藏る侭伴若黨に持しく君所へ出仕せるに姑且く杉倉氏元堀内貞行も出仕せゞ隨即件のよりと告て俱に披露に及び折義成主その書翰を迎習讀して所の第一箇條に初清澄們が舘山へ推寄て素藤と戰ふ。躬方に勝に乘じ折素藤が陣中に妙椿と喚做る一個の怪異女僧あり。たゞも行ふ幻術に魔風猛可に吹暴れて沙と颺げ礫と覆し天地晦冥なるに中に浦安牛助友勝に落馬して脚を傷り。雜兵に多く數ん。金竜児に満呂復五郎們七八十名に及び主に駭紀嘆じ。嗚乎危哉々々果して是素藤を幇助ぬる悪物あり。曩に貞行們を魅して中途より返せも地道を穿て訴訪の巨樹の根より伏兵を出せもその女僧が所行とけん。然而その次に甚麼ぞやと問せゞ又讀む三箇條あれど清澄高宗逸友們に薄疾も屑へず速に殘兵を聚合て羽賀に退紀し當晩礪時顧八業當奥利狼之介出高と喚做る両個の賊徒が五百個許の兵を領て羽賀の地に襲ふ。龍衣に折清澄たゝかの機を精して伏勢をりくに破り賊徒の頭人出高業當を生拘て次の日也と勝鬨を

紀せり。詳に載るの義成主合失て通愛く計りなけれ。然でも畫の敗軍の恥を雪めん而その次に第三箇條を亦復讀して所の素藤們が機変の事に及ぶ夜本陣に生拘る賊徒礪時顧八業當奥利狼之介出高と両個の賊徒が五百個許の兵を領て羽賀に退紀し。笠を傾て今朝舘山の賊寨より素藤両個の使价を遣りて又再四詮説の上相違あるべきもあらざれば則素藤が所望を許し。先良干と友勝を受合て後に業當と出高と素藤が使者に遞與して還しつかはす。豈思へや良干友勝に真のりのふあらぎて草偶児でかと讀むに主從胸を撫して相顧て嘆息も是より上下の條に清澄們が意見を寫して素藤既に恁まで怪異女僧の幇助を仰ぐに人を愚に做もの段あるに只力とのみ克んと思ひ又幻術の中られて反て不覺を取るのみ。ゆゑに主君に対して義成憶に教圍紀ぬ側聞に三家老氏元貞行辰相も俱に呆れて

と
畧られ一ぢ上ゐ攻伐遅延ゐ及びるが怠慢のちゑ咎。影護くゐ（がもん）皆」と請まりて以後の進退仕るべゑ。
因て注進の状件の如し。四月日晋上杉君太曽人殿堀内蔵人殿東六郎殿田鋭力助逸友小森但一郎
高宗院川兵庫助清澄。とありければ。義成屢點頭て三家老们ゐ宣まう。老輩いろ思ふ
らん清澄が主意甚佳寛の一字を守るゐい先例既ゐ上言ゑ姑且賊の妖氣を避て他ゑ戦米竭る折ゐ代ゑが
ゑらむ功あるべし。れど支ゑ間ゐ妖賊ゑ殺を旋らく。射方ゑ悩をゐるべゑ。欲是ゐ亦知るべらむ。あるとりく我
思惟るゐ大江親兵衛が感得ゑる那仁字の霊玉いかく邪を退け妖を征ゑ応験の灼然ゐるを人の知る所ゑ件の
玉をいぬる比我親兵衛ゐ借得て。今ゐ埋めく土中ゐ在り。濱路が病着瘡りて那物怪も絶えれば只今玉を
穿出さ七権旦清澄ゐ貸與へるべ今親兵衛が在らぬとも件の女僧が怪一ゑ見と破る身の備ゑりぬべ。あの
義ゑ作祭と向ゐ免ば氏元貞行辰相们一議ゐ及ばぬ義諾ゐ卿諚寔ゐ理あり。去ゑ。と稟ゑ一ゑ我成
則近習と立て。衛ゐ玉を埋るゐ奉ゑる奥隷の老黨を召よせ且今那玉所要あり。速ゑ奴隷を聚合て箕貢
子を放ち穿出さ玉を取ゐ奉ゑ。快ゑせよ。といそがゐ奥隷の老黨い兼りぬと応ゐ慌ゑぐ退出ゐ。

第百十三回　江湖の瓶里見侯と醜を
一級の首南弥六を徳り

義成主那霊玉の瓶と等ゐ程ゐ又二個の老黨と素藤征伐の得失利害と云云と討論ゑ。他が
機変の怪しかゑ一ゐ就て又宜ゑ机上の理論い儒の虚文ゑ辨い要ゑ見ゑ名詮自性ゑ見ゑ。
那素藤が狡猾ゑ牛助と共て狼之介ゐ易登桐と共ゑ偽時ゐ易ん。と哄えゑ即これ汝们ゐ。
ぞや。夫牛い仁獣之狼い悪獣又桐い直木之偽い磨石ゑ。陳砥之仁獣の牛。悪獣の狼ゐ敵一ゑ。直
木の桐。疎砥の堅ゑ及ざるい猶孔子の盗跖ゐ怒罵られ孟軻の臧倉ゐ譏誚られ。如一盗跖孔子を
罵るといへども孔子の聖人ゑる害ゑ一臧倉孟軻と誚るといへども孟軻の大賢ゑる害ゑ一此ゐ由て他ゑ怠
ゐ二賊が昨日極れて射方の禁獄ゑ免れい実ゐ免れゑ。機変ゑ。と人を欺ゑ一のみ又良干と友勝が
敵の俘囚と免れ。れいゑ。その解尼の時の至ゑ。ゑ。素藤既ゐ詐の誅ゑられて業當出高と奪得ゑり
ゑ。ば狼良干友勝と久ゑ内置ゑ。とも急ゐ害ゑ。ん。素藤ゑ。ん是ゑの望と遂ゑる故ゑ然い思ゑ。と論一ゑ。ば氏

とさざめきたるに、元貞幼辰相い感じて、膝の找むと覚ゆ。俱に主君の宏論を稱賞して、論議の時を移すに、浩然の氣、奥隷の老黨、某甲が方寸中より、突出でくる靈玉の瓶とそを保ぶ両個の青侍は吊運してそを束て且緑頰の老黨に、措しも找えんとすと、徒らに報恩せざる義成、徳を南とする瓶の壊の秘を内る壺を、合出せよと仰ぶ老黨、緑頰は退いて青侍と共に、八重縢せ、藏索と左右に解捨て内る壺を合出して、両手に捧げそなへもける壺を、鄭重に埋め、折義成、封印して、封皮に土氣の湿るを、舊の保に戻して、ありけり。小程、青侍は、空瓶を吊起して、緑頰より退いて、奥隷の老黨、辰相は、後方に坐す。登時義成主は四個の老黨に宣ふ。汝は、いまの靈玉を、一覽せざりしかと、折問ふ。そは、仰ぎ、大家額を、傾て、御諚の如く、其玉は、人の噂に、聞ども、義成、手壺の封皮を、合放して、内は、蓋を、開て、見ん、と、答る間に

ぶやと諭さと辰相さえて各の論議のよりあれども俱に推量の外とせを願ふ矢江親兵衛を召返して問せ玉
へ。萬ふ壹あん疑ひと解くようのあるやせんとぶと義成主所のぶて三個の論議皆申す木曽介が疑ひも左の
ごとくに又藏人が論ずるように寔ふその據あり然とそ當ふ占定めるから唯六郎が所事の捷徑ふ似れ
ども御尚ふ我思ふようあて權且親兵衛と遠離るふ他よ借くうる靈玉とその折ふ返らせ埋め伏ふ喪
なりとそ今遽く親兵衛と召返さんさいぶ女子に者と思られん因て熟思惟ふ那玉へ親兵衛が母の胎
内より感得して靈驗ありとぶえよ非除異人の教とも他ぶ衛と倉放さそ濱路姫が身の衛ふせんそ
土中へ埋めへ我第一の従ふ總て名劍古鏡の類もの人ふ与て身の衛と做ふ又その人ふ与て出祟を受く
倒へ和漢ふ事ふ徨ふ従れ那靈玉も親兵衛ふそ身の衛ふ与て応驗ふ与けの濱路
ぶ與ふ与ふ我ふ自然と亡せも以ある開とふ我ふ今その玉を今ふ
荒川兵庫ふ貸與へ女僧妙椿が幻術と折んと欲りせの是徐ふ衍堂ふ果ね私情のそ大人君子の苟且
あ為ふ心ふ与ふ今ま心ふ与ふ我ふ亦鬼魅怪ふ惑ふ事れ狡弓新八幡宮ふ奉ふ由ふ又

思ふ我ふ親兵衛と疑ひふ開も亦心の惑ひふ一狡れふ人ふ
大洋の胸廣ふ一名將も測り難ふ妖孽魔障覚とふ
黨ふ召返されば親兵衛ふ情由あけんと猜ふを明君みつふ徳と飾り多ふ
感心の外ふけ姑且て義成主ふ又辰相が宣ふ靈玉のふへも何ふ悔ふふも今ふ術ふ長
詮議ふ無ふ大江仁ふ我ふ思慮を旋らて召返さとも返さずとも目今あふ話まふ只要緊ふ素藤と
征伐の一議と我腕の病着の徒まで過半摩ふれ出陣ふかくもわねど然とふ軍功ふ清澄が面ふ
我も亦那幻術と急ふ控ぐ術ふあふ徒れば清澄ふ請ふ儘て續の一字ふ書とふけ馬方ふ二三百の戰
殺金瘡児ふ一ふれ加勢の軍兵五百名と殿基遺ふべと宣掟ふ近習ふ視名と倉ふ来ふ里と
麿ふ筆と染て傍ふ措れ扇子と開て一ふ寛の一字と寫て一ふれを辰相ふ遞與て又宣ふ這扇
子ふ清澄が我命令の照据と坐右ふ懸て敵を守ふ事速ふ軍功ふくも馬方と損せ敵と押え汝們
連署て清澄が我這旨と偽へふ又那靈玉の立ふ各秘て人ふ知せそ徒ふ折ふ人少知ふ

言いなろ　さ　こゑへけんきそうふうこゑ　ぜう　ゐ　ぐそくを　きども
怪ふ敬雪ゑ奇と唱て牽強傅會の評をも倣え就中女子毎ふ兎毛許も安甘ゑぞよゑ玄の義も都てゐくろゑよ
いとねんろ　ぎめ　みぎくとも　とうけ　つれも　ぎすべ　え
と最叮寧ふ示ーゑゞ犬家俱ふ言美きてうち連立てぞ退りける小程ふ安西出来介景次へ詰茂佳橘と
ゆうとも　とうのうくらうとをけ　ぎ　ぞとで　ぐーふみ　まうぞ　ぐ　ぐくぐをを
共侶ふ東六郎辰相が宿所ふ留やれて下知状を程ふ姑且暇ありけれ佳橘ハ主の清澄が宅春ふ陣中ハ趣と
つぎ　いで　きくできすけ　とぐろ　おき　ぎーい　ぐ
告知せんと出ゝ〳〵ゆゑ又出来介ハあの年来浅ゝ〳〵ぞ交らるゝ荒磯南弥六が安否を訪ゑ今番館山攻の勝
ぎ　つけ　れ　ぐさ　ぐこ　ぐとをまり　ぐ　ぐ　ぐ

南弥六面と和げそ外面へ出し門の戸と固てゆさぶり坐と占て額を合して悄語くやう。和主もかな我れ曩に富山神童に生拘られし時命い既に亡ぬるを一に花侯御父子の仁心深く罪と宥め頸と接して月俸とさへ賜り給ひ。這再生の大恩を亭々人に提れる忠も盡さば義に仗らぬ富山で犬江に撞れ折那伏死ぬと優とせん。此も是我日屬の志なるべし。當初和主們い素藤に従て富山の情由さあるを知い御方の士卒が疑んとて三人を一人送されてこの回の軍役に漏まじい我身の貧乏を圍武士のいれとそ心まで見貶されい情なしと我素藤と數る捕るのあるとの君侯いかゝ家老達猫児も鞨氏も胆と淺しと稀なる義烈と称て思ひ入れ。

弐る命と其首に喪ふとも名い後の世に遺るべしと思ひも素藤に仕へ奉る我身を那兄堂に相識あり。何をよろぶに舘山の城内入るとも謀て素藤に近づくと獨肺肝と摧ぎ今日究竟の便宜を得ん身ども我身単者の事足る所ぞいで和主と相譚んと思ひ折に訪まつ天望成就の祥なるべし忠義の與に百稔の命惜まじと思ひ問ふを待あ也開ん又諄。我も武士火と踏み水に淪むとも和殿と資ざる絶快映機密を告よ。とのに南弥六駭頸で便宜とのいの別義あるぞ和主も面喜りてあらんぞ。

禁獄せれ程同じ獄舍に繋れる鳥野戸郎六と喚做る罪人八人を殺せ強盗積悪既に分明れ今長須賀安房郡の在り村を距る西北一里許る。の申明亭に梟首せらるゝ。その件の戸郎六を俗に云他人の猿肖とて面影に左る頭の黒子まで荒川素よく肖て羊の齢も相応して五十許に見えれば我與の奇伝貫平宵我いその首級と竊て舘山赴べし和主も亦殿臺の御方の陣屋へ送るべ先舘山城内へ入る笠前書を射入れ。箇様々々ふり誘へ同志の乾兄荒磯南弥六と喚做る者と俱に清澄の寝首を捕て今宵夜半に持参せんその折を城門を開き大れ。その書に寫さば素藤必信容れて首級実検とせば我們両個に對面せん。その折倶に七首を懐に飛近つき素藤をば數る捕らばその餘の奴們幾名あるとも殺散んと易るべ。俟て火を放て暗號を做さば荒川主の火焔を見て敵城に変あるべんと猜て攻べ。かゝの如くなる事十二分の造化なる。那妖尼がその機を査て敵に高を田断く其頭の田地に至らずとも對面せば素藤と數る果て戰殺せんと計りて那城内へ入るとき和主に在り既に入て素藤を數る捕るとも我に機密とのいい是のみ甚麼とのみ甚麼とせんと又他事も多く耳に示せば出来ん听つ然ばそれ又ぞ

妙策を前書にかきつらねて和殿明日那地迫られば普請の邊の蘇を利るを里野芝我がなれる苦の復文
共侶は館山の城へ赴んといへ人の心術なり。安定寺の
今の國守の乳與は又素藤と刺すを善悪その差ありとへども行ふ所の異なれば俗云内股膏薬は
そもそも誠の人かやうなるを南弥六推禁を人何ともなれば暗を去て明に就く昨は非して今は是
一善一悪我は在の世の産長貶は拘つらんを紛の所作とも悪を資けて栄んを善は與して死んを大丈夫
なべれ後ろ又ふるところ諭せば出来介又異議せば然ば和殿明日悄を地は那首級を携て黄昏まぐれ
迹より来よ我は守の下知状を賜りそ又通宵騎馬を選ばれ翌の早朝は御方の陣へ歸着せれば疑
ふ約束を違へと示を合ん立別れて東の宿所へ退けり。程は東六郎辰相は夜の日申牌の左側は稍
宿所へ退けりて隨即出来介佳橋們は下知状を遞與とらるる這個の書筒の内は館のあり自筆の
肩子もあれば少く略次は小心と兵庫助は遞与もべしの餘のあり徒々と可密はあるべしと身の暇を
今はせしの出家介書筒を頂の機けを別を告げて佳橋と俱は文騎馬を始めてこれを通宵連の路を

いたりけり。然ば又南弥六は今宵上總へ走る元用意を做と程は先市は立出て刃を揮て一口の七首を貫とり
たるを。倘宿望を汲深ぎ七命を喪はるるを我志空とるべて人は逐電せーと思へ一筆送まるべしと
深念をまるく素藤を數まるく欲き宿意を寫と硯笥の底は藏の物既は整はられ長は腹掛の刀帯て
身甲は秋は包をみるは是を搭駝とその曛氏は正門より出て長須賀を赴き申明亭は来るれば果
きそ鳥野戸郎六は既は首を刎れる首級は樗は載て在り尚甲夜なれば開を成る元児は憚るそ出下を
其頭を徘徊せ程は短夜を深初て子二刻時候を隨は元児們は退去て寺舎は入り元在を
南弥六は便りを潜びて戸郎六は首級を安を准備の編袱は推裹を腰は
附て出ることを幾を思ひ日を岐路より突然と走り来るのあり南弥六は心驚を誰を遮長
視れば怪しむべ一個の女僧と美麗の少女は布囊を衝せを肱腹は抱を當下南弥六は
這奴は出家は似けを必是拐児を良家の女児を窃を恢を侠を乱を近て隨は立
塞を。憐俗児等を吸禁を。肩尖抓て按寄を女僧は噪を振放を秀を中を修煉の春を南

ぬちん
まちびな
くさね
善悪も知
らぬ
三人
烏夜ゐ挑む

弥六を憶ず膳を撲と叫ぶ聲もろ共ぶ仆て殿堂に撲地と仰反り浩処ぶ一個の乞児棹棒を
挾て南弥六が迹を跟て来る方僅這女僧が光景ぶ怯とあるべく持る棒を拿直一振振て耶と聲
被て殺ぬんとせし女僧いまもたちまちに口ぶ唱る呪文と倶ぶ乞児が棒を持る仆ぶ前キ四三間後ざま
ぶ倒れ仆る徒て女僧が少女子を左ぶ抱て毫も故障なき右のかいなを挿らまで腰ぶ帶る戒刀を抜りと
抜て南弥六を結果んと立寄る折く奇哉一個の神女最大なる狗児の背ぶ立て富山のごとくして
瞬息間ぶ影向の快を現前のごと降集る雲を靡かて忽然として件の女僧の目前ぶ立あらぶ女僧が
咤嗟と驚ぶ怕れて已を沈ぶ戒刀を殺拂んと見ぬ那時遽一這時速一神女が右の脚を以て透さぬ女
僧の胸前を蹴ぶ神罰覿面女僧が一聲叫ぶ果ぬ搔抱ける少女子を放て仰ぶ倒れ登
時神女が少女子を狗児の背ぶ乗せ又霊を踏て中天ぶ升る身を聳て往方も知ぬ程ぶ
南弥六も乞児も倶ぶ我を復して神女の奇特を驚く敬畏ぶ且畏て一霊幸時が仰ぎ瞻送
る那女僧も亦孰地ぶ仆て撲滅を欲くして外の奇怪ぶ空骨折ぬ乞児が南弥六ぶ

ぶ去ぬ後ぶ星の光りが透て来る蒐ぶ南弥六を引ぶと避て両三番蹴
きて衝る剽姚足を飛て礮と蹴る蹴られて乞児が阿と仆ぶ死活が知ぬ転輾ぶ
六々足が信ぶ星月夜鎌倉山ぶ向ぶ奇異ぶ鐘数ぶ七ぶ貴夏の夜のいと深ぶ明易
七ッと六々十二里熟れ路を遥ぶ上總と投て走りけり不題再説素藤が妙椿が幻術の帮助ぶ討
て天将清澄山を恩ぶ隨ぶ眩惑して前日那隊ぶ生拘られる願八と狼之介を奪復て引ぶ扶ぶ大
ぶ殿堂の勢ひを援ぎて殿堂推寄て清澄を撲る捕て尼姑も倶ぶ出陣して例の風を敵の士卒ぶ息
と吹ぬ吹ぬ妙椿推禁ぶ怖りぬる開ぶ乞ぶ咱倩が起て猛風が野戰ぶ利ぬれども也を撲る妙
且殿堂ぶ地高を敵を隈く直下せば前を裝ぶ石を擲ぶ他が利ぬを射方が利ぬ況三社の
名神が就中正八幡が源家の氏神なるを以て我祢も亦思ぶ隨ぶ紛ぶ紛ぶ清澄鈍く謀ぶ
て生拘二名を復せば必怒りて推寄せ来べ。その折ぶ又風を起て乱る処を攻撲ぶ漏さじと欲ぶ血ぶ
ぶ既ぶ寄隊を殺拂ぶその勢ひを稲村攻入んと易ぶべ。と論せば素藤感服して敢て兵を出さ

躰て礪時願八と奥利狼之介を召よせて那陣中の虚実を問ふ件の両個は再生の恩を稱て答へ清澄
とせの勢ふ如ねども士卒號令をよく守りて使々とする足の如し剛又高宗逸友たちの男まり侮りくいと素素
藤領主て然るに他ふ推寄来るをそ中途ふ逆撃ん細作兒を遣て敵の動静を探ぶとそ準備を
あるとーふ清澄の推寄せても来ぶ城中姑且を事ありけれ素藤は退ぶて早も後室ふ在り小人奥ふ暇あ
れば妄想慾火と倶ふ起りて遣るかを考りけるとも戯れる語次ふ妙椿ふ其くを徒らぶ身の與ふ情蓮
糸似れども鄭高ふ身の法術をもて大江親兵衛と追遣ぶ我復此ふ據るとも此ぞ里見と牛角の軍い
まれども遂ぶ濱路姫を見るとを得ぶ亦例の妙術を擬攫ふ来ぶ我本来の迂足りて身は正室
他の側室と黄金を左右ふ持るよる義樂ーかんぶ其田地ふ至るかを抑甚麽る因果を諍
説ぶ妙椿慰ぶ有りかるいる理を咀俤何ぞ世間の婦女子ふ等しく喫醋せんぶ那少女を擬攫ぶ身を
望を稱へと思ふるふあねども旌揚の始より又敵を引受て日毎の軍議ふ暇なれぶ届で默止せ
敵寄ぶるあ虜今宵稲村へ赴ぶ碧旦剛領て来ん臥笠備せるぶと輒ぶ誘ひて

折節もぶ妙椿のそ黄昏より忽然とそ遁ぶ素藤は遂ぶ濱路姫を連て曉を遁ぶ
ふ次の日ふ至りても妙椿ふかの悪ある那濱路姫の臥房の下へ埋措ぶと咲えて大江が霊王ある故ふ輒く便りを
給ぶ死ぶふと思ふ人ふ問ふるるを胸安ぶ思ふ程ふ右の日未下刻後門を戍る雑兵ふ前書を捨ひ
ふ許ありそ奥利本膳ふ郡兵をけれ本膳その紙門を携来て素藤ふ告知ぶと素藤は訝りぶ箭
書を本膳ふ讀て聞ふ安西出来ふ内応ぶ密書をそ里見義実と
狙撃ぶ不事ふて大江親兵衛ふ生拘れて久く獄舎ふ駕ぶ舊家の子孫ぶとりて義成竟ふ在下
ち們を饒て這回の軍役ふ従へるの故ふ毎日より清澄の陣中ふ存ぶ胡馬の北風ふ嘶ぶ烏鵲の南枝ふ
巣るとい故と忘れぶ在下們已ぶ為ぶ姑且寇家ふ従ふ君ふ受る年来洪恩を忘れんや脱れ去てその
大城へ還るまんと思へども功ふ饒ぶ計較ふ満呂復五郎重時は日の閉戰ふ流
箭ふ傷られて存亡不定ぶ商量敵ふ及ぶ粤ふ同盟の義兄弟芦磯南弥六と喚做ぶ者ある
他へ名ある任侠ぶ昨日安房より来れば隨即南弥六ふ密談ぶ示し遂ふ幇助ふ做ぶ是ふ

今宵清澄の睡頸を捕て陣屋に火を放て暗殺を見あらば殿臺に火の起るを見あらば各々勢を找ち攻撃て
衆を惑はし倘火を放つ暇なく清澄が首級を携て南弥六と俱に推参せよその折実検あらばその孫愚
衷す楮の幣一かたり。餘は幷謁を期し誠惶々々謹言とありけるを素藤は西三番に復さ〳〵うち
听て現出来介が返忠は搗鬼なるを告れども今の世の人心必とも定め難し衆議に依るべしとのたまへば盆作願
八碗九郎沙雁太麻嘉六狼之介ら皆餘も都て頭連す凶黨を召聚會てよと告前書を乃ち
その意見を向けふ大家半信半疑て虚実を安定ふかのみなる。評議區々なりけるを平田張盆作推禁
めて各何ぞ狐疑ヨリも敵に俘りて反忠の内応を做す者の火を放ち暗殺せんとて敵を切処に共引寄
せて伏兵をもつて撃破るを段い和漢の軍書に徳を安西出来介が火を放ち暗殺せんとも
あぎ這度は決て信ぜ〳〵他倘清澄の頭顱を捕て南弥六共侶身を脱れて今宵當城へ来るべし則是照
据の召入れて実検を備てんと相違なく殿臺へ推寄て攻撃るとき貝方大利敵を備ふるべし主将の
横死を驚噪く士卒は狩場の野雉に似て逃るを驚く狂瀾て収まらんと欲すれ疑し怒ふるを席を拍て論せば大家

俱に然りと答て更に異議なるもなし。就中素藤は鉄心信て感じて已まず盆作はうち對ひて
與冬に通論せる然るに今宵更て東出来介が南弥六と共侶に来る城門を敲く向極め
内へ入れて速に我が報を齎す首級を実検を清澄は疑ひなくその丞の錫を立地に出陣て
殘る奴ら〳〵を殺搏へ其頭の准備もせよかと下知して評議は果しなく会なるを退出けり。話分両
頭。介程に安西出来介景次は詰茂佳橋と共侶に稲村の城へ舞い去りしその夜の歇に馬を
なぞ。次の日の朝未明に殿臺へかの来ふければ清澄はもとより遊興けるを清
澄は逆友高宗ら〳〵を招集て聚合て俱にその書を披見るに清澄は盡く怠ふ城を攻伐の
べ〳〵宜く寛の一字を守りて敵の懈るを待べしとある君命を偽れ且義成主の自筆を寛の一
字を寫せ玉へ。扇子を命令の證据とて清澄は高宗逆友ら〳〵と俱に賜を
拜し相懽ぶてよりと士卒に御示し固く屯を成しを一騎駈の鬨戰を許さず出来介佳橋を労ひ
休息の暇を取せけり。偖而安西出来介は昨日南弥六に相譚れる約束を錯へじと思へば両夕睡

ちぎりける長途の疲労と醫して、そこと母思と考へ退いて一雷妻時假寐の枕に就いしが午後時候睡覚て更に又思ふ今宵計りも敵城に入ることも敵も亦その備あり計畧紛れ出て生て二度還りかたし然るを御方に知るもあるは忠義の與に棄て一命の狗死にするんのみ考へも御方に今猶必勝の勢ひ有れば首級両端の思ひと做て又素藤に降参せ狡と疑れもせば朽惜かるべ然バとて這回の機密を人に告べもあらば我子は一個あり遠山寺に在るこれば這遠も死便るもあく今般の對面いらくかさう只満呂重時のみ年来貳心なく交りする同憂中の友なれば他に悄々地に告ぎて出ず思ひ我上の咎て折る恨もせんと思のあり金瘡児に告ぎおもひと増せんのみ要てそれと深念とせ折傷に人のあり館山の城へ射入るべ況笹書と今番南弥六に相譚れる忠義の趣旨と寫を送書一通と悄々ふりのみ重封皮しるそと懐に満呂復五郎が病牀に赴いて稲村よりかの来ける事由を報知て病榻の安危を問ふに復五郎は深痍なれども都て安躺所にあらぶれば死ぶることなかりしが陣中の透間ヨリ

くて夜風に御ぶに便りなれば遂に破傷風に成て面色憔悴して身を起さと泣き〻復五郎は出来ぬ火急の使に撰れて稲村よりかの来る那里の首尾どうち聞くも人の功績の羨しさに身の落命をうち歎けば出来ぬさてそと尉めて昨日南弥六が宿所を訪ふて對面せよと告れども密談い秘して些も知らせず退去らんとせる折復五郎が枕に建る小屏風の故るに外面破裂するあるを究竟となりに思ひ懐ませ送書とみて取出件の屏風の敗れる処より悄々地に裏に挿入れ遽しく退去て休息所に来てそれ朋輩の雑兵両三名鰾膠放れる弓に粘てう出来ぬ他に対して酒家い火速の使に勤果しるに權且休足の暇に賜ぬ一両日所役をいで近辺野に出て求獵て野鶏を射て捕りて獲あらば和主に倶に今宵の酒菜にせん酒調べて等のひと実に成るに誘へて鎧甲を着擬臂縛脛繳あて獵笠前に要に角弓に携て外面投出する素よりの獵の為なれば悄々地に小徑をうち造りて館山の城に近つく樹柱の隙より那這と便宜の処に覗に副門の乾に當て崖岸のいと

高に究竟の要害あり。這頭は都て切所を憑みそ成る。その隊の兵のヨヌ〳〵下とをえけれい出来ぬい
るゐ那這と樹間立潛に近くよせて笠間勢と量りて准備の筍書と三條まで射て入れすせ。ふそぶ
三條は沼届ぬ。一條は塀を串刺又一條は空塹の頭へ果敢く落ぬれども最後の一條は思ふの隨ふ
よく走りて城の内ふ入りぬ。今は心安ろに思へ。思へば安く退にて。その日の暮るゝに程ふ近に普善蘇
蘇利村ふ年来相識ヨるれども。悉ふ他們を訪ひ疑ることありぬせんと尋思とりて。人煙なき山
邊と獨徘徊して。その日ゝ夫ふ消けり。單表荒磯の南弥六を。昨宵安房る長須賀の申
明亭ふ梟首の盗兒ゝ髙野戸郎六が首級と穿鑿獲ゝりよる。通宵路次と急にて。その日未
くるころ。ゝさ。こまゝ。ふせむ。下刻時候上總の舘山の城近に普善村ふ来りけり。這里る枝村ふ字と乙接と喚做まり。その
地方の農戸ふ阿弥七と呼ぶる。南弥六が弟ゝ。他いその心術兄南弥六と同ゝくて最老実ゝふ
めゝれば畊作ゝ身を入れて要ゝ友を汲ゝく欲せぞ。ゝとりく家兄の荒磯が年来左右事を
好ゝて專ゝ侠氣と言ゝるゝ。ゝ風所行ゝ。ゝ折ふ觸ゝて諫めゝ。南弥六ゝ欲ぬぞ。

是ゝ迭ふ疎闊ふ。又年来過ぬ。南弥六ゝ今ゝふ骨肉の情ゝふ。肚裏ふ
思ふ。今宵我計まる如く賊首素藤と討捕獲ぞ。命は其里ふ。ゝ這里まで来ぬ我
弟ふ逢ぬ。その日と空く消ぬ。後ふ悔ゝ。一雪時那里ふ立寄て暮ゝ。ゝ一事
両用ふ優ゝる便宜ふ。ゝと尋思ゝ。然氣ゝく乙接村ふ赴く程ふ阿弥七は野田挿ぞ。
晝食ゝ。ゝふ還る折料ゝ。南弥六ふ逢ぬ。迭ふ欲ぞ。畢ゝ祝て。躰宿所ふ相伴ひけり。
然ゝ又阿弥七が妻は這胞兄弟の従母妹ゝ。名と落間と喚れる。心操ゝ。萬事ふ誠ゝ。
ゝれば絶て久ゝ。良人の兄の来ゝ。ゝ欲ぞ迎て。ゝ多ゝく先上坐ふ花莚と布。請聲て猛酒ふ酒と
湯ふ鮪と調へ。良人と俱ふ。その日屬人の噂ふ。ゝ又問ひ慰ゝ。ゝ差ゝ。ゝと壽ぞ。
歎待ゝ。ゝ閑ゝ。ゝれば南弥六も亦欲ぞ。その身安房ふ。ゝ。ゝ主御父ゝの仁慈ふ。助ゝ
ぞ命ふ饒ゝれゝ。洪恩德義の首より尾まで。箇様ゝ。説ふ。ゝ阿弥七落間は聞く毎ふ。
驚ぞ且感して。是ふ就ても叛逆人の速ふ滅亡ゝ。慨ゝ。ゝ思ふ。却這阿弥七夫婦の

中に両個の男児あり。その家主を阿弥太郎次と増松と喚做す。阿弥太郎は十二歳増松は十一歳に満ぬ折から普善村なる何某院へも習ひ出したりけるが目今かの来ふければ二親は云云と告ぐ給仕に侍らへる両個の児子ども習ひ学ぶ所の書冊を開くて南弥六に問ひ登時南弥六も久しくえざり一両個の侄の思ふ優ていとうたる大学の胆を淡してその書を左見右みるに弟のも筋優りて且阿弥太郎は農業に疎くも又増松は武芸を好てその師なるもの欲きまま

ども相應くも投れば親は只顧推禁めて許さるべくもあらぬを問ふに母親の告るを南弥六も聞てそは漏心なるかは就て我に愚よりあり。阿弥七も聞の知らるるを身は孤独なる娶らざれば子なきを然べとそ後なる家に人なる道をなれば願ふ増松を我に取らせよ我身今は幸ひに稲村の城に召置れて月俸を賜れば功あるべん折御家臣に奉りて殿堂の陣中へ使に立るを低れが逗留久しかるを明日は稲村へかへりまるべん非如約束なれば今番伴ひ帰るべしあるべ我發途る日のあるべ折ふも喚攬るべし甚麼なる我を饒さ

と他事なるらるれてあるべ夫婦は理りなる美狡ひぐ更に又異説を及ぶ俱にその意を儘せるべ南弥六を懐ませ。勒肚の財嚢なる圓金十両とり出して阿弥七夫婦に與へらるるは這は旦逆より我貯禄の餘財を薄義なれども増松を養嗣に約束の牽出物とらるる又財嚢を探りて圓金四五両出して薦めてよるる和主に土産の代を受収めるひとらるる阿弥七左右なく取るを門云云と推辭を南弥六は聞ずして頭を掉て。去又要の口誼を咱家年来那這とるく許すの交を交ひたれば銭財を喪ひも少き老ひるとも見るるを今は尓る友のあるべ喪ひもせざるべきもあれど稲村殿に召置れて俸禄を賜る身なれば徒なるの貯禄なるべとて支を鈌んや推辭むるとの諭して頻りに薦めて已まざりければ阿弥七落間の辭難て受戴きて鈌を陳て安く収めけり低而南弥六を改めて先増松に盃を取りて父子の義を結べ実父母さへうち失れて千秋樂とも稱ける是より続る盃の数幾番を累ねて南弥六痛く醉うけれども睡臥て日の亘春なるとまくざりけり既にして南弥六を點燭時候に覚るべ遽く身を起して阿弥七を喚てはやう不覚の痛醉けん憶ぬ

南弥六義俠
素藤と戦ふ
○その処の本文は第百十四回の初段にあたり
ぢんぱち
ぢんぺい
ぢんぱち
ぢんぺい
ぢんぱち
ぢんぱち
ぢんぱち

日は暮るゝ我私の旅ゝねゝ今宵を這里ゝ曉るゝ快罷らんと告別て立んとせ程ゝ落間ゝ
たゞく穿着て准備の饌をとりて來る。一霎時と留めて薦めぬ。夜食の箸と含ざるん人の情を
思ふ似る陽ゝ急ぐ面色れども時るゝ早と思ゝ更ゝ又坐を占て飽まぞゝさうべ果らば
欲び〻逝再會を契りて遽く出てゆくと。阿弥七落間ゝ両個の兒子と倶ゝ門まで目送りけゝ程ゝ
南弥六ゝ駝搭ゝ身甲掩膊脛脹の一裏と又那古野戸郎六が首級ゝ郷高ゝ阿弥七許せく
折ゝ徙遷稀ゝ山蔭の舊朽木の櫃の内ゝ深く秘ー措ゝけれゝ先その処へ赴て裏を開て身装
を首級を携て夜ゝ紛れて安西出来ゝ約束ゝる莨野ゝ來てゝれゝ出来ゝ人ゝ待ゝ送ゝ
欲び相近着て准備慌々と其儀ゝ談ゝ時も移りて夜ゝ子の時候ゝ過ー過ぬ俄ゝ
連立て館山の城へ急げゝ畢竟南弥六出来ゝ計て敵城ゝ入るゝ及びて支の勝敗甚麼を開い
たゝ処の出像を看ても大略ゝ猜せられを猶も具ゝ知ゝく欲せゝ又這次の巻ゝ解分ると聽給か。

南總里見八犬傳第九輯巻之十一終

東都　曲亭主人編次

第百十回

義俠元を瘞く郭騙を送る
神霊魔を懲して處女を全き

却説安西出来ゝ荒磯南弥六共侶ゝ當晩館山の城の副門ゝ來ゝけれゝ城門を遽く開
敲て安西景次と荒磯南弥六ゝ郷高ゝ忠告の前書を案内仕て
いへゝ事情を知られるべー。稟ゝ主の錯ゝを寄隊の大將清澄が寝首を捕て來ゝ快々内へ
素藤
頭の殿と呼ゝ入れるべー。稟ゝ主と喚ゝ登時這隊の雑兵ゝ間の窓より透ー見ゝ豫面
を見れる出来ゝ人その餘ゝ件の南弥六ゝ両個の外ゝ潛ゝ來ゝ敵ゝ人ゝ則屋内外を疑ゝ
ぐもゝ因て這隊の頭人ゝ奥利本膳ゝ報知て逃出来ゝ南弥六を城内へ入れゝ有徒
程ゝ本膳ゝ隊兵を領て出て來ゝ即使両個の降人ゝ安西荒磯ゝ對面て其來路を尋ゝ分

まわらぬけの然バ又素藤ハ郷島安西が来介ゞ返忠の報あり〻る然〻もたのりかゝるれバ更聞こえ
ねむ　ようく　ようい　けぢ　ね　すぐ　ころ　きすけ　ようろ　ようふ　まかど　ようこと　ようこと　ようこと

ゑ
ゐさう快のちね快さといそがせば南弥六を阿と答て持る裏を解り足找近つゝ廿一程ゐ本膳あゑ遽り
止めく出れ南弥六不敬へ首実検ゑ法式あり自身の披露と許されゝそ彼酒家ゐ遽與れゐを
南弥六冷笑して懼さるゝとゐ人る陪臣ゐりとも清澄い則岡まゐ名代を當所討蒙の大将ゐを我们
絶ゐ両個ゐ人ゐ者せを开ゞ首捕て當城ゐ来ゐ挿ゑい類ゐ彼ゑ大功ゐゐ人偽ゐ者せまゐ者せんや
烏許ゐることと敦圍くと本膳听ゐ頭を掉く礼儀ゐ疎ゑ田野の匹夫這里ゑ自由い做ーなゐ実
検と遂られて虚実分明ゐくゐ大功ともゐべれ然ば虚実を知ゐるすべい誰ゐ小心せざゐ死を遽
與さゐい隻首欲烏許ゐるとをりかへをゐ素藤ゐく聲を被て本膳ゐ遠慮その理ゐ然とく
他と怕ゐゐ南弥六を首級を遽與へゑ共伯ゐ近く找ゐ向ゑ彼とのあるやせん競々と鷹揚ゐ
ゐれと南弥六欣然と応ゑて復礙誠せを裏ゑ一首級をゐ開ゑて卒とゑ遽與せゑ本膳い准備の
首函ゐゐ乗て捧げゑ找む後方より南弥六も亦藤を找めゑ素藤ゐ近つくと間六七尺ゐゐ沙
雁太麻嘉六推禁ゐゑゐ不覚ゑ且扣よ席と犯ゐ礼ゐ礼ゐゑゐ扣ゑゐゑと制ーゐ介程ゐ素藤ゐ首

函と成ゐゑ熟視ゐ眉と頻単めていゐる且我戰場ゐ清澄と見れども其の間遥ゐゐ他ゐ晩を
戰ゐれい回と認ゐ足ゐゐ願ハと狼之介い郷高ゐ俘囚ゐせられ時那陣ゐ在ーゐ清澄と高吾ゐ
たゝん近く寄て左よか。とゐゐ業富出高ハ共伯ゐ找ゐて件の首級と左見右て御諚ゐ及ども我们那
里ゐ帰ーゐ折清澄ゐ面前ゐ牽れい夜分ゐその後對面せゐるゐれば這首と那面影と似ゐるゐ似れども
真偽い亦上ゐかりとゐ素藤點頭てゐゐべ沙雁太麻嘉六ゐ多日使伯ゐ辛ー折清澄ゐ對面せーゐ
ん好検で真偽と決めと指揮ゐ件の両人ゐ膝と伐ゐ左右ゐ相ゐゐ約半晌許ゐ若語齊一亦ゐゐ
る且我們般莫赴ゐ折応對せーゐ高宗と逸友ゐ清澄い上ゐゐ正ーく對面せゐゐれば他ゐ死狭他ゐ
らざる狭眼力届ゐとゐゐ南弥六焦燥て噫鈍ま人々ゐ清澄い頃ゐ大伝ゐ黒子ゐゐ皆人の知ゐ
所其頭ゐ心ゐれゐゐと沙雁太麻嘉六現ゐ顔く沙雁太麻嘉六ゐ遠外ゐゐ正可ゐ足ゐゐ彼ゐ素藤
ゐくゐんゐ其ゐまゐゐ證据ゐゐゐ那里ゐ首函と又曳寄ゐる程ゐゐゐ南弥六ゐく膝と找ゐ
黒子い左ゐいとゐゐゐ。懐ゐ隠ー持る短刀と晃ゐと抜て丁と斬ゐ巻尖く素藤い額と斫られて仰

反ア一と畳揖て殺さんとすれば大家ひとく騒噪て原来檝楫児逃さじと叫び群立つる中ゆ沙雁太と麻
呂嘉六と南弥六ら立別後より遮隔て組留るを南弥六透さず振放つ修煉の剽姚奴氣奮男朱立さる沙
雁太が細頸撲地と殺さ落せば挂難る麻嘉六も深疵と負て仆さる侍ら一程ゆ出来介も懐剣を援
持て倶ゆ找と南弥六と資け素藤と殺さんと競べ遣ゆと拉る力士ら当る儘く殺拂ふ這那
必死の挺ゆ願八盆作碗九郎本膳父子も度と失て皆素藤と殺せと扶起ら逃迷ゆ周章大く
ろ破れが南弥六と出来介ゆ機ゆ乗る勢ひ猛く敵と揮ま殺続然ーも烈ー太刀風ゆ力士ヨロ〳〵く
疵と負て仆ものり俯ものり願八盆作碗九郎及本膳も狼も猫も松ゆも殺立られて素藤も疵
方ゆ今殺さ果さるべうもなる折ら突然とし金屏風の蔭ら頭れ出る者あり是則別人ぞ八百比丘尼
妙椿ゆ今這事の為体と見れば驚く氣色なくゆ先続秘密の印口ゆ呪文と唱る程ゆ南弥六信と
なりて殺拂ふと振抗る刃ゆ千曳の石ら重くゆ足猛ゆ麻癩れて瞑眩けし兵ら殿居ゆ控と輾
轉ぶ喚ゆ駭く出来介ゆ術ゆ中られ度と失て觔斗ら仰反仆れて速ゆ起ゆ立ら奇特賊徒の

老兵狼之介ゆ等ら皆立ら機と立るゆ心と共倡ゆ走り蒐れ南弥六出来介身を起え
と両撞けども女僧の魔術ゆ枷掛られて脚も解ゆ異ゆ眼を睜り泡を吐て送恨遣るくるるけ
る中ゆ南弥六ら刀と突杖と氣と励て立あがらんとせ程ゆ振回ら衆兇の白刃の光ら立の雨ら殺ゆく
前後ら殺ら焼刀ゆの世の別れ哭身ゆ突醢ら殺ら鮮血流る出来介も枕ら死ぬ登時願八
盆作ゆ先素藤と扶起て吸活んとせ程ゆ妙精ゆく找と立て立人く謀ら者唱俳金瘡の神薬
あり一さび是と用ゆ氣力清ゆ立ら殺ゆ疵も赤隨て愈て速ゆ
ゆ且素藤が眉間の疵ゆ添ち塗ら餘る口中ゆ推入れて水と求め沃ら下ら甘と徐ゆ拊る程ゆ素藤忽
地息出て膝組直て四下と立て原来若ら恙もあ〳〵で那剛敵と殺ら果せ尼姑ら還りの引ら向へば大
家答る曰ら既ゆ知せゆ如く那南弥六が勇ら出来介も亦思ゆ倍て刃尖鋭ー〳〵那御陵見せら沙雁
太麻嘉六ら殺兵ら皆壁易て殺れるの五七名疵と負ら勘ら殆難ら及ー折
料ら尼公の帰助ゆ両個の寃家ゆ那像く殺ら捕て立人奴が

ちんぎ。恩義と思ひ寄隊の輿に飽まで我と欺く。南弥六よりも罪重き。生拘ふせ思ひの隨に斬ふべしと誅
罰開果まで。今宵飽迄地に寄と尼姑の郎助が金尼姑は亦何なの故ぞ。昨日の還りの後ぐり。我
情婦いかゝぞと問へば妙椿舎兄て然ばとよ。聞めの日稲村へ赴て内外隈なく覘ひしに大江が在ざる
障るものもなかりしが。前宵人定りて潜て姫の臥房に近づき。喚覚して迷ひ出るを賺て撥攘して
長須賀まで来ける。折那荒磯南弥六が其首は鼠とる罪人の首級をのしてゐるとて。撞見首の
那奴が咱俯とあやまりて。引禁めと角ひ。春一巻て仕せ。後方に一個の乞児あり。棒りく咱
俯と駁さんとせしを。近くいよせず跌走りて。登時咱俯思ふ。這南弥六を相識るねど。地方に名高き同じ
侠客なれば。我も粗認ゆる。今宵里見に従ふ。稲村の城に置るれば。敵の人を今更闌て罪人の首
級を窃盗りて。事情いかれども。這奴ふ姫をとられて後の障りにやせん。結果るふ考えあ
らんと。尋思とて。戒刀を晃りと抜て。南弥六が匂月の前刺んとせし程に里見を護る散女鬼ゐん。憶ぞ
開奴ふ妨られて。刺も果さぬのみぞ。慷慨や姫を奪復されて。剰胸を蹴られ。脆く一雨時も沼

堪ぞ。そ仮其里ふ俯ゐるを。我も復そ。影と躱りて十町あまり上流吸ふ投て走る程に蹴られ
胸の最酷く痛て。堪へかねれば。路の樹蔭ふ臥て。昨夜通宵。今日も終日。心ぞ気を頤ひて。
時を移り。日を過しぞ。なく。瘥の果しが日甚て。開里を立ぬて。目今かつ来てゐれば。敵の刺客とぞ。論
個の猛者が奮撃突戰。勢ふ撓ぎ克ふ。無るぞ。一個は南弥六。又那一個は出来ん。俱ふ認るまる
奴何れが透まで。秘術を施して。仆く。躬方の甲ふ。討捕り。ゆと報るふ。素藤。敢て感ぞ。今ふ。
ゆ。るるぞ。ゆと。憑りて。神術妙算。折く。還りの。ぞ。危く。ぞ。造化。迄。微妙。活菩薩。一
雫時。りとも。苦しゆ。るの。敷鬼。何。少。ん。世の風。聞ふ。伏姫の霊。ゐ。欲。左。れ。若。
れ。ん。身の撲傷。瘥て。恙。ぞ。愛。れ。却。今宵の騒劇。那。安西。出来。奴。が。内応の。筆書。
箇様。ふ。誘。子。刻の時候。ゐ。荒磯南弥六。共。侶。荒川清澄。首捕て。ゐ。計
られて召入れて。對面せ。実検の折。不意を。駁れて。我。痛。瘥。肩。ふ。懽。尼姑の。妙。茶。疼痛
立地ふ退て。心地も。生平ふ異。ぞ。情婦を。撥攘。来。れ。ぞ。十二分の。造化。

んが為に復されぬ月が雪花が嵐の恨ぞよと泣く妙椿なれども又折のまぐれに隠れて蜀を臨む情慾は
且図らず今宵思ひ合はれば夜叉南弥六が長須賀の申明亭を窺ひ首級を清澄の偽首にせ奉
てそありけめ然とは思はぬ敵の幇助なるべしと結果んと欲せしを果さで迷惑るゝが這里に終
討捕せんは他が命運盡るべし明るを待て斬梟けて寄隊が胸を淡さんを異見父子を討滅して安房も上
総もなほ入しばん身の随意なるべしと賓路を志ぐるを慰められて素藤は矢々屡點頭て意見
誠にその理あり本膳は南弥六と出来合が頭顱を刎て城外へ梟首せよ寄隊の奴輩は如何せんと思ひ
落ちぬ沙雁太郎下の力士輩の殺されは皆屍骸を埋め尚息あるは扶退けて尼姑にして某を用ひ願は
金作碗九郎狼之介輩は其隊々々の成りを慰めて寄隊の陣へ間者として虚実を探りて注進せよ我
疾減栄あれども神某宮即效あれて起居も既に自由なるを先は奥へ退き徐に将息せんと天
明ならん快せよと言語急迫く吩咐て卒とやとう身を起せば妙椿は又懐より件の切葉一包を出て
本膳に遞与へ曰ふ是を金瘡児に取まる人一匙々分ち用ひば死を起まるのヨクンとあるべしと素藤に

扶けて奥へ入る程に本膳その餘の老兒黨も言葉を歃ひて舒て齊一目送りけり偖而本膳碗九郎輩は
猛可に多く雑兵を召登下知して金瘡児を退け屍骸を出し遣の血糞塗れる席薦はもとの貴子縁
頻迷も多く洗ひ流せと宣する関諍果ての棒ぞ朽幾條卑入る筏は迹のまろの誰樓の大鼓音
高く天は耿々と明かなり休題単表這館山の城の囚牢司が海松茸軒柯遇は嘆嗟者も南弥六が来合が
亡骸と奥利本膳より遞与されて梟首の為に獄卒が命じて首を斬らせ城外へ出さて梟並べん
と准備せしを南弥六が首級は眼を閉ぢ合れる面色活るが像くなるが快らざるその首級猛可に重
くなりて合る揚ぐべもあらぬを獄卒驚怪て左せん右せんと罵りて索もて枷結の朽に拽て抬起きん
とすれども索は断離れ人は轉輾ていと車くなりて千曳の石に異なるねば大家果れると又て立問ひたく
徒長視てより登時軻遇は思ふにその荒磯南弥六なりと安房とその名呼て洲崎安垢三が外孫なる
世の風聲を隱れ忍び那魯垢三は神餘の與に逆臣定包を殺まくせしを誅て光弘主を犯して誅戮せ
られる當時の風聲を語り傳へ這頭の人も皆知るに今又南弥六も異見の與に頭の殿城刺まく

欲りせ事成らぬ矢庭に斃されし勇者の寃魂終に首級を失て偖も奇特と顕まるん我が小鞠谷の舊臣
老已とゝろぎ墓田殿に仕へ今に至れるのこと素より里見に恨みあれば偖また奇しき首級と知りて亮ヨヌ
勢をのゝ抬出して強く梟首まるるゝが竟に我身を出ゝ崇を禀んに彼是も亦知るべからぬ然ばとて明々地に
えあぐ疑れて貳ちあるのとおもはれん然るとは是も亦罪なきに所刑まるべき要なくば尋思せらる主
意既に決りければ思ふよりは偖々と獄卒们に耳元ぶ獄卒们も這年來素藤が恩寡くて政の最苛
に疎まるゝと思ひしが大家異議なく差引てその指揮に從ひける登時海松茸軒遇八を恭く南弥
六が首級に對ひ合掌して肚裏に念まるゝ荒磯大哥本意なりけん遂恨さそと猜しちりく和
主の首級を梟さば悄々地に隱しまるん和主の代に躬方の一人名墓沙雁太の首をもて箇樣々に
計ふべし沙雁太が面影に和主に肖る所あり且年齢も相応しければ実に究竟の替首なるべし願ふ所の
秘事を人に知せば我身を護るに罪なきまでもと諄返して祈る程に獄卒们も皆共に跪坐て
齊一拜をけり既に軒遇八を念ひ果て身を起して卒試に抬むるとのまに一人贊力ある者逸早く

抗ふに首級に両めまで抱て矢聲を出して抬抗るに始め似ぎると軽くて仇と揉るより易りけるを
大家二人に訝りそのまゝ有ふに怕れより登時軒遇八を支の奇特の憑しに敢て貼むあるを南弥六
が首級を隱して後々まで人に知せば御に本膳が下知を偽て躬方の士卒に數れる沙雁太が首と
そのに殿に北郭に山蔭に皆瘞めよとて既に遽與されたれば悄々地に沙雁太が首級を
りく出來れば首級を俱に城外に遣る殿堂の方に距ること五六町に並樹の松あり其の樹の間廣る
地方に両箇の首級を並梟けて獄卒们に成らに更に又沙雁太们が亡骸を北の郭に山蔭に埋るに皆
是妻子もあるべの哀れに是を來てある者もあれば素藤が恩惠に疎に士卒の上にも偖ることなる然ば
沙雁太が首級に鮮血を浴着るに面相の南弥六と聊似る処もあり其人髪并の乱髪に顔に揮
拭をゝ〻に彼に似て假装りければ敵も躬方も贋首とは思ひかべもなきけり口に這一奇事のまる
ら異日荒磯南弥六が首級を當城の郭内に葬ることを決て義侠遠近に伝へ墳墓に
遂に郭の名に屋と荒磯郭と喚做けり是後の話に介程に這朝殿堂に里見家の屯営

怕崇軒遇八槇首級語りをおもひ
下歟の
失里見侯
重く閑悟
を
ゝ成

きのふあんさいでさすけ。昨日安西出來介が野鷄を射て捉んとそ弓箭を携乃て出るが今ハ至てかゝる來老他の御方の不利とえて舊好あれが素藤ハ降參をするゐんとの衆議の訴ハ及びを清澄听て頭を敬ひ出來介が不義と不義我々ハ皆是推量のそみて思ふ合るよりもゐる。快館山の城の邊へ間諜者を遣ハ他ハ往方を探らせよとそ心利る雜兵ハ下知て悄々地ハ遣せハ幾程もあらぬそして其者馳てかゝる却清澄ハ報るゐ小可密旨を兼ねそ館山を投て赴く程ハ城より五六町這方ゐ松原ハ斬梟する首二級あり敵ゐ成れハ憚そ樹間を潛り近ゑて熟視れハ梟首の者一箇ハ安西出來介又一個ハ御方ハあら老ゐる日素藤が使ハ立て両個の生口業當と出高を騙畧る名幕沙雁太ハ彷彿ゐ恁ゐ那出來介ハ敵ハ降參せ一ハあゝと撃れるそゆゑとハ清澄ゐ听て原來安西出來介ハ拔駈して撃れ欣然ゑ賊徒沙雁太が出來介ハ内應して那城内へ引容れを事發覚れて両個ゐ撃ゐるゐ。あんぎゝんをゐ左ゐれ右ゐれ一人とも御方の首級を當陣近く梟られゐゐ知りて密ゐ成ハ賊徒と蹴散して首級を奪合るべしそ事の准備を急ゐ。則田稅逸友ハ二百餘名の士卒を授けて那松原へ遣ハけれハ逆友隨即馬とそゆゑ。推寄せゐ士卒を找めそ咄と嘯て駈散ゐ。首級を成る獄卒們ハ驚聯て逃走ゐ。一町餘り趕蒐て并ゐ一人を生拘ゐ。両箇の首級を雜兵ハ持て殿臺退く程ハ館山の城兵們ハ敵出ゐと所知りて撃ゐ果さんとそ罵噪けども猛の事ゑ合期せゐ左右ゐる程ハ迂れる獄卒們ハ逃て來ゐ寄隊ハ首級を奪ゐ退散ゐと報げゐ。擬勢ハ寄ゐ〻ハ多めゐ〻素藤ハ始より毫も誤ゐ冷笑ひて清澄們ハ不能ゐる敵の首を捕ゐ斬梟られる他們ハ躬方の首を奪ゐてゐ柄と思ハ欣ハと烏許ゑと嘲りて心ハ驕ゐ然ハ又海松茸軒遇八ゐ寄隊の爲ハ獄卒一名を俘ハせられと俗ゐ肚裏ハ思ゐ憶某甲ハ貪ゐ之間ゐ宣ハ不便のゐれども寄隊ハ首級を奪れハ友て我身の幸ひ然ハ件の替俘を敵て知ゐ躬方ハ知ゐ〻ゐんと尋思ハ胸ハ齣けそ後安ゐ〻ゐ程ハ殿甚まハ滿呂復五郎ハゐの身の看病ハ隷られる雜兵ハ訴ゐ清澄道耶其者を呂近つけゐ〻ゐ雜兵ハゐ〻安西出來介が撃れゐ〻と復五郎も洩ゐて。驚ハて枕邊ゐる小屏風ハ

各かく
樹て。幸ーて立まくせふ。憶む屏風を推倒ーて登り。樹りつ。推破くる。屏風の裡ふ書翰ふ。その折ふ顕
れ出ーをそれが出来介ぐる迹を。寫送ー中支とあり。因て私ふ開封せずそ。俗呈閲仕り。扨て又昨日
できすけまことら。やちの。と。じ。ゑ。おのれ。ふ。ぞ。ゑ。ぐ。ら。ぐ。ら。ぐ。ら

免れ難き者なれども那妙椿が幻術に不意を駭されて克く[illegible]はり是命運の致す処なれば惜むにも猶あまり
なり這生口に負ふも足らぬ獄卒ありと雖ども誅まるとも何の益あらん意ふその獄吏軒遇八と共に出来
怕れて南弥六が首級を隠せり這方の與ぬせしなるべしと亦惜むべきのみあらんと因て這生口い放ちてかへ
いるまでに旦沙雁太が首級い要ずして家裏に取せん快のそなれと言ふ細郷の索を雑兵に
解て躯て追放れい獄卒い恩を稱て死囚の逃るごとく館山を投てかろうじて程に返されて沙雁太が
首級を城へ齎りて奇とふとも妙なりと嗟ぜり路傍なる沼田の中投棄して猶底深く踏入隱しく
立かりし折軒遇八かのを秘密と耳元に報ふる間話除敏が介程に清澄に高宗逸友たちと南昌里に南
弥六が来介が忠死のよしを館守にあげんとて更に文詰茂佳楠に連署の呈書を齎して稲村に遣せ程に
満呂復五郎重時に来介南弥六が支の趣恁々なりと告示せば尚起ちて[illegible]る金瘡見復五郎と共に四
五名の他に都に住楠に倶して稲村へかへり遣さん徐に將息せよと命じて各筵輪に乗して看病の
雑兵幾名に隷て安房へ遣りける支の差配い是のごとくに安西出来介が首級をば程遠く成山院へ

遣りし叮嚀に[illegible]せり[illegible]苦参表朽せず世々に貽りて人その義侠を稱えけりあも亦後話に是より先に
稲村の城内に荒川兵庫助清澄の殿臺の陣中よりまかりてせさる使者安西出来介詰茂佳楠をかへ
遣されける詰朝濱路姫のとりまきもとに給事の女房たちが敬焉憂ひて辨よりもなく隈なく尋まろ
ぞ[illegible]秘密明よりのなりて往方を尋ぬ照験なければ已にそなたを奥隷の死當に告知せ終に[illegible]ん母
吾嬬前に[illegible]上まろ[illegible]の母君敬焉に歎せ[illegible]ぞ義成も亦
驚ぎのひて事の仔細を尋ねとそみぎり後堂に来まりて吾嬬前に立迎へて閑室に密談あり然而宴
やう濱路が在ぬをなりけり昨宵夜半のなりけんに次の間に臥ぬ侍児毎もれを[illegible]稍暁方に[illegible]上比
空に臥蓐をとりてそうちも誤ぬるに往方い絶て知れぬ[illegible]で士卒と部して快々渉獵に[illegible]
請ぬ果ぬるに[illegible]義成主も嗟嘆に勝ぬ眉を顰て宣ふ這回の椿事も那物怪の所為ぬてそあん
ぎるぬ然ぬに深夜窓の下に旦ーくせ少女子が夜半に臥房を接して那里へそなぬ倘果しなまくんん
あ縱追隊を蒐るとも索逢ふことかさ成べく命の有ぬも心のとそ宜ふ者なれば物怪の出ぬそとちに不娯

のふを吾嬬前推禁めそ。その怨恨こそ理りなれど奴家が思ふにまづ濱路が大江親兵衛が宿直の折より情申かけんをそゝ遠離めしが墓まで惑ひ出でるゐん正た證據のあるかこのれて義成驚いて。そは亦甚だ確證のあるゝと問せめへ然いとよ濱路が在ゝ出でるゐ東西はわ。ん狡とそ他が書棄る匣ゐどを甲乙とゝく啓檢ゐたりしは枕邊ゐ置せる鼻紙臺ゐ紙の間ゐ親兵衛が濱路ゐ贈りし艶書一通ゐ見し那親兵衛い九歳とのべども心術大人備て身長い年十五六の少年ゐも優りゐれば生情さへそつなけれ思ひ付ゐるゐそゐたりと悄語ゆゑと義成主い聞て歎息まゐして。それそ思ひ合まるゝあり。知られれば愚まるゝ我も亦ゐ比親兵衛が宿直の夜叉濱路が臥房の次の間ゆく。他們が艶翰を拾ひ見ゐ。折ゐ親兵衛い其頭ゐ在ゝ臥房の方ゐ男女の悄語く聲の洩ゝと驚ゐん。ゐそ怒と忍び退いて獨ゝく思惟ゐふ青年毎の惑ひそ色情ゐより生涯と衍ゐめの世ゐ多ゐ就中親兵衛い智勇兩全ゝ人ゐ勝れて既ゐ當家ゐ功あゝと濱路左まれ右もあれゐ今他們が事を糾て可惜犬士を喪ゐい是ゐ不便のゐゝて後ゐ悔ゐ思ふもあゝん快親兵衛を遠離て他們が中を堰ゐ

あゝと尋思ゝて艶書ゐ封ゐ披ゐ焼棄て人ゐ知せじ言と設てその次の日親兵衛ゐ身の暇と取せ。ゐ今後那靈玉を十市より奪ひ出せ折玉の失せゐ疑ひ起りて原来濱路と親兵衛が不誼淫奔ゐ幻ゐそゐ物怪の所為ゐ疑ゐと思ひ惑ひて決難ゐ今又ゐ身ゐ他們が艶翰と料ゐ焼ゐ濱路が逐電宣ゐ由ゐ我拾ひ入ゐの夜叉焼棄ゐれば是くもあゝ今朝又ゐ身の不出せゐ那里ゐあるやゐも亦奇とゐれて吾嬬前ゐ面ゐ向ゐ懐ゐと刺入れて半の艶翰と義成受合て。ゐ是ゐ素紙ゐ是いゐと許りて返ゐめ吾嬬前ゐ胸と淺ゐ左見右見て現不思議ゐふ。今朝憶ゐ。ゐ折ゐ入ゐ素楮ゐ反りゐふ文字の迹ゐく消耗せゐ。ゐそゐ甚ゐ故ゐ言疎忽ゐ似て倒ゐ解ゐ。ゐ。ゐ。

素藤が與ふ計を那妙椿が幻術を。這回も妖書を送せい濱路い只管情慾の安き方をふ親兵衛を
慕ひて狂浮れ出るをのと思せ為けり。を鈍きや始より惑されく親兵衛を疑ひより傳賢ふ牛這
ふる故ふを竟ふ守りを失ひて濱路を奪略れぬ。一期の瑕瑾を爭何い丸悔ふ。あてけりと悄語
ふ。良将も返せ一度千慮の一失あり。惑ひ五嬬前も醒て甲斐ふ子多の間ふ嘆音をあぶ夜の
鶴たまくを脛よりも長く別れふ堪難て歎く沈ませの日。浩る折ふ異る小坐席のふ誤く人の
散動めく聲せを義成を聞着ゆて那い何をとどろふ耳を敬あふ程ふ給事の老女女房們ぞ爆く
来て亶を方僅思ひ付ふも東ふ丸内庭の樹柱深く退遁ふ。五の姫君の忽然とふ出さゆひ
あと折ふ。臣共の知縁頼ふ單侍ふ。友禽ふ心ともふ。を驚ふ玖ふ。殿雷ふ玖ふ。殿雷ふ玖ふ。殿雷ふ立て明輩を喚聚合
た皆共侶ふ走下りふ。丸坐席ふ迎れを。却昨夜より丸徃方の知ぞ。を。ふ。ふ。ふ

仆せ一個の男子の胸前刺んとせ一程に婢娟多一個の神女最大江多拘児の背に充うち撫たく忽然と虚空より降り来りて女僧と遮留めんば女僧は怕れ面色を斫拂んと角ひもあれば神女は胸と撲地と蹴られて奴家と損て仆る。登時神女奴家が身邊へ拘児と找めつ奴家とも無せて翠天に升りつ。去向遥に倶しめ快さと宛然の像く。風に撲れて布囊は解けて地上に隊ちけん。苦悩ともあらざりき。徒而神女は雲に集る高峯に降立て奴家が手を執て岩屋に入りぬしが内いと洞亮く月の夜女に異ならぬの折神女のかん顔の正可に拜れぬひが。泰山の弥増て向まつりん惶さに跪坐て氣色と伺ひまるに神女は翔て妙音をかけて慰めぬ。濱路よ然のみを怕れぬとそ咱俤は那尼の類にあらず過世は和女の親族なり八犬士は母の冥の尼を過去の人なり那悪物を懲しつ。徒だりあれば明の醉を醒まに足らざるべければ具に告ん聞ねが。抑當國王義成は。その器其量親に劣らず。仁義の良将なりとて。征夷大将軍と上總と従下總半國を賜ひ駿河の国に天道は盈るを虧く夷滿一那館一城の素藤が逆謀は即天の敬を戒め。小敵と侮りて後悔を示まふ在り。あるとき咱身の比大江親兵衛仁は課て老侯の尼を極こまねらを猶且素田素藤は仆を降伏の功あるせかが。又素藤と邦助は邪魔の幻術大きに驚き義成の明鏡も魔雲に暴り心惑して鈍き大江親兵衛と疑て遠離されば素藤ことば折を窺く。又館山の城は拠りあれども火急に攻伐ざるは義成が寛仁大度士卒と思ふ故なれども併素藤と天四討その時いまぞ辛まに仁を等て前功を全うさまぞ天機あり。あらざれば咱神力のと素藤妙椿は八犬士館山の賊徒數と盡て血刃せんのかなもあらず所行多と呂は那寛の一字と誨て事と忌ぶ世に妖孽屢起るのみ。里見の軍威と落ぬとく。鉄槍あるも死と免れて事竟は大害に至らざりきと思はぬ。今は禍鬼解除せられて和女の上にも穴躬泥を。賊徒は雷相の解らざるに誅伏せるを疑ひ。平も親兵衛と召返さまは誰は亦よく那妖賊は當て克と一舉は妻せん八個の大士は軽重なれば先人なれば親兵衛と疑ぬて事に用ひ餘の七犬士は招ぬも皆共侶は来會せ所謂隗より始るとは。然の理なるを悟らぬは疎き那素藤は妖尼の帮助あるとも小敵を心腹の患はあらず。然り小敵ぞと

其ぞ
征伐ふ。その人〻失へば如意を取り易ふ。異日倘百萬の大敵西北ふ起ることあらば。海陸共ふ攻寄来ば。
房總諸城の守将戍卒。悉皆解體せ。その折ふも八犬士の幇助あるふあ所ふ。誰ら亦よく大敵ふ
當りそ。那吳の周郎ら赤壁ふ克ふ倣ふ。遮莫今番ハ義成の吾ら殺くふ慈醉て先非を悔ん拠れば。
咱言ふ候まそ。親兵衛と召返せべ。素藤誅伏表ふとも後車の餘轍と忘ることなく。八犬士と
重く用ひて才略武藝ふ任ーふべ。那百萬の大敵も怕るふ足ざるべ。和女稲村へかまる折。答々ふ
爰を徳よと。叮寧ふ諭さゆ。示現ふ少く畏ふて頭を拾げ又伏拜ふて。原来ん泉ハ伯母君ふ神
霊ふそとなれ。今ふ下め思ふ驗宜助ふ。死御恩ふ待るか。那八犬士の内ハも奴家も豫ら知ら待
ふ。その中ふ大江親兵衛ハ六稔の程ふ身長めいとふ大人備て生年九歳とまうせども。十六七の少年ゆ。
立優ふ。其故と訝り思ふ者も侍らぬ。
まうりーと神女ハ听て點頭ふて。その疑ひ理の条〻非常の人ふ異體あり。猶霊木ハ一夜ふ生て一夜ふ巨
樹ふ成ふ如。これ凡庸ふ異ふる処人ふ示れふ似ることあり。昔唐山東晉の時安帝の義熙七年ふ。

錫の人の子趙末とうり。童男。年八歳一旦身長の伸ること暴ふ。八尺ふ達れり。且その髭髯も蔚然ふ。
と晉書ふ載せと思惟ふ。宇宙の間往〻ふ何ふの物ふ對ふんや。徒れハ異邦ふ趙末あり。今ハ我國ふ大江
仁ふ世の人視聴ふ廣ふ。れハ。その内必ずとて疑ふ。の惑ひと解べ。今ハも是まで二親のさそ安
ふ。ぐ〻むふ快稲村へ還りねと。送りて品川崎より出ふ。ハ已前の狗児ふ。ふて。ふ奴家と背ふ。ふ乗
せ。雲を起ー宙と走ふ駅と宛駿馬の像ふ。這大城へ来る程ふ奴家ハ騎ふ堪ぎーて。憶ふ狗児の
背ふ。滾ひて大地。忽然と隙きれて。庭の樹間ふ在り。夢と思へ臥房ふあ。現と思へ覚ぎーて
かふ。ふ。然而ふ。ふ。れハ。躯て樹蔭ふ。ふ。ふ。折侍婢毎の天ふ。て安否と問ふ。我ふ怪む脳い
ふ。ふ。ふ。

南總里見八犬傳第九輯卷之十二分卷之上終

南總里見八犬傳第九輯卷之十二下

本輯ハ第七卷百零四回より第十二卷百十五回までの六卷とゝ。中帙とせり。

第七卷の簡端ハいるが如く。もゝ。這十二の卷ハ楮數殊ハ多くれば猛ハ夥し。上下二冊とも是故ハ中帙ハ七卷ハ有れるえそを咸彫果るを俟ハ發兒の時ハ後れんとの文溪寓ハ好ハ儘く。七の卷より十の卷まで四卷を中帙の上とせいぬ。既ハ發行あり。かくて十一十二の卷上下二冊も權且中帙の下と唱へ。續ぎて今番出し。說ぬ帙又上下ハ分ちハ勿論一要時の程ハ。是より後ハ七卷と一帙ハして賣ちくも亦是書肆の請ハよるなり。

抑犬江親兵衛の列傳ハ百四回の段左ハ起りそ。今や百十五回ハ至るまでのまゝ全く說訖ら。後又二三回ハて八犬見足の卷ハ至れん且八士全聚ふるとも物語尚ほ多く看官明年全局の大團圓まで閲るべ。日者此彼推量の違ると知るよりもあゝ。誰ぞ作者の腹稿と詳ハ探り得て未發の後回を知まる者を茲唯その一人あり。仰ぎて造化の小兒ハ問よべ。呵々。

文溪堂藏

第百十五回

前面岡に大刀自孝嗣を救ふ
不忍池に親兵衛河鯉を釣る

その夜より毎日毎日あまのまえ登時義成主の吾嬬前をそそのかして俺娘子具に所望し狐妖書の顛末今宵ぞ悟りぬる
のみならず我女兄の神霊の示現なく灼然今ぞ何ぞ疑ふ這と所那を思ひ我謀の大きなるを
恥るかまるあるものゝ長談緩話の无益に似る快親兵衛を召返して妖賊を討滅せんと身を
濱路を慰めそそのかす漏せるあるが委曲を畫さるゝ。そもそもとひても遽く身を起して躍て前廳
へ出あるに奥隷の老嫗老女の先に立後に従て驛路にあるに鈴間房鈴兒の緒含て雷鳴
せば其頭に等て侍くる両個の童扈従們が合と走て出て来て老嫗老女を立替して
主君に俱ゝ行けり然ば這朝工家老有司們も皆出仕をるが義成出さるゝ遣即向注所を
啓ゝけの訟を定らるに囚牢司の訴あり。昨夕長須賀の申明亭に梟られる盜兒戸郎六の首
級紛失の事并に當晩奇怪の事件の顛末の箇様々と鳥首守護の弓堅市と唤做

者の稟を受て弟を遣て首級を穿鑿せ。檻尬兒が怪を女僧に撃仆れ及檻尬兒を捉へ
て迹を跟る堅市も件の女僧は禁呪せられて倒れて前後を失せるの且那女僧が肱腋に抱て美
女の事神女の事告訴極て奇異なれば大家ひとゝく駭嘆して所以を知るゝ者なし。単義成主
のゝ分明を伏姫神の冥助なり濱路姫に差遣て返されをける當晩の光景今亦告訴啓合あ
なるを意事に感嘆あひなり。沿処に荒磯南弥六が逐電の顛末訟あり。その趣を所ゝの訴
人の稟を。南弥六を昨日の下晡に怪らの為体にて東の城門より出るを。今朝
かゝり来ぞ逐電をゝと思ひ。他の宿所を穿鑿せ硯笥の内に送書一通あり事怪しきを
躰てその書をあらせば是なりて南弥六が義侠の心術正可に顕れ安西出来介と謀合ゝ素
藤を刺さく欲する計略の支の趣逆徒を欺くべき與に長須賀に梟措る罪人戸郎六が首級を携て
館山なる敵城へ赴くの事情の詳に知れるが大家二び駭嘆して原来長須賀の首級偷兒が戸
郎六が與に梟まる伏家の悪根ゆゑで館の御恩を深くも思ひ南弥六が所為を志氣にゆる

上ぶ〜敵地の幇助を憑こる那安西出来ん。智勇勝れ者ぶ〜ぶ南弥六荆軻の勇あり。そも〜
いとく心許ぶ〜。とらるめ〜ぶ〜ぶ〜ぶ

分説を乞べれども。然でハ今こそ火急なる所要を果さ不便。六郎を我名代ゝ。速ク那里へ赴たゞ大人ゝ陪話をそなう。照文と與四郎と。倶に速ゝかゞ來よ。あの餘の人箇樣々々と。急狀の趣を詞

迫く吟味ゝ。辰相いろゝ果て。然ゝ瀧田へまゐらんとそ。遽ゝ退出ける。ゝ程ゝ義成主。有司仰

退かゝて。ゝ程氏元貞。ゝと。身邊近く侍らゝ。或ハ伏姫神の靈驗。威德の大ゝ。ゝと稱讃ゝ。或ハ

南弥六。出來ゝ。忠誠義俠を憐て。事の吉凶思ゝかゞ。明日ハ必殿臺より。告らゝ。ゝ

專素藤。誅伏の計謀を旋ゝ。ゝ程ゝ。蛍崎十二郎照文。ゝ。老侯の仰を稟て。姥雪與四郎共倡ゝ

瀧田より來ける。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。義成。訝り且熟ゝて。大人の仰い何ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。尊意を。ゝ

ど。好折ゝ來ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。先十二郎を召べ。ゝ。ゝ。ゝ。然ゝ。蛍崎照文ハ。近習ゝ。ゝ。ゝ。閑

室ゝ。ゝ。見參ゝ入ゝ。ゝ。義成主ハ。照文を。身邊へ招て近着て。先老侯の御安否ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。卻

冥ゝ。ゝ。ゝ。這里ゝ。火急の所要ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。與四郎。大人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。瀧田へ遣ゝ。ゝ。ゝ。

途ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

え
エこゝろこゝろの外國兒們の強ぶる方物種々を献り。そゞ中に鸚鵡一隻あり。老侯ふまゐせのひゝ。
躰てゐ便室の。庸の柱に拭させ。年来書せあつ件の鸚鵡今朝老侯の起出のまを名る貌に怒
然と聲を立てゝ。老侯ゆ召せ稲村殿ハ。ゐる比大江親兵衛を遠離のゆ。ゐ術を知召て今ハ
御後悔大こゝろ。その所以ハ箇樣々々。侍のまいそ。濱路姫上の御危難神女の擁護又那妖
書の事まで。その崖略を告まゐて。親兵衛并に七犬士們を召さゞ。ゐ使に照文與四郎を優者
あつぶと那里に評議ありて。ゐ使を遣さゞ。開ゐ等の。時に移りて今日の役に達かゝ。件の
両人を稲村へ遣れよ。必ず疑ひのゆゑと。諍復しつ。稟しゝ。老侯驚ゐ許りのゆゑ。單ゐ胸裏に思
ゆゑ。昔唐山晋の時張華が畜し白鶏鵡ハ。主人に悪夢の凶兆を報て免るゝとゐふ事文
後集に本文あり。又唐の天宝年間長安の豪民楊崇義が妻劉氏ハ。鄰舎兒老疎くゐ李弁
と密通ゐつゝ。俱に計りて崇義を殺して酒井の中に埋めて。知ぬ顔して訴けり是より。檢吏その
家に來て。仔細を糾明ゐ。崇義が畜ける鸚鵡に。有司に向ひ聲ゆ立て崇義を殺せ。悪視い。

劉氏と李弁を。と云その聲分明なりけ。好夫淫婦ハ免て。躰て刑戮せれ
けり。時の天子玄宗帝件の鸚鵡を。愛し賞て。封て緑衣使者とふより。載て天宝逸事に。然
けれども今の鸚鵡ハ。僅に他鳥の聲を。倣ものゝ。人の言語を。倣ゐも。一両言に過ざるゆゑ。如ハ疑
べしとゐ。宋明の人の小説に。記載ありとハいへども。是ものゝ鳥の神ゐるゆゑ。他の鸚鵡と一列に論ぜ
ゐ。然ハ唐山の例に憑りて。今我鸚鵡の奇談を思ふに。這鳥の心くゝ。いつるゆゑ。ものゝ伏
姫の神靈ゐ。のりうゆゑ。ゐんぞ。亮表に猜ゐ。ひ。ゐ。亮毛も疑ひ。ものゝ。臣と與四郎を。聯く召
さゐ。ゆゑて前條を。仔々と仰示さゐ。ゆゑて。若們ハ速に行装の准備と。稲村へ走ゐまゐよ。守の殿に告稟
さんに。ものゝ果しく驗ゐ。ゐ。欽びて用ひられん。非除尚義成ハ。然る後悔の心ゐくも。鸚鵡の奇談。
吟れ。ゐ。親兵衛グロかへさて。物種に。ゐ。ゐよりも。ゐ。
并に與四郎ハ。驚奇感嘆。辭よりも。ゐ。時を移さゞ。准備と。日今来着仕の尊意を伺ひな
れハ。君侯に。件の御准備ゐる。狀辰相。ゐ。老侯へ稟さゐ。ゐ。奇異妙絶。恐れ入て。ひと。一五一十を

告稟せば側聞せる氏元貞行倶に奇談よ駭然たるべき中よ義成主憶ぎまるを額に加へて嗚
呼奇なるかな妙なるかな鶏鵜の奇言は我大人の御明査よ錯なく女兄の君の神霊の神謀に
あらんぎるも現神通の元量なる曩ゆ氏の童女に化現して賊徒征伐に緩急の理を示さるべし更に
又疾風の如く朗方の刀槍に真助を施し昨夜は又明々地に神體を顕して濱路を極て女僧妙椿を
懲しめたるは義成に妖賊に惑されるる術を諭さるべき上は親兵衛に童年は似げなく大人
類なる史書を援て世の疑ひを解ぬる論辯廣博最有なる示現なるに今朝は又瀧田
鶏鵜よ憑て我意を表さるも大人に告さるべし計ひなる妙なる義大人の夢想に恁々
と告ぬるに何疑ひもなきまさん在朦朧なる現身の鳥なりとなるべし大人に毫も疑ひなく快照文
と與四郎を這方に遣はさるべし事立地に合期して料らずも這便宜なる濱路并に妖書を見出
既に知召さるべし照文は必ず知るべし然ば今ゆ告んに要なる先づ與四郎を呼べとて近習百に
ゆさるべし遠侍に伺ひ候る與四郎は近習に引れて来る義成主の御面前に

恐よ與四郎近く寄れ御面に我思ひ浅くて犬江親兵衛を遠離せる実に無此上謬なり因て召かさん
と欲せ并使仆は十二郎と洲に優めるべきを瀧田辰相とまるせに奇なる鶏鵜の忠告あり大
人の変なる洲逆を這方に遣はるべし特に便宜の計に赤くて思ひまるれ左も右も十一郎と商
量して快起なれば路費は市に駿兵衛を伴當として餘の犬士も索遇せ
我意を伺て俱に来よ然るに義成主の義なるに與四郎は額揖して頭を抬げず氏元と
貞行は左右に對して撰向は最も惶恐御諚義なるに
いな逆知召れん下総の市河は是親兵衛の故郷に行德は母親の親里なるに
崎生と路を分て那里に赴て那山林の名迹と宜へる依仆夫婦は對面して穿枘問は那人の往方を知
る據なる御諚は特なる似れども伴當は一個も要に況雑色輕卒なる御内人と俱にそなるべし影護
くて倒に進退不如意なるは道節は先に御扶持の下に召置て身の
本意なれば音音も俱に不娛なるべし一要時の暇を賜り道節は餘の犬士の在処を

索ひつぐやと思ふ折ふし犬江の腋子まう仰ようて這地に在ぢまうーと人倩ふ少知りーとり胸淺ましく。
伴ゆも沼立む憑ふ執送され老が身の遣る方もなくいひふ徳ふ御用ふ擇れて蛮崎生と共侶ふ那八
犬の人々の迎ふ。と仰の趣寔ふ沼くえ造化ふ面目この上やいびたの身軍でゆとも犬江はいふ。犬士達。
逢ば必説薦ゆ。俱さぐ還りのひつぐとと勇ぢく稟ぢまぞ。氏元貞幼有理と感じて。脆て執做なれば義
成荒然とうち笑ゆて。他が情願寔ふ餘弐ぢ。暇兵ど隷て遣さんとのーは非常の與ぢぐ。開も亦不
便ふ思ふれ。強るは要ぢー。隨意ぢるべー。却十郎は甚麽ぞゆ。その弐ふ就て瀧田ゆて。另ふ仰はぢう
ぢ。と。
為狡と問せゆへ。照文答て。然ば目今與四郎が稟ぜーどく。小臣は穂北ぢ。氷垣許索ゆて。那里ふ大吉の
在ぢぢといひ。結城へ赴ひん。君侯も聞召ぢるどく。こ、大法師は宿願あり。季基公と首ぢぢぞ嘉吉のむ
く結城ぢ。陣没ぢる人々の菩提を吊ふべ與ぢ春より那地ふ庵と締ぢて。大念佛と修行ぢと豫ぢの
きと。
竹ぢえあり本月の十六日は那諸灵位の亡日ゆ。結願のとーぢれば。その日ふ至ぢば大士們。俱ふ結城ふ赴ぢく。
法華ふ會ひん非除來會せぢもあれ。小臣は御父子の御名代を奉り。十六日の結願ふ必法會ふ預

るべーと。老侯の御諚あり。御布施ぢも儀のどく。遠ふ寔ゆひーを柳笠ふ藏め。伴當ふ持せ。
又老侯の宣ひは。始賢士を招ぢる里堅印は我一署ぢ這回は守の殿の御教書と齎ぢべーと仰られひと
稟せば義成點頭ゆて。寔ふ義ある仰へぢ。ぢば我も大士們へ招状と與ぢべく。祖靈へ香奠ぢまぢ。
べー。十六日の結願ふ。餘日ぢぐぢもあるぢれば十一郎は今宵水幼を先武藏ぢぢ赴ぐべー。後去向は異へとも。
與四郎も俱ふ首途せふ。十一郎は十個の暇兵の外ふ東西持ぢ奴隷ぢぐは不便ぢん。弥木曽介藏人は
これ。むーつ。
ぢぢの旨を有司ふ倩へ。事の准備を急ぐべー。と仰ふ大家ぢぢる果て。齊一退り去ぢる。偖而照文と
與四郎は饗膳美酒を賜ふ。權且伴當の揃ふを待ーふ幾程もなく事の准備整ふ。と告ぐ。
隨即氏元貞幼は招状と香料を照文ふ遞与ーけり。又與四郎へも親兵衛を召ふ。御教書と
路費を遞与ー。御諚を倩へ。縱情願へとも獨幼は多ぢば一両個の伴當を領てゆくべー。と諭ぢ
ぢ。與四郎固辞むとぢぢ。瀧田より從來ぢる鞋奴只一名を俱して照文と共侶ふ稲村より首途ぢ
長沼日ぢぢ影敬ぢて下晡ふ。小程ふ照文は暇兵十名奴隷五名及瀧田ぢ俱して來ぢ。私の

文溪堂藏

伴當と共に二十餘名の從者を領て與四郎と共侶に便宜の港口に赴き當晩海船に執乘て武藏の千住に投て走らんれば與四郎は纔に一個の伴當を從へて別船にうち乘々たれ下總の市河へとて逃げ去り水引とのそだけ偽り程に辰相は瀧田より來て義成主に怨々と返命を告げ上席に既に鶏鳴の奇談を這方の事を那里に知られ者に照文と與四郎を遣されて後るれば又さる人もるーられども君侯の死徳をみづからも悟りぬて親兵衛と名かさるあるの一條は老侯の御本意に稱せ及ば欽びの大さを戊因て南弥六出來介が任侠義烈の支の趣鶏鳴の告も漏せりと云云と申えあげ老侯御感浅からず譜第恩顧の者ども他們も守の與に命を惜まで義に勇るに併守の殿の士を愛し民を撫育仁慈の致を所へと死欽びの父子賢明の死相譚を傳ふるの稱讃と感憂く思ひけり偽而あの次の日の黄昏時侯に殿臺の陣中より荒川清澄が使者として詰茂佳橋が呂に一騎稲村の城に着到て荒磯南弥六安西出來介が素藤を刺んと敵城に入て戰殺の事の顛末且南弥六が怨魂の首級に住て梟首に及れざりしを是故に館山の牢獄司が實首を梟し清澄の手を知りて急に士卒を遣して出來介が首級を奪捕せ且敵の雑兵一名を生拘て支の仔細を責問ひに南弥六出來介が勇戰の為体も具に聞え素藤が疵を負ひ擒られ士卒數多亦那牢獄司が南弥六の實首を用ひ南弥六に擬られる賊徒名幕沙汰大の首級をもりければ一笑に堪ずるの処然ば出來介が遺書あり志の程も知れ忠義分明に上に首級に近く山院に葬らて異日墓表を建べきの人滿呂須五郎以下の刀瘡見の久く癒ざる者五六名ひ將息の與大城内に置まく欲も皆横轎に乘せられ明日來着仕ん先件の趣を申えあげまつる為に馬を走らいれとて清澄高宗逆友が連署の巨書とまあるまけれが有司これを受とて三家光に告知せ當晩披露に及びけり偽而あの後の日に復五郎と首とて刀瘡見も來れば各宿所に帰へ居らて醫師に命じて某を賜ひ滿呂須五郎に南弥六出來介の児子に欽ぎ給へ親族のあらざるに向せたまふに南弥六を妻もなく子もあらず獨阿弥七と喚做ぶに南弥六が弟なり上總なる蘇々利の農戸へ件の阿弥七に両個の見子あり家子と阿弥太郎次と增松と喚做さるが俱に尚

總角之又出来介ぶ妻は世を去て成之介と呼做を獨子あり。今茲は十二ゐるべし。件の成之介が亡母の叔父い
ぐさの系いしのこのこりまくるかどを
上總國夷隼郡山田村ゐ程遠ゐ弓折塚ゐ引接寺の住持ゐるとそ。出来介則成之介を召
讀書の為かそ年七八の比より件の寺ゐ預け置くゐ。あの折復五郎が父を義成景うち殺
ぬて南弥六出来介ぶ忠義ゐ死せ。狼ゐ支成らぶとゐ人の及ぶ所ゐて戰場の陣殺ゐ優れ異
日賞を蒙ゐとゐもあれば親族児子の居所姓名を漏さず記し留めゐと有司ゐ命じぬけ。恐て又清
澄们へ妖書の及神女の威力ゐ女僧妙椿が懲される那夜女の支の趣又南弥六が送書の及人
老侯の垂世ゐ鷄鵡ゐ奇談あり。の是ゐより親兵衛们へ犬士を召させぬん為ゐ昭文と與四郎ゐ
ゐ使を仰付られて遣ぬ事の由。佳檜ゐ仰示さて親兵衛が帰参ゐるまでゐく也と固く成そ
那實字を忘れそとある下知状を賜りけれ。佳檜へ隨即稲村の城を辞去て亦復馬を乗ゐ。殿臺
へ急遽ゐけ。話分両頭介程ゐ大江親兵衛へ那日大母妙真ゐ辞別れ折伴ゐも馬を途ゐ還
ゐ。單港口の船を呉ゐ。駈てゐ乗て漕走ゐ。通宵順風なれば次の日朝日の昇る時俟ゐ

市河ゐ来ゐれば船を労ゐ船を還ゐ親の名蹟と呼ぶゐ。依介夫婦の宿所を尋ゐて名告ゐ
對面を依介水澪ハの多日ゐ妙真が消息して親兵衛が母堂ゐ
ゐ見れば皆ゐ増穂の芒草色づきぶ長伸て犬人備ゐ胆を潰して呆れて一霊時長視ゐ親
兵衛ハ亦亡親の住ゐ宅ゐかの来ゐ欲とゐ。昔あの檜の衿神ハ露ゐ懐ゐ旨の涙を拂ゐ
向上て心とゐく立在ゐ依介水澪ハ稍改定て遽ゐく立迎ゐ思ひ設ゐ現和子ゐ
ゐと前ゐ立て帚合ゐ精悍ゐく船荷の塵埃掃ゐ上坐ゐ請ゐ。親兵衛ハ揖讓ゐ野袴の結
掖下ゐ刀を解て坐ゐれば依介ハ水澪と俱ゐ茶を薦ゐ。恭ゐく額を衝て山ゐの欽ゐ云云と舒ゐ
ゐ日ゐ妙真ゐ消息を賜りて告ゐ。身の高運伏姫神の寛助を六稔富山ゐ生育
ゐ術ゐ身長ゐ大人備ゐと呼ゐる奇話珍説ゐ一ゐ驚ゐ。欽ゐ涯ゐ
御成長ゐと名告ゐ安房へ赴て訪ゐ思ゐ日毎ゐ船荷の多
ゐ今ゐ果ゐ倒ゐ訪れゐ本意ゐ水澪ハ御親族の李ゐ初見参ゐ欽ゐ禀ゐ

ぎとへられて水涕ハ額つ巨ハ膝と找めつ共侶ハと吁寧ハ慰めるる人の誠ハ親兵衛も亦外ゑ恐地と囲
坐程よく相譚へば依介ハ又過去と只顧ハ以ハ歩て那舵九郎ガ暴虐ハ折受ゑ眉間の舊痕と示ら
神の加護年歯ハ鄉ハ再會の果ハ如ハ夢と思ハ食応ハるの届く板厨の壷の錦ハれ錦ハ添ハ花丹楓果子と
薦ハ慶賀の盃と快勸んと立すくせと親兵衛ハ遽ハく推禁めてやと阿曳ゑ弟ハ旦園ね今とと急ぐ
ゑ鬼管待ハ後ハ鄉食ん今日ハ地方ハ立ちハ私の旅行ゑ君命ハ依るめゑ然とそ去向をいそぐべ一両
日ハ止宿せん鄉ハ大母の消息ハそ吟知られゑとも我身ゑハ同因果の七犬士ハ先ゑて君侯御父子ハ見
参ハなり聊武功ありとハ人故あるとも首尾妙ゑを自餘の犬士の在処と尋さて送ゑく都て俱ハく来よ
と約ハ坂東分國と遊歴の暇と賜り萬里の旅客ゑ立ハ寄りゆれ先墓参せまくほ思られ墓所へ案内と頼むの
主夫婦ハ對面ゑく親の御墓と拜んと思ハだらハ立寄りゆれ先墓参せまくほ思られ墓所へ案内と頼むの
と諭ハ水涕ハ水を乞て漱ハ家廟と同ゑ父祖の木主ハ焼香ゑその間ハ依介ハ衣脱更々背門傍ゑ
離笆の楊櫨花折含て程もく親兵衛ハ出れば備を貸草履ハ

出て曰く悠而大江親兵衛ハ宿所を去ると遠ハ母二親の墓所ハ参ハけれ依介ハ水と汲ハ携ハる花と立て
卒と傍ハ跪坐ハ房八沼蘭ガ死せ比ハ世ハ憚ハ隠れ後ハ許我の御所ハ信
乃と追捕ハ沙汰ハ吟ゑ舵九郎ガ伏家の光棍們ハ崇と怕れ他鄉ハ走て後安ハ房八沼蘭の
一周忌ハ墓碑と依介ハ造立て義侠夫妻之墓と六大字と勒てあり其の折と三回忌ハ建一卒都婆ハ
舊れ朽もせぬ依るとハ親兵衛ハつくと見ハ跪坐合掌て念誦ハ時の移るを覚ぬ追慕の涙
胸ハ盈て哀悼悲泣ハ堪ざりしと思ハ一念ハ果て安ハ身と起せば頭ハ障る樹の枝ハ兵稔前ハ
大塚信乃ガ実栽ゑ植ハと豫ハ那八房の梅ハぞあり親兵衛ハ其の樹の下と曝ハ富山ハ在ハ
日ハ伏姫神の告ハ知ハ思ハ枝條ハ四方ハ栄ゑる弱樹ハ屈
曲て蟠龍ハ似ハ勢ハ折ハ夏の盃ハ結ぶる実ハ青ハ黒ハ房ハ依介ハを
指さて其の梅樹ハ生ハ五稔許ハ枝ハ麗ハ実の異ハ里人
稱て八房の梅と喚ハ告ハ親兵衛ハ向上て點頭ハ現犬と梅ハ八房ハ

轉ぜば親の名の房八と号る名詮自性を思ふも不媿しかも東弓春の過けり花の根ふ我が舊巣へかへれども返る反親の墓ふく栽ふ友も多くの心の憂ひ帝ひ難て塵ふ交る塵の世を歎ひ果しかるべし然而存るべ

ふ所あるべれば又依介を先ふ立て香華院へ参詣を五七町の程ふして大きく寺ふ来りければ祖先の墓ふ花を向て方丈ふ到ぬる名簿を出し布施を捧ぐれば住持舵て對面して十念を授る布施の多ふ依りてなん屋

茶を呼び果子を薦めて似げる俗談せるふ親兵衛ハ困じ果て依介目を注しかるに辭去て大江屋へかへり来ふければ水滸ハ准備の酒餚を羞めて良人と共侶ふ曾待初ふ弥増けり依程ふ這市河の異人们を幾の程ふ知りけ大八の真平ど神躱しふ遇ひより既ふ六稔の光陰を歴ていまる日ふ還されるる今茲九歳の童ふ成ふ身長猛可ふ大ぶるして文学武藝ハ人ふ萬夏ふ就て神々表神童と稱られて權且安房の稲村ふ在しふ親の上墳をせん為ふけふもかへ来ふけりと話續ぶるを陜田舎の多ふあれど一郷

ふ知ざるハなく次の日の朝より四五名連署をる鱒を贈り海鮮を贈り或ハ果子煎茶などを贈るもあ

ふ良賤老弱陸續と咸大江屋へ詣来り歎びを演對面を請ふ者幾百人るを知ぶそ中ふ小文才ある

困児ハ伊呂波韻を操ふ唐紙を幾遍とる繰返して辛表並立る五七言の單字を整る詩を恭良様

とるふ悪筆の七可惜唐紙寫ちせしを懐ふ表字寄ちるもあり又こそけれるふ介遠波ぶる知ぶる調味兒ハ

よき出ふ表ふ像易を雅言俗語の駁雜ふ三十一字を義も世ふ取美麗ふ高櫃ふ筆勢折る釘ふ像

ふ懐然として遺るもあり是ふ親兵衛ハ依介と商量しふ餅十五六鮮搗煉して一郷送る飽遺

表又東西贈られる酬ふ表ふ人ふ宿所ふ招ふて置酒して一日遊を開ふ且大江屋の舗工们るふ表ふ折酒を

飲けり偖ふ雑費ハ親兵衛ふ携る盤纏を以て剰主人依介ふ金五両を取せ依介驚ふ推返して

云云と推辞めども親兵衛ハ聴ふ理を盡して萬ふ水滸ふ遽與けり依程ふ親兵衛ハ舊里人ふ愛願せ

られて逗留數日ふ及びしを猛可ふ依介ふ別を告て先ふ德の方へも立去んと欲せば依介水滸ふ推辞ふ

ふ放ち遣るべきもあらざれば親兵衛ふ諭しふ錦を被て故郷ふ還るふ是ふ人の面目ふれども我身正

ちく里見殿ふ仕て重任大禄の栄ふ居て於ふ表ふ為ふ忠只是孤客ふ同因果ふ義兄弟七犬士の在処を

索ふとある君の仰を稟ふ舊里ふ立帰ふ浮世ふ這地方ふ日を弦ふ思ふ義ふ今

後の会あるべき再會なれば今宵はこゝに依本の惜む別を替めあへず明日と契りしこの
宿朝未明の約徳すでに送れば遂の決と分られ徳而親兵衛の朝の約徳番の折々戚古那屋香華院へ
立よりて上堂香料を寄進し退出て塩焼く濱の光景を眺望する外祖文五兵衛の舊宅と人の
購ひとりしを今日訪ん由縁あれば只母屋の庭の吉那屋の花鯛を送りて親兵衛の四才の秋まで母も祖母
も捨られて折々這里に来ける恩とも只夢と似て思ひ難く懐舊の端緒と做るのみ徳でもるべ
あるべき単肚裏の思ひ茲よりして真間図府墓詣西墨田河を杖曳ぶ名勝故迹見るべ分れど山水の
為ぞ旅ならねば是も要る今番の思ひもあり先江戸へ赴て湯嶋妻恋を歴覧し金昌木
ゝ穂坂に到り乞大塚大山三四の兄弟今も那里ありやうや便宜を探ふきてあるべし既に琴思ひ
折西図河へかつる約快船あるとぞ聞て譚ひよりて賃銭を定めその船に乗ちけるに潮時もよく順風も約
三四里ばかり一時許に船果れば船を陸路ふる登りて上野の原まで来ける程に忽れば老る松の下に登
見西三脚並建て茶賣構の出茶屋あり休ん這前茶を嚮く茶博士に根岸金昌水頭の農戸の

妻欲母孫年齢六十有餘の老媼なる客待の程なる投るん眼鏡を掛て茶を績て居る親兵衛暁
天の市河を立去りしより六七里の路を来れども日の出と長閑限りなる四月の天の落曇り十日の近き時候なれば
昇るべき高き未牌の初刻ならぬ既にして湯嶋へ遠くもあらぬ程なれば親兵衛は這頭の先や姑
且憩んとて件の茶店に立よりて発見の尻をも掛れば老媼は遽く頭を抬げて客なりけりと見てければ眼鏡
外して衛を見る芋と疾芋桶に納ね弄めて身を起して迎て相公を来ませるか今日の朝より日和のよ
くて暖なるかとの問て脆て急焼着て渋茶一碗淹茶盆に載て卒を薦る折から這頭の里人と
おぼしき幾個とく奔走して誰も来よ他の者を憐むべ那人は今四牢より奉出されて前面図へ来るぞとよ。
噫無斬慙なる南無阿弥陀妙法蓮華は限りの命なるぞと不忍の池の邊望て走る光景最賺しけり
親兵衛是を聞て嘶阿懐那衆人は何と覩んと走るやうに刑罪人でも来るぞ狭と向れて老媼は嘆口氣
も然かと心の内が何面白くて人戦を紛て覩る者は仮者は那を就て苦々しく物かたり合ふ人まで他
今日前面図る申明亭に首を獄る罪囚は肩谷家の御内室二世の忠臣と呼ばる河

刃を住て
谷中二
大刀自ゑ謂
せん作
谷中二

三浦介佐太郎孝嗣と喚做る廿歳計の後生と豫て風聲あり那人の父多々權佐守如主の奥家老で
俗に御上様蟹目御前の御意を以て新参の伊人龍山縁連を殺んとて犬坂毛野亂智と称喚做る智勇
勝れ後生を憑る那縁連犬坂が親の寃家であるければ商議即座に整ひて去の春正月某の日に縁
連并に河嶌の甲乙相模の北條家へ和議の使に赴く折鈴茂林の頭を犬坂元を俟者で縁連主
僕と副使の鰐崎猛虎仁を殺し捕へて去の餘越杉駱三一峯寃〻鍋介既済と喚做る奸嶌主
僕の悄々地に毛野の助剣を以て犬田犬川を殺せる事と為も五十子の城
内に管領酷く怒せ給ひ毛野と追捕の為隊兵三百餘名を分く甚奮地に
鈴茂林の浦邊に煉馬の残嶌犬山道節忠與と云ふ猛者と同盟の義兄弟犬飼犬村の
両勇士と二隊に埋伏を設その隊の猛卒七八十名猛可に起て前後より挾て攻殺す大刀
風當るべうもあらざれば管領方は乱誤して殺るる者尠からず大将は辛く三四個の近習と俱に
敵の囲を殺脱て五十子を投て走りの道節透さず赶蒐て克雪て殺る前に管領様の頭を射

られて頭鎧は矢場に落されども幸ひに裏を缺ぬを這里を従兵四名の内中両個は道節即に殺れ
けり小程に五十子の城内あらのるまを守れば上様驚き歎き給ひて怒に縁連を除んとす
故に毛野が口より事を洩して那道節を告げ然れば思ひ合せ剛敵途を起りて館を危
窮に及ぶ始め推其毛を吹て倒に疵を求る我慾を争何は君あられとせず支る赤心を
後に知らせまゐらせんとて自刎して亡ぬ然は河鯉權佐守如主も神多の身の事を仔細を
知るとき毛野を怒て腹搔断る臨終に獨子なる佐太郎孝嗣に遺言し君の先途を
拯ひまゐらせ克ぎ館のあん馬前に戦殺せよと励る折る大山仁義兄弟大塚信乃が詭計を
隊兵絶に二十名と俱に城内に納れて火を放て攻る犬飼犬村両勇士最も稠く追逼られて近臣皆殺れ
け給ふ程に管領様は又高畷の頭に犬飼犬村両勇士最も稠く追逼られて近臣皆殺れ
残る大将のみ乗れば馬と岡の邊に馳寄せて腹を断き去る程に件の河鯉孝嗣主多々亡骸を轎に
舁て走り去りけるに三十名計の士卒と共に主君の危窮を極まりて隊兵を分て忍岡の城と延て

各其身に些の残兵を従て小川を隔て敵を俟ち必死の覚期をけれ。犬飼犬村両雄に感じて左右なく
敵をも蒐る。折ふし道節と音音犬阪犬川犬田の輩ら集合して原来毛野と道節に始より謀り合せ館を
と現に大角の四犬士に初対面の口誼あり。孝嗣あれども滝蔵
狙撃ふかもと心を猜り疑て解て毛野を恨まざるべかりしかど却已に死せるあらばれば名告被け敵を招くに
勝負を決せんと勇しく道節の威嘆して敢て及ばず。
道節に分捕をなる馬を孝嗣に返さんと孝嗣聴てうち跨て一箭射て相別れるその折の進止寡愛に
武者態をしと敵をもて大士達に只顧感じて已ざるを知れる者の話を徒而河鯉孝嗣主に忍岡の城に赴
て主君を見参せんなり。鮮目御前も父守如も自殺せ事の趣を伝えば又毛野に道節と謀り合せ君侯を
犯せるかの故に箇様々々と対陣の折洩せる毛野道節が初対面の口誼を事の證とて
上様の知恵を思事由を稟し解て辨論詳りけれ。管領昨非を悟りて御後悔大なるを其
詰朝孝嗣主に辛丈赴て昨日大山に濱遷し鳥る主君の身鎧を舎御し軍五十子の城に

入て敵の退るを待より。則方の残兵に四つを守らを却忍岡の城に入て来て頭鎧を返しなり。且五十子為
体及信乃道節が白壁書言迷しる文言を徒らに誦しそのあり恥辱に縁連の君を貴ぶ欲しる
邪智奸佞を起るを。鮮諦稟あるが管領に恥さを恥て孝嗣の忠孝を賞めて浅らざる父の本
領を賜て身退近く召使れに功を媚を栄を羨む佞人に欺ぶ折を嘱く誤言してその非を知者ヨリ
けれ管領亦復惑されて然も二代の忠臣を悄ら地に疑ひ遂に外様に退て五十子に倶ゆ
仍に忍岡の城内に罪れる孝嗣に群小の譖を怕る為に病に假托て出仕せず無竟てのみ在けり佞人
们の尚飽を中に縁連と親かりしもまれの折をく竜山の輿に怨を復さんと思心の起りけんと怕
る佞偽書を為て河鯉佐太郎孝嗣に毛野道節に内応して忍岡と五十子の両城を攻合せんと欲
密謀恁々と件の偽書を披露せる管領驚怒りあり。有司に命じて孝嗣を捕捕せ獄舎に繫
で毛野道節が在処を問て呵責ふかりけれども素より寃枉の罪なれば招ることもなく
く忍岡守城の頭人根角谷中二麗廉奉て日毎に拷問を加る程に五十子の城内より美田駅

えんどのあるこせんきゝ為つゝ
蘭二穴栗專作出役ゝ。然けれども孝嗣主ハ毫も屈せゞ死を極めゝ。寛枉のよゝを叫ぶのゝ另ふ
ゝよりもゝ。谷中二駅蘭二相計ゝて那人の首伏の條々を哄造ゝ。毛野道節们ハ孝嗣ゞ弱
と捕られゝを少知ゝ。深く躱れ兄。今ゆゝ照驗ゝ。巧ふ少ゝあげゝゞ憐むべ孝嗣主ハ竟ふ死
刑ふ處られ今日未下刻前面岡へ牽出されゝ首を刎らゝと少ゝ。実検使を根角生大刀
金ゝハ穴栗生ゞ五十子より出役ゝ。遂件の風聲あり方僅衆人の物見んとゝ走りもゝ。ハ外ゝ
ゞ。好人の毅ゝ憐ゝ。樂ゝ薄情ゝ。人心盖ゝ所為ゝ。外面瞻
仰て長ゝ日ゝ。又一碗ゝ。欲ゝ。茶碗ゝ。汲ゝ。親兵衛ハ遽ゝく呼禁めて不合ゝ。茶ハ
欲ゝ。現阿懐の物ゝ。我疑ゝ。釋けゝ。忠臣孝子の誣られゝ。罪ゝ身ゝ殺ゝハ。
宿世怎麻ゝ。応報ゝ。怎ゝ。不平の事ゝ。切ゝ其里赴ゝ。外ゝ。その人の面影ゝ。
向岡ハ那里ゝ。向ハ依ゝ。件の岡ハ不忍の池の畔ゝ。前面ふ連ゝ

岡ゝ。這里ゝ。距ゝ。遠ゝ。七八町ゝ。原來同名異地ゝ。我安
く武藏ゝ。向岡ハ。即故名所ゝ。开ハ國府の南の方。玉川を隔ゝ。數里連れる岡ゝ。向岡ゝ。喚
做ゝ。然ハ萬葉集ゝ。柿本朝臣人麿の歌ふ出ゝ。見ゝ。向の岡の本紫ゝ。冊ゝ。花ハ成ゝ。辻ゝ
ぎゝ。又新勅撰集小野小町の歌ふ武藏野の向の岡の草ゝ。根ゝ。ひさゝ。長ゝ。
思ゝ。詠ゝ。俱ふ忍岡の名ふ。素ゝ。是國府ふ近ゝ岡ゝ。先哲の考證ゝ。然ゝ。這
頭ふ。同名の岡ゝ。ハ少知ゝ。土人の私稱ふ。
岡ハ這頭ふ。ねゝ。忍岡を喚更。前面岡ゝ。者ゝ。又不忍の池の西のゝ。本郷ゝ。續ゝ。岡ゝ。前面
岡ゝ。喚ゝ。土俗の私稱ゝ。取ふ足ゝ。
郷ふ入ゝ。郷ふ從ゝ。世の常言ゝ。因ゝ。俗稱ふ儘ゝ。易ゝ。便利ふ。
吻ゝ。笑ハ親兵衛ゝ。合笑ゝ。現ゝ。然ハ酒家ゝ。前面岡ゝ。快ゝ。
腰纏ゝ。錢ゝ。出ゝ。茶價ゝ。遽ゝ。菅笠ゝ。遽ゝ。茶店ゝ。出ゝ。程ふ。肚裏ふ。

奇なり。那老媼が物のいひざま。民間微賤の者に似ぬ。甚麽なる人の果やらん。是まで心憎からぬ河鯉親子の名ハも。我身富山に在りし時。伏姫神の告させ給ひて。最詳に知るなり。今又老媼が説く所這那符節と合る像く。言具にして一支も漏さず。他いふまでもなく城内の機密を探るなれば。故なくして亦奇なり。そも左まれ右もあれ。那孝嗣ハまくなく。是忠孝の士ハ。道節毛野介も相憐れむ。丈夫なり。あと多くあれ。然ばこそ。今我身単身にて。極ふる由もなく。切て首級を奪ひ。便り宜賛佛場へ葬るも。是武士の好意。徒やに已んと尋思ひ。足を早めて打出の前面岡に来て。既に刑罰の折と。おぼゆ。年二十許なる後生の面白く。月額の延伸て黒く。背に結垂れて。布皮の上に。此は孝嗣なるか。又実検使とえる武士の紺純子の皂に天鵞絨の下縁なる。野袴に。葱羅紗の戦外套。とうち被りて。朱鞘の両刀。苛めく。発見に。尻を撫る。根角谷中二麗廉なるべし。又年齢三十有餘なる一個の武士の袴の半分隠るまで。高股裁を含る。葱白の太き。繻絞の襟に。臂を顕して。般柄被る一口の刀を。抜持て。罪人の後方に跪坐る。あるは那究果専作。あるは。雑兵数十名。或ハ棹棒を衝鳴らして。現れて近く。衆人を追拂ふ。或ハ鎗鉞を推立持て。整斉として。守護なり。その事の為体。五道の冥官。餓鬼を屠り。夷狄の庖厨に。豚児を解くも。恁やらんと思ふ。むろん凄しくも。亦最多。後ハ高丘岡に。招くとも。人間道芒草ハ。剣の山。狡と疑ふ。前ハ不忍の池。紅蓮の芙蓉ハ。剣樹。正是人間栄枯。桑一炊。子息絶ば。萬事休。仰ぎ冤を。叫べども。白昼。答なし。幽鬼。今夜。誰が家に。落ん。侍ら哀れを知らぬ。貌に。今孝嗣が。駆るを。視んとて。聚合る。里人。雖散されども。又聚ふ。引板の鳴子に。群雀。佳轉りあへず。樹に。登りて。遠に。躍れて。観るまでなり。恁りし程に。親兵衛。岡の邊に。と。鍛冶。樹陰を。便りに。近て。人に。知れぬ。窺ふ。登時。根角谷中。孝嗣。河鯉佐太郎。義れ。若ず。父。權佐守。如に。當家。恩顧の。老黨。煉馬の。残黨。犬山道節。并に。大阪毛野介。と。通同して。出頭。当の。良臣。龍山。免太夫。縁連。を。狙撃して。北條家の。和議を。破り。剰君侯を。危くして。五十子の。大城。大塚。信乃を。引入れ。折守。如が。奸詐。密謀。を。発覚れんとせ。に。怕れ。那身に。自滅して。その。子孝嗣。偽りて。忠死のように。装ひて。君を。惑して。更に。又毛野。道節。と

折々密書を送りて。五十子忍岡の西城を攻囲せんと相謀る。虎狼の野心大辟不赦九族誅に數と
盡して誅せらるべき者なれども。母は冒裏に世を去りて兄弟姉妹もあらぬ。先祖の忠勤を思食て罪一
人に止られ。目今斬首せらるる者也。御諚辱く兼なりて及を受よとぞ渡せと孝嗣聞て嗟嘆く現
世曰い金を鑠を忠義を誣て謀叛とぞ。奸佞と稱て良臣とぞ。狄緑衣黄裳美賤を乱り冠履倒
異ふして。天地反覆を然ぞ。忠臣子皆誅せられて。呉王亡び范蠡去て。大夫種罪なきの期に及び
何をかのがん。屍は野前を肥やす。寃魂必天雷と為て。説臣を殺さん思い知らせとぞ。果て谷中
二怒れる聲ぬ立て。益の諍言誰か守ん。疾々首を刎ぬと。劇した指揮に。充栗事作。兼りぬと身を
起て。孝嗣が項の後毛を。両三遍拭揚て。念佛せよと聲うけて。夏の寒く氷做を及と見ると。振抗
る程もあれ。一個の武士。胸肩野袴。刀に草鞋浅紫の三尺帯の締目長に。逆旅の打扮。湯嶋の方より
忽然と飛が似く走り来て。間近くなる。隨に越後方言の聲高やかに。管領家の人々なるぞ。洒家は。
腹大刀自の。孔伴。當巣鴈駿平。幼深と。喚做を者。老夫人の御意を。汝に伝ぶ。旨ぞ。一愛時及を

止ぬと。扇を抗て。喚けば。思いかけぬ。思いかけぬ。驚に訝る。谷中二。專作。庖丁。夫。河鯉の頭に。跨數を。そ
投頭の思念に。暇なりけり。既に。巣鴈駿平は。走着に。谷中二。躾て。竟兒を。放て。遽に。立迎へて
御邊は。越の。老夫人の。孔伴。當に。欣在下。則。扇谷殿の御内。忍岡の城守護の頭人。管領家の御諚に
よりて。逆臣。河鯉佐太郎。孝嗣を。刑罰の為。出役を。根角。谷中二。麗廉。でん越の。老夫人は。何。の故。
遥々の御。参向。逆。の御沙汰。も。なく。と。佛々。に。御旅。に。いらるるぞ。と。駿平。うち。吁て。御不審。
理り。なり。老體。朱門の。婦人。に。侠猛。可。る。御旅行。の。所。以。なる。の。義。は。老夫人。に。見。参。の。折。疑。
鮮。ぞ。と。詞。ぞ。訖。ぞ。徐。と。夫。人。の。先伴。是。甚。麼。る。打扮。ぞ。但。見。第。一。番。の。排列。は。鐵。炮。
弓。に。四十名。次。に。長尾。の。家。の。花號。ぞ。緋。の。油單。に。縫。箔。を。一。對。の。挾箱。次。に。猩。緋。の。重。韃。に。眉。尖
刀。を。持。る。者。次。に。歩兵。三十名。却。て。の。次。に。夫人。の。轎子。左右。に。従。老黨。若黨。齊々。と。二十。許。名。皆。行。裝
華。なり。陣。笠。野袴。掩。脛。衣。列。と。正。と。守護。を。る。次。に。雜色。數十名。醫。師。の。轎子。茶。辨。當。伴。の。女
房。に。轎子。も。十。挺。あ。まり。續。に。る。是。より。下。に。騎。馬。の。老。黨。伴。鎗。陪。伴。雨。衣。籠。に。食。過。ぬ。と。の。ま。ぞ。天。象

婦人に似ず武備厳重覬覦を警て司を却説大刀自の轎子の既に近く来る程に駿平躍て走り還て轎子漆の花蕚に谷中二が姓名その餘の事まで箇様々々と物語れば大刀自あらうち聞て且先伴と住よと下知して又駿平まろがさつ轎子を舁居させ為程に伴當們は整々と立ちて行儀よく左右二側に星列ち登時巣鳳駿平は又谷中二が身邊に造りてやと根角生老夫人の對面せんとぞ轎子を建られたり快々といそがぬぞ谷中二は阿と応て走りて轎子に近つけて芝生に拜伏しければ大刀自は轎子の戸を開かつ端然と谷中二ふうち對して汝が根角谷中二なるよ這回我身の恁猛に東國へ發向する所以は原主筋なる扇谷家と我子景春が和議整ひる歡びまうさんが為及亡女蟹目前の上墳せまくほりまを思ひ起せ草枕旅宿累ぬる程に奇しき夢想に神の告あり辟言に湯嶋の天満宮枕上に立ちて鮮目前の傳を示し權化が獨息子河鯉佐太郎孝嗣が冤枉の罪に陷されて命危き事由を最詳に告さとりて他の父守如は忠臣なるに聊事を辟めて自殺せるを詭臣們が逆謀あるを主君に啟し剿その子孝嗣も親に劣らぬ忠誠の志ある後生なり又奸黨が禀掠を怒て林獄數日に及ぶ本月の某日に

恁々の地方に竟に死刑に行はれんと聞て孝嗣を救べしと正可に示さるの人忽然として夢の覚ぬ開より路次をいそぐ七今日も這地に来る程に孝嗣を死刑の里巷の風聞果して違ぬ因て湯嶋の神社へ詣て這里へ来る人是より五十子の城に赴けば管領い左右も宜くまうす故を聞て快孝嗣を放ちねかとの願の像輒るに谷中二果れ面色を変て仰でいはく孝嗣が叛逆を大赦の折でも數まぐれに大辟るをいかにして御内縁なりまを老夫人の御助命を饒さるべき者にあらず且佛の教にも果敢なる事に相喩て泡沫夢幻とかるるに憚りなく御夢想の神託に信じかり婦人の仁にあらずとも果て大刀自に聲苛立て默れ廉泡沫夢幻の譬喩あるとも神の示現を信仰て罪なき人の死を救ふと佞者の詭を信容て可惜忠臣を誅るとは愚の害孰か孝嗣素より罪なく然るに谷中二や守如が何の為に逆心あるべき能く媚む小人們が良臣の栄を忌て偽書を造て謀書と被露招ずせざる首伏を哄作て罪を讒り君命を借て私怨を果さんとぞ大辟不赦の罪人必首を刎るべきの義に什麼と詰られて谷中二答ることなくぞ黙れり口訥りて黄蘗を舐りて唖覓に似たり戯

亦とトろう　まぎ　ぎ　ぎ　

や右や救ひかぬ越後(倶)しとかうるべ尚管領家と宿と衝狭と思されて和議も破れやせんゆり捨てて
思ども是より永く別るべゆゑ唐山の孟死常言ふも良禽は樹を擇て栖を良臣は君を擇て仕ふとそ
ふるふ譜第と暗主の與ふ忠を盡すと盡さぬ身を喪ふ愚を愚孰の里ふも孰か立て後の栄と
ゆせよかと慰められて孝嗣は感涙業ふ落るとぞ頭を拾げて思ひけるは再生の御恩湯
嶋の臺より高く不忍の池も浅かり孰の時ふ報ひまつらん今ゆる短詞を聲を呑もとも乗力
自業ふ否とよ汝が為のそ忠ぶ權佐守如ら鮮目前ふ冊死て殉ひ忠心ふ報ふと思ふ恩ふ恩でまー
譏死と見ふ不忍の池の水草ふ放生會子の河鯉を活鯉ふ做ふ花滋ふ親切ふと諭ふ傍ふ
駿平咱神替の両刀あんん快半ねらぞせば駿平は阿と応て一霎時後方ふ退ぞ逆准備ふ
金表裝の両刀と廣蔡ふ載て恭くも來ふ登時大刀自ふ孝嗣ふ對て喃佐太郎今ゆる浪の
身とも武士ふ寸鐵も帯ずて那里へ行ん因て其両刀と取ふ然ばも高ふの地方と遠く去ぬは後
難あらん安く他郷へ影を隠ね當今東國の良將は里見親子ふ優ふ武士ふ安房上總と兎角身の置

所ふ及ん尊上ふの義と思ふと教諭と大小の刀とぞ取ふ受戴ふ腰ふ帯く感
謝ふ堪ねば吐ふる涙と共ふ額徹に拝ふ又因賜の鉄ふ書ふ頭と拾げ四下ふ行ふ今まで存り
つる大刀自主從轎子眉尖刀挾箱然も多ふ伴當ふ忽然と一人も見ふ者ふ不忍池の畔ふ高く水鶏の
聲ふ聞ふ最も幽ふ物ふ佳る神出鬼没の行會料知ふ驚ふ呆れて忙然とてあり
越ふ啓筆て心ふ見れば帯ふ両刀は量ふ禁獄ふ折根角谷中ふ捕收ふ孝嗣ふ佩料ふ河鯉の家先祖
ふ相傳の鋭刀ふ原来大刀自主從ふ孤狸の所爲ふ我與ふ這両刀と悄々地ふ捉て返せ狡猾ふ
湯嶋ふ聖廟の霊驗ふ我死ふ救ふ這刀ふ合ふ復ふ狡猾ふ左ふ右ふ思ふ
難ふ奇異現怪ふ尚疑ふ鮮ふ倩ふ時宜ふ倘谷中ふ迷ふ醒て路ふ急ふ行ふ
免ふ然ふ身ふ纏ふ路費ふ爭何ふ湯嶋ふ社參
詣ふ行ふ思ふ稟ふ親ふ眼ふ思ふ是も申斐ふ浅草ふ退て又主意ふ獨語
遷ふ棠ふ蹇ふ拂ふ世ふ潜ふ身ふ不忍ふ池ふ遠て正坂田舎上野ふ方ふ赴て介程ふ大江親衛

久く樹蔭に立躱れて孝嗣が死を極めし眼大刀自主従の事の光景又大刀自も伴當们も掻消せ似くなんぞ
ゑくする。奇しき椿事に胸を潰して出もせず在りける程に剛才孝嗣が獨譚て浅草寺のさまを池を遠く
やくと見て肚裏に思ふ。那孝嗣は忠孝の士なる後生只今他に説蔓めて我君侯の家臣に做さば萬卒に
倍て憑しからん。されども徒その名を呼て今日その人を見るのまぎ本吉の剛柔を知るべしかれば心許なく錐てこ
に深念こそ。樹蔭を出て捷徑より孝嗣に先ちて走ると両三町。不忍の池の畔に老る偃松一株あり其
頭は芝生えれば親兵衛は木の根に枕をして仰及倒れ乳を覆ふ面色を眺後生の近つけ来るを知らず
孝嗣は鬱髪とて偃松の邊まで来れば。どれば行装せ一個の少年腰に両刀を跨へて輾轉く樹下に
在り。剛そぶ懐より財嚢の半分顕れ出れば必路費の金なるべしと誰か見ざらん孝嗣は歩を伸めてたぐと
單心ありのやう這旅客は年少なれ一路児の子ー狡なる酷く酒に酔ひ然るべき病痾の發りーるーん
倘我がその心を過る人那財嚢を見ば必不良の心を起して奪取るべきと惻隱の心
有般に已まざれば我と呼ばれ高聲に嘯旅客覚めやと覚ぞやと我答ふ雖呼々々応せも捨て

いたいさまを見て脈を試るに親兵衛は姫神偽授の閉息の法をもく脈さへ沈うければ
孝嗣驚ろきを放ちて。その人亡毫も酒氣なければ酔て倒れ者にあらず且寸口の脈平常なる有が如
く無に似る意なるを顛癇に即倒るるに疑ひ。猶中脘を推試まに死活を知らんと獨言
に。親兵衛が衣領を推披く懐へ入て親兵衛は臥ながらそのまを丁と扼りて白日
強盗奴何者ぞと詈りながら身を起して掻抓を耶と聲うけて眼上約莫一丈あまり蹴鞠の像く投さ
れて孝嗣も赤本事なれば宙に刀を抛て地上に立て涙を仆れ怒れる聲を振て悪少年奴ら
陽滅せ然も知れば我が誠心なれて看病く虐恩に仇做て白打三昧小ぶ本事を見知れ覚
期せよと敦圉る勢い猛く腰刀を晃りと拔て礮と擊る親兵衛嘆ぐ氣色を腰を銭扇拔持て
受け拄る。撓まぎ玉ぎ姑且挑戰けり這段は長安なる腹稿なれば盡さば看官訝るべしかく
思ふ。勿論あの中帙も六巻なれば楮數殊に多くなれば。敬皇て七冊に做ものゝ。そもそも
這に限りあり是より下の話説は本輯下帙の巻に俟く。第一百十六回に解分るを聽給へ。

南總里見八犬傳第九輯 巻之十二分 巻下終

八犬傳刊行の書林文溪堂なる敎賀言七言本輯中帙七冊の編述い作者蓑笠翁約束あり。大凡斉
下旬までに送すく綴りて取れそ。今茲乙未春二月六日より子を覩て渡れ。果して五月七日至りて十一の巻第
百十三回の二十四頁まで稿本過半出来し筆工画工彫人の多く渡しそ。刊刻を急ぐ。次の日五月旦の朝翁の獨
子を伴ひ琴嶺先生の訃ノルラヒ。ゆえて長く病着起ゆ。もるくあの朝辰時に簀へ易あると告げ。先生の
瀧澤氏諱興繼字は宗伯一稱は琴嶺守忍庵と號し方伎をもて業とす。年三十
八歳。五月十日小石川茗荷谷清水山深光寺浄土宗なる。先焚香に祔葬せる法號して玉照堂君與言風光琴嶺
居士と云。先生稟性忠孝順言行先実なりとす。嗚乎惜き幼息一男二女あり。長子は小学に入る歳餘い
尚いけるなり。翁の悲愁査べし。あの凶喪に拘らんて未成の稿本の獲られたる龍の腮にあるとは珠に似たる
心地あるに事の障りは是のみ。六月の比より狹翁も亦恙あり。僕時々訪慰めり。一日翁の云ア。老て不
幸多く鄭に琴嶺を先にそ。心ならず衰されいや。背屈り腰さ疼そ人の扶助に起居とまれ忌い閑
ても尚無龍で朝露夕槿の果敢なきを観念の外他事あれども坐して食べ箱も空。現病着のせんかさ

なるに苦しきの世渡の為哉心の憂に帚を執て玉箒に代て幾ばくか。今一霎時待ゆ。
疼痛ずかとて送る巻を綴べ。抑早が年毎に編る冊子物語の稿本を傍訓るとに誤脱あるをみづから
急に讀復しそ見送ま。三回ぐ綴る毎に先琴嶺に校閲さるく。指摘を他に儘れば補に
便りよりの紙因て這般の稿本も十の巻百十回まで皆琴嶺に見せるが十一の巻の中央に至れる百十三
回十五頁は五月朔日に綴りかども。その比は琴嶺が病着既に重なれば平はよりとも他に
やく学知りくいなく校閲まくやーそ。病の牀に在りるがゆと叮嚀に誤脱を訂ゆて親の資助に
又ゆまべもあるまでに原稿まら歎きの人のあるれば。
たでさえ便りも今は人の見そ。人の見そ人のみを綴りとび。実に吾が歌のごく綴りとび。
よりの理のあれいと難てのまありける程に幸に翁の病着八月下旬に本復のなるあり是よりそ彼百十三回の四
五頁送れると十の巻上下二冊百十五回の終りまで十月望日に綴り果れ。喜びは僕のみ。貸本屋まで四方の君
子もさぞかし恵べいと短き筆にて長くもるる本輯二帙前後の發販料ども今まで遅滞せりと白地に生るに見。

○曲亭編述八犬傳第九輯中帙七号画工筆畊刷人目次

出像畫工　柳川重信

筆工　揔　巻　谷金川
第百八回第百一回　千形道友
巻七九十一　横田守
刷版　巻八十二下　櫻木藤吉
巻十　高木翦樫

○著作堂手集國字稗史新舊畧目　書林文溪堂藏板

南總里見八犬傳第九輯下帙　第一輯より第九輯中帙まで六十巻既に刊行し訖ぬ第九輯下帙七冊丙申冬出板共に六十八巻として全部とな本集の稿本と為る曲亭翁みづから評点をほどこしたまふ八犬伝全部の次に綴んとあり刊行遂げんとす○五巻近刻

近世説美少年録第四集　蝴蝶物語今を盛りの名花四種を花兵衛名跡を改め荘蝶翁と自称ゆゑ異域奇談歴歴の髣髴書綴て弥新奇なり　近刻

荘蝶老翁再遊外紀第一集　質屋の虚蔵の古物流行夜の説法風と退け俗説辨の堅炭を去て平易なる説教を上品世俗と醒まの新書　○五巻近刻

好事先生醒俗異聞第一集　百八人の列伝を綴りたて彩像を新に目金聖歎が外書評注の足らざるを補ひ謬れるを正し小説婦女君子学ばんがために○五巻未刻

水滸畧傳第一集　水滸後傳四十回を譯文筆削し謬れるを補ひ拙を化して巧めり其一画と異なる如き通俗本と同じく全部五冊子と○五巻未刻

水滸後畫傳第一集

開巻驚奇侠客傳第五集　第一集より四集まで二十巻刊行説本集五巻近刻

松浦佐用媛石竜録　前後二集　全十巻　美濃舊衣八丈綺談　全五巻

今般出版仕候八犬伝第九輯中帙の先板は焼失仕候ゆゑ巻毎の紙数多く且十三の巻八四十張に及ぶる上下二冊に分ち本輯七冊に成候て彫刻速に揃ひ難く故中帙の上四冊中帙の下三冊両度に書肆に出版仕候中帙の仕様の此為めに出版後七冊一帙の下三冊書買仕候猶又明年八全部六十八巻大図圖に可成旨作者曲亭翁より仰付大慶に存じ弥彫刻摺刷に入念美本に仕立て入賢覧に依之此段告禀仕候頓首　文溪堂再まうす

○家傳神女湯　婦人ちのうち淡病の妙効　一包代百銅

○精製奇應丸　大包代弐朱　小包代五一

○能胆黒丸子　一包代五十

○婦人ぢのの妙薬　一包六十四文半包三十二文

○製茶本家神田明神下同朋町東よこ丁　瀧澤氏

弘所　元飯田町中坂下南側よもの向　滝沢氏

○美艶仙女香　一つ代十八文　黒あぶら美玄香　一つ代十八文　江戸京橋南二丁目角　坂本氏

天保七年丙申春正月吉日　令辰發行

書行　大阪　同　心齋橋筋博勞町　河内屋長兵衛

江戸　傳馬町二町目　丁子屋平兵衛　河内屋茂兵衛